隠密三国志

他二編

山手樹一郎長編時代小説全集＝56

春陽堂

作品案内――文芸評論家　石井冨士弥

デートに遅くなったいいわけから税金のいいわけに至るまで――人は毎日、いつも本人にとってはぬきさしならぬ、せっぱつまったさまざまな危機感をもって暮しているものだ。大小の違いはあっても、たえず一種危険なパズルをやって生きているような――。

巨額な隠し財宝をめぐる伝奇小説のスリルもその延長といえよう。主人公の古賀新三郎が行きつけの飲み屋の娘お葉と知り合ったのも、まさか、そんな大事にまきこまれようとは夢にも知らぬことだった。迷惑にも、財宝の鍵（かぎ）を握る生き残りとそっくりの人相をしていたからというわけだ。災難はどこにあるかわからない！　――かくて、おなじみの財宝争奪戦がめまぐるしく始まることになるのだが、本編の読みどころは、ハラハラ、ドキドキの危機の中からどう脱け出すか、あなたならば？　それを解く作者の答えがすなわち、あなたの日常に爽快（そうかい）な勇気を与えることになるという興味万丈の展開にある。――他に、清純なお色気横溢（おういつ）の「いろは剣法」を収録！

山手樹一郎長編時代小説全集＝56

隠密三国志

他一編

春陽堂

隠密三国志

他一編

山手樹一郎長編時代小説全集＝56

春陽堂

春陽堂●450円

0193-200456-3066

隠密三国志 他一編

山手樹一郎長編時代小説全集

56

隠密三国志 他一編

山手樹一郎長編時代小説全集

56

春陽堂

春陽堂

隠密三国志

他一編

山手樹一郎長編時代小説全集

56

春陽堂

●編集/解説
尾崎秀樹

●巻末付録執筆者
井口朝生
一条明
＊伊藤文八郎
風巻絃一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
永岡慶之助
松永義弘
水野泰治

＊本巻執筆者

目次

隠密三国志……一
いろは剣法……二九三

隠密三国志

三日の約束

1

お葉は神田連雀町の小料理屋松葉屋の看板娘である。

父親の松五郎はもと近くの多町に住んでいて、捕り物の名人といわれた岡っ引きの親分だったが、三年前に女房に死にわかれてから、その株を子分の安二郎にゆずって、連雀町へいまの店を持ったのだった。

そろそろ六十に近い松五郎だから、もう隠居がしたくなる年でもあったが、松五郎にはお葉の兄で松吉といういいせがれがあった。その松吉に二十で死なれ、つづいて女房にまで先立たれたのががっくりきて、急に岡っ引きという稼業がいやになったらしい。

「岡っ引きなんてのは罪な稼業だ。そりゃ、世間のために悪いやつをつかまえてやる稼業なんだから、理屈からいえば世間にはばかることはちっともねえはずなんだが、その悪いやつにもいろいろあって、おれでさえこいつだけは逃がしてやりてえと思ったことが、二度や三度じゃきかなかった。おまけに、一度つかまれば死罪になるやつ、獄門首になるやつ、まだ罪のきまらねえうちに牢死する気の毒なやつだっていくらもある。岡っ引きってやつは、そういう人殺しの手つだいをするようなものなんだ。年をとってから考えてみると、決して後味のいい稼業でない。松吉もお前のおっかさんも、そういう人の怨念で早死にしたんじゃないかと、おとっつぁんはこの稼業がつくづくいやになってしまったのさ」

いまは親一人娘一人の松五郎が、娘のお葉にしみじみとそう話したことがある。

「おとっつぁんはすっかり気が弱くなっちまったのね。いやだなあ」

お葉はその時、何気なくわらってすませてしまったが、父親がそんな弱気になった胸の奥には、いつまでこんなことをしていて、もしお葉にまで先立たれちゃ取りかえしがつかないという親心があるんだとくみとって、これからは本当に親孝行をしなくちゃと思った。

幸い、松葉屋は地の利がよかったのと、松五郎は広い顔だし、お葉が一生懸命働いたのとで、日ましに繁盛して、今では小女を三人もおくようになっていた。

客は種々雑多で、多町の青物市の若い衆から、お店の番頭、諸家へ出入りの職人、鳶の者、それらは店の土間で飲み食いをしていくし、三間しかない二階の座敷はだんな衆や近所の屋敷の侍たちでほとんどあいているということはなかった。

それに、松五郎のもとの稼業が稼業なので、この辺に多い折助や地まわりに荒らされるということもめったにない。

「こんなことなら、お葉、もっと早く店をはじめるんだったなあ」

そういってよろこんでいた松五郎にも、このごろになってたった一つだけ気になることがあった。

看板娘のお葉も今年は十九の春を迎えて、いまだにしかるべき養子がきまらないことである。それとなくお葉にその話を持ちかけてみても、

「いまに好きな人ができたらおとっつぁんに相談するから、そんな心配はしないでください」

と、お葉はわらっていて相手にしないのだ。

お葉にすれば、店へ飲みにくる若い男たちの中には、ずいぶん看板娘が目あてで張りにくるのもすくなくはない。しかし、こうして店で多くの男たちを相手にしていると、男の欠点ばかりが目について、女心をひかれるというような

男は一人もない。
――男ってみんなこうなのかしら。
なにか物ほしそうな目、つんと取り澄ましながら媚びている目、すきがあったら食いつこうと露骨にねらっている下卑た目、わざといやがらせをいいながらそれで関心をひこうとしているずるい目、こっちは稼業だからそういう男たちの目に平気でわらいかけて、当たらずさわらずに程よくあしらってはいるが、この男ならというような目に、お葉はまだ一度もぶつかったことはなかった。

しかし、ただ一人例外はあった。この三月ばかり、三日に一度、四日に一度ぐらい土間の客になる古賀という浪人者で、年ごろ二十四、五、中肉中背で、どこといって際立ったとりえはないが、目の色になにか深いものを持っている男である。話しかければだれとでも気さくに口をきくが、自分からは決して出しゃばらない物静かな人柄で、夕方店へくるといつも銚子を二本飲み、後は飯を食って帰っていく。あまり目立たない存在だけに、もとはどんな身分の者か、どうして浪人したのか、いまはなにをして暮らしているのか、古賀だけはお葉にも見当がつかなかった。

「古賀さんは江戸の生まれですね」

この間、まだそう客の立てこんでいない時、お葉は二本目の銚子を運んでいったついでに、一つ酌をしながら、そう話しかけてみた。自分でも悪い癖だとは知っているが、親の娘でお葉には生まれつき穿鑿好きな性分があって、まだ松五郎が岡っ引きだったころ、女がそんな御用のことに口を入れるもんじゃねえと、苦い顔をしながら、時には、お前がもし男に生まれていたらなあと、惜しがるほど勘のいいところがあった。古賀の素姓がどうにもわかりかねるので、ついその癖が出てしまったのである。

「うむ、生まれは芝で、育ちは神田だよ」

にっとわらいながら、古賀はそんな返事をする。

「あら、じゃ纏を持って歩かなくちゃいけないんでしょ」

「纏は質屋に入れてある。飲み代に困ってね」

「お侍さんの纏持ちってあるかしら」

「浪人すればなんでもやるさ。食っていかなくちゃならないからな」

「どうして御浪人なすったんです」

「当ててごらん」

「それがわかりません。お旗本にはお旗本だったんでしょう」

あかぬけがしていて、どこかにそれだけの品は持っているようだ。

「そんな風に見えるかね」

「お道楽をして勘当されたというお人柄ではないし、古賀さんはけんかなどしたことはないんでしょう」

「けんかをするほどの度胸があれば、もっと出世していたかも知れないな」

分別がありすぎると、つい気が弱くなる、そういうたちの人かも知れないと、お葉は思った。しかし、分別がありすぎて旗本を浪人したとなると、それはどんな事情だったのか、お葉はいよいよわからなくなってくる。

――いいわ、そのうちにきっと聞き出してみせるから。

その時は客が立てこんできたのでそれっきりですませたが、それから五日ばかりたって、店で妙な事件がおこってしまった。

季節も花にまもなくなって、土間の客はまた新顔の常連が少しふえてきたようである。その中にいつも三人づれでくる若侍があって、一人は鷲尾軍兵衛といい、最近江戸へ出てきたどこかの藩の重役のせがれらしく、一人は国もとから軍兵衛に用心棒としてついてきた北野周平、一人は江戸の案内役をつとめている大森金蔵という男だった。

軍兵衛はむっつりとしているが、北野と大森

はいかにも取りまきらしくよくしゃべる男たちで、お葉の聞きたいようなことは、二人でみんなしゃべってしまう。
「今日はどちらを御見物なすってのお帰りですの」
　お葉はお愛想のつもりで聞いた。
「冗談じゃない。我々は江戸見物だなんて、そんなのんきな身分じゃないんだ」
　北野が昂然と胸を張って答える。この三人には、とかく店中の目を自分たちのほうへ集め、お葉をそばへくぎづけにしておきたいうぬぼれっ気があるのだ。
「おや、じゃみなさんは敵討ちに江戸へ出ていらしたのかしら」
　お葉はわざとおおげさに目をみはってみせる。
「まあ、それに似たような大事を持って、苦労しているんだ。それでなければ、こんなところで酒など飲むような若だんなの身分じゃない。——そうだろう、金蔵」
「その話はよそう。大事の前の小事ということがある」
　大森がもっともらしい顔をする。
「じゃ、その敵ってのは、うちのようなけちな店へきてお酒をのむような人なのかしら」
　つい皮肉が口に出るお葉だ。
「敵はどんなところにいるかわからんからな」
　北野にはその皮肉が通じなかったらしい。
「でも、うちへはあんまりお武家さまはこないんですよ。二階は別ですけど」
　お葉はそこに古賀のきていることをうっかりしていたのである。
「そうでもあるまい。あそこに一人きているではないか」
「あら、うっかりしていた。——古賀さん、ごめんなさい」
　お葉はわらいながら、それをしおに古賀のそばへ行って銚子を取りあげた。

「古賀さんはおとなしいから、うっかりされちまうんだ」
　常連の一人がそんな冗談をいうと、
「うっかり敵なんかに間違えられると大変だぜ、古賀さん」
　別の一人がさっそく古賀を酒のさかなにしようとする。
「古賀さんはそんなんじゃないから大丈夫よ。ねえ、古賀さん」
　お葉が古賀にかわって答える。その様子がいかにも古賀をかばっているように見えたので、
「ようよう、御両人」
　と冷やかしたやつがあって、常連はたわいもなくわらい出す。店中の目はもうみんな古賀とお葉に集まっていた。
「古賀さん、お杯を一つくださらない。もう見つかっちまったんだから、大っぴらにやりましょうよ」
　よせばよかったのに、そんな芝居っ気を出したのがいけなかったらしい。
「おい、貴公——」
　斜め向かいにいる軍兵衛が、いきなり陰険な目を古賀に向けてきた。
「わしかね」
　古賀は杯をお葉にやって、酌をしてから、ゆっくり軍兵衛のほうを向いた。それがいっそう軍兵衛の癪にさわったのだろう。
「うむ、貴公だ。まず姓名をうけたまわろう」
　と、頭から高飛車に出てくる。
「わしは古賀新三郎という浪人者です」
　古賀はおとなしく答える。
「その浪人者が、なんでさっきからわしの顔ばかり見ているのだ。わしの顔になにか思いあたることでもあるか」
　目をすえて食ってかかったとたん、
「やいたやいた」
「大熱い」
　と、常連の中から野次が飛んだ。まるで気ち

がい犬をけしかけるようなものである。
「失礼した。ちょうど席が斜め向かいなので、つい目がそっちへ行ったので、別に悪気があったわけではありません。どうぞあしからず」
古賀はおだやかにうけ流す。
「いや、うそだ。貴公の目はただこっちを見ていた目ではない。たしかに悪気のある目だった。その言い分を聞こう」
軍兵衛は執拗にくいさがってくる。
その態度があまりにも激しいので、常連は思わず鳴りをしずめてしまう。

2

「困りましたなあ」
古賀は当惑気に苦笑する。
――この人、やっぱり分別がありすぎて、気が弱いのかしら。
ここでけんかをされては困るようなものの、勝ち気なお葉はそんな弱々しい古賀の態度になんとなくあきたりないものがある。
「困ることはなかろう。男らしく思ったことをいえばいいんだ」
軍兵衛は相手を弱いと見たか、いよいよ笠にかかってくる。
「どうしてもいわなければ承知できませんかな」
古賀が妙なことをいい出す。
「あら、なんかいうことあるの、古賀さん」
お葉は思わず古賀の顔を見てしまう。
「うむ、ないこともないんだが、気にされると困るんでねえ」
「よし、それを聞こう」
軍兵衛の目はなにか殺気立っているようだ。
「よろしい、それでは話してみよう。わしは多少観相を学んだことがあるが、貴公の顔には剣難の相がある。それも普通の剣難ではなく、貴公はある者の命をねらい、貴公もある者から命をねらわれている。心あたりがありますかな」

相手はたしかに胸にこたえたらしく、じっと古賀の顔をにらんだまま、
「それから――」
と、後をうながす。
「いや、ただそれだけです。だから、別に見料はいりません」
古賀はあっさり冗談にしてすまそうとする。
「たった一つ、ねらうほうが先か、ねらわれるほうが先か、ぜひ聞きたい」
「それはいえませんな。観相のほうでは、そういうことは絶対にいってはならないことになっているんです」
「そうか――」
軍兵衛はちょっと考えてから、
「すまんが、貴公、表まで顔を貸してくれ。もう一つ、ぜひ聞きたいことがある」
といって急に立ちあがった。
「わしはもう別にいうこともないんだが、飯をすませればどうせここは出る。それまで待ってもらいたいな」
「よし、じゃ我々は表で待っている」
軍兵衛は取りまきの二人に目くばせして、さっさと表へ出ていく。北野と大森は小女に勘定を払って、いそいで軍兵衛の後を追っていった。
「大丈夫なの、古賀さん」
相手は三人で、しかもはじめから殺気立っているのだから、お葉は心配でたまらない。
「なに、大丈夫さ。あんまり待たせても悪いから、もう飯にしてもらおうかな」
古賀は案外平気のようだ。
「古賀さん、あの男の剣難の相ってのは本当かね」
常連の一人が緊張した顔つきで聞いた。
「まあ本当だろうな。あの連中はけんかっ早そうだから、どうせ刀を抜かずにはいられないだろう」
「けど、古賀さんが観相をやるとはちっとも知らなかったなあ」

「そうだろうな。わしも観相をふりまわしたのは、今夜がはじめてなんだ」
「あら、じゃ今のは口から出まかせだったの、古賀さん」
「うそも方便というからね。なんとか気をかえないと、あの連中はおさまりそうもなかった」
「いやだなあ、古賀さんて平気でそんな手が使える人なのかしら」
　お葉はあきれながらも、まだ半信半疑だった。
「気をつけたほうがいいぞ、お葉さん。この分だと、古賀さんはどんな手で看板娘を丸めこむか知れないぞ」
　常連は目ざわりな侍たちがいなくなったので、ふたたびにぎやかさを取りもどしてきたようだ。
「古賀さん、ちょいと表を見てあげようか」
　古賀が飯をすませて立ちあがると、お葉は出入り口まで送ってきて、そっといった。
「なあに、いざとなればわしは逃げ足の早いほうだから大丈夫さ」
「じゃ、気をつけてね、古賀さん」
「ありがとう——」
　古賀はお葉に別れて表へ出た。まだ宵の口をすぎようとする時刻だから、空には六日ばかりの春の月がおぼろにあかるい。
　その横町にはだれも人かげはなかったが、八辻ガ原へ出ようとすると、その角にさっきの三人が待っていた。
「やあ、少しゆっくりしすぎたかな」
　古賀がこっちから声をかけると、
「とにかく、そこまでいっしょにきてくれ」
　軍兵衛は先に立って、ぐんぐん柳原土手のほうへ歩き出す。
　古賀が後についていくと、北野と大森が左右から肩をならべてきた。
　抜きうちをかけるとすれば左へついた北野のほうだが、こっちがうしろへ飛びさがると大森を切るようになるから、まずその心配はないと

古賀は見た。
　先に立った軍兵衛は、柳原土手へあがるとすぐ、あたりに人目のないのを見さだめて、
「この辺でいいだろう」
と、立ち止まって、くるりとこっちを向いた。
　古賀は黙って軍兵衛の顔を見ている。
「おい、貴公は古賀新三郎といったな」
　軍兵衛は国者で、重役のせがれだから、怖い者なしのこんな横柄な態度が身についてしまっているのだろう。
「うむ、わしは浪人古賀新三郎だ」
「正直に白状してくれ。貴公は天狗党を知っているだろう」
　軍兵衛のけわしい目が、じっとこっちの顔色を見すえている。
「知らないなあ。なんだね、その天狗党っていうのは」
　天狗の面を思い出すと、古賀はつい微笑したくなる。
「知らない——。きっとだな」
「金毘羅まいりは天狗の面をしょって歩くそうだが、あいにくわしは天狗には近づきがない」
「では聞くが、ねらうほうと、ねらわれるほうは、どっちが先だ。はっきりいってみろ」
「それは、貴公が天狗党をねらい、天狗党が貴公をねらっているということかね」
「そのとおりだ。貴公が天狗党について、なにか一言教えてくれたら、その一言に百両出そう。二つ教えてくれれば二百両、その上、貴公の命はきっと我々がまもってみせる」
「悪い仕事じゃなさそうだな。その天狗党ってのは、いま江戸へきている形跡があるのかね」
「そのとおりだ」
「どうも血なまぐさい仕事らしいな。わしには向かないかも知れぬ」
「なに」
「この話は聞かなかったことにしよう。わしは血なまぐさいことはあまり好きではないんだ」

「そうか――。味方になるのはいやだというんだな」
「貴公、ここで刀を抜いちゃいかん」
古賀はとっさに柳の木を背にして立つ。ちょうど三人を向こうにまわす形になるのだ。
「うぬっ」
機先を制された三人は、どうしようかというように、ちょっと顔を見あわせている。
「江戸は田舎とは違うからな、こんなところで刀を抜くと、すぐに足がつくぞ。時刻からいえば、もう定町回りがこの辺を見まわりにくるころだ」
この舌刀はたしかに利いたらしい。
「おい、今のことを人にしゃべると命がないぞ。――おい、行こう」
軍兵衛は二人をうながして、足早に和泉橋のほうへ歩き出した。
「おぼえておれ」
そんな捨てぜりふを残して、北野と大森が軍兵衛のあとを追う。
「やれやれ、やっと助かったか」
古賀はほっとして、我にもなくひとりごとが出る。
こんなあぶないところへ長居は無用だ。すたすたと土手をおりて、籾蔵のほうへ出ようとすると、
「旦那、あぶのうござんしたね」
ひょいとぬすっとかぶりの、いかにもやくざらしい男が、気軽に肩をならべてきた。
「なんだ、お前、いまのを見ていたのか」
「見ていやしたよ。いい気っぷだね、だんなは。あんなすごいやつらを三人まで向こうにまわして、舌先三寸でちょいとあしらってしまうなんて、よっぽど度胸がなくちゃできねえ仕事ですからね」
「おだてたって、わしはたったいま飯をすませてきたばかりなんだからなあ」
「知ってやすよ。松葉屋のお葉に給仕をさせてでござんしょう」
「そんなことまで知っているのか、お前は」
「自慢じゃねえが、知らなくてもいいことならたいてい知っているが、ぜひ知らなくちゃならないことはなんにも知らないときてやがる。一人前にゃ通用しないねえ、こんな野郎は」
「じゃ、天狗のことを聞いてもむだかな」
「しっ、だんなは天狗のことを人にしゃべると命がないぞと、たった今やつらにおどかされてきたばかりでげしょう。気をつけなくちゃいけねえや」
この口ぶりで見ると、どうやらこの男は天狗のことをなにか知っていそうである。

3

「わしはまだお前の名前を聞いちゃいないようだな」
古賀新三郎は心やすそうに肩をならべて歩いているぬすっとかぶりの男の横顔をちらっと見ながらいってみる。
「申しおくれやした。あっしは伊太吉という風来坊でござんしてね」
「風来坊の伊太さんというのか」
「へえ」
「伊太さんはどうしてあの三人の後をつけて歩いているんだね」
「御冗談で、だんな」
伊太吉はあきらかにどきりとしたようである。
「そうか、冗談ならわしも助かる。わしはあぶないことはあんまり好きなほうじゃないんでねえ」
新三郎はわざと突っ放すようにいう。この男は、偶然にあそこを通りあわせていまの話を立ち聞きしたのではなく、松葉屋から自分たちの後をつけてきたのだ。とすれば、なにかわけがあって、はじめから鷲尾たちの後をつけていたのではないかと気がついたからである。

「あやまりやす、だんな」
案の定、伊太吉はあっさりかぶとをぬいで、
「いきなりずばりと図星をさされると、すなおにうんといえなくなる。つまり、下司根性というやつでしてね」
と、本音を吐きながら苦わらいをしているようだ。
「なにかわしに話したいことでもあるのか」
「お手の筋――。松葉屋の看板娘はだんなにちょいと気がありやすね。すみにおけねえや、だんなは」
「おだてたってだめだよ。お葉は伊太さんなんかより少し利口者のようだからな」
「それ、それなんでさ。その利口者の看板娘が、だんなだけはいつも特別あつかいにしている、そこをあっしが買っていったってわけなんですがね、さっき柳原土手でのやつらとの掛け合いを聞いていて、なるほどと感心しちまったんです」
「ありがとう――。そこで、わしに話ってのは」
「失礼ですが、だんなは金もうけってやつがしたくありやせんかねえ」
伊太吉は籾蔵の横を通りぬけて、なんとはなく和泉橋のほうへ足を向けて行くようだ。
「金もうけねえ。一体、いくらぐらいもうかるんだね」
「ざっと見積もって百万両――」
耳もとへささやいてから、伊太吉はそれとなくあたりを見まわす。
「伊太さん、百万両というと、千両箱でいくつになるだろうな」
「さあ、十で一万両ですからね、百で十万両、千で百万両ってことになりやすかね」
「二人きりじゃ、ちょいと担げそうもなさそうだなあ」
新三郎はのんびりとわらい出す。
「さあ、ここなら大丈夫だ。まだ夕涼みって季節じゃないが、立ち話にゃここがいちばんいい

んでさ、人に聞かれなくてね」
伊太吉は和泉橋の真ん中あたりへきて、川上のほうの欄干へ寄って立ちどまる。
六日ばかりの宵月がまだ頭の上にあって、下を流れる神田川を境に、左手は長い柳原土手、右手は佐久間町通り、正面に筋違見付の門の屋根が墨絵のようにながめられる春の宵である。
「古賀さんはまだあっしの話が本当にできないようだが、こいつはうそじゃないんですぜ。といったところで、あっしもまだその百万両ってのを自分の目で見たわけじゃありやせんがね」
「そうだろうな。現物がすぐそこにあるんなら、なにも人の知恵を借りることはない。千両箱を毎晩一人で一つずつ運び出しても、一年で三十六万五千両、三年足らずで百万長者になれる」
「皮肉をいっちゃいけやせん。まあ、一通りわけを話してみるから、聞いておくんなさい」
「そうだなあ、聞くだけなら聞いてもいい」
「頭の働くだんなのようだから、ずばりと話しやすぜ」
「うむ」
「ある国に先祖代々の百万長者があった。その国の領主さま、というより家老の一人にすごい切れ者がいやしてね、まあ、お家のために、その長者の財産をねらったんでさ。そこで、まずその長者一家をかくれキリシタンの罪におとして、入牢中に毒殺してしまい、その家を闕所にして財産を藩で取りあげることになった。ところが、いざ調べてみると、そういう旧家だから相当の財産はあったが、百万両以上あるだろうといううわさのあった千両箱だけは、どこにかくしてあるのか、どうさがしてもそのかくし場所がわからない。これが今から五年前の話なんです」
「なるほど――。大名が長者の財産をねらう、まんざらほかに例のない話じゃないな」
「そうでござんしょう。ねらった大名にすりゃ、どうせ乗りかかった船だから、なんとしても百

万両の小判が手に入れたい。その切れ者の家老がいろいろと手をまわして、一族の者や召し使いの者をさがし出して、拷問にかけてまで調べてみると、その百万両の金は先祖代々たしかにどこかにかくしてある。しかし、そのかくし場所は代々当主しか知らないことになっているんだと、やっとわかるにはわかったが、その肝心の当主もそこの跡取り息子も、すでに牢内で毒殺されているんだから、いまさらどうしようもない話でさ」

「なかなかおもしろい話だなあ」

「気に入りやしたか、だんな」

「つまり、その百万両を、わしと伊太さんとで横取りしようというんだろう」

「まあお聞きなせえ、話はこれからなんだ。その大名のやり方がやり方だから、長者の一族のほうでも黙ってはいられない。生き残った人数がこっそりひとまず江戸へ逃げてきて、これが徒党を組み、五年の間、復讐をたくらんで力を養ってきた形跡がある」

「なるほど――」

「大名組のほうではこれを根だやしにしないとまくらを高くして眠れないのと、どうやらその長者組が本尊として立てているのは当時十三だった長者の娘で、今年は十八になる、これが百万両のかくし場所を知っているらしいということがわかってきたんですね」

「おかしいなあ、娘が大将なら、天狗党より天女党と名乗ったほうがいいだろうにな」

「ちゃかしっこなしさ。人が悪いねえ、だんなも」

「しかし、伊太さんはそんな話をだれから聞きこんだね」

「あっしの友達に常というやつがいやしてね、これがどこから聞きこんできたか、ぜひその本尊の娘に会って、あわよくばその娘に力を貸してやりてえ、ひょっとするとその娘が女房になりたいといい出さないでもなかろうと、まるで

夢のようなことを考えやがって、夢中になって天女をさがしているうちに、ついこの間、さっきの三人に切られちまったらしいんです。その死骸が新大橋のところに引っかかっていやしてね」

「そうか、それで伊太さん、友達の敵討ちをしてやろうというんで、まずあの三人の後をつけているんだな」

「どうでしょうねえ、だんな、これがうまくいけば百万両の仕事になるんだ、一口乗ってみる気はありやせんかねえ」

ぬすっとかぶりの中の伊太吉の目が、なんとなく底光りをおびてきたようだ。

「そうだなあ。わしは別に金はいらないが、その天女というのにちょいと会ってみたい気がするな」

「けっ、会ってどうしようっていうんです、古賀さん」

「それはまあ会ってからの話だ。遠くて近きはなんとやらということもある」

「本気かね。そんなことがもしお葉の耳へでも入ったら、ただじゃすまないじゃありやせんか」

「そういえばそうだなあ。お葉天女もあの意地っぱりなあたり、なかなか捨てがたいところがある。こうしよう、三日と日をきって、三日の間、考えさせてくれ。どっちがいいかよく考えてみる」

「三日だねえ、だんな」

「うむ、三日だ」

「三日たったら、どこで返事をしてくれるんだね」

「三日目の今ごろ、ここで返事をしよう」

伊太吉はこっちの顔色をさぐるように見さだめてから、

「まあいいだろう。じゃ、きっと約束しやしたぜ」

と念を押して、ぷいと佐久間町のほうへ橋をわたり出す。

「いいとも――。わしは約束のかたい男だ」
その背中へ新三郎はもう一度投げかけておいて、こっちもふらりと柳原土手のほうへ歩き出す。
――おかしなやつだなあ。おれを仲間へ引き入れて、一体なにをさせようという気なんだろう。
新三郎ははじめから風来坊のいうことなど本気になって聞いてはいなかった。だいいち、相手はずっとぬすっとかぶりのままで、とうとう素顔は見せようとしなかった。
もっとも、風来坊のほうからいえば、こっちがあまり気のりがしていないと見て、素顔を見せるのは用心したのかも知れない。
いずれにせよ、伊太吉が口にしていた話は、大体、事実には事実なのだろう。
大名が領地内の金持ちの財産をねらうということは、例のない話ではないのだ。そして、その長者父子を牢内で毒殺したとなれば、当然遺族一門の復讐が怖いから根だやしにもしたくなるだろうし、一族のほうからいえば復讐をたくらむということもないことではない。
が、そういう大名の非道は、どう秘密にしておこうとしても、必ず公儀の耳へ入るものなのだから、いずれは幕府の取り調べをうけ、公裁に付されるのが普通なのだ。
なんの関係もない他人が、余計なお節介をする必要はないのである。
それを、あの風来坊は、その長者の一族をさがし出そうとしている。目的が埋蔵されている百万両の金にあるとすれば、無論正しい人間ではないし、だいいち、そんな秘密をだれから聞き出したのか、これがまず問題である。常という友達から聞いたなどというのは、口から出まかせにきまっている。
それに、一国の大名があらゆる力と金と人知をあつめて手に入れようとしている埋蔵金が、あんな風来坊一人の力でどうなるものではな

い。もし、伊太吉が一人でそんなことをたくらんでいるとすれば、身のほどを知らぬ大ばか者ということになるが、いまこの目で見た伊太吉はそんな男とは思えない。むしろ、人一倍小才のまわる男のようだ。とすれば、これは伊太吉一人の仕事ではなく、背後に相当大きな力が働いている。つまり、伊太吉はその手先の一人に使われていると見るのが本当だろう。
――こいつ、とんだ災難をしょいこんだかも知れないぞ。
相手はあれだけの秘密をうちあけているのだから、三日たってもし一口乗るのはいやだとことわると、命をねらうかも知れない。ふっと新三郎はそう気がついて、それとなくあたりへ気をくばってみると、案の定、何者かがもう自分の後を尾行しているようだ。
――やれやれ、つまらない目にあうもんだなあ。
新三郎は唖然として苦笑してしまった。

4

古賀新三郎は神田平永町通りの下総屋という米屋の裏の長屋を一軒借りて、一時の浪宅にしている。
この五軒長屋は下総屋佐兵衛の家作で、佐兵衛の女房おたねはもと古賀家で女中奉公をしていたことがあった。その縁故でここを借りることになったのだが、新三郎ははじめから下総屋の居候のつもりだから、口は下総屋まかせで、浪宅には寝道具と火ばちしかない。
翌日、新三郎は一日中家の行火の中でのんびり暮らして、まだあかるい夕方、ぶらりと家を出た。
「おたね、ちょっと出かけてくる」
出がけに店をのぞいて、働き者のおたねに声をかけると、
「行ってらっしゃいまし」
おたねはにっこりしただけで、別にどこへ行

くんですとは聞かなかった。おたねは無口のほうで、口よりは体のほうを先へ働かす女だった。いってみればそれが古賀家の家風なので、
「若だんな、手前はいい女房をもらい当てたようです」
　これも口は重いほうの佐兵衛が一度だけそういったことがある。
　——似た者夫婦だな。
　一日中家にごろごろしている新三郎には、なまじ世間なみの世辞などいわれるより、そのほうが気が楽で、居心地がよかった。
　新三郎はどこへ行くでもなく、まだ夕日が長く自分の影法師をうしろへおとしている八辻ガ原をぬけて、まっすぐ連雀町の横町にある松葉屋へ入っていった。
　時刻がいつもより少し早いせいか、さすがに土間の客は二組み三組みほどで、目ざとくこっちを見たお葉は、
「ああ、いらっしゃい」
　わらいながら走り寄ってきて、
「話があるの、今日は二階にしてね」
　と小声でささやき、もう正面とっつきのよくみがきこんだ階段を、自分が先になってとんとんとあがっていった。
　——やっぱり、なにかあったらしいな。
　新三郎に自分の勘があたっていたのを内心ちょっと気にしながら、ゆっくり階段をあがった。
　ここの二階ははじめてだが、中廊下の左右に小座敷が二つ三つあるらしく、その中廊下の突きあたりが裏階段になっている左側に、かくれ部屋のようになっている四畳半の小座敷がある。箪笥や鏡台がこぎれいにならんで、壁に三味線などがかけてあるところを見ると、これはお葉がふだん居間に使っている部屋のようだ。
　お葉はやや大ぶりの角火ばちの前へ座布団をなおし、鉄瓶をおろして埋ずめ火を火ばしでおこしながら、

「お酒でしょう、古賀さん」
　と聞く。いつになくほおにほんのりと血の気がさしているようだ。
「ここで酒をのんじゃ悪くないかな。まずお葉さんの話ってのを聞いてからにしよう」
「あら、あたしこんなところへおつれして、失礼だったかしら」
「つまらない気をつかうんだなあ。そんなことより、お葉さん、今日は大切な話があるんじゃないのか」
　新三郎はいつもとかわらぬ微笑をうかべている。
「古賀さん、どんな話だか見当がつく——」
　お葉は思わずそこへ座ってしまう。
「なにかゆうべのことに関係のある話じゃないのかね」
「ああ、そうそう、ゆうべあれからどうしました、古賀さんは」
　思い出して、はっとしたように目をみはるお葉だ。
「わしはあれからあの三人に柳原土手へつれていかれてね、変なことを聞かれて困ってしまった」
「どんなことを聞かれたんです」
「あの三人はいきなりわしを取りかこんで、お前は天狗党のことをなにか知っているだろうというんだ」
「まあ」
「そんなものは知らないというと、妙な顔をしてねえ、じゃねらうほうとねらわれるほうとはどっちが先だ、いってみろときた。つまり、鷲尾という男は、わしの観相を気にしているんだ。鷲尾は天狗党をねらっている、天狗党は鷲尾をねらっている、自分のほうにそういうおぼえがあるもんだから、わしがあんなことをいったのは、その真相を知っていて当てこすったと考えたらしいんだ」
「それで、どうなすったの」

「わしは血なまぐさいことはきらいだから、この話は聞かなかったことにしようというと、どうも三人の様子が殺気立ってきたようなんで、ここで刀を抜いちゃあぶない、もう定町回りが通るころだとおどかして、こっちは素早く柳の木のほうへ身をひいたんだ。三人とも悔しそうな顔をしてね、今のことを人にしゃべると命がないぞといって帰っていった。田舎者は気が荒いからかなわない」

　新三郎が冗談ばなしのようにいってわらっているのを、お葉は真剣な顔をしてまじまじとこっちを見ている。

「どうしたんだ、お葉さん」

「その天狗党っての、古賀さんは本当に知らないの」

「変なことを聞くんだなあ。じゃ、お葉さんは天狗の話を知っているのか」

　お葉はどうしようかというようにためらいながら、こっちの目から目をはなさずに、わずかにうなずいてみせる。

「ふうむ。わしに話があるってのは、それなのか」

　新三郎は思わず声をひそめる。

　お葉はがくりとうなだれて、返事のかわりにため息をついている。

「そうか、お葉さんも人にしゃべると命がないぞとおどかされているんだね」

　こんどははっきりとうなずいてみせるお葉だ。

「じゃ、お葉さんは風来坊の伊太吉っていう男を知っているかね」

「どんな人なの」

「そうだなあ、顔はわからないが、やくざっぽい身なりで、年は三十がらみかな、背のすらっとしたやつだ。ゆうべ、たしかにここの土間の客になっていた男らしいんだがねえ」

「さあ、どの人かしら」

　これはおぼえがないらしい。

　すると、お葉が天狗党の話を聞いたのは、伊太吉からではないということになる。

「ねえ、古賀さんは本当に天狗党のことはなんにも知らないんですか」

　お葉の目はいつかすがるようなまなざしになっている。なにか娘の胸ひとつにおさめかねるものがあるようだ。

「ここは立ち聞きをされる心配はないか、お葉さん」

「いいえ、大丈夫だと思うんだけれど」

　お葉はいそいで立って中廊下のふすまをそっとあけてみて、すぐにしめて帰ってきて、

「まだ二階のお客はだれもいないわ」

と、もとのところへ座る。

　後ろは出入り口の正面に一間のひじかけ窓があるだけだが、ここはそんな心配はないところとみえて、別に見ようともしない。

「実は、ゆうべ、あの三人に別れたすぐ後で、我々をつけてきたらしいやつに声をかけられたんだ」

「それがその伊太吉とかいう人なの」

「うむ。とうとうしまいまでぬすっとかぶりをとらなかったが、そいつが天狗党の話をして、わしに一口乗らないかと誘いをかけたんだ」

「誘い——」

「いま気がついたんだが、伊太吉もここでわしが鷲尾にいった観相のことを聞いて、ひょっとすると天狗党のことを知っているかも知れないと考えたんだな。それでわしを味方に引き入れようとしたらしいんだが、あいにくわしは天狗党のことは知らない。ちょっとがっかりしていたようだ」

「じゃ、その伊太吉って人も、天狗党をさがしているんですね」

「どうもそうらしい」

「古賀さんは百万両の話、聞いた」

「うむ、伊太吉から聞いた。お葉さんはだれからその話を聞いたんだね」

「それをいうと、あたし殺されるかも知れないの」
「なんだ、お葉さんはわしを相談相手にするつもりじゃなかったのか」
「古賀さん、本当にあたしの相談相手になってくれる」
「わしはねえ、お葉さん、あんまりたよりになる男じゃないが、物の判断だけはできると思っている。だから、天狗のことにはこれ以上深入りするのはよそうと考えていたんだが、どうもそうはいかなくなってしまったようだな」
「どうして――」
「わしがここでお葉さんと話しこんでいるのを、敵はきっとどこかでもう見張っているんじゃないかと思う。だいいち、店の者だって、わしがお葉さんと二人きりでここでひそひそ話をしていれば、怪しいと思うだろう」
「あら、ごめんなさい。古賀さんは御迷惑なんでしょう」
　お葉はいまさらのように、顔を赤くして、すまなそうにいう。
「いや、そんなことはだれがどう考えようと勝手だが、天狗の災難だけはどうしてもふせがなければならない。命までねらわれちゃつまらないだろう、お葉さん」
「わかりました。あたしみんな話しちまいます。そのつもりで古賀さんのくるのを待っていたんだもの」
　お葉はやっと決心がついたようだ。
「他言してならないことは、決して人には口にしないから、それだけは安心してもらっていい」
「いやだわ、安心していい人だと思ったから、ここへきていただいたんですのよ」
「よろしい。では、話をうかがうことにいたそう」
「あたしに天狗の話をしたのは、八町堀のだんななんです」
「ふうむ」

　これはまた意外なことになってきたものである。
「つまり、おとっつぁんに縁のある同心か与力ということになるのか」
「ええ、渡辺源太夫さまという南の与力。おとっつぁんにもいうなと、かたく口どめされました」
「怖いおじさんのようだね」
「そんなこと、どうしてわかるの、古賀さん」
「まあ、話のほうから聞くことにしよう。今日のことか、それは」
「今日のおひるごろなの。お葉、お前は女には惜しい気性だから話すのだが、どうだ、天下のためにひと働きしてみる気はないかと、こうなんです」
「うむ」
「そんなことだめですとあたしはことわったんだけど、いや、話を聞いてみてだめだと思ったらことわればいい。まあ聞くだけ話を聞いてみろといって、尼崎の百万両の話が出たんです」
「なるほど――」
「公儀からも隠密が入って、ずいぶんさがしているんだけれど、どうしても百万両のかくし場所はわからないんですってね」
「そんな話だなあ」
「尼崎さまのほうでも躍起になっているが、まったく手がかりさえつかめない。そこで家老の鷲尾刑部さまが息子さんの軍兵衛さんを江戸へよこして、天狗党をさがさせることになった。殺された天野屋浪右衛門さんの娘で、千鳥さんという今年十八になる娘さんだけが一人、生き残っているんですってね。その娘さんが百万両のかくし場所を知っているはずだという見こみなんですって」
「それで、八丁堀のだんなはお葉さんになにをしてくれっていうんだろうな」
　新三郎の言葉はおだやかだが、内心不吉な予感が次第に大きくなってくるのをどうすること

もできなかった。

5

「渡辺のだんなは、うまくあたしに鷲尾に近づいてできるだけ天狗党のことを聞き出してみてくれというんです」

お葉はいかにも生娘らしく、潔癖そうにまゆをよせながらいう。うまく鷲尾に近づくという渡辺の言葉の裏に、色じかけにかけてもという意味が見えすいていたからだろう。

「おかしいな。軍兵衛は天狗党の手がかりがいまだにつかめないから、毎日江戸中を歩きまわって苦労しているんだろう。その軍兵衛にいくら近づいたって、なんにも聞き出せるはずはないと思うがねえ」

新三郎は思わず小首をかしげる。

「いいえ、天狗党のことはまだわからなくても、鷲尾党は天野屋さんの生き残りが何人ぐらいいて、およそだれとだれが江戸へ出てきているぐらいのことは、ちゃんと調べているにちがいないと、八丁堀さんはいうんです」

「なるほど、そう聞いてみると、さすがにうまいねらいだな」

「いやだわ、あたし、あんな男のきげんをとって、なにか聞き出すなんて」

「待てよ」

新三郎はちょっと考えてから、

「八丁堀さんはなんだってそんなに天狗党のことをさぐり出さなくちゃならないんだろうな」

と、それが疑問になってくる。

「やっぱり、天野屋さんの百万両をねらっているんじゃないかしら」

「しかし、公儀が人の財産をねらうのはおかしい。もし、渡辺が公儀からの内命で働いているとすれば、公儀はすでに尼崎藩の不正をみとめていることになるから、裁きのほうが先なんだがなあ」

「そういえばそうですねえ」

お葉にも新三郎のいうことがほぼのみこめたらしい。

「この事件はすでに五年前におこっていることなんだ。天野屋がそんなひどい目にあって闕所にされたとすれば、天野屋の遺族のほうから、当然、公儀へ尼崎藩の非道を訴え出ているはずだ。その訴訟をいまだに公儀で取りあげないから、天野屋の遺族たちは天狗党を作って、自分たちの手で尼崎藩へ復讐することにした。尼崎藩のほうではそれをふせぐために鷲尾党を作って、天狗党を絶滅しようと躍起になっている。――そうは考えられないか、お葉さん」

「どうして公儀では天野屋の訴訟をお取りあげにならないんでしょう」

「問題はそこにあるようだな。一体、渡辺は天狗党をさぐれという内命を、だれからうけているんだろう」

「公儀からじゃないと、古賀さんはみているんですか」

「うむ、公儀からの命令なら、天狗党をさがし出すより、尼崎藩の内情をさぐるほうが先だと思うんだ」

「ねえ、こんなことというと殺されるかも知れないけれど、天野屋さんの訴訟を公儀がお取りあげにならないのは、それを中途で握りつぶしている人があるんじゃないかしら」

「えらいぞ、お葉さん。わしもその辺がくさいと思うんだ」

「すると、どういうことになるのかしら」

「それはだね、天野屋の復讐組が江戸で天狗党を作ったということを、いちばん先に知ったのは鷲尾党なんだ。たぶん、天狗党から鷲尾党のほうへ、なにか挑戦状みたいなものが行ったんで、はじめて天狗党というものができたことがわかったんだろう。一方、天野屋の訴訟を握りつぶしている人物、おそらく老中の中の一人だと思うんだが、これも天野屋の百万両をひそかに私しようとはじめからねらっていた。だから、

鷲尾党のほうから天狗党のことをさぐり出して、千鳥という娘さえさがし出せば、百万両はこっちのものだと暗躍し出した。渡辺源太夫はその老中組の一人と見ていいんじゃないかと思う」
「じゃ、もしあたしが鷲尾党からそんなことをさぐり出すのはいやだとことわると、老中組からどんな目にあわされるかわからないんじゃないかしら」
さすがにお葉の顔が少し青ざめてくる。
「しかしなあ、お葉さん、もし鷲尾軍兵衛から天狗党のことをさぐり出すようなことを一言でも口にすると、鷲尾党はかなり血迷っているようだから、それこそ命があぶなくなる。まあ、当たらずさわらずがいちばんいい。たとえ渡辺のほうから、まだなにかわからないかと催促されても、まだわかりませんと答えておく。この仕事が命がけだということは、渡辺だってよく承知しているはずなんだから、そんなに無理もいわないだろうと思う」
「そうかしら」
お葉はまだなにか不安そうだが、
「古賀さんのほうはどうなのかしら。その伊太吉とかいう男の話をことわって大丈夫なんですか。一体、伊太吉というのは、どっちの組の者なのかしら」
と、ふっと思い出したように聞く。
「わしもいまそれを考えていたんだが、あの風来坊は老中組の隠密くさいな。ただのやくざではなさそうだ」
「じゃ、古賀さんもきっと命をねらわれるわ」
「なあに、わしは男だから、いざとなればなんとでも手段はつく。お葉さんにしても、わしにしても、こんな天狗のたたりをうけようとは、思いもかけなかったねえ」
「あたしねえ、古賀さん、そんなにあの人たちが大騒ぎをやっていてもわからないんなら、こっちで天狗党のかくれ家をさがしてやって、あの人たちをあっといわせてやりたい気もするのよ。やっぱりおとっつぁんの血をうけているんですね」
たったいま青くなっていたくせに、どこかにそんな跳ねっかえりの血を持って生まれてもいるお葉のようだ。
「物好きはいかんぜ、お葉さん」
新三郎はたしなめるように苦わらいをする。
「まさかそんなことやりやしませんけれど。鷲尾党にしても、老中組にしても、あんまり手前勝手すぎるんですもの、あたしは天狗党の肩を持ってやります。古賀さんだってそうでしょう」
「そりゃ弱いほうへ味方をしたくなるのは人情だが、さわらぬ神にたたりなしで、まあ、危ない橋はなるべくわたらぬことだ」
「古賀さん、ここへお酒持ってきましょうか」
お葉はもういつものように明るい顔になっていう。
「いや、店のほうへ行こう。お葉さん、先に店へ出ていてくれ」
「どうして――」
「わしにはゆうべから、どうもひもがついているような気がするんだ。ことによると、そのひもが澄まして店で一杯やっているかも知れない」
「本当、古賀さん」
「まあ、そのつもりで店へ出てごらん。わしもすぐ後から行く」
「じゃ、あたし店へ行ってみてくる。古賀さんはそれまでここで待っていたほうがいいわ」
お葉はそういいおいて、目を輝かしながら居間を出ていった。
――お葉がいうように、そう簡単にいくかな。
お葉に一目で見破られるような隠密では、隠密の役目はつとまらないはずである。
それにしても、この百万両事件に公儀の大官が暗躍しているとは、新三郎もちょっと意外だった。仮に、一老中が公儀の力を利用して天野屋の百万両をねらっているとすれば、天狗党に

とっては鷲尾党以上の強敵ということになる。

南の与力渡辺源太夫も、昨夜の伊太吉も、たしかにその老中があやつっている手先にちがいない。

——待てよ。

伊太吉が、天狗党のことをいちばんよく知っているはずの鷲尾党のあとをつけて、昨夜も松葉屋へきていたことはなんのふしぎもないが、鷲尾軍兵衛はどうして再三この店へ飲みに寄るのだろう。

用心棒の北野たちも、本当ならこんな店へ飲みにくるような若だんなじゃないといっているくらいで、気位の高い軍兵衛がわざわざ飲みにくるような店ではない。目あては看板娘のお葉にある、そう考えられないこともないが、軍兵衛は目下、天狗党さがしという命がけの大事を持っている男だ。お葉をはりにくるほどのゆとりはないはずである。

すると、この店へ天狗党のだれかが通っている、そういう事実を耳にして、それをさぐりにきているのかも知れぬ。

——はてな、ひょっとすると、疑われているのはこのおれかも知れないぞ。

現に、昨夜そのことで、軍兵衛たちに柳原土手へ引っぱり出されている。

おそらく、鷲尾たちはその前からこっちを天狗党の一味と疑って、様子をさぐりにここへ通っていた。それが、昨夜、妙なことから言葉敵になって、こっちはからかい半分に剣難の相を持ち出したのだが、その言葉がぴたりと軍兵衛のいまの立場をいいあてていた。

軍兵衛にすれば、こいついよいよくさいということになったのだろう。

しかも、軍兵衛はただ漫然とこっちを天狗の一味と疑い出したのではなく、疑うには疑うだけのちゃんとした理由があって、こっちをねらっていたにちがいない。

——もしそうだとすると、軍兵衛は昨夜のことぐらいで疑いを晴らすような、そんな単純な男ではなさそうだから、これからも相当うるさくつきまとってくるだろう。

こいつやっかいなことになったぞと、新三郎が一人で苦笑していると、

「だんな」

中廊下のふすまの外から、だれか小声で呼ぶ者がある。

「だれだね。そこをあけなさい」

「へえ」

ふすまを少しあけて顔を出したのは、板場の下働きをやっている豊吉（とよきち）という若い男だ。

「なんだ、豊さんか」

「へえ。ねえさんからそっといいつけられやしてね、履き物を裏階段のほうへまわしやしたから、一度外へ出て表から店へきてくれるようにってことでござんす」

「そうか、じゃそうしよう」

新三郎はすぐに立ち上がった。お葉がそんなことをいってくるようでは、店へだれか怪しいやつがきているのだろう。

あたりはもうすっかりたそがれて、板場にも店のほうも灯が入っている。

「豊さん、ゆうべの三人づれの侍は店へきているようか」

「いいえ、まだのようです」

「そうか——。ここのおやじさまは家にいるね」

ともかくも娘と二人きりで長い間話しこんでいたのだから、松五郎がいればあいさつをしていくほうが礼儀だと考えたのだ。

「あいにく親方は夕方から多町のほうへ行っていやすが、なにか用でござんすか」

「いや、ちょいとあいさつをしていこうと思ったんだが、まあいい、帰ってきたら豊さんからよろしくいっておいてくれ」

「承知しやした。でも、古賀さんはまだ帰るんじゃないでしょう」

「うむ、これから店へまわって一杯やっていく」

「じゃ、そのうちに親方もたぶん帰ってきまさあ」
そういいながら豊吉があけてくれた台所口から、新三郎は礼をいって素早く裏の路地へ出た。その路地から松葉屋の横をぬけて、表へまわる三尺路地がある。何気なくその暗い路地をぬけようとして、新三郎ははっとそこへ立ち止まった。
すぐ目の前をお葉がだれかと肩をならべて通りながら、
「若だんなはどこにいるんです」
「いや、すぐそこの角に待っているんだ」
そんな言葉がはっきりと耳についた。
連れはどうやら昨夜鷲尾軍兵衛の供をしていた大森金蔵のようである。

6

日はほとんど暮れきっているが、空に月があるからうっかり後はつけられない。新三郎は路地口へ立って、じっと二人のうしろ姿を見送っていた。
この横町を出外れると、すぐに八辻ガ原になる。二人の姿はその右角を曲がって消えたので、新三郎はあたりを見まわし、怪しい人影のないのを見さだめてから、ゆっくりそっちへ歩き出した。
――まさかこんな見えすいたわなにかかるようなお葉じゃなかろう。
もし敵が腕力に出るようなら救いを呼ぶはずだからと、その右角まで行ってそっとそっちをのぞいてみると、意外にもいま六尺が立派な女乗り物をかつぎあげたところだ。
前にちょうちん持ちの中間が一人立ち、駕籠のうしろについているのは大森金蔵と北野周平の二人だから、駕籠の中はたしかにお葉にちがいない。
――しょうがないなあ、どうしてこんな駕籠におとなしく乗る気になったんだろう。

新三郎はよっぽど飛び出していって駕籠をとめてやろうかと思ったが、ふっと気がかわった。
お葉がおとなしく駕籠にのったのは、鷲尾党からなにかをさぐり出して、世間をあっといわせてやりたい山っ気がたぶんにあるのだろう。一つには、二階にいる古賀がちょうど表へまわるころだから、きっと後をつけてくれると、そんな計算も胸の中でしているのかも知れない。
――よし、それならこっちも黙って後をつけてみよう。
物好きはいかんぜとお葉をたしなめておきながら、いざとなると新三郎にもそんな血気がむらむらとわいてくるのである。
駕籠は八辻ガ原を東へ突っ切って、柳原通りへ進んでいくようである。
それにしても、軍兵衛はお葉を呼びつけて、なにを聞き出そうというのだろう。お葉から天狗党のことを聞き出そうとしてもそれは無理な話だ。
しかし、わざわざ女乗り物までよこしてお葉をつれていくからには、なにかちゃんとした目あてがあってのことにちがいない。
――こうなると、いやでもおうでもこっちまで、いよいよ天狗騒動にまきこまれてしまいそうだな。
しかも、その天狗の正体はまだだれも見かけていないようだから、新三郎もだんだん好奇心に駆られてこずにはいられなかった。
駕籠はやがて柳原通りを左へ切れて、和泉橋をわたっていく。
ここで新三郎は明日の晩、風来坊の伊太吉と出会う約束になっているのだ。
駕籠はまもなく佐久間町三丁目通りへ出て、そこの大きな屋敷の門内へ消えていった。おそらくここは尼崎藩の下屋敷になっているのだろう。
――こいつ、ちょいと面倒なことになったな。敵はどうせあくどい仕事をたくらんでいるの

だろうから、まさか屋敷へはつれこむまいと、新三郎はたかをくくっていたのだ。それが大名屋敷へつれこまれたのでは、こっちはうっかり忍びこむわけにはいかない。大名の屋敷は城もおなじで、それをおかした者は切りすてられても文句はいえないし、屋敷うちで起こったことは、公儀といえどもむやみに干渉はできないのだ。

それだけに、新三郎はここまできて、お葉をそのままほうっておくわけにはいかない。なんとかして助け出さなければ、男が立たないのである。

この屋敷の裏木戸は神田川のほうにある。ともかく、新三郎は屋敷の塀にそってぐるりと裏木戸のほうへまわってきた。日が暮れたとはいってもまだ宵の口だから、往来にはちらほらと人通りが絶えない。うじうじしていてはかえって人に怪しまれるので、木戸の前へ出ると、家へでも帰ってきたようにかまわず木戸に手をかけてみた。

木戸にしまりはなかったらしく、すぐにあいた。素早く中へ入って後をしめてから、はてなと思った。

裏木戸のしまりを忘れるなどということは考えられないから、ここは日ごろ家来たちが出入りに使っているか、今夜だけ特になにか必要があってしまりをあけておいたか、どっちかだろう。

入ったところは外庭で、雑木林になっている。林の小道を十間ばかり入っていくと、そこにまた内庭へ入る木戸があって、ぐるりと黒板塀をめぐらせてある。外がわの塀よりこっちの塀のほうが、なんとなくがんじょうにできているようだ。

しかし、その木戸にもしまりはなく、造作なくあいた。入ったところはおなじように雑木林になっていて、向こうにぽつんと一軒あかりのついている離れらしい家が目につく。

町中の下屋敷で、そう広くはないといっても二千坪ぐらいはあるだろうから、お葉はどこへつれこまれているか、――とにかく、目についたところからさがしていくほかないと思い、新三郎はあかりのついている離れのほうへ歩き出した。

おかしいのは、この屋敷の裏のほうにはどこにも人のいるような気配がしないことである。木戸のしまりがないのだから、当然、出入り口には番士が詰めて警戒をしているはずだ。まして、軍兵衛がここを本陣にしているとすれば、天狗党という敵を持っているのだから、そのくらいの用心を怠るはずはない。

――ことによると、わなに引っかかったかな。

そんな気がしないでもないが、もうここまできては後へひくわけにはいかない。

新三郎はかまわず離れの縁先のほうへ近づいていった。といっても、こういう時の新三郎の歩き方は、そのほうの心得があるから、決して足音は立てない。ここは茶室にこしらえてあるらしく、庭は雑木林を背景にして石をあしらい、わざとらしくない自然の小庭を作っている。

新三郎はまず戸袋のかげへぴたりと身を寄せて、明るい障子の中の気配にじっと心気を澄ましてみた。

たしかにだれかいる。それも、一人のようだと見ているうちに、

「いやだなあ、いつまで待たせる気なんだろう」

と、つぶやくようにひとりごとをいったのは、どうやらお葉の声らしい。

「そこにいるのはお葉さんか」

新三郎は低い声で呼んでみた。

「あら、どなた――」

お葉はすぐに立ってきて、障子一枚をあけた。

「ここだ、お葉さん」

「まあ、古賀さん、どうしてこんなところへ」

「お葉さんこそ、どうしてあんな駕籠へのったんだ」

「ぜひあわせたい人がある。こうして駕籠を持って迎えにくるくらいだから、決して礼儀に外れたことはしないっていうんですもの」
「ふうむ、あわせたい人がねえ」
新三郎はまゆを寄せながら、ふっとどこかに人の忍びよる足音を感じた。
「よし、そこへ行って話そう」
やっぱりこっちまでわなにかかったんだと気がついたから、新三郎は度胸をきめて縁先へ出ていった。
「大丈夫かしら。だれかきたらどうするの」
「いや、礼儀を心得ている人たちだから、心配はなかろう」
新三郎は上へあがって、そこの障子をあけ放し、座敷へ入って座った。
お葉もなにか感づいたらしく、そこへ座って、まじまじと新三郎の顔を見ている。
「お葉さん、あんたにあわせたい人ってのは、ことによるとわしかも知れないよ」
「そうかしら――」
お葉はさっと青ざめながら、庭のほうへ目を向ける。
「古賀新三郎、やっと気がついたようだな」
縁先へぬっと立ったのは鷲尾軍兵衛だった。うしろに大森金蔵と北野周平がついている。
「鷲尾さんは案外人が悪いようだな」
「どうだね、古賀うじ、今夜のわしの相は、ねらうほうが先か、ねらわれるほうが先か、どっちだね」
「さあ、そんなことはわしが改めていうまでもなく、今夜中にはっきりとわかってくるんじゃないかな」
「なにっ」
軍兵衛はきらりと目を光らせながら、
「おい、千鳥はどこへかくしているんだ。正直にいってしまったほうが貴公のためだぞ」
と、ずばりと出てくる。
やっぱり、軍兵衛はこっちを天狗党の一味と

疑っているようだ。
「千鳥というのは、死んだ天野屋浪右衛門の娘だそうだな」
「まだそんな白を切る気なのか。よし、それならこっちからいってやろう」
軍兵衛は鋭くお葉と新三郎の顔を見くらべてから、
「天野屋浪右衛門にはな、千鳥のほかに、めかけに産ませた腹ちがいの兄が一人ある。名を新三郎といって、今年二十八になるんだ。これは十五の時、江戸へ一人で飛び出してきて、生死不明になっていた。いいか、古賀、よく聞いていろよ。その新三郎が、あのごたごたのあった翌年、町人に化けて国もとへ帰り、牢破りをやって大番頭の磯右衛門というのを助けて、江戸へのがれた。その磯右衛門が江戸へきて、目安箱へ訴状を入れて尼崎藩を取りつぶしにかかったが、これが途中で何者かに切られて死んでしまった。そこで、新三郎というやつが天狗党などという人騒がせな徒党をこしらえて、大胆にも直接尼崎藩へ復讐をしようとたくらむようになった。――どうだ、おぼえがあるだろう、古賀」
軍兵衛はにやりと冷酷なうすわらいをうかべる。
それにしても、これはまったく意外な話で、新三郎は啞然とせずにはいられない。
「妙なことをいうなあ、鷲尾さん。するとわしはどうやら天野屋の遺児と間違えられているようだが、なにかそんな証拠でもあるのかね」
「あるとも――。悪いことはできないもんで、その時ちゃんと新三郎の顔を見ている生き証人があるんだ」
「生き証人――」
「おい、白を切ったってだめだ。あの牢破りの時、貴様が牢番に化けていたのを、わしはこの目でちゃんと見ているんだからな」
そばから北野周平が得意そうな面を突き出し

てくる。
「ふうむ、わしが牢番にねえ」
「お葉、お前は今日、長いこと南の渡辺源太夫と二階で話しこんでいたな。どんな話をしていたんだ」
軍兵衛はふいに鋭い目をお葉に向ける。
「それがどうしたっていうんです、鷲尾さん」
お葉はどきりとしながらも、あべこべに食ってかかる。
「それから、さっきもお前はこの男と二階へあがったきり、なかなか店へおりてこなかったそうだ」
「大きなお世話でしょ、あたしがだれと話しこんでいようと」
「そりゃお前がお葉なら、だれと話しこんでいようとかまわないが、——この男と長い間二人きりで話しこんでいたとなると、こっちはお前を天野屋の娘千鳥じゃないかと疑いたくなってくるんだ」
「なんですって——」
さすがのお葉もあっけにとられた顔である。

あぶない橋

1

「お気の毒さまでしたねえ、あたしはもと多町の岡っ引き松五郎の娘で、多町で生まれて多町で育ったんですから、名はお葉、町内へ行って聞いてもらえばすぐわかります。あんまり変な間違いはしないでもらいたいわ」
お葉は怒ったようにきっぱりとやりかえす。
「そうか。では、すぐに調べてみることにしよう。新三郎のほうはどうなんだ」
鷲尾軍兵衛は冷たい目を古賀のほうへ向ける。あごの角ばっているあたり、相当執念深そうな面がまえだ。
「あんたさっき妙なことをいったな。天野屋の

大番頭磯右衛門は目安箱へ訴状を入れて、だれかに殺されたといったが、その下手人はわかっているのかね」
新三郎はおだやかに、こっちから聞きかえす。
「そんなことはわしに聞かなくても、お前のほうがよく知っているはずだぞ」
「目安箱というのは、将軍家が直々にひらくものだ。そして、その必要があれば訴状を老中にわたして調べさせる。絶対にほかへもれるはずはないものだと聞いているが、あんたはだれから磯右衛門が訴状を出したと耳にしたんだろうな」
軍兵衛は、急所をつかれて、ぐっと返答に詰まったようだ。
「わしは、ゆうべ、あんたたちに柳原土手へ呼び出された。あんたたちに別れると、すぐまた別のぬすっとかむりの男に呼びとめられた。実は、その男の口から天狗党の由来を聞いたのだが、この男はどうもあんたたちの後を始終つけて歩いているんじゃないかと思う。そんな心あたりはないかね」
「その男は、貴様がいいつけて、我々の後を尾行させていたんだ。ちゃんとわかっている」
「さあ、それは少し見当ちがいのようだな。わしは第三者だから余計なことはいわなくてもいいんだが、あんたがたの敵は天狗党ばかりじゃないようだ。いいかえれば、別のもう一組みが千鳥とかいう娘さんをねらっている。それもわかっているかね」
「どうだ、新三郎、そんなむだごとをならべ立てる口で、千鳥のかくれ家を白状してしまってはどうだ。強情を張ると、痛いおもいをするだけ損だぜ」
軍兵衛はにやりと勝ち誇ったような冷笑をうかべる。
「気の毒だが、そんな人ちがいをするようでは、鷲尾さんはあんまり頭のいいほうではないな」
「黙れっ、貴様があの時牢番に化けていたこと

は、このわしがちゃんと顔を見おぼえているんだ。貴様は天野屋の遺児新三郎に相違ない。人ちがいだなどと、白々しいことをいうな」
そばから北野周平が浴びせかけてくる。
「他人の空似ということがある。だいいちわしが天野屋の遺児なら、おそらく今まで貴公たちを生かしてはおかなかったろうな」
「言い訳は無用だ。真偽のほどはいまにわかる」
軍兵衛が憎々しげにいう。
「それで、あんたがたは我々をどうしようというのかね」
「それも、いまわかる」
軍兵衛はいきなりふところから短筒を出して、ぴたりと新三郎をねらいながら、
「おい、おとなしく両刀を前へ出すんだ」
と、横柄に命じる。
「やれやれ、短筒の脅迫ではしょうがありませんな」
新三郎は苦わらいをしながら、両刀を取って前へ出した。
「そんなことをして大丈夫なの、古賀さん」
お葉がはっとしたように顔色をかえる。
「なあに、こっちは善人なんだから、まあ、災難だと思ってあきらめよう」
新三郎は平気な顔をしている。
その間に、軍兵衛があいているほうの手をあげて合図をすると、大森金蔵が廊下へあがって、素早く両刀をさらい、物かげにかくれていた若侍たちが五寸角の牢格子を庭から運んでくる。
「おどろいたなあ、これが尼崎藩の礼儀なのかな」
新三郎があっけにとられているうちに、若侍たちはたちまち障子の外がわへ牢格子をはめこんでくぎで打ちつけてしまう。これで茶室は座敷牢に早がわりをしたことになる。
「おい、しばらく二人きりにしておいてやるから、よく相談しておくがいい」
「なにを相談しておけというんだね」

「貴様もあんまり頭のいいほうじゃないな。こっちの知りたいのは、天野屋の埋蔵金のあり場所なんだ。それさえすなおに白状すれば、命までとろうとはいわぬ。まあ、ゆっくり考えておくことだ」
軍兵衛はそういってせせら笑いながら、一同をしたがえて母屋のほうへ引きあげていった。
「どうしよう、古賀さん」
さすがにお葉は生きた色もないようである。
「えらい目にあうもんだなあ、お葉さん」
「あいつたち、本当にあたしを千鳥さんだと思っているのかしら」
「さあ、今のところは半信半疑というところだろう。それより、むしろ、わしのほうを天野屋の遺児だと思いこんでいるようだな」
「古賀さんは尼崎へ行っていたことがあるんですか」
「いや、一度も行ったことはないんだ」
「じゃ、どうして北野はあんなことをいうんでしょう」
「北野のいう牢番の新三郎というのが、どこかわしに似ていることだけは本当なんだろうね」
お葉はじっとこっちの顔を見つめながら、
「古賀さん、本当のことを教えて——。古賀さんは本当に尼崎へ行ったことはないんですか」
と、真剣な顔をする。
「なんだ、お葉さんまでわしを疑いたくなったのか」
「だって、北野は本当にそう思いこんでいるようなんだもの。いくらなんだって、そんなこと人まちがいをするかしら」
「問題はどうやらそこにあるようだね。北野はわしをその時の牢番新三郎だと見た。その新三郎がよく松葉屋へ行くので、自分たちも松葉屋へ通って、新三郎の様子を見ていると、新三郎はよくお葉と話しこんでいる。すると、お葉はことによると千鳥じゃないかと考えたくなってくる。そこで、今夜思いきってお葉をここへつ

れこんでみた。お葉が千鳥なら、天狗党の新三郎が必ず助け出しにくるとにらんで、わざと裏木戸をあけておくと、案の定、わしがわなにかかってきたということになるんだな」

「あたしが千鳥さんでないということは、多町へ行って聞いてもすぐわかるけれど、古賀さんが天狗党の新三郎さんじゃないということは、ちょいとわかりにくいんじゃないかしら」

「そりゃお葉さんまでわしを疑いたくなるくらいだから、天狗党を恐れる鷲尾たちとしては、あくまでもわしを天狗党の新三郎にしておきたいだろう。しかしなあ、お葉さん、わしがもし天野屋の遺児なら、ゆうべ柳原土手であの三人を切っている。親の敵だから許しておくはずはない」

「そういえばそうねえ」

お葉はどうやら納得したようにうなずきながら、

「じゃ、あたしたちが天狗党でないとわかれば、あの人たちおとなしくあたしたちを帰してくれるかしら」

と、心細そうに聞く。

「さあ、それはどうだろうな。あの連中は、罪もない天野屋の一族を罪におとして、牢内で毒殺してしまったような冷酷な人間どもだからね、もし我々を無事に帰して、自分たちの秘密を世間へあばかれては困る、いっそ口をふさいでしまえと考えるんじゃないかな」

「いやだわ、あたし、こんなところで殺されるなんて――どうすればいいのよう、古賀さん」

「まあ待て――。いま考えてみよう」

新三郎は案外のんびりとした顔つきである。

――どうして、古賀さんはさっき、おとなしく刀をわたしてしまったんだろうな。

お葉は気が気ではなくなってきた。たとえかなわないまでも、さっき刀を抜いて闘ってくれれば、なんとか逃げられる道がついたかも知れないのだ。短筒の弾など必ずあたるとはきまっ

ていやしない。

――やっぱり、この人は腕には自信がないのかも知れない。

そう思うと、お葉はいよいよたよりなくなってくる。

「ねえ、古賀さん、考えればきっとここから脱け出せる工夫がつくの」

「うむ、いまそれを考えているんだ」

「心細いなあ、あたし。いくら考えても、逃げる工夫がつかなかったらどうするの」

「そんなにあわてないで、お葉さんもいっしょに考えてくれるといいんだがなあ」

「あたしになにを考えろっていうんです」

「そうだ、まずあの障子をしめてきてもらいたいな」

「あの障子をしめればどうなるんです」

「ことによると、敵は庭からこっちがどんなにあわてているかのぞいて見ているかも知れないんだ。なにもお葉さんが泣きべそをかいているのを、敵に見物させておく必要はないからね」

「あたし泣きべそなんかかいちゃいません」

お葉はどきりとしながら、いきなり立っていって、ぴしゃりと廊下の障子をしめてしまう。そして、ふっと変な気がしてきた。もし古賀が自分にいたずらでもしかけてきたら、どうしようと考えたからである。

――まさか。

さっきも長い間、二人きりで家の二階で話しこんでいたのに、古賀にはそんな気ぶりさえ見えなかった。そう思いかえして、お葉はもとの座へかえると、

「さあ、障子をしめたわ。あたしになにを考えろっていうんです」

と、わざと食ってかかるように、新三郎の顔を見すえる。

「お葉さん、ちょっと耳を貸してごらん」

新三郎は小声でいって、つと両手を肩へかけてきた。

たったいまそんなことを考えていたばかりだから、お葉はあっと体中がかたくなる。が、どうしたことか、その男の手を払いのける気にはなれない。
「鷲尾たちはね、わしたちを天狗党の千鳥と新三郎だと見ている。すると、新三郎と千鳥は、腹ちがいではあるが兄妹ということになるだろう。兄妹で畜生道におちるはずはないから、二人をいっしょに座敷牢へ入れてみたんだ。だから、ここでもし障子をしめきって、行燈を消すと、二人は兄妹ではないことになるんだ。すくなくとも、お葉さんは千鳥ではないとわかって、敵はがっかりする」
「そうねえ、たしかにそうだわ」
「もう一つ、わしたちが本当に天狗党の者なら、仲間たちが黙ってみてはいない。必ず二人を助け出しにくる。敵はそれを一網打尽にしようとねらっているんだ」
「それも当てが外れるわけね」
「そこで、もう一つ大切なことは、老中組が本当に千鳥をねらっているとすれば、我々をこのままほうってはおかない。きっと横取りにくる。さっきお葉さんが店へ出ていった時、これは怪しいなと思えるような客は目につかなかったかね」
「古賀さんはやっぱり頭がいいのね」
お葉は思わずため息が出てくる。気がついてみると、自分の両手はいつの間にかしっかりと男のひざをつかんでいるのだ。ほおが火のようにほてっている。
「あたしは店へ出るとすぐ大森に呼び出されたんで、はっきりとはいえないけれど、三十がらみの渋い顔つきの遊び人らしい男が、一人でのんでいたわ。ひょっとすると、これが古賀さんの話していた伊太吉じゃないかしらと思いました」
「そうか――。この座敷牢は中から破るのはちょっと骨が折れそうだが、いまに外から破って

くれる者がありそうな気がする。まあ、気ながに待ってみるんだね」
「行燈を消すの、古賀さん」
お葉はわくわくと胸がはずんでくる。
「いや、それはもうしばらく様子を見てからにしよう」
新三郎は肩の手をそっと離して、おだやかに微笑した。

2

「くせ者だ、出あえ」
「くせ者が押し入ったぞう。出あえ出あえ」
突然、外庭のほうからけたたましい叫び声がおこったのは、それからまもなくだった。
「きたようだわ、古賀さん」
どきりとしたようにお葉が顔をあげる。
「よし、行燈を消すんだ、お葉さん」
「はい」
お葉は立っていって、すぐに行燈を消した。
一瞬あたりは急に真っ暗になったが、外には月があるので、その反射で廊下の障子がわずかに明るんで見える。
茶室のわきを通って、何人も外庭のほうへ走っていく足音が、どすんどすんと耳につく。
「油断するな。それ、そっちだ」
「内木戸は大丈夫か」
「手ごわいから気をつけろ」
そんな叫び声が、たちまち外庭中へひろがっていくようだ。
「怖い、古賀さん」
お葉は我にもなく男の胸へすがりついていく。半分は古賀に抱いてもらいたい気持ちが十分にあるお葉だった。
「しっ、黙って――」
新三郎は左手でお葉の肩を軽く抱きながら、じっと外の物音に耳をすましている。
茶室の庭へだれかきて立ったようだ。無論、鷲尾軍兵衛にちがいあるまい。

「うまく引っかかったようですな、若だんな」
後からきた大森の声がいう。
「うむ、敵は何人ぐらいいるんだ」
軍兵衛の声が聞く。
「五人です。覆面黒装束というでたちで、船で裏の河岸へつき、こっちにちゃんと手くばりがあるとは知らず、ぞろぞろと木戸から入ってきました」
「裏木戸はちゃんとしめてしまったろうな」
「しめました。北野ががんばっているから大丈夫でしょう」
「一人も生かしてかえしてはならん」
「しかし、おかしいことが一つあります」
「なにがおかしいんだ」
「五人ともみんな侍ばかりで、だれもひとことも口をききません。天野屋は町人だから、一人や二人町人がまじっていてもいいはずだと思うんですがな」
「それは侍に化けてきたほうが働きいいからだろう」
「そういえばそうですが、忍者はどんな切りあいになっても口は決してきかないものだと聞いています。今夜の五人は五人とも、ちゃんとそういう心得があるようです」
「そんなことはふしぎのうちには入らぬ。天狗党は尼崎五万石を向こうにまわして、大それた復讐をたくらんでいるんだ。みんな忍者の修業ぐらいしたくなるのは当然じゃないか」
「一本まいりました。たしかにそのとおりです」
大森金蔵はぺこりと一つおじぎをしたようである。
「まだ一人も片づかないのかな」
軍兵衛は舌うちをしたようだ。わあっ、わあっという味方の必死の声は、少しもおとろえようとしないのだ。
——はてな。
全身を耳にしている新三郎は、庭のほうとは反対の三尺のふすまの向こうで、こつこつとこ

っちへなにか合図をしているような小さな音を耳にした。
そのふすまはこの六畳の裏がわにある三畳の茶室へ入る戸口になっていて、無論ここにも五寸角の牢格子が打ちかけてある。
新三郎はお葉の肩を離して、その戸口へいざり寄り、そっとふすまをあけてみた。
意外にも、その牢格子についている二尺幅ほどの出入り口の戸があいていて、その向こうに黒装束の男が一人、こっちへ出てこいというように、黙って手まねきをしている。
——そうか、こっちが考えていたとおりだ。
新三郎は少しもためらわずにうなずいてみせて、お葉の手をとり、自分から先にするりと向こうへ出る。
男は無言で三畳の茶室へ入り、そこのにじり口から素早く庭へすべり出る。
こちらもそのとおりにして庭へ出た。
先に立った男は、足音も立てず雑木林の中へ入って、まっすぐ東の塀ぎわまで進んでいく。
その塀の外は、さっき新三郎が表から裏へまわったとき通った路地になっているのだ。
男はその塀の板を二枚ほど簡単に外して、苦もなく路地へぬけ出る。
こっちもつづいて路地へぬけ出ると、男はすたすたと川っぷちのほうへ歩いていく。
お葉はいまになって急に怖くなってきたらしく、しっかりと新三郎の手にすがって、がたがたふるえているようだ。
月のあかるい河岸っぷちへ出ると、そこの桟橋の下に灯を消した屋根船が一艘、ひっそりともやってある。
男は桟橋の上へ立って、早くあれへ乗れというように、船を指さしてみせる。黒覆面黒装束に身をかためた中肉中背の、いかにも敏捷そうな男で、覆面の中の目が鋭く光っている。
——なるほど、これは忍者のいでたちだ。
新三郎はそう見て取りながら、うなずいて桟

橋をおり、お葉をつれて船へ移る。

艫にうずくまっていた船頭が、すぐにもやいを解きはじめる。

それを見とどけた忍者は、足早に下屋敷の裏木戸のほうへいそぎ出す。おそらく、味方の人数をまとめに行くのだろう。

「だんな、いまのうちだ。逃げやしょう」

「えっ」

お葉を船房へ入れて、自分も一足入りかけた新三郎は、びっくりして船頭のほうへ振りかえる。

「なにもおおかみの檻を出てとらの檻の中へ入れられることはねえでしょう。あっしについておいでなせえ」

いつの間にか手ぬぐいをぬすっとかむりにした船頭が、ひらりと桟橋へ移る。

「そうか――。では、たのむ」

下屋敷の裏木戸のほうを見ると、忍者はもう屋敷の中へ入ったらしく、往来には人影もない。

「お葉、こい」

新三郎はお葉の手を引っ張って、船頭のあとから桟橋を駆けあがり、いま出てきたばかりの路地へ飛びこむ。

「どうするの、古賀さん」

「まあ、まかせておけ」

座敷牢から助け出してくれた忍者は、老中組の者にちがいないのだ。どこかで逃げなければならぬと新三郎も考えていたので、ちゅうちょなく船頭のさそいに乗ったが、一体この船頭は何者なのだろうと、こんどはそれがちょいと気になってくる。

左手はさっきの下屋敷の塀で、右手は小さな家がごたごたとならんでいる。船頭はすぐにそっちの路地へ曲がって、路地から路地へぐんぐん歩きつづける。

「あぶなかったねえ、古賀さん」

ここまでくればもう大丈夫と見たのだろう、船頭がふっと話しかけてきた。

「うむ、おかげで助かった。さっきのやつは忍者のようだな」

新三郎は船頭の背中へ聞く。

「そうですよ。あれは黒住鬼堂という忍者で、ある大官に召し抱えられている隠密の頭目でさ。自分から鬼を名前にしているくらいだから、鬼のようにすごいやつです」

「そうらしいな。今夜は鷲尾党をまるで子供あつかいにしていたようだ」

「まあ、軍兵衛なんかではちょいと歯が立たないでしょうね」

「わしもお葉も、別に鷲尾党にねらわれるようなことはなにもないんだが、今夜はひどい目にあってしまった」

新三郎はそれとなく持ちかけていってみる。

「お葉姉御のほうは、とんだまきぞえを食ったことになるんだが、――古賀さんはねらわれるわけがないとはいえないでしょうよ」

「なんでも、わしは牢番の新三郎とかによく似ているんだそうだ」

「あっしがその話をひとつしてみやしょう。なにか思いあたることがあるかも知れやせん」

「うむ、ぜひ聞かせてもらいたいな」

新三郎は思わず耳をすます。

「今から四年前に、尼崎の牢屋に、たしかに新三郎という牢番がいたんだそうです。これは後からわかったんですが、公儀の隠密だったんですね。つまり、入牢中の磯右衛門という男から、いろいろなことを聞き出したくて牢番になったわけです。だから、磯右衛門に引っかかりのあるある男が、ある暴風雨の晩、牢屋へしのびこんで磯右衛門を助け出した時、その牢番が手引きをして、うまく自分もいっしょに逃げ出してしまったんです」

「ふうむ、その牢番が手引きをねえ」

「ことわっておきますが、金にころんでの手引きじゃありません。義侠心からの手引きです。ところが、尼崎のほうでは、磯右衛門を助け出

したのは牢番一人の仕事だと見たんですね。だから、そのある男と新三郎さんがごっちゃになって、牢番の新三郎さんが天野屋のかくし子だと思いこんでしまったんですね」

「なるほど、よくわかる」

「それから、そのある男は磯右衛門をつれて船で江戸へ逃げたんです。その時、新三郎さんもいっしょに逃げればよかったんですが、まだ仕事があるからと後へ残り、なんでもこんどはこじきに化けていたそうですが、こいつくさいとにらんだのは、鷲尾党でも一番の軍師といわれる大倉玄蕃という男で、ひそかに新三郎さんをやみ討ちにしてどこかへ埋めてしまったそうです。まったくお気の毒なことをしました」

「ふうむ、切られてしまったのか」

「惜しいことをしました。無論、ある男は新三郎さんに恩があるので、この敵討ちは自分の手できっとやるといっているそうです」

「ありがとう。それですっかりわかった。そうか、その新三郎は切られていたのか」

新三郎は思わずくちびるをかみしめている。

「あっしはねえ、古賀さん、新三郎さんからなんにも聞いていないので、古賀さんのことはつい最近まで知らなかった。鷲尾はどうして松葉屋へよく通うんだろうと、ふしぎに思って、この間ちょっとのぞいてみましてね、古賀さんの顔を見てびっくりしました。なるほど、これじゃ鷲尾党がねらうわけだと、それからはずっと気をつけていたんで、どうやら今夜は恩がえしが一つできたというわけです」

「あんたの名前を聞いちゃ悪いか」

「いずれは名乗るようになるでしょうが、あっしは古賀さんをこのごたごたの中へまきこみたくないんでさ。まあ、当分見のがしておいておくんなさい」

船頭は一度もこっちを振りかえってみようともせず、

「さあ、黒門町へ出やした。ここまでくればもう大丈夫でしょうから、あっしはこれで失礼いたしやす。どうぞお気をつけなすって」

そういったかと思うと、顔を見られないようにして、ふっとそこの路地へ別れていく。

「あの人、天狗党ね、古賀さん」

お葉が小声でいいながら、じっとそのうしろ姿を見送っている。

3

「お葉さん、家まで送ろう」

古賀新三郎はお葉をうながして、黒門町通りを筋違橋のほうへ歩き出した。

いまそこで別れてきた男は、古賀さんをこの事件にまきこみたくないから、名前は名乗らないといっていたが、どうもそうはいかなくなってきたと新三郎は思った。今夜、鷲尾党も再三口にしていた牢番の新三郎というのは、兄の新兵衛にちがいないとわかってきたからである。

古賀家は父祖の代から将軍家直属のお庭番で、お庭番は将軍から直々の内命をうけると、家へも帰らずその場から隠密として目的地へ立っていかなければならない。だから、家の者は当人がどこへなにをしに行っているのか、その当人が帰ってくるまでは皆目わからないことになっている。

しかも、隠密はその行った先で隠密らしいとわかると、その藩で必ず切られてしまう。公儀としても、隠密はその藩の秘密をさぐりに行くのだから、たとえそこで切られたとわかっても、その藩をとがめるわけにはいかないのだ。つまり、敵に見破られて切られてしまうような隠密は、当人が無能だからということになるのである。

古賀家でも兄新兵衛は四年前に家を出たっきり、いまだに帰ってこない。どこかで御用をつとめているのだろうと思っていたが、いまの男の話で、行った先は尼崎、新三郎と名をかえて牢番になり、ある男といっしょに入牢中の天野

屋の大番頭磯右衛門を助け出し、その後、大倉玄蕃という者に切られたとわかってきた。

新三郎は兄新兵衛とよく顔が似ている。北野周平が牢番の新三郎と間違えるのは無理もない。しかも、鷲尾党は牢番の新三郎が天野屋の遺児だと思いこんでいる。

いまの男は、こっちをこの事件にまきこみたくないといっていたが、鷲尾党から見れば新三郎はすでにこの事件の中心人物になっているのだ。また、新三郎としても、兄がこの事件で鷲尾党のために切られているとわかったからには、意地でも兄の弔い合戦をやらなくては承知できない。

無論、隠密は家を出た日が命日で、役目がら敵討ちなどということは成立しないが、尼崎藩が天野屋を横領した悪辣冷酷なやりかたは、人としても許しがたいものがある。

それがあるから、兄新兵衛も隠密としては許されないある者につい協力して、自分の命まで失ってしまったのだろう。

——よし、わしは今日から兄の志をついでやる。

兄の死を悲しみ、兄の冥福を祈るのはそれからだと、新三郎ははっきりそう腹をきめた。

「古賀さん、なにをそんなに考えこんでいるの」

さっきから新三郎は一言も口をきかずにむっつりと歩いているので、怒っているのかしらと、お葉は急にそれが心配になってきた。

「いや、考えることがどうもたくさんありすぎてねえ」

新三郎はやっといつもの顔になったようだ。

「あたし、怒っているんじゃないかと思って、悲しかったわ」

「それより、お葉さん、家できっと心配しているぞ」

「そうね。でも、こうして無事にかえれるなんて、夢みたいな話なんだから、おとっつぁんよろこんでくれると思います」

「しかしなあ、わしにしてもお葉さんにしても、これですんだというわけにはいかないんだ。むしろ、これからのほうが、もっとあぶなくなる。困ったことになったもんだな」

「大丈夫よ。あたし、その度に古賀さんに助けてもらうつもりなんだから」

お葉はそんなのんきなことをいい出す。

「でも、古賀さん、刀を取りあげられちまって困りゃしない」

「うむ、なんだか腰が寂しくて変だな」

筋違橋をわたると、連雀町はもうすぐそこである。

「今夜はあたしたち、まったく変な目にあっちまったもんですね」

「そのとおりだ。こっちはなんにも知らないでいるうちに、向こうはちゃんとこんな膳立てをしている。しかも、これはとんだ災難だったではすみそうもない。もっと根深いものがあるんだから、世の中は油断ができない」

「本当ねえ。でも、あたしを千鳥さんと間違えるなんて、あんまりばかばかしすぎやしないかしら」

「それは、こっちから見ればなにをあわててやがるんだとわらいたくもなるが、向こうからいえばお葉さんを千鳥だと疑いたくなる理由はちゃんとあるんだから、おわらいぐさではすまされなくなるんだ」

「古賀さんがその時の牢番新三郎に似ているというのが、こんどの間違いのはじまりになったわけなんでしょう」

「そうなんだ。しかも、鷲尾党はその新三郎を天野屋の遺児と思いこんでいるんだから、いよいよ面倒なことになってくるんだな」

「ねえ、さっきあたしたちを助けてくれた船頭さん、あの人があたし千鳥さんの腹ちがいの兄さんじゃないかと思うんだけど、ちがうかしら」

お葉が声をひそめながら、さすがに頭のいいことをいう。

「それは、わしもそうじゃないかと思っている」
「すると、あの船頭さんが牢番の新三郎といっしょに、牢屋を破って、磯右衛門という大番頭さんを助け出したことになるわけね」
「うむ、そうなる」
「牢番の新三郎さんは、後で切られたといっていましたね」
「うむ」
「あの船頭さんも、古賀さんはその牢番に似ているんで、びっくりしたといっていましたね」
「うむ」
　なにか勘づいたかなと思ったが、お葉はそれっきり口をつぐんでしまう。もうそこが松葉屋の前だった。
　時刻は五ッ（八時）をまわったころだろうか、松葉屋は掛け行燈（あんどん）を引っこめて、入り口の雨戸を一枚しめている。今夜は少し早目に店をしまったようだ。
「ただいま――」
　お葉が油障子をあけると、
「おお、帰ってきたか」
　がらんとした店の土間の台の前に、つくねんと一人で腰かけていた父親の松五郎が、さっと目を光らせて立ちあがった。
「一体、どうしたんだ、お葉」
　無事な顔を見て、ほっと安心すると同時に、むらむらっと腹が立ってきたのだろう。
「親分、まことに相すまん」
　後から土間へ入った新三郎は、すかさず松五郎の前へ出て頭をさげた。
「なんだ、古賀さんもいっしょだったのか」
　松五郎はやっと怒気をおさえて、ゆがんだような苦わらいをする。
「お葉さんもわしも、今夜はとんだ災難にあって、わしは見てのとおり、両刀まで取りあげられている。おおげさにいえば命からがら逃げ出してきたというわけなんだ」
「まあ、掛けやしょう。――おい、だれか早く

茶を持ってこねえか。早く表の戸をしめちまうんだ」
　松五郎は板場のほうへどなりつけて、それでどうやら怒気のほうはいくらか発散したようである。
「表なら、あたしがしめるわ」
　お葉はすなおに入り口の雨戸をしめる。
「親分、さっそくだが、親分は五年前尼崎でおこった天野屋事件というのを知っているだろうか」
　新三郎はいきなり本題へ入っていく。なるべく早く松五郎の怒気を消してしまいたかったからだ。
「たしか百万両にからむごたごたでしたね。それならまだ十手をかえす前だったから、小耳にはさんでいやす」
「そうか。じゃ、話は早い」
　新三郎は、今夜お葉が鷲尾党に呼び出されて、駕籠（かご）で佐久間町の下屋敷へつれこまれたことから、妙な船頭に助けられて、やっとこうして無事にここへ帰ってこられたあらましの話を、松五郎の耳に入れる。
「ちょっと待っておくんなさいよ、古賀さん」
　松五郎はそうことわっておいて、
「豊吉、おい、豊吉はいねえか」
　と、奥へ呼ぶ。
「へえ、御用でござんすか」
　さっき顔見知りの板場の豊吉が、土間へ顔を出す。
「あのなあ、豊吉、お前そっと台所口から出て、家の前に怪しいやつがうろついているかも知れねえ、しばらく見張ってくれ」
「かしこまりやした」
　若い豊吉はすっと板場へ引きかえしていく。
「お葉、お前おとっつぁんの脇差（わきざし）を持ってきて、古賀さんにお貸ししてあげろ。お武家さんが丸腰じゃ不用心でいけねえ」
「はい」

長い間岡っ引きでたたきあげてきているだけに、これは生やさしい事件じゃないと、松五郎はすぐにぴんときたようだ。
「親分、さすがだなあ」
「こんな気をつかうのがいやで、一杯のみ屋のおやじになったんだが、娘まで事件にまきこまれちまったんじゃ、しょうがありやせんや。しかし、古賀さん、こいつは根が深そうだから、少しの油断も禁物ですぜ」
「わしもそう思っている」
「たとえ間違いにもせよ、古賀さんも、うちのお葉も、もう事件の中へまきこまれてしまったんだ。しかも、鷲尾党にしろ老中組にしろ、自分たちの秘密を古賀さんやお葉にのぞかれてしまっている、それだけでも敵は早く二人の口をふさがなくちゃ安心できなくなっているんですからね」
「親分は黒住鬼堂という忍者を知っているだろうか」
「知っていやすよ、まだ会ったことはありやせんが、御老中稲垣伊勢守さまがふところ刀にしている恐ろしいやつだそうです。この鬼堂ってやつが一人いるために、ほかの御老中方がみんな稲垣さまに一目置いているんだっていううわさがあるくらいなんですからね」
「すると、鷲尾党と張りあっている老中組は、稲垣組と見ていいわけだな」
「まあ、黒住党といっておくほうが穏便でしょう。御老中さまが人の百万両をねらうなんてのは、あんまり世間へは知らせたくない話ですからね」
「たしかに親分のいうとおりだ。世間が老中を信用しなくなると、世の中は物騒になるばかりだからな」
「そこでねえ、古賀さん、今夜黒住党が鷲尾党から二人を横取りしようとしたのは、黒住党は絶えず鷲尾党の動静をさぐっているだろうから、これはわかるとして、それをまた船頭が助

けてくれた。その船頭は無論天野屋の一族で、たぶん妾腹のせがれと見ていいだろうが、するとその天野屋の一味、つまり天狗党でも、絶えず鷲尾党の動きを見張っているということになりやすね」
「うむ、そういうことになる」
「その天狗党が古賀さんとお葉を助けてくれた、しかもその船頭はどうしてこんな間違いがおこったかという真相を古賀さんに話してくれたんでしょう」
「うむ」
「なんの引っかかりもない赤の他人にしては少し親切すぎるようだが、古賀さんはそれについてなにか思いあたることがあるんですか」
松五郎も元の稼業がら、どうやらおよそのことは勘づいているらしい。
「わしの口からそれをいうことはしばらく保留しておいてほしいが、思いあたることはたしかにある」
「そうなんでしょうね。それだと、こんなあぶない事件に深入りしないほうがいい、一時どこかへ身をかくしていたほうが安全だと、すすめてみてもむだだということになりやすね」
「まあ、わしのことは男だから自分でなんとでもやっていくが、お葉さんは当分どこかへかくれたほうがいい。つまらぬ飛ばっちりをくったんでは、それこそ取りかえしがつかないからな」
「そいつはよく考えてみやす。あっしも元は岡っ引きだ、江戸の街を鷲だの鬼だのに勝手に荒らされたんじゃ、黙って見ちゃいられやせんからね」
松五郎にもまだそれだけの気概は残っているようである。
「じゃ、今夜はこれで失礼する」
新三郎が立ちあがると、
「はい、脇差――」
お葉が父親の脇差をわたしてくれる。
「ありがとう、拝借する」

「どうせ業物というわけにゃいきやせんがね、それでもないよりはましでしょう。どうぞお気をつけなすって」

新三郎は松五郎親子に送られて、松葉屋を出た。

「親分、別に怪しいやつは見あたりやせんよ」

そこの路地口から豊吉が出てきて告げた。

「御苦労だったたな、豊吉うじ」

新三郎はねぎらいの言葉をかけておいて、八辻ガ原のほうへ歩き出す。

4

翌日――。

新三郎は六ツ半（七時）ごろ家を出て、和泉橋へ向かった。風来坊の伊太吉と会う約束があるからである。

新三郎は今日は一日中長屋に引きこもっていて、わざと松葉屋へも顔を出さなかった。松葉屋になにかおこれば豊吉が迎えにくるだろうし、自分がお葉に近づくことはいよいよお葉をこの事件にまきこむことになる。当分は松葉屋から遠のいているほうが無事なような気がするのだ。

それにしても、鷲尾党は昨夜こっちが逃げ出したとわかっていて、どうしてすぐ松葉屋をさぐりにこなかったのか。もしさぐりにきているとすれば、自分の帰りも無事ではすむまいと覚悟していたのに、別にそんな様子もなかった。

一体、鷲尾党はもう一組み強敵黒住党があることを知っているのだろうか。また、黒住党にしても、せっかく横取りした鴨（かも）に逃げられていながら、昨夜のうちに松葉屋へ手を打たないというのは、少し手ぬるすぎるような気がする。

皮肉なのは、鷲尾党にしろ黒住党にしろ、躍起になって天狗党をさがしているのに、どっちもまだその影さえつかめず、かえって自分たちのほうが天狗党の一人らしい者と昨夜口まできいている。おかしなものだと、新三郎は思うのである。

そこで、今夜これから和泉橋で会うことになっている伊太吉だが、こっちは彼を黒住党のまわし者と見ている。もしそれが事実なら、今夜はどこかに待ち伏せの用意があるはずなのだ。考えようによっては、今夜という日があるから、黒住党は昨夜なんの手も打とうとしなかったのかも知れない。

そうわかっていながら、新三郎が昨夜借りた脇差一本でなんの用意もなくこうして出てきたのは、敵は決してこっちを殺さないだろうという自信が新三郎にはあるからである。

平永町から和泉橋はつい目と鼻の間なので、新三郎はまもなく和泉橋の南たもとへかかってきた。

――感心に、もうきているな。

月夜だから一目で橋は見とおせる。その橋の中ほどにぬすっとかぶりの男が立って、川下のほうをながめている。伊太吉にちがいないのだ。

その川下を一町ばかりくだった左手に、昨夜つれこまれた尼崎藩の下屋敷の塀（へい）が見えている。どうもあまり安心していられる場所ではないようだ。

「伊太さん、だいぶ待ったかね」

そばまで行って無造作に声をかけると、伊太吉はくるりとこっちを向いて、

「よく出てきやしたねえ、だんな。色男にしちゃいい度胸だ」

と、ぬすっとかぶりの中の目が感心したようにわらっている。

「わしはこれで約束はかたい男なんだ」

「まあ、歩きながら話しやしょう」

伊太吉はゆっくりと柳原土手のほうへ歩き出す。たぶん、土手のどこかに味方が伏せてあるのだろう。

「そこで、一昨日の晩の返事だがね、わしは一口乗ってもいいと思うんだ」

「本当かね、だんな」

「わしはこれでも二枚舌は使わないことにしている男なんだ」
「じゃ、だんな、ちょいとうかがいやすがね、今夜はどうして脇差一本しかさしてこないんですね」
「実は、ゆうべ鷲尾党につかまって、あそこの佐久間町の下屋敷へおびきよせられてな、大小とも刀を取りあげられてしまったんだ」
「驚いたなあ。なるほど、だんなは正直だ」
「伊太吉さんは黒住鬼堂っていう忍者を知っているかね」
　こんどはこっちからさぐりを一本いれてみる。
「知っていやすよ。ゆうべだんなとお葉を茶室から助け出してくれた男でしょう」
「そのとおりだ。案外、伊太さんも正直らしいな」
「そりゃ、だんな、正直な人にうそをいっちゃ悪いからね。そのくらいの義理はあっしだって知っていまさあ」
「じゃ、ゆうべあれから鬼堂さんはどうしたろう」
「だんな、そんな子供みたいなことを聞くもんじゃありやせん。せっかく手に入れただんなに逃げられちまったんだ、おとなしく引きあげるよりしょうがねえでしょう」
　伊太吉は苦わらいをしているようだ。足はぶらぶらと柳原土手を川下のほうへ歩いている。
「鷲尾党は黒住党のことを知っているんだろうかな」
「そいつはゆうべなんだかおかしいと気がついたようですよ。はじめ鷲尾たちは天狗党がだんなを助け出しにくるだろうと考えていたんですね。ところが、その天狗党はだんなを助け出すとさっさと引きあげてしまった。天狗党なら恨みのある軍兵衛をそのままにしていくはずはないでしょう。忍者は五人、鬼堂を入れると六人で、戦いはその六人のほうが強かったんですか

らね。無論、鷲尾党は引きあげていく黒住党に尾行をつけた、この尾行がまたうまくまかれちまったんで、ゆうべ鷲尾党はだいぶ長いこと額をあつめて評議していたようですぜ」
「伊太さんはまるで見ていたようなことをいうな。ゆうべあの下屋敷のどこかへ忍びこんでいたのかね」
「けっ、だんなは血のめぐりが悪いな。あっしがなにをねらっている男か、知っているはずですぜ。現に、だんなはついいましがた、一口乗ってもいいと自分の口からあっしにいったばかりじゃねえか」
「ああ、そうか。――こいつは一本面ありというところだな」
　こんどは新三郎が苦わらいをする。
「どうだね、だんな、本当にあっしを兄貴と立てて、尼崎の百万両をわが物にする度胸があるかね」
　伊太吉はそこへ立ちどまって、改めて念を押す。ちょうど対岸に昨夜の下屋敷の裏木戸が真正面に見えるあたりだった。
「一つだけ兄貴に聞きたいんだがなあ」
「うまくいってらあ、聞きたいことは一つや二つじゃなさそうな顔をしているくせに、――まあいいや。一体、一つだけおれになにが聞きてえんだ」
　伊太吉はもう頭から新三郎をのんでかかっているようである。
「この仕事は兄貴とおれと二人だけでやるのか、それともほかに仲間があるのか、そいつが聞いておきたいんだ」
「今のところはだんなとおれの二人きりだ。はっきりいっておくが、無論おれが大将で、だんなはおれの一の子分てことになるんだ」
「すると、親分が一人、子分が一人、たった二人きりで鷲尾党と黒住党と、それからこいつはまだあるかないかはっきりはしないが、あるとすれば天狗党と、三つの敵を向こうにまわして

闘うことになるんだな」

「まあ、そういうことになる。少し怖くなったか、だんな」

「いや、別に怖くはならないが、百万両の埋蔵金をさがしあてるには、まず天野屋の千鳥っていう娘をさがし出さなけりゃならないんだろう。兄貴はそっちのほうの手がかりをいくらかつかんでいるのか」

「そりゃいくらかはつかんでいる。しかし、そんなことはおれにまかせておけばいいんだ。いまにだんだんわかってくる」

「わしが牢番の新三郎に間違えられていることは知っているんだろうな」

「そりゃ知っている。おれはゆうべあの下屋敷へ忍びこんでいて、大体の話はみんな聞いているんだ」

「よかろう。じゃ、わしは兄貴の一の子分になることにする」

どうも伊太吉の正体がわからない。当分子分になって様子を見るよりしようがないと、新三郎は腹をきめたのだ。

「きっと、おめえ、おれの子分になるな」

「なる。おれは、さっきもいうとおり、約束はかたい男なんだ」

「よし、それで話はきまった」

伊太吉はそういいながら、まだそこを動こうとしない。どこかに黒住党がかくれているとすれば、もう出てきてもいい時分なのである。

「そうら、出てきやがった。だんな、あれを見な」

裏木戸があいて、人影が一人、二人、三人、往来へ出てきて、和泉橋のほうへ歩き出した。

「なるほど、いつもの三人らしいな」

「うむ、鷲尾軍兵衛、北野周平、大森金蔵の三人だ」

「どこへ行く気なんだろうな、兄貴」

「きまってらあな、連雀町の松葉屋さ」

「ふうむ。さすがにいい度胸だな」

三人は和泉橋をわたらずに、まっすぐ筋違橋のほうへ行くようだ。

「さあ、おれたちもそろそろ出かけよう」

「松葉屋へ行くんかね」

「そうよ、こっちも度胸のいいところを見せてやるんだ」

伊太吉は颯爽としながら、土手の上を八辻ガ原のほうへ歩き出す。

和泉橋の南たもとを突っ切って、こんもりと森の黒い柳原稲荷のほうへ近づきながら、

「こいつはいけねえ」

と、伊太吉は舌打ちをした。

「どうしたか、兄貴」

「うむ、蛇の道はへびというやつでな、変なのが飛び出すかも知れねえ」

「なんだね、その変なのっていうのは」

「まあ見ていなせえ。けど、だんな、こりゃかなわないと見たら逃げるが勝ちだ。落ちあう先は松葉屋の前ときめておこう」

「よし、わかった」

はたして、柳原稲荷の境内からすっと黒い人影が三人ばかり行く手へ出てきたようである。

5

「待てっ」

新三郎と伊太吉の前に立ちふさがった忍者姿の三人のうち、先頭に立って声をかけてきたのは、どうやら昨夜の黒住鬼堂のようだ。

「やあ、黒住さんですな。ゆうべはどうもありがとう」

新三郎は機先を制して、こっちからあいさつをしてみた。

鬼堂は頭巾の中でじっと妖気のこもった目を光らせながら、二人の顔を見くらべている。

——はてな。

自分を見る目も、伊太吉を見る目も、おなじように冷たい。すると、伊太吉はこの連中の仲間ではなかったのかと思いながら、新三郎が相

手の出ようを待っていると、
「おぬしのその連れはだれだ」
と、はたして鬼堂がしわがれ声で聞く。
「これは風来坊の伊太吉、わしの兄弟分だ」
「すると、ゆうべの船頭の仲間か」
伊太吉が黒住党の一味でないとすれば、新三郎が考えてもそういうことになる。
「いや、ちがう。わしの兄弟分だ」
「おぬしは牢番の新三郎だな」
「それも違う。わしは浪人古賀新三郎だ」
「正直にいってくれ。おぬしは天野屋浪右衛門のせがれ浪太郎ではないのか」
「違う」
「大番頭磯右衛門にも磯吉というせがれがある。おぬしは知っているはずだな」
鬼堂はちらっとぬすっとかぶりの伊太吉のほうへ目をやる。
「わしは正直に答えるが、その浪太郎という名を聞くのも、磯吉という名も、今夜はじめて耳にした。おそらく、鷲尾軍兵衛もまだ知らないんじゃないかな」
新三郎の顔に邪気のない微笑がうかぶ。
「お庭番のうちに古賀姓が一軒あるそうだな」
鬼堂は急所をついてきた。
「知らないなあ。古賀姓は旗本八万騎の中にもたくさんあるし、陪臣、浪人の中にも数えれば相当あるだろうからな」
「ゆうべおぬしたちをつれて逃げた船頭はだれだね」
「それも少し違うようだな。お葉の家はすぐそこの連雀町だ。わしたちは別に船に乗って逃げる必要はないから、自分たちで勝手に船からあがったんだ」
「そうか――。わしたちはそうでない証拠を握っているんだが、それでもまだあの船頭をかばいたいかね」
鬼堂は脅迫するような口ぶりである。
「自分の失敗を、わしのせいにするようなことをいうねえ。貴公たちは一つ間違うと命にかかわるような仕事に手をつけているんだから、罪のない者までこの事件にまきこまないように、念には念を入れて注意してもらいたいものだな」
「よろしい。では、念には念を入れてもう一つ聞くが、おぬしたちはなんのために、今夜、和泉橋の上でおちあったんだね」
「お葉の父親はもと岡っ引きだ。江戸に罪もない娘をさらって監禁しようとするような屋敷があるとすれば、たとえ諸侯の屋敷でもすてておけない。わしたちは鷲尾の屋敷を改めてさぐりにきたんだ」
新三郎はすらりといってのける。
「おぬしはなかなかすみにおけない男だな」
冷たい鬼堂の目がにやりとわらって、
「早く松葉屋へ行ってやるがいい。罪もないお葉がねらわれてはかわいそうだからな」
というなり、すっと柳原稲荷の境内へ消えていく。少しも足音を立てない上に、動作が素早いから、まったく消えたとしか思えない。
「行こう、兄貴」
新三郎は伊太吉をうながして、すたすたと八辻ガ原のほうへ歩き出す。
「すごい野郎だねえ、だんな」
しばらく歩いてから、伊太吉がなにくわぬ顔をして話しかけてきた。
「すくなくとも軍兵衛などよりはるかに強敵だな」
「あいつはどうして鷲尾党でさえまだ知らない浪太郎や磯吉の名を調べあげたんだろう」
「たぶん、磯右衛門の訴状に書いてあったか、それとも磯右衛門の口から出たか、どっちかだな」
「磯右衛門の口から出たというと、磯右衛門がだれかに話したということになるぜ」
「訴状を読んだやつが、役人に化けて下調べだといって内密に乗りこめば、つい口がすべりゃしないか」

「なるほど——。すると、大番頭を切ったのは黒住鬼堂かな」
「そうじゃあるまい。切ったのは鷲尾党だろう。利口なやつというものは、人に人は切らせても、めったに自分は手をくださないものなんだ」
伊太吉はそれっきり黙りこんでしまう。
まもなく八辻ガ原へ出てきていた。月があかるいから、この広場はすっかり見とおしがきく。たとえ忍者でも、こういうところは小細工がきかない。今のうちだと思ったので、
「兄貴——」
と、新三郎は小声で呼んだ。
「なんだね」
「どうも妙なことになったようだ」
「なにが——」
「兄貴は鬼堂にくさいとにらまれ出したんじゃないかと思う」
「おどかしっこなしにしようぜ」
伊太吉は本気にしないようだ。
「まあ聞くがいい。わしはゆうべある船頭に助けられている。わしはその船頭を天狗の一味と見ているんだ。鬼堂が今夜あそこへ網を張ったのは、鷲尾党の動静をさぐる目的が一つ、もう一つはわしと船頭がおなじ目的であの下屋敷の近所にあらわれそうだと見たからだ。いいかね、わしは兄貴をはじめは黒住党かなと思って和泉橋へ出かけたんだが、そんなことはどっちでもいいとして、鬼堂のほうから見れば、そうれ、あんなところで落ちあいやがったということになるんだ」
「すると、おれはその船頭にみられたことになるのか」
「まあ、そういうことになる。鬼堂から見れば、兄貴はともかくも天狗の一味らしいとにらんだ最初の男ということになるんだ。どんなことがあっても見のがすことができないから、必ず尾行をつける」
「なるほど——」

さすがに伊太吉も緊張してきたようだ。
「それで、だんなのほうはどうなんだ」
「わしのほうは、ゆうべでほぼ牢番の新三郎ではないとわかったようだな。ということは、わしは浪太郎ではないということだ。むしろ、わしを助けた船頭のほうが、浪太郎か磯吉にちがいないと見た。では、なぜ船頭はわしを助けたんだろうという疑問が当然おこる。それも鬼堂はほぼ洗っているようだ」
「よくわかった。じゃ、おれはすぐずらかることにしよう」
伊太吉はとっさに決心がついたようだ。
「いや、連雀町の角を曲がってからのほうがいいだろう。鬼堂はわしたちが松葉屋へ行くものときめているから、今のうちならまだ網は張っていないだろう」
「しかしなあ、だんな、おれがずらかると、こんどはだんなにうるさくひもがつきゃしないか」
「なあに、そいつは心配ない。たとえわしがつかまって鬼堂に拷問にかけられるようなことがあっても、わしはまだ兄貴たちのことはなんにも知らないんだ」
新三郎がそういってわらうと、
「ちげえねえ。けど、まあ気をつけなせえ。拷問にかかって痛いおもいをするだけ損だ」
と、伊太吉もわらいながら、ついに自分の素姓はおくびにも出さずに、連雀町の角を曲がると、さっとそこの路地へ飛びこんでいく。
——強情な男だな。
新三郎はあきれて苦笑しながら、しかし、あのくらいの意地がなければ大名を相手に復讐はできないだろうと一方では感心させられもした。
もうすぐそこの左側に、松葉屋の掛け行燈が出ている。松葉屋へは鷲尾軍兵衛が北野と大森をつれていっているはずだ。店から入っていきなり顔をあわせるより、とにかく裏から入って様子を聞いてみようと、新三郎は手前の三尺路地から裏手へまわる。

二階を見あげると、手前の客座敷のほうには灯が入っているが、その向こうのお葉が居間につかっているほうの四畳半は暗い。つまり、お葉は店へ出ているということになるのだろう。
裏口の油障子をあけて板場の土間へ入ると、
「ああ、いらっしゃい」
と、豊吉が目ざとく見つけてそばへ寄ってきた。
「豊さん、店へ軍兵衛たちがきているだろう」
新三郎が小声で聞くと、
「今夜はついさっききて、いま二階で親分と話しこんでいやすよ。さんぴんなんて、ずうずうしいもんですね、だんな」
昨夜の事件を聞いている豊吉は、目を光らせながらそっと二階をにらんでみせる。
「そうか。じゃ、店から入ってもよかったな」
「お葉ねえさんなら、そこの帳場にいます」
土間の突きあたりは店への出入り口になっていてのれんで仕切り、その通路の左が板場、右が六畳の間で帳場になっている。
「豊吉、古賀さんかえ」
声を聞きつけたらしく、そこの障子があいて、お葉が顔を出した。
「ああ、古賀さん、待っていたのよ」
「どうしたんだ、お葉さん」
お葉の顔は死人のように真っ青で、目が異様な光をおびている。
「とにかく、こっちへ早くあがって――」
「軍兵衛が二階へきているそうだね」
そこでこんなに興奮しているのかと、新三郎は引っぱりこむようにされて、わらいながら帳場へあがる。
「豊吉、立ち聞きされないように気をつけていてね」
お葉は豊吉に耳うちしてから、いそいで障子をしめきってしまう。
「そんなに怖がることはないだろう。いくら鷲尾党だって、ここへきてはまさか刀もふりまわせやしないさ」
「違うのよ。あたしこわい」
お葉はひざをつきあわせるようにして座りながら、身ぶるいをしている。
「違う――？　じゃ、なにが怖いんだね」
「殺されたんです。いいえ、もうきっと殺されているにちがいないんです」
「だれが――」
「渡辺のだんななんです」
「なにっ」
新三郎は思わず目をみはらずにはいられなかった。

6

「落ち着くんだ、お葉さん。渡辺のだんなというのは、お葉さんに鷲尾から天狗党のことを聞き出してくれといいつけた与力の渡辺源太夫のことか」
新三郎はわざとゆっくりした語調で聞く。
お葉ははっきりとうなずいてみせる。
「相手はだれなんだね」
「わからないんです。はじめてきた二階のお客さんで、二人づれなんです」
「無論、侍なんだろうね」
お葉はまたしてもうなずく。
「渡辺はその侍といっしょにきたのか」
「いいえ、二人づれのお侍さんがきて、表二階でのんでいました。日の暮れ方で、そこへ渡辺のだんなが裏から一人で入ってきて、松五郎はと聞くから、たった今、多町へ出かけましたといったんです」
「多町の安二郎のところか」
「ええ、使いの者が迎えにきたんで、いっしょに出かけたばかりなんです。話はお前でもいいんだといって、だんなはそこの裏階段からあがって、お客に顔を見せると煙ったがるだろうと、あたしの部屋へ入っていくんです。あたしはいやだったけど、しようがないからついて入りま

した」
「その前の表二階のほうに、二人づれの侍がのんでいたわけだね」
「そうなんです。そっちにはもう行燈がついていましたけれど、まだ外は少しあかるかったので、あたしは話はすぐすむんだろうと思って、灯はつけませんでした。だんなは座るなり、お葉、お前は昨日とんだ災難にあったそうだな、その話をすっかりしてみてくれっていうんです」
「ふうむ、八丁堀はもうそんなことを耳にしているのか」
「あたし、うそをいうのも怖いし、船頭さんに助けられたことだけはいいませんでしたけれど、座敷牢へ入れられたことや、ふしぎな覆面の男に助けられたことまで、すっかり話しました。いいえ、だんなのほうからどんどん突っこんでくるんで、そうなっちまったんです。すると、だんなは急に怖い顔になって、お葉、そいつはとてもお前一人じゃまもりきれない、これは根の深い事件なんだ、しかも、この事件には某老中までからんでいるようだから、こんどわなにかかるときっと命がない、おれがお前をまもってやろう、おれさえついていれば大丈夫だ、そのかわりな、といいながらふいにあたしの手をつかんで引き寄せようとするんです」
「なるほど、ひどいやつだな」
　渡辺のねらいははじめから一つはそこにあるんじゃないかとにらんでいたので、やっぱりそうかと新三郎は苦笑させられる。
「あたし、いやですといって逃げようとしたんですけれど、これ、声を立てるとおやじのためにならねえぞといわれちまって、うっかり人を呼ぶのも怖いし、夢中で体だけまもっているうちに、目の前が真っ暗になってきたんです。すると、急にだんなの力がゆるんだので、あたしははっと逃げて起きあがりました。もう日はすっかり暮れていて、でもお月夜ですから窓あかりでぼんやり見えたのは、黒い覆面の男がだん

なをうしろから抱えこむようにしてのどをしめつけ、だんなは怖い形相になって、手足をばたつかせていました。あっとあたしが声を立てようとすると、静かにするんだ、ここはおれが引きうけるから、お前は黙って下へおりていろ、人にいうなよ、おれがもういいというまで、この部屋へきてはいけない、わかったら早く行けと、その男がいうんです」
「その覆面の男っていうのは一人か」
「ええ、一人でした」
「お葉さんはそのままここへ出てきて、かくれたのか」
「そうなんです」
「その時おやじさんはまだ帰っていなかったのか」
「ええ、おとっつぁんはついさっき鷲尾たちといっしょに帰ってきて、すぐ二階へあがってしまったんです」
「表二階でのんでいた侍二人はどうした」
「まだいるかも知れません。それより心配なのは、渡辺のだんなのことなんです。もしここで殺されていたら、古賀さん、どうしましょう。どうしたらいいかしら」
「まあ、待て――」
　店の土間には相かわらず定連がきていてにぎやかな笑い声が絶えないし、板場では板前の金次と下働きの豊吉が、たえずできあがったお通しものを取りにくる小女たちと冗談口をいいあって、店中が活気立っているその二階で、殺人が行われ、しかもそれを知っているのは今のところお葉と自分の二人だけなのだ。新三郎は啞然とした気持ちで、どうにもふにおちないものがある。
「その下手人の覆面は、呼ぶまでお葉さんに部屋へきてはいけないといったんだね」
「ええ」
「お葉さんは表二階の二人の侍のうちの一人が下手人だと思うのか」

「それよりほかに考えられないんですもの」
「すると、中廊下のほうから入ってきたわけだな、下手人は」
「窓のほうは、すぐ下が路地ですから、はしごでもかけなければ入ってこられません」
「それはそうだ」
「あたし、なんだか、その覆面の男、ゆうべの黒住党のような気がするんです」
「忍者の黒装束というやつだったんだね」
「その時は夢中でしたけれど、今になってそんな気がするんです」
「よし。とにかく、わしが二階へ行って様子を見てきてやる」
「いけない、古賀さん」
　立ちあがろうとする新三郎のひざを、お葉が両手で必死におさえつける。
「どうして――」
「いやっ、いやっ、古賀さんにもしものことがあったらたいへんだもの」
「そんな心配はしなくてもいい。それに、二階ではおやじさまが鷲尾たちと会っている。そっちの様子を見ておきたいんだ」
「じゃ、あたしも、あたしも行く」
「さあ――。そりゃ自分の家だからかまわないようなもんだが、相手が忍者だからな」
　新三郎はちょいと立ちかねる。
　それにしても、鬼堂はなぜ渡辺源太夫を殺す必要があったのだろう。しかも、わざわざ松葉屋で殺すというのも解せない。だいいち、新三郎は、渡辺は鬼堂の一味じゃないかと見ていたのだ。
　それがそうでないとすると、渡辺はどっちの一味だか判断のしようがなくなってくる。
　もう一つわからないのは、渡辺が今夜松葉屋へくることを、鬼堂はどうして知っていたかということだ。
「どうもわからん」
「なにがわからないの、古賀さん」

　お葉がひざをおさえつけたまま、新三郎の顔を見あげた時、
「お葉、いるかえ」
と、障子の外で松五郎が呼んだ。
「いるわ、おとっつぁん」
「そうか――」
　松五郎は障子をあけて、
「ああ、古賀さんもきていなすったか。こりゃちょうどよかった」
と、座敷へあがって障子をしめる。
「鷲尾軍兵衛がきているそうだね」
　新三郎は座りなおす。
「それなんでさ。多町からの帰りがけに、そこの横町でぱったり出あいましてね、やあ、おやじか、今日はあやまりにきたんだと、先方から声をかけられてみると、尾をふってくる犬はなんとやらで、この若僧めと腹ん中じゃ思っても、まさか無愛想にもできない。いっしょに家へ入ってすぐに二階へつれてあがると、ゆうべはとんだこっちの思いちがいから、お葉をひどい目にあわせた。実は、半分は脅しのつもりなんで、いつまでも座敷牢へ入れておく気はなかったんだ。まあ勘弁してくれと、散々言い訳をならべて、菓子折りまで出すんです。そうですかい、なあに、もうすんでしまったことなんだから、そちらさんで人違いだったとわかってもらやあ、あっしのほうもきれいにゆうべのことは忘れましょうといってやったんでさ」
「そうだな、人違いだったですむような話じゃないが、あやまらないよりはまあましだな」
「それでもね、感心に古賀さんから取りあげた両刀まで持ってきて、これはおやじの手から先方へもどしてやってくれ、古賀さんの家がわからないんで、ここへ持ってきたというんです」
「そこまで恐れ入ってみせるようじゃ、後が怖いな。それで、先方の注文はなんなんだね」
「一つだけお葉に聞きたいことがある、おやじも同席でいいから、お葉に会わせてくれという

んです」

「いやだわ、あたし。だれがあんなやつなんかに会ってやるもんか」

ぷっとお葉がほおをふくらませる。

「そうか、いやならしょうがねえが、おとっつぁんがいきなりことわるわけにいかねえから、お葉がいるかいないか、ちょいと見てきましょうといって、座を外してきたんだがね」

「軍兵衛の聞きたいというのは、たぶん黒住党のことだろう。ゆうべ後をつけさせたが、途中でうまくまかれているという話だ」

古賀にはすぐそれがぴんときた。

「そうかも知れやせんね。じゃ、もしその話が出たら、座敷牢から助け出してもらった覆面の男の話ぐらいしてやってもかまわないんじゃありませんか。どんなもんでしょうね、古賀さん」

「いま二階にいる客は、鷲尾たちだけかね」

「そうのようですよ」

「おかしいな、表二階のほうに侍が二人あがっているはずなんだが」

「じゃ、帰ったんでしょう。たしか灯が消えていたはずでさ」

「親分は夕方、多町へ呼ばれていったそうだな」

「安二郎から使いの者がきたんで、すぐに出かけやした。清川一馬(かずま)さんていう渡辺のだんなの組の同心さんがきてやしてね、これがまたゆうべの話なんでさ」

「それでわかった。渡辺は親分を多町へ呼び出しておいて、わざとその留守にここへやってきたんだ」

「へえ、渡辺のだんながきたのか、お葉」

松五郎はちょいときょとんとした顔つきだ。

「その渡辺がなあ、親分――」

「いけない、古賀さん。それは口どめをされているんだもの」

お葉が恐ろしそうにあわてて口をふさごうとする。

「いや、かくしておいても、どうせ知れることだ。三人寄れば文珠の知恵ということもある」

「渡辺のだんながどうかしたんですか、古賀さん」

さすがに松五郎の目が光り出す。

「うむ、ゆうべの話を持ち出した上、おれが命をまもってやるからといって、お葉の部屋でお葉を手ごめにしようとしたんだ」

「なんですって――」

「そこへ、忍びの黒装束の男が音も立てずに入ってきて、渡辺をしめ殺し、お葉に、下へ行っていろ、だれにもいうなといって、お葉を追い出したそうだ」

「本当か、お葉」

さっと松五郎の顔色がかわる。

お葉はうなずいてみせてから、

「こわい、あたし」

と、すがるような目を新三郎のほうへ向ける。

「そ、それはいつのことだ」

「親分が鷲尾たちと二階へあがる少し前のことらしいな」

「で、その部屋へ行ってみたのか、お葉」

「それはまだなんだ。その男は、こっちから呼ぶまで部屋へきてはいけないと、かたく念をおしている。お葉さんがここで青くなっているところへ、ちょうどわしがたずねてきて、いまその話を聞いたばかりなんだ」

「そいつはいけねえ、すぐに行ってみよう、古賀さん」

「待った、親分。それより、先に鷲尾たちをかえしたほうがよくはないか。場合によっては、人に知られると困る問題になりはしないか」

「なるほど――」

一度立ちかけた松五郎は、どかりとそこへ座りこんで、じっとお葉の顔を見ている。

「古賀さん、もしだんなが、だんながあたしの部屋で絞め殺されていたら、どうなるの。こわい、あたし」

お葉はたまらなくなったように、新三郎の腕

へすがりついてくる。

お嬢行者

1

「お葉さん、あんた親分といっしょに鷲尾の座敷へ顔を出したほうがいい。そのほうが話が早く片づきそうだ」

　新三郎はそうすすめてみた。いつまでもぐずぐずしていられる場合ではないからだ。

「お葉、そうしてみよう。早くやつらを追っぱらってしまわなくちゃ、どうすることもできない」

　松五郎もその気になったらしい。

「いやだなあ、あたし。あいつたちの顔を見ただけでも癪にさわるんだもの」

「しかしなあ、お葉さん、口のききようによっては、あいつらからどんな耳寄りの話を引き出せるかわからない。そうは考えられないかね」

　新三郎はちょいとおどしをかけてみる。

「それもそうねえ」

　きかない気のお葉は、どうやらその手にのって、

「じゃ、あたし行ってみるわ、おとっつぁん」

　と、急に立ちあがった。

「そうか、じゃ行こう。——古賀さん、しばらく待っていてください」

　父親の松五郎は暗い顔をかくしきれないようだ。事もあろうに、わが娘の部屋で八丁堀のだんなが何者かに殺されているらしいというのだから、さすがに気が気ではないのだろう。

　親子が店の表階段のほうへ出ていくのを見とどけてから、新三郎はすぐに板場の裏階段から二階へあがってみることにした。親子が鷲尾たちと話している間に、問題のお葉の部屋を調べてみようというのである。

　一つには、軍兵衛たちが陣取っている座敷はお葉の居間の隣だから、なにか間違いがおこった場合、すぐ踏みこんでいけるという腹もあったのだ。

　お葉の居間は裏階段をあがったとっつきの右手で、左は怪しい侍たちが二人で酒をのんでいた表座敷になる。来てみると、なるほど、その表座敷は灯が消えていて、人の気配もない。

　すると、その二人の侍は勘定も払わずに帰ったことになるが、一体、いつどこから出ていったのだろう。

　それはそれとして、新三郎は問題のお葉の居間の前へうずくまって、ふすま越しにじっと耳を澄ましてみた。ここも人の気配は感じられない。しかし、ここにはたしかに渡辺の死骸がころがっているはずだ。

　新三郎は思いきってそっとふすまをあけてみた。ここも無論灯はついていないが、窓障子に月夜のあかるみがぼんやりとただよっているから、四畳半のせまい部屋は一目で見とおせる。

　——はてな。

　部屋の中はきちんとして、死骸などはどこにも見あたらぬ。

　押入の中かなと思ったので、新三郎はかまわず部屋の中へ入り、押入の戸をあけてみた。中には上も下も物がいっぱい入れてあって、死骸などをかくす余地はどこにもないようだ。

　——おかしいなあ。

　新三郎は一人で意気ごんでいただけに、がっかりして、火ばちの前へきてぼんやりと座ってしまう。

　お葉の話では、どうしても渡辺は死骸になっているはずなのだ。もし生きているとすれば、黙って帰るはずはない。

　待てよ、表二階の怪しい二人も黙って姿を消している。その二人が渡辺の死骸を運び出したのかも知れぬ。人目につかずにそんなことのできるのは、裏路地に向いている窓よりほかにない。

　新三郎は立っていって、そこの窓障子をあけ

てみた。目の下にさっき自分がとおってきた裏路地が見える。

この路地は左右へ通りぬけられるようになっているが、前がわの家はその一つ向こうに横町があって、みんなそっちへ店をひらいているから、こっちは台所と台所が向かいあって、あまり他人には用のない道になっている。

――下手人は黒住党の忍者なんだ。この窓を使うぐらいは造作もないだろう。

後で彼らの履き物を調べてみれば、この推定が当たっているか外れているか、はっきりしてくるはずである。

新三郎は障子をしめて、火ばちのところへもどってきた。押入とは反対側の壁一重で鷲尾たちがいる裏座敷になっているから、いやでもそっちの話し声が耳についてくる。

「おかしいじゃないか、お葉、一面識もない黒頭巾の男が、どうしてお前たちを座敷牢から助け出してくれる気になったんだろうな」

なじるような声で追及しているのは軍兵衛らしい。

「あたしもふしぎだと思いました。けど、後で古賀さんに聞いて、なあんだと思っちまったんです」

「古賀はなんといったんだね」

「その黒装束の忍者は、あたしたちを助ける気じゃない、とりこにする気できたんだろうというんです。つまり、その黒鬼もあたしたちを天狗党の者と間違えていたにちがいないんです」

「なるほど、――しかし、お前たちはよくその黒鬼の手から逃げ出せたもんだなあ」

「若だんなは黒鬼たちを天狗党だと思っていたようですね」

お葉は何気なく聞いていく。

「いや、中途からそうでないことはすぐわかった」

「あの黒鬼たちは何者なんでしょう。あいつたちも天狗党をねらっているようですね」

「気をつけたほうがいいぞ、お葉。我々はお前が千鳥でないとわかったが、黒鬼どもはまだお前を疑っている。いつねらわれるかもしれないからな」

「そんなことないと思います。若だんながねらわないような者は、黒鬼だってねらいやしません」

「いや、お前の疑いは晴れても、古賀はまだ天狗にゆかりのある者と見られている。まあ、用心するに越したことはないな」

冷酷な軍兵衛の声音である。

「若だんなも、黒鬼だけは気をつけないと、忍者はとても怖いって話ですからね」

お葉が負けずにやりかえす。

「なあに、こっちにはもっとすごい味方が用意してあるんだ。黒鬼どもにしろ、天狗どもにしろ、近いうちに根こそぎ片づいてしまうだろう――今夜はとんだじゃまをしたな」

軍兵衛はわらいながら立ち上がったようである。

「どうも失礼いたしやした」

松五郎がいっしょに立って、階下まで見送っていくようである。

お葉はいそいで座敷を出て、裏階段のほうへくるようである。

「お葉――」

新三郎は居間のふすまをあけて呼んだ。

「ああ、びっくりした。おどかしちゃいやだ、古賀さん」

ふいをくって飛びあがるようにしたお葉は、それでもはっと気がついたらしく、

「死骸は、死骸は――」

と口走りながら、新三郎の腕をつかんでくる。

「ところが、ここにはそんな跡さえないんだ」

「本当、古賀さん」

「まあ、入ってみるがいい」

新三郎は身をひいて入り口をあけてやる。

「まあ、どうしたのかしら」

お葉は居間中を見まわしながら、ぽかんとそこへ立ちつくす。

「どうしたんだ、お葉」

そこへ客を送っていった松五郎が、こんどは裏階段からすぐに引きかえしてきたようだ。

「あっ、おとっつぁん、なんにもないのよ」

「なにっ」

松五郎も居間中を見まわしながら、

「おかしいなあ。まさか、お葉、お前夢でも見ていたんじゃないだろうな」

と、あまりにも心配が大きかっただけに、啞然とした顔つきである。

「親分、その侍二人の履き物と、渡辺の履き物を調べてみてくれないか」

「なるほど――、ちげえねえ」

松五郎はさすがに察しよく、いまあがってきたばかりの裏階段を駆けおりていく。

「お葉、表座敷を調べてみよう。行燈を持ってきてくれ」

「はい」

そこは二人分の膳がまだ出しっ放しになっていて、無論、侍たちの姿はなく、その一人のほうの膳の上に一分銀が一つおいてある。今夜の勘定のつもりなのだろう。

「こんなことに気がつくくらいだから、侍たちはあんたを助けるために偶然に渡辺を殺したのではなく、あらかじめ先まわりをしていたにちがいないな」

「そうかしら――。じゃ、あの人たちは今夜、渡辺のだんながここへくることを知っていたことになるんですか」

「たぶん、そうだろう。渡辺は前から黒住党にねらわれていたことになるんだ」

そこへ松五郎が引きかえしてきて、

「古賀さん、ここの侍たちの履き物は二足とも下駄箱に残っているが、渡辺のだんなのは見あたらないんですがねえ」

というのである。

「おとっつぁん、渡辺のだんなは裏から入ってきたのよ」

「うん、だからそこにもないんだ」

「あそこは、親分、厠へ行く客はだれでも通るところだな」

「そうですよ」

「よし、それで大体わかったようだ」

新三郎は自信ありげにいった。

「どうわかったの、古賀さん」

「わしははじめ、渡辺は黒住党の者だとばかり思っていたが、そうじゃなくて、自分一人の手柄にしようという腹で、この事件に手をつけたんだ。ことによるとお奉行さまの内意をうけていたかも知れないな。いずれにせよ、この事件に深入りされると、某老中の名が出てくる。その老中が黒住党にいいつけて、ひそかに渡辺の口をふさいでしまえということになったんだろう」

「なるほど、そんなことがないとはいえやせんね」

松五郎は太いまゆを寄せながらうなずいている。

「つまり、渡辺は前から黒住党にねらわれていたんだ。そうとは知らずに、渡辺は今夜、役得のつもりで、お葉をくどきにきた。供の者もじゃまだし、親分もじゃまだから多町のほうへ呼び出すことにした。その小細工がかえって渡辺の運のつきだったんだな。黒住党の二人は、渡辺がお葉の部屋へ入ったのを見て、忍び装束に姿をかえ、一人が渡辺を絞め殺す。一人は窓から路地へ合図をして味方を呼び、二人で渡辺の死骸を荷作りにして、窓から綱で下へおろす。二階の仲間がそれをうけとってどこかへ運ぶ。二人も窓から路地へおりて逃げてしまう。渡辺の履き物は店へ客になってきていた仲間が厠へ行くふりをして持っていく。まあ、ざっとこんな筋書きだったんだろうとわしは思う」

「黒住党はどうして渡辺のだんなの履き物まで必要だったのかしら」

お葉が不審そうに聞いた。
「彼らには彼らの誇りというものがあるんだ。だから、店の勘定だってちゃんとおいていくくらいで、ここの店へ迷惑はかけないというつもりなんだろう。渡辺の履き物がここに残っていれば、渡辺はここで殺されたとすぐわかってしまうからな」
「しかしねえ、古賀さん、渡辺のだんながここへきたってことは、配下の清川さんにはたいてい見当がついているだろうし、また見ていた人間だっているにちがいない。とても隠しきれないことだと思うんですがね」
松五郎はもと岡っ引きの親分だけに、うそはつきたくないのだろう。
「その心配は、親分、渡辺の死骸が見つかってからでもいいんじゃないのか。もし今夜配下の清川が渡辺をたずねてきたら、さっき帰ったようだといっておけばすむ。お葉が黙っていれば、親分はなんにも知らないでいるはずなんだからね」
「そういえば、まあそんなもんだが、——とにかく、こいつはただ事じゃすみそうもない。お葉にしても、古賀さんにしても、十分気をつけていないと、まだまだどんな災難にぶつかるかわかりやせんぜ」
松五郎は暗い顔つきで、くれぐれも二人にいいきかせていた。

2

翌朝——。
渡辺源太夫の死骸は、朝早く、松葉屋からそう遠くない昌平橋をわたった湯島川の川っぷちへころがされているのを、通りがかりの者が見つけて大騒ぎになった。
新三郎が松葉屋の板前の下働き豊吉の迎えをうけてすぐその現場へ駆けつけたのはやがて五ツ（八時）ごろで、そのあたりはもういっぱいの人だかりだった。

殺されているのは、人もあろうに南町奉行所配下の与力なのだから、一層騒ぎは大きい。
「物取りじゃないって話ですよ。もっとも、相手は八丁堀のだんなですからね、いくら気の強い追いはぎだって、こいつは遠慮するのがあたりまえでさ」
「すると、意趣晴らしだね。役目がら、恨んでいる人間はかなり多いだろうからね」
「たぶんそうだろうって話です。それにねえ、おかしいのは、ここで殺されたんじゃない、どこかで殺して、死骸になったやつをここへ捨てにきた。しかも、家の中で絞め殺されたんだって話です」
「へえ、どうしてそんなことがわかるんだろうね」
「草履がそこへ投げ出してあるが、足袋の裏に土がついていない。着物もきれいだっていうんです。それに、この前の家は淡路屋の元締めで、人足部屋にはいつも人足がたくさんごろごろしている、それがだれも変な声や物音は聞かなかった、けんかでもあればみんなおもしろがって飛び出すような人間ばかりですからね。たぶん、死骸は船で運んできて、明け方近く捨てていったんだろうってことです」
野次馬たちは、あっちでもこっちでも、みんなおなじようなことを話しあっていた。死骸にはもう荒むしろをかぶせて、小者たちが二、三人で番をしながら、
「そばへ寄っちゃいけねえ」
「なにがおもしろくって、いつまでも立っているんだ。歩け歩け、往来のじゃまだ」
と、口々に野次馬どもを追い立てようとしているが、野次馬どもは一向に散ろうとはしない。
新三郎は別に死骸を見ようという気はないので、一通り野次馬のうわさを聞いてしまうと、豊吉にはわざと声をかけずに人だかりを離れた。
「だんな、早いねえ」
ふっとうしろから声をかけながら肩をならべ

てきたやつがある。縞の対の着物をきちんと着た手代風の男で、年ごろ三十がらみ、きりっとしたなかなかの男前で、意地の強そうな目がいたずらっぽくわらっている。
「なんだ、伊太兄貴か」
新三郎は、声とその目で、すぐに伊太吉だとわかった。
「よくすぐにおれだとわかったなあ」
「声でわかるさ。兄貴も死骸を見にきたのか」
「うむ、まあね」
すると、この男の巣もここからあまり遠いところではなさそうだ。
「兄貴はあの死骸がだれだか知っているのか」
「知っているよ。あの死骸はゆうべ松葉屋の二階から裏路地へ綱でおろされ、それから長持ち詰めにして荷車でどこかへ運ばれたんだ」
「ふうむ、見ていたのか、兄貴」
新三郎は思わず目をみはる。
「ゆうべだんなと別れたのは、松葉屋の横町へ入ってからだ。おれはあぶなくやつらに見つかりそうになってね、あわてて逃げ出したんだ。死骸は八丁堀だってな」
「うむ、渡辺源太夫という与力だ」
「下手人は黒住党だとすると、百万両に目をつけたやつなんだな」
「荷車はゆうべどっちへ行ったね。そのあとをつければ黒住党の巣がわかったはずなんだがな」
「そううまくはいかねえだろう。長持ちは荷車から船へ移されて時刻を待っていた。巣へ運ぶようなあぶないまねはするもんか」
「なるほど、船へ移しておけば安心だな」
「それより、松葉屋のほうは大丈夫か。あの死骸が松葉屋から運び出されたとわかると、後が面倒だぞ」
伊太吉はちょいと心配そうな顔をする。
「問題はそれなんだ。あくまでも白を切るか、それとも正直にぶちまけてしまうか」

「相手にもよるが、まあ、ぶちまけてしまうほうがよさそうだな。町奉行所だってあまり自慢になる話じゃないから、なるべく表へは出したくないだろう」
「わしもそれをたのみの綱にしているんだがね」
「おれはそれより黒住党のほうが怖いと思う。松葉屋の弱みにつけこんで、どんなまねをするかわからないからな」
「しかし、忍者は女に目はつけないんじゃないのか」
「無論、お葉をどうするというんじゃないが、お葉をおとりにつかうと、だんなをわなにかけやすい。だんなは自分が黒住党からねらわれていることを忘れちゃいけない」
「なるほど、それがあるなあ」
「とにかく、油断は禁物だ。まあ、松葉屋のことはだんなにまかせておくとして、今夜もう一度和泉橋まで出向いてもらいたいな」
「そうか——。時刻はゆうべぐらいでいいのか」
「うむ、それでいい。今夜からいよいよ仕事にかかるんだから、そのつもりできてくれ」
「よかろう、きっと行く」
「じゃ、お葉姉御によろしく」
伊太吉はわらいながらくるりときびすをかえして、今きたほうへ引きかえしていく。
新三郎はその足で、ともかくも連雀町の松葉屋へいそいでみることにした。
——いよいよ仕事にかかるとは、なにをやろうというつもりなんだろう。
新三郎は別れぎわに伊太吉のいっていた言葉が妙に気にかかる。
しかし、伊太吉はたぶん天狗党の一味だろうとこっちが勝手にきめているだけで、本当の素姓はいまだにはっきりしないのだから、その伊太吉のやろうという仕事はまるっきり見当のつけようがない。ただわかっているのは、どっちにしても百万両の埋蔵金事件にからまる以外の

仕事ではないということだけだ。

　来てみると、松葉屋の表はまだしまっていた。裏へまわって台所口から入っていくと、お葉が板場でたすきがけになって、小女たちといっしょに朝飯の支度をしていた。

「お早う――」

「ああ、古賀さん、豊吉が迎えに行ったでしょう」

　お葉はたすきを外しながら走りよってきた。なんとなくさえない顔色である。

「うむ、きたよ。いま現場へ行ってみてきたところだ」

「あがりましょう、古賀さん」

　お葉は先に立って帳場の間へあがっていく。

「親分はどうしたね」

　長火ばちの前へ座りながら、新三郎は聞いてみた。

「ちょいと多町へ行ってくるといって出かけたんです。きっと相談に行ったんでしょう」

「相談にか」

「おとっつぁんは、ゆうべのこと、とても隠しきれるもんじゃないっていうんです」

「そうか。親分の気性じゃそうだろうな」

「やっぱり、渡辺のだんなは殺されていたのね」

「うむ」

「ゆうべ古賀さんのいっていたようにして、死骸を運び出したのかしら。あたし、なんだか信じられない」

「しかし、渡辺の死骸があんなところへ捨ててあったとすれば、わしがいったようにして運び出すよりほかはないだろう。それに、わしはいま現場で野次馬たちの話していることを聞いてきたんだが、死骸はどこかわきで殺されてここへ運んできて捨てたんだと、みんないっている」

「じゃ、もうだめね。ここで殺されたってことも、すぐわかっちまうわね」

　お葉はいまにも泣きだしそうな顔をしている。

「渡辺の下についている同心はなんて男だったかな」

「清川一馬さんていう人です」

「清川はどういう性質の男なんだろう。話のわかるほうか、わからないほうか」

「あたしはまだ二度ぐらいしか会っていないけれど、おとなしい人よ。おとっつぁんは、あれでとても芯の強い、たのもしいところのある人だっていっているけど、あたしにはわからないわ」

「一度会ってみたいんだがなあ」

「どうして――」

「少し相談してみたいことがあるんだ」

「今日あたり、うちへ調べにくるんじゃないかしら。渡辺のだんながゆうべうちへきたのを知らないはずはないと思うんです」

「すると、ここで待っていれば会えるかも知れないね」

「怖いなあ、あたし。清川さんに聞かれたら、どう返事をすればいいのかしら」

　子供のようなことをいいだすお葉である。

「お葉うじもあんまりうそはつけないほうだからな」

「古賀さん、お願い、あたしといっしょにそこまで行ってください」

「どこへ行こうっていうんだね」

「そこの花房町にめくらの行者さんがいて、おうかがいをたてるととてもよく当たるっていうんです。あたし、一度おうかがいを立てて、度胸をきめようと思うんです」

「苦しい時の神だのみというやつだね」

「冷やかしちゃいやだわ。生きるか死ぬかの瀬戸ぎわなんですもの、しょうがありません」

「まあいいだろう、どうせ乗りかかった船なんだから、どこへでもお供してやろう。しかし、こんなに早く行っても、その行者さん会ってくれるかな」

「会ってくれますとも。――人が生きるか死ぬかで、こんなに困っているのに、朝が早いから

だめだなんていう神さまなら、そんなのいんちきだわ。困っている人を助けてくれるからこそ行者さんじゃありませんか」
　お葉はむきになって目をすえている。
「わしに怒ったってしょうがないだろう。じゃ、とにかく行ってみるか」
「いっしょに行ってくれる、古賀さん」
「いいとも――。そのかわり、帰ってきたら朝飯をごちそうしてくれるだろうな」
「しますとも――。ちょっと待っててね。着物をきかえてきますから」
「なあんだ、生きるか死ぬかの境でも、おしゃれがしたいのか。だいいち、行者さんはめくらだっていうじゃないか。着物なんかそのままでいいだろう」
「そうじゃありません。神さまの前へあかのついたものを着ていっちゃ罰があたるから、着かえるんです」
「ああ、そうか、なるほどなあ」
　新三郎が苦わらいをしている間に、お葉はいそいで二階へあがっていった。
　――はてな、お葉はゆうべあの部屋で寝たんだろうか。
　まさか人殺しのあった居間では寝られなかったろうなと、新三郎はすぐに思いなおして、これは冗談ごとじゃない、この事件でこれまでに死んだ者も相当ある、自分の兄もその一人だし、これからだって何人の犠牲者が出るかわからないんだと思うと、さすがに体中がじいんと緊張してきた。

3

　筋違橋(すじかいばし)の北たもとを神田川にそって少し下ると佐久間町河岸へ出るが、その手前の小さな一郭が花房町になっている。
　その河岸通りに京屋というなかなか凝った造りの上旅籠(じょうはたご)があって、その手前が路地一つ隔てて八百富という八百屋だ。

　その京屋と八百富との間の路地を入って、八百富のちょうど真裏にあたる二階建てのこぢんまりした門がまえの家が、めくらの行者の住まいだった。
　行者の門の前は、まだずっと京屋の黒板塀(くろいたべい)になっている。
「ここよ、行者さんの家は――」
　お葉はその門の前に立って、小声でいった。
「なんだ、看板も表札も出ていないじゃないか」
　新三郎はふしぎそうに門を見まわしている。
「悪いわ、そんな大きな声を出しちゃ」
　お葉はちょっとにらむようにしてたしなめて、
「ここの行者さんは、それを商売にしているんじゃないんです。ただ、自分がおめくらさんだものだから、観音さまを信心しているうちに、その観音さまのお声が聞こえるようになったってうわさなんです」
「ふうむ。つまり、人がおうかがいを立てると、行者さんは観音さまのお声を聞いて取り次いでくれる訳なんだね」
「そうらしいわ」
「しかし、それが稼業(かぎょう)でないとすると、ことわられることもあるわけだな」
「そこが慈悲深い観音さまですもの、自分が病気ならともかく、どんな人にでも会っておうかがいを立ててくれるそうよ」
「じゃ、とにかく中へ入ってたのんでみろよ」
「なんだか怖いな」
　お葉はそれが本音らしく、子供っぽくちょっと首をすくめてわらってみせながら、思いきったように門の引き戸に手をかける。
　戸は軽くあいて、中へ入ると正面玄関の格子戸まで六尺ほどきれいに石だたみが敷きつめてあり、左右に風雅な袖垣(そでがき)を作って、もうちゃんと打ち水までしてある。
　そういえば、この水は掃き清めた門の前にも打ってあった。

「ごめんくださいまし」
お葉は格子戸をあけて、気取った声で案内を請う。
「はい」
すぐに返事があって、まもなく玄関の障子があき、
「おいでなされませ」
そこへ三つ指をついたのは、もう五十をすぎている切り髪姿の品のいい老婆である。
「あの、あたしはつい川向こうの連雀町からきたんですけれど、心配ごとがあって、ぜひ行者さまにおうかがいを立てていただきたいんです。お目にかかれますでございましょうか」
事実、大きな災難をしょおうとしているのだから、お葉もいまは真剣のようだ。
「うわさを聞いておいでになったのですか」
「はい」
「お嬢さまは行者ではございませんの。皆さまにそう申しあげておことわりしているのですけれど、——困りましたね」
老婆は気の毒そうな顔をする。
「いいえ、困っているのはあたしのほうなんです。とんだ災難にみまわれて、どうしていいのかわからないんです。どうぞおそでにすがらせてくださいまし」
すらすらとなかなかうまいことをいうお葉だ。
「では、お嬢さまがなんと申しますか、とにかく一度うかがってまいります」
「どうぞお願いいたします」
老婆は二階へあがっていったようだ。
家の中はしいんとして、どこからか香のかおりが流れてくる。決して安物ではないようだ。
——おかしな家だなあ。一体、お嬢行者というのは、何者の娘なんだろう。
新三郎はだんだん好奇心がわいてくる。
やがて二階からおりてきた老婆は、
「お目にかかりますそうです。どうぞお上がりくださいませ」
と告げた。
「ありがとうございます。おかげで助かります」
お葉があがったので、新三郎も会釈をしてついてあがった。とめられるかなと思ったが、老婆は会釈をかえしただけで、なんにもいわなかった。
あがったところは三畳になっていて、その左手に二階へあがる階段がついている。
「お二階ですか」
「さようでございます。遠慮なくおあがりください」
階段をあがりきったところは廊下になっていて、その廊下は突きあたって右へまわり縁になっている。
お葉はそっちへまわって、障子の外へひざまずき、
「ごめんくださいまし」
と、中へ声をかける。
「どうぞおはいりなさいませ」
中からきれいな声が答える。
静かに障子を一枚あけたお葉は、あっと目をみはったようだ。
座敷は八畳一間で、正面に一間の床の間と、一間の違いだながならび、その違いだなのほうを背にして行儀よく座っているのは、ぬれぬれとした高島田髷に結った振りそで姿の若い娘で、両方の目に白い目おおいをしているのがひどく痛々しい感じではあるが、色の白い美しげな娘である。
お葉も新三郎もなんとなく白衣の行者姿を想像していたので、まずそれにおどろかされ、なるほど老婆がお嬢さまと呼ぶのもこれなら無理はないと思った。
床の間も違いだなも普通ありふれた造りで、飾ってある調度もこれはと目につくような物はないが、ただ床の間には軸物がなく、紫檀の台の上に高さ一尺五寸ほどの厨子が安置され、中

は無論観音像だろう、香はその前の香炉からにおってくるらしい。
　あとは右手の古い壺に白い梅が一枝投げ入れにしてあるだけで、行者の家らしいと思われるのは、その厨子ぐらいのものだった。
「失礼いたします」
　お葉は座敷へ入って障子ぎわへ座り、
「さっそくですが、あたしは連雀町の小料理屋で松葉屋の娘、葉と申します。年は十九になります。昨夜、あたしの家の二階で思わぬ災難がおこり、どうしたらいいかと困ってしまって、おうかがいを立ててもらいにまいりました。どうしたらよろしいでしょうか」
　と、まず切り出した。
「わしは浪人古賀新三郎、その松葉屋の災難に多少引っかかりがあるので、今日はお葉の供をしてまいった。つまり用心棒です。じゃまのようなら玄関で待つことにしてもよろしいんだが」
　新三郎も自分の立場を一応あきらかにしておく。
　そういっている間に、さっきの老婆があがってきて、娘行者のわきへ黙って座った。
　お嬢行者は顔をややうつむけるようにして、ひざの上で絶えず水晶の数珠をつまぐっている。細いしなやかそうな指だ。
「お供の方はそのままでよろしゅうございます」
　行者は身うごきひとつせずに答えて、
「あなたは片親ですね」
　と、顔を少しお葉のほうへ向ける。
「はい、父親と二人きりです」
「災難は外からきて外へ去りました。しかし、あなたの身にはまだ当分災難が振りかかってまいります。親御さんのあやまちをあなたの体でかえすのですから、辛抱しなければなりません。幸い、あなたにはその度に浄土から救いの手があるようです。親御さんの善根が報いられるのです。いつもすなおな心を持って、欲心さえおこさなければ、やがて波風は自然におさまります」
「よくわかりましたけれど、あの――」
　お葉はなにか不満があるように口ごもる。
「どうぞおっしゃっていただきます」
「こんなこと聞いてごめんなさい。うちのおとっつぁんはそんなに間違ったことをしているんでしょうか」
「間違ったことではなく、正しいと思ってしたことでも、人にはあやまちということがございます。それと、親御さんと申し上げたのは、おじいさま、ひいおじいさまも入れての御先祖ということです」
　お嬢行者の柔和な口もとが微笑をふくんでいる。
「お葉さんは親御さんおもいなんですね」
　老婆がそばから口をそえてにっこりする。
「今日お帰りになると、力になってくださる人に会えるかも知れません」
　ふっと気がついたように、お嬢行者がいいたす。
「あの、あたしがですか」
　お葉はびっくりしたようだ。
「そうです」
「どんな人かしら」
「お帰りになればわかります」
「どうもありがとうございました」
　お葉はていねいにおじぎをしてから、
「古賀さんはいいんですか」
　と、新三郎のほうへ聞く。
「いや、わしは今日は姉御の用心棒なんだから」
　新三郎はわらって、しかし礼儀だけは正しく、失礼しましたとお嬢行者と老婆のほうへあいさつをしてから、先に廊下へ出た。
「あの、おばあさま、お賽銭はどこへおけばよろしいのでしょう」
　お葉がそんなことを聞いている。
「いいえ、その御心配はいりませんのですけれど、そちらさまのお気がすまなければ、下に竹

筒がかけてございますから、お心持ちだけをどうぞそれへ」
　老婆が答えているのを耳にしながら、新三郎が階段を降りてきてみると、なるほど上がり口の柱に竹筒がかけてあった。
　どこかでうぐいすが鳴き出したのは、どうやら前の京屋の庭かららしい。

4

　お葉は河岸通りへ出てからもなんとなく浮かない顔つきで、むっつりと黙って歩いていた。
「どうしたんだ、ばかに沈みこんでいるじゃないか。親御さんのあやまちってのが気に入らないのか」
　新三郎は微笑しながら聞いてみた。
「そんなことじゃないんだけれど、古賀さんはどう思う、あのお嬢さんのいうこと、当たっていると思う」
「大体当たっているんじゃないのか。災難は外からきて外へ去った」
「まだ去りやしないわ。その後が心配だからおうかがいに行ったんじゃありませんか」
「そりゃまあそうだが、外へ去ったんだから、後の心配はいらないということになるんじゃないのか」
「それならそうと、はっきりいってくれりゃいいじゃありませんか」
「いやにつむじを曲げているんだな。一体、お賽銭はいくら入れてきたんだね」
「おぼしめしだっていうから、三十文入れてきたわ。悪かったかしら」
　さすがに少し気がひけるらしい。三十文はそば二杯ほどの銭だ。
「まあ、いいだろう。金に困っている家でもなさそうだからな」
「まだ災難は当分つづくっていいましたね」
「うむ、どうも情勢からいっても、これっきりってわけにもいかないだろう」

「あたしは、おとっつぁんのせいじゃなくて、鷲尾党や黒住党のせいだと思うわ」
「まさか、そこまではいくら行者だってわかるまい。こっちのことはなんにも知らないんだからな」
「もうよしましょう。いちいちそんなことを気にしていたってしようがありゃしない」
「そのとおりだ。三十文損をしたと思やいいさ」
　しかし、実際はそれですまないことがあるのだ。多町の安二郎は松五郎と親分子分の縁があるからなんとか話はつくとしても、渡辺配下の同心清川一馬が昨夜渡辺が松葉屋へ寄ったことを知っているとすると、とても渡辺殺しの一件はかくしきれなくなる。また、なまじかくして後でばれるくらいなら、はじめから正直にぶちまけておくほうが、一度はいやな嫌疑がかかるにしても、結局は早く解決がつくことになるのだ。
　すべては松五郎の腹一つなのである。
　松葉屋へ帰ってみると、まだ店はしめたままになっていた。
「いやだなあ、まだおとっつぁん多町から帰ってこないのかしら」
　お葉はまゆをひそめて口小言をいっていたが、新三郎はいよいよ松五郎も腹をきめたなと思った。それでなければ、奉公人はなんにも知らないのだから、いつものとおり店をあけるはずである。まだ店がしまっているのは、松五郎が帰ってきて店をあけさせないのだと見た。
　案の定、裏口から板場へ入っていくと、そこに奉公人たちがひとかたまりになって、ひっそりとしていて、店のほうにだれか人がきているようだ。
「どうしたの、豊吉」
　どきりとしたようにお葉が小声で聞くと、
「清川のだんながきて、親分と話しこんでいるんです」
　と、豊吉も不安そうな顔つきである。

「ふうむ」
お葉はちょっと考えてから、
「あたし出てみる。古賀さんいっしょにきてね」
気丈な娘だからすぐに決心がついたらしく、先に立って店へ出ていった。
「清川さま、おいでなさいまし」
客にあいさつをしてから、
「おとっつぁん、ただいま」
と、松五郎のほうへ寄っていくと、
「どこへ行っていたんだ、お葉」
父親は客の手前ひどく気むずかしい顔をしてみせた。こんな時、家を出歩くのは不謹慎だという気持ちなのだろう。
台を中にして向こうの空き樽に腰かけている清川はまだ二十四、五の年配で、いかにも八丁堀同心らしくあか抜けはしているが、それが少しも軽薄に見えないのは、顔の造作が大まかで、ぎろりとした目になにか奥深いものを持っているからだろう。
「あたし、古賀さんにいっしょに行ってもらって、易者にみてもらいに行ってきたんです。古賀さん、あいさつをしてくださいな」
お葉はもういつもの明るい顔になって、そんなはきはきとした口をきいている。
「親分、お早う」
新三郎は松五郎に声をかけてから、
「はじめてお目にかかります。わしは古賀新三郎、ここの店の定連でしてな、よろしくお願いします」
と、気さくにこっちから清川のほうへ名乗りをあげた。
「いや、こっちこそよろしくたのみます。清川一馬、まだ八丁堀の駆け出しでしてな」
野太いが少しも濁りのない声音で、これなら腹からぶつかっていっても大丈夫そうだと、新三郎は直感した。
「親分、もうあらまし話したんだろう」
「まあ、ざっとね」

松五郎は苦わらいをしている。
「清川さん、これは親分の留守に起こったことでね、わしも一口乗せられてしまったんだが、渡辺さんがどうして昨日の夕方、一人で裏口からここへこられたか、その辺にこんな不吉のおこる原因の一つがあると思うんです」
新三郎はかまわずにぶちまけていく。
「あんたは天狗騒動にまきこまれているそうだね」
「そうです。牢番の新三郎というのに似ている。これがきっかけで、お葉は千鳥じゃないかと、とんだ疑いをかけられたんです」
「天狗党をねらっているのはだれとだれなんだろう」
「いまのところ、鷲尾党と黒住党の二つだけがわかっています」
「天狗党の実物にぶつかったことはあるのかね」
さすがに稼業から、こっちはまるで吟味でもうけているようだ。
「残念ながら、まだだれにも実物はわかっていないようですな」
「わかっていないんじゃなくて、本当はそんな実物などないんじゃないのかね」
「いや、あることはたしかにあるようですな」
「どうしてそんなことがはっきりいえるんだね。だれも実物にはぶつかっていないんだろう？」
「実物がないとわかっていれば、黒住党が躍起になるはずはない。その背後関係を洗えば、必ずそれを裏づけする事実があがってくるでしょう」
「そんなことがいえる理由は――」
「目安箱へ直訴した当人が、何者かに暗殺されています」
「なるほどねえ、遊ばしとくのはもったいないような頭だな、古賀さん」
清川が急にくだけた調子になってわらい出

す。
「おどろいたなあ。こんなところでいきなり御吟味をうけようとは思わなかった」
「いや、聞くだけは聞いておかないと、これも役目なんでね。そこで、ゆうべの件なんだが、渡辺さんが黒住党にねらわれる理由は、およそこっちでもわかっているんだ。だから、こっちの方針も、たぶん、ここでの事件は素通りということになるんだろうと思う。松葉屋は知らん顔をして店をあけているほうがいいだろう」
「ありがとうございます。これでやっと安心しやした」
　松五郎はほっとした顔つきである。
「古賀さん、ことによると後であんたに一度内緒で会いたいって人があるかも知れない。その時はひとつわしの顔を立ててもらいたいな」
「承知した。しかしねえ、清川さん、あんたはなるべく黒住党は素通りのほうがいいと思う。八丁堀さんに対して余計なお節介かな」
「なあに、渡辺さんはどっかのおちゃっぴいに色気を出したからいけねえんだ。おれはこれでそのほうは案外お堅いほうなんでね」
　清川はそんな冗談口を残して、まもなく帰っていった。
「古賀さん、ありがとう。おかげで助かりやした」
　松五郎は愁眉(しゅうび)をひらいて、新三郎にもひどく恩に着たようである。
「姉御、お嬢行者のいったことは、やっぱり当たっていたな」
　後で新三郎はお葉にそっといった。
「なにが当たっていたの、古賀さん」
「清川さんはなかなかの人物だ。力になってもらえる人だとわしは思うがね」
「古賀さんまでそんなこと、――いやだわ、あたし。もっと力になってもらえる人が目の前にいたのに、それがわからないなんて、あの行者はあきめくらよ」

　お葉はぷっとふくれている。
「冗談いうなよ。あの行者はあきめくらどころか、本当のめくらだったぜ」
　その時はちゃかしてわらってすませたが、そうか、お葉の怒っているのはそのことだったのかとやっとわかって、困った娘だなあと新三郎は内心当惑した。
　いまの新三郎は色の恋のとそんなのんきなことをして遊んでいられる体ではないし、お葉に対しても妹のような親しみは持っているが、まだ恋人として考えたことは一度もなかった。
　――しょうがない娘だ。いまにそれとなく意見をしてやる必要があるか。
　ふっとそんなことも考えたが、事実はそれさえしている暇のないほど、新三郎の身辺はいそがしくなっていたのである。
　その夜、新三郎は五ツ（八時）を合図に、約束どおり和泉橋の上で風来坊の伊太吉に会った。
「ここはあぶねえ。例のところがいいだろう」
　伊太吉はぬすっとかぶりのやくざ姿で、先に立って柳原土手のほうへ歩き出す。例のところとは、対岸に鷺尾屋敷が見える大柳の下のことだろう。
「伊太兄貴、この辺は今夜も黒鬼がうろうろしているんじゃないか」
「まあ、そう覚悟していたほうがいいだろうよ」
　今夜も月のあかるい晩だが、昨夜より風がほおになまぬるく、空にも薄い濛気(もうき)がただよって、いわゆるおぼろ月夜という風情である。
「だんな、松葉屋のほうはどうなったね」
　思い出したように伊太吉が聞く。
「うむ、今のところはまだ店をあけているがね」
　一応新三郎は空っとぼけておいて、
「兄貴、花房町に京屋っていう上旅籠(じょうはたご)があるな」
と、そっちへ話を持っていく。
「うむ、それがどうした」
「あそこは泊まると高いか」

「そりゃ安くはねえだろう。だんな衆のつれこみ宿につかわれるところだからな」
「そうか、道理で凝った構えだと思った。振りにいっても泊めてくれるかね」
「金さえ出せばな。だんなはお葉でもつれていく気かね」
「まさか、そうでもないんだが」
「ほれてもいねえのに、おもしろずくで娘なんかはらませちゃ罪だぜ」
　まるで見ぬいているようなことをいう伊太吉である。
「わしはこれでも案外そっちは堅いほうなんだ」
「けどなあ、人間にゃ魔がさすってことがある。ずばりといや、男は浮気だっていうことさ」
「そういうものかなあ」
「京屋のおかみさんはお京さんていういい女だ。おそろしく利口な女でね。無論、亭主とかだんなとか、そんなうしろだてがいるんだろうが、まだだれもその亭主の姿を見た者がないっていうくらいだ」
「ふうむ、どうして亭主をかくす必要があるんだろうな」
「そりゃ、なにか深いわけがあるんだろう。まあ、そんなことは人さまのことでどっちでもいいが、もしだんながな、たって京屋へつれていきたい女があるんなら、まずおかみさんを呼んで、伊太吉に聞いてきたっていってみな。たぶん泊めてくれる」
「なんだ、兄貴は京屋へ顔がきくのか」
「ひとにいってもらっちゃ困るが、ちょいと恩を着せておいたことがあるんだ。けど、だんな、これだけははっきりことわっておくぜ。遊び半分におれの名をつかってくれるな。いいな、おれはこれで義理のかたい男なんだ」
　その声音になんとなくずしりと重いところがある。伊太吉がこっちを信用していることだけはたしかのようだ。

「ありがとう。一度はつかわしてもらう時があるかも知れない。ところでな、兄貴、京屋の裏に、というより八百屋の裏だな、あそこにお嬢行者ってのが住んでいるのを知っているか」
「知ってるよ。このごろ、よく当たるってんで、だんだん評判になってきた娘だ」
「あれはたしかに当たる。実は、わしは今朝、お葉の供をしてあそこへ行ってみたんだ」
「ふうむ。普通の娘だったろう、めくらじゃあるが」
　伊太吉はお嬢行者のほうもなにか知っているようである。

5

「時に、伊太兄貴、今夜の仕事ってのはどんなことだね」
　新三郎は改めて聞いてみた。
「そうだなあ。まあ、もう少し待ってみよう」
　伊太吉は、さっきから時々、そこから上手に見える和泉橋のほうを気にしているようである。
「おかしいなあ。お目当てはあの鷲尾屋敷じゃないのか」
「うむ、結局はあの屋敷なんだが、しのびこむにはしのびこむ時刻があるんだ」
「しのびこむのか」
「そうだ。怖いかね」
「いや、別に怖くはないが、――ああ、わかった、今夜あそこへだれか集まって、寄り合いかなんかがあるのか」
「当たったよ。くわしくいうとな、今夜、鷲尾党の軍師大倉玄蕃が国もとからあそこへ着くことになっているんだ」
「ふうむ。大倉玄蕃がねえ」
　その男が兄の新兵衛を切ったと聞いているので、新三郎は急に激しい敵愾心を感じてくる。
「名前ぐらいは聞いているか、だんな」
「うむ、大物だってことは聞いたことがある」

「無論、大物だとも——。百万両事件はほとんど玄蕃が計画を立てて、自分が采配を振るったんだ。鷲尾刑部の妹を女房にしているやつでね、悪のかたまりみたいなやつなんだ。うっかり江戸へ出すとどんなことをやり出すかわからないというんで、今まで国もとへおさえておいたんだが、せがれ軍兵衛では天狗党の様子がいまだに何一つわからない、とうとう刑部が業を煮やして、おぬし行ってみてくれということになったらしいんだ」
「兄貴、そんなすごいやつでさえ天野屋の百万両がいまだにさがし出せないとなると、百万両はひょっとすると江戸へ運ばれているんじゃないのか」
「なるほど——」
伊太吉はちょっと目を光らせながら、
「そりゃ今のところおれにもどっちともいえねえが、玄蕃がこんど江戸へ出てきたのは、天狗党退治がおもな目的なんだろうと思う。やつらにすれば百万両もほしいが、それより命のほうがもっと大切だろうからな」
と、考え考えいう。
「どっちにしても、やつらの密談は聞きのがせないが、どうだろう、黒住党でも今夜のことはかぎつけているだろうか」
「わからねえな。しかし、たぶんかぎつけていると見ておいたほうがいいだろう」
「あっちはしのびの本職だが、こっちはうまくいくかな。屋敷のほうだってこの間のようなことがあるから、今夜はことに油断してないだろうしな」
「どうせそりゃあぶねえ仕事さ。虎穴に入らずんばなんとやらでね。百万両握るか、命をふいにするか、男は度胸というやつだ。仲間になるのがいやなら、だんな、ぬけてもいいんだよ」
「いや、これでもわしは体中が度胸でできているような男なんだ。やっぱり仲間に入れてもらうことにしよう」

「そうか——。それ見ねえ、だんな、玄蕃の行列がやってきたようだ」
なるほど、ちょうちんを手にした十数人の供侍、小者にまもられた駕籠が、神田のほうからいま和泉橋へかかってきたのが、墨絵のように見えはじめた。
「それで、こっちはどうするんだ、兄貴」
「黙っておれの後をついてきなせえ」
伊太吉はたちまち草の土手をするすると神田川のほうへおりはじめる。
新三郎が黙ってついていくと、土手をおりきった岸の草むらのかげに、小舟が一艘つないであった。
「なるほど、この舟で向こう岸へわたろうっていうんだな」
「そのとおり——。けど、あわてることはねえんだ。あの行列は佐久間町通りへ出て表門から屋敷へ入る。家来たちの気持ちがみんなそっちへ行っている間に、こっちは屋敷の横手から塀を乗りこえてしのびこもうって寸法なんだ」
伊太吉はそこへしゃがみこんで、土手の上を見まわし、それから向こう河岸を見わたしながら説明する。
「さすがだなあ、兄貴」
「つまらねえ感心をしていねえで、舟の中に黒装束が用意してあるから、早いところ支度をしてくんな。ここは向こう河岸の往来からだと一目に見えてしまうから、人のこねえうちにやっちまわなくちゃいけねえ」
なにからなにまで、ちゃんと行きとどいている伊太吉である。
時刻はすでに五ツ半（九時）に近いから、人通りはほとんど絶えている。
新三郎が着物の上から黒装束をつけ、黒頭巾で顔をかくしてしまうと、伊太吉は棹を使って、器用に小舟を佐久間町河岸の桟橋へつけた。どうやら、一昨日の夜、黒住党が屋根船をつないでいた桟橋のようだ。

「さあ、あっしについてきなせえ」
伊太吉はぬすっとかぶりのやくざ姿だが、それがすっかり黒装束になっているから、改めて支度はいらない。
往来へあがってみると、そこは鷲尾屋敷の東がわの路地口の前で、伊太吉はさっとその路地へ姿を消す。新三郎もそれにつづいた。
ちょうど一昨日の晩、黒住鬼堂が塀板をはがしておいたあたりまできて、伊太吉はとんとんと塀を軽くたたいて、中へ合図をした。
「兄貴か――」
中から小声で聞く者があって、
「うむ、伊太だ」
と、こっちも小声で答えると、そらよといって中から塀越しに細引きを一本投げてよこした。ところどころに結び目をこしらえてあるから、それを足がかりにすれば造作なく塀が乗りこえられる。
塀の中に待っていたのは、これもぬすっとかぶりで顔をかくした中間体の男である。
「様子はどうだ」
「それがなあ、兄貴、今夜はちっとばかりいつもと違うようだ。とにかく、そこの木の上でしばらく待ってみてくれ。いい時がきたら知らせにくる」
「そうか、じゃそうしよう。無理をするなよ。相手は大倉だからな」
「合点だ」
中間はすっと林の中へ消えていく。
「兄貴、この林の中を西へまっすぐ行くと、例の茶室へつきあたりゃしないか」
新三郎は念のために聞いてみた。
「うむ、そのとおりだ。しかし、今夜は大倉がどんな手くばりするか、しばらく様子を見ることにしよう」
「よしきた」
林の中に、のぼって身をかくせるような手ごろな木がいくらもある。伊太吉と新三郎がのぼ

ったのは槇の木のようだった。
――なるほど、屋敷の中に間者が入りこんでいれば、どんなことでもできるわけだ。
新三郎は少し安心しながら、しかし、あの中間はだれなんだというような余計なことは、決して口にしなかった。
その夜、国もとから大倉玄蕃を迎えた鷲尾屋敷は、すっかり緊張しきっていた。
軍兵衛が出府して、この下屋敷を本陣にしてから、ここには国もとから選抜してきた国侍が三十人、江戸の上屋敷から手伝いにきている家来が十何人、侍だけでも五十人近く住んでいる。
軍兵衛はこれを手足のように使って、江戸の天狗党を根こそぎ片づけるはずだったが、こと志と違って、いまだに天狗党らしい影さえつかめずにいる。要するに、軍兵衛にはそれだけの才能がないのだ。
だから、こんど一門の大倉玄蕃が改めて江戸鷲尾党の総頭取として出府してきたのだが、玄蕃は一口にいえば妖刀村正のような切れ者で、たちまち相手の胸の中を見ぬいてしまう眼力をそなえている上に、冷酷と思われるほど賞罰がきびしい。一味の者といえども少しも油断ができないのだ。
しかも、玄蕃には、呼び名を二郎次、三郎三、四郎太、五郎蔵という浪人者あがりの家来四人と、市助、仁吉、三蔵という小者三人を養っていて、これがそれぞれまるで手足のようによく働く。
つまり、玄蕃は自分の目と耳のほかに、七人の目と耳を持っていることになるのだ。
屋敷中の者が緊張するのも無理はないのである。
玄蕃は年すでに五十に近く、髪を総髪にして、かげでは赤鬼というあだ名があるくらいだから、いかつい赤ら顔で、見るからに堂々たる体躯をしている。先年正妻を失ってからは、後妻をめとらず、身のまわりの世話には十八ほどに

なる美しい若菜という娘を小姓仕立にして召し使い、ひどくこれを寵愛して、こんどの出府にも無論つれてきている。

　鷲尾屋敷へ入った玄蕃は、まず書院で士分の者一同のあいさつをうけ、それがすむと、軍兵衛と北野周平、大森金蔵の三人をうながして、まだ旅装もとかずに林の中の茶室へ向かった。

「叔父上、お疲れでしょうからひとふろあびてはいかがです」

　軍兵衛が見かねてそうすすめると、

「いや、それは後でよい。ここはもう戦場もおなじなのだから、一刻の油断もできぬ」

　と、顔色ひとつやわらげない。

　軍兵衛は叔父甥のことだからまだ気が楽だが、北野と大森はそういうきびしい玄蕃のやり方に、なんとなく身のすくむ思いがした。

　しかも、玄蕃腹心の七人は、屋敷へ着くなりなんの打ち合わせもなく、もう屋敷中へ散らばってそれぞれの仕事をしているのだから、なおさら薄気味が悪いのだ。

「さっそくだが、一通り話を聞いておこうかな」

　玄蕃は若菜がたててきた薄茶を一服のんでから、三人の顔を見くらべ、

「一昨夜、ここへ天狗党の者らしい二人をつれてきたそうだが、その者たちはどうしたな」

　と、軍兵衛に聞く。

　そんな聞き方をするくらいだから、大体のことはすでに耳に入っているのだろう。

「あれは、古賀新三郎という浪人者が当時の牢番新三郎にそっくりだと北野がいうので、それならその新三郎が毎晩通っている連雀町の松葉屋の娘お葉は千鳥ではないかということになって、一昨夜わざとお葉をここへ誘拐してみたのです」

「周平、おまえは牢番新三郎の顔はよく知っているはずだな」

　玄蕃の底光りのする目が、じろりと北野の顔を見る。

「はい、新三郎はこっちの見込みどおりすぐお葉を助けにきましたので、両人をつかまえ、この茶室を座敷牢にこしらえました」

　北野がそう説明しようとすると、

「その座敷牢から黒住党が造作なく両人をつれ出していったそうだな」

　と、玄蕃が先まわりをする。

「申し訳ございません」

「それで、新三郎とお葉はたしかに天狗党の者なのか」

「どうも違っているようでございます」

「古賀新三郎が牢番の新三郎に似ている。だから、これが天野屋浪太郎だと見た。そこまではまあよい。その浪太郎が毎晩松葉屋へ通うから、そこの娘お葉が千鳥だと考えるのはあまりにも迂闊すぎる。浪太郎はどうして大勢客のいるところでわざわざ千鳥に会わなくてはならないんだね。北野がもし浪太郎だったら、そんなまねができるかな」

「申し訳ございません」

「金蔵は江戸育ちだ。なぜその時までお葉の身もとを調べてみる気にならなかったのか。八丁堀に知り合いがないわけではあるまい」

「一言もございません」

　大森も冷や汗をかいているようだ。

「しかし、お葉をおとりにして新三郎をおびきよせたのはむだではない。古賀はともかくも周平が牢番新三郎と間違えるほどよく似てるのだ。これは一応よく洗ってみる必要がある。たしかめてみたのか」

　三人とも返事ができない。

「あの時の牢番新三郎がはたして浪太郎かどうかは疑問があるが、いずれにせよ大番頭磯右衛門を牢から助け出したことは事実だ。よいか、その新三郎がこっちの手におちれば、天狗党は黙って見ているわけにはいくまい、恩義があるからな。たとえばだぞ、牢番新三郎に兄弟があって、そのほうがつかまったにもせよ、天狗党の

ほうではほっておけないのだ」
「はい、よくわかります」
「無論、そちたちもそう考えたから、天狗党が新三郎を助けにくるのを待っていた。そして、天狗党ならざる黒住党の者に、造作なく新三郎とお葉を横取りされている。そちたちはなんのためにわざわざここへ座敷牢までこしらえたのだ」
三人とも頭があげていられない。自分たちの無能ぶりが悔しくさえなってくる。
「その後始末がまた悪い。黒住党に逃げられてしまったのはしようがないとして、事実は新三郎もお葉も黒住党から天狗党へ取りもどされている。なぜそこへ気がつかぬのだ」
「あっ」
三人は思わず顔を見あわせてしまった。
たぶんそうではないかと考えてはいたが、ではどうしてそうなったか、天狗党はどんな風にして黒住党から二人を横取りしたか、まったく見当さえついていないからである。

6

「すると、叔父上、新三郎をつけていれば、自然に天狗党がわかってくるわけですな」
軍兵衛が意気ごむようにいい出す。
「わかりきったことだ。だいいち、おまえたちは新三郎のほかに、天狗党に関係のある者さえ、まだ一人もさがしてはおらんではないか」
玄蕃はあきらかに苦々しい顔をしている。
「いっそもう一度新三郎をわなにかけてみてはどうでしょうな」
北野がもっともらしくひざを乗り出す。
「それも一つの手だ」
「黒住党のほうはほっておいてもいいものでしょうかな」
なにか一言いわなければ具合いが悪くて、大森がそんなことをいい出す。
「無論、ほっておくわけにはいかん」

玄蕃はそう答えて、まだほかに意見はないかといいたげに、三人を見まわす。
が、三人とも意見はたったそれだけのようだ。
「この屋敷の中間小者どもは国もとの者ばかりではあるまいな。元締めはどこだな」
「あっ、そうか、その中に天狗党の間者がいないとはかぎりませんな。元締めは湯島代地、昌平橋外の淡路屋島五郎です」
軍兵衛がさっと目を輝かす。
「新三郎はどこに住んでいるのだ」
「川向こうの平永町の米屋の裏に浪宅があるようです」
「黒住党は、一昨日の夜、船で逃げているそうだな」
「そうです」
「この屋敷を中心にして、西は昌平橋、東は柳橋、南と北は神田川を中にして十町ほど、この中に天狗党が散らばっていると見ていいだろう。屋敷に近いほどくさいと見て、変わった住まい、変わった人間を一応さがしてみる必要があったのだ。おそらく、手をつけてはいないだろうな」
「はあ、うっかりしていました」
軍兵衛はかぶとをぬぐよりしようがない。
「よろしい。すんだことはもうなにもいうまい。これからはわしが一切の采配(さいはい)をとるから、独断は慎むこと、必ずわしの命令は実行すること、いいだろうな」
「はい」
「それでは、軍兵衛は表門、北野は裏木戸。無論、両方とも表の往来も含む。特に北野は川筋の船に気をつけろ。今夜は黒住党も天狗党もこの屋敷うちにしのびこんでいるはずだ。それぞれ必要な人数をわけて、ただちに敵を追い出してみてくれ」
「あっ」
三人とも思わず顔色をかえて、ちょっと半信半疑といった目つきだったが、この時ちょうど

裏庭のほうから、

ぴ、ぴい。

ぴ、ぴい。

と、鋭い呼び子の音が不気味に聞こえてきた。

「それっ、あれが敵を見つけた合図だ。早く持ち場をかためなさい」

「かしこまりました」

三人が三人とも、こんどこそ必死の顔になって、一度に立ちあがっていた。

この呼び子の音は、東庭の林の中の木の上で、味方の知らせを待っている新三郎たちも耳にした。

「裏のほうだな、兄貴」

「うむ、町方がこんなところへ入りこむはずはないし、呼び子の音もちょっと違う」

伊太吉はじっとそっちへ耳をすましている。

が、呼び子はその二声だけで、後はうそのようにひっそりとしているようだ。

「おかしいなあ。屋敷の見張りがくせ者をみつけて鳴らしたんなら、すぐに騒ぎがおこるはずだろう」

「そりゃそうだ――。待てよ、もしくせ者が黒住党の者で、呼び子を鳴らしたとたんどこかへかくれてしまう、そんなことはないかな」

「それならもっと呼び子を吹いて味方を集めたくなりゃしねえか」

伊太吉はなおも耳を澄ましながら、

「しかし、くせ者が見つかったとすれば、たしかに黒住党だな」

と、考えこんでいる。

「忍者は闘うにしても逃げるにしても決して声は出さない。こっちの夜番のほうも心得のあるやつなら、黙って味方のほうへ追いこんでいくほうが安全じゃないか」

新三郎はなんとなくそんな気がするのだ。

「そういえばなあ、だんな、大倉ってやつには浪人あがりが四人、小者が三人、手飼いのすごい隠密（おんみつ）がついてるって話なんだ。そいつらがいっしょについてきているとなると、今夜は油断ができねえ」

「さっきのお中間がいっていたじゃないか、今夜は少し様子が違うようだって。――無論、大倉はその七人組をつれてきているさ」

「しかし、やつらはたったいま国もとからついたばかりだぜ」

「戦場に骨休みなんてのがあるかな。現に、わしたちはもうここまできて大倉をねらっているんだからな」

「なるほど――」

伊太吉もどうやら納得がいったようだ。

ぴ、ぴい。

こんどは突然、すぐ自分たちののぼっている木の下あたりで呼び子がなった。

とたんに、さっと黒い人間が一人、目の下を横切って林の奥へ消えていく。それをまたねこのように足音も立てず、まっしぐらに追っていく黒い影がある。

どうやら逃げたのは黒住党のしのび姿で、追っているのは中間風のやつのようだった。

「だんな、おれの負けだよ」

「うむ、すごいことになったな」

伊太吉がそっと耳もとへささやく。

追うほうも追われるほうも無言で、必死に闘っている。黒住党も一人でしのびこむはずはないから、あっちこっちの木の下やみでそういう死闘がつづけられているにちがいない。

「こいつはうっかりここが動けなくなったんじゃないか」

「しっ」

伊太吉が制した。

下を見ると、なるほど、少し向こうの木の根方へ、ちょろりとだれかしのび寄ってうずくまったのが、木の葉の間からちらっと見えた。

「いけねえ、平吉じゃねえかな」

「さっきのお中間さんか」

「うむ。――そんなにあわてて出てこなくたって、こっちは心配ないのになあ」
伊太吉ははらはらしているようだ。
その平吉は、しばらくあたりを念入りに注意しながら、そろりと立ちあがったようだ。
とたんに、うしろからぐいと平吉の腕をつかんだやつがある。
「あっ、いてえ、だれだ」
平吉はかすかに悲鳴をもらしながら、それでもすぐに食ってかかる。
相手もおなじような中間だが、ただ見ただけでも体の鍛え方が違うようだ。
「おめえこそだれだ」
低いが野太い声音である。
「おれは平吉っていうここの中間だ」
「どこへ行くんだ」
「くせ者が入ったっていうから、一番おれも手柄を立ててやろうと思ってな」
相手はじっと平吉の顔を見すえている。
「おめえは今夜国もとからついた兄貴のようだな。名はなんというんだね」
「三蔵だ。――おめえは淡路屋から入ったんだな。江戸っ子だろう」
「うむ、江戸っ子だ」
「おめえ、今夜ここへだれか手引きをしてやがるな」
「そ、そんなことはねえ」
「うそをいったってだめだ。今夜はここの中間は部屋から出ちゃいけねえことになっているんだ。知らねえのか」
「おれは、おれはそんなこと聞かなかったぞ」
「そりゃおめえがその前から部屋を出ているからだ。今夜命令にそむく者は切ってしまえということになっているんだ」
「そんなむちゃなことがあるもんか」
「おい、命だけは助けてやるから、正直に白状しろ。おめえはだれを手引きしてどこへかくしてあるんだ」

「そんなことは知らねえというのに。くどいなあ、兄貴は」
「よし、しょうがねえ。おれといっしょに御家老さまのところへ行け」
「御家老さまって、大倉さまのところか」
「そうだ。おとなしくしねえと、おめえ本当に切られちまうぞ」
「じゃ、兄貴に本当のことをいえば、命だけは助けてくれるか」
「そりゃ助けてやる」
「きっとだな」
「おれたちは御家老さまのふところ刀なんだ。ほかの中間小者とはわけが違う。約束はかたい」
「ありがてえ。じゃ、白状する。おれが今夜手引きをしたのは黒住鬼堂さまだ」
「なんだと――」
「本当なんだ、兄貴」
まことしやかな顔をしながら、どうすきがあったか、
「こん畜生」
平吉はふいに三蔵を力いっぱい突きとばして、ぱっと南のほうへ走り出す。さすがにすばしっこい気合いを持っている。
「うぬっ」
一度はよろけたが、三蔵もまた負けてはいない。
ぴ、ぴい。
ぴ、ぴい。
とっさに呼び子を吹いて合図をしながら、風のように林の中を走りぬけていく。
「平吉、死ぬんじゃねえぞ」
伊太吉はしっかりと木の幹を片手で抱きながら、そっちへ首をのばして、祈るようにつぶやいていた。

脱出

1

大倉玄蕃（おおくらげんば）は茶室に座って、屋敷中へひろがってきた戦闘の気配に、じっと耳を澄ましていた。

追いまわされている敵は黒住党の忍者たちらしく、だれも声は出さないようだ。

味方も、国もとからつれてきた家来どもは、こういう野戦の時はほとんど口はきかないことになっている。敵にぶつかった場合は呼び子で自分の位置を味方に知らせる。味方はその呼び子で敵の位置を推測して、包囲陣を敷く。これが敵を倒すにしてもつかまえるにしてもいちばん確実な手段なのだ。

「そら出たぞう」
「逃がすなあ」
「こっちだぞう」

そんな余計なことをわめきあっているのは江戸詰めの者たちで、わざわざ敵に自分のいるところを知らせるばかりでなく、味方の人数まで読まれてしまう結果になる。ばかげたことなのだ。

ぴ、ぴい。

ぴ、ぴい。

その呼び子の音が、今夜はあっちからもこっちからも聞こえてくる。

相手が忍者どもなので、そう簡単に追いつめることができないのだろう。

あいにく宵（よい）からのおぼろ月が今はすっかり雲におおわれてしまったのも、多少味方の不利になっているにちがいない。

――しかし、黒住党の今夜の目的はなになんだろう。

玄蕃はふっと疑問を感じてきた。黒住党はこっちからなにか百万両の埋蔵金についての手がかりをさぐり出そうとしていることはわかる。

天狗党とはちがうから、まさかこっちの寝首までかく必要はないはずだ。

そうだとすれば、こっちに姿を見られてしまった黒住党は、今夜はあきらかに失敗したのだ。失敗した場合はきれいに引きあげて、再挙を計るのが忍者の戦法だと聞いている。

それが、今夜はいまだに引きあげようとしない。こっちの攻撃が急なので、そのすきがつかめないのか。――いや、そんなことはあるまい。彼らはあらかじめいくつか逃げ道を作っておいてからその屋敷へしのびこむはずだから、逃げそこねているとは考えられない。

すると、彼らにはなにかほかに目的があるのだ。

――なんだろう。

玄蕃がそれを考えていると、案の定、奥の廊下へ出るふすまの向こうから、

「玄蕃、掛け合いたいことがある。しばらく耳を貸す気があるか」

と、低いがはっきりした声で、ふいに話しかけてきたやつがある。

そばに控えていた若菜が、びっくりしたようにふすまのほうへ目を向ける。

「その声の主は黒住鬼堂のようだな。ちがうか」
「いや、察しのとおり鬼堂だ」
「聞こう。掛け合いたいとは、どんなことだ」
「百万両の埋蔵金を山分けにする気はないか。それが承知なら、共同で天狗党にあたり、跡かたづけはわしのほうで受け持ってもいい」
「いやだといったらどうするね」
「やむをえぬ。こっちはこっちでやることにする」
「天狗党の正体を多少なりとつかんでいるのか」
「正直にいえば、外がわをいくらかつかんだくらいで、まだ正体は見当もつかぬ」
「それでは話にならんではないか」

玄蕃はふすまのほうを見ながら苦わらいをし

た。
「そうか、話にならんか」
　ふすまの向こうで鬼堂も苦笑しているらしく、
「しかしな、玄蕃、そっちで握っている手がかりがあれば、我々はすぐそれを二倍にする力を持っている。もう一つは、いまもいったが、跡かたづけでそっちはごたごたせずにすむ。そう悪い条件ではないと思うんだがな」
　と、もう一度押してくる。
「鬼堂、たった一つだけ聞くが、こっちが命がけではじめた仕事を、横から手を出そうというのは、あまり虫がよすぎはしないか。そういうずるい人間が信用できるかどうか、一度よく考えてみてくれ」
　玄蕃はびしりと一本打ちこんでいく。
「それは、玄蕃、了見がせまい。この仕事ははじめからこっちが先口だと威張れる性質のものではない。百万両がまだ出ないからあまり世間の問題にもなっていないが、すでに将軍家から直々の隠密さえ出ているくらいだ。まあ、そんなことは承知の上でかかっている仕事なんだから、それはいわぬことにして、ここに百万両の金山があるとする。一人ではどうしても掘りあてかねている場合、いっしょに手伝ってやるから出た金を山分けにしようじゃないかと持ちかけるのは、別にずるいの、虫がよすぎるのという問題じゃないと思うんだがな。それでも貴公はやっぱり百万両を独り占めにしたいかね」
　鬼堂はおだやかに切りかえしてくる。
「そうか、わかった。では、そうしよう。そっちがなにかこっちの手に有力な天狗の手がかりを持ってくる、それを土産にしてその時から手を握る。これではどうだ」
「よかろう。手ぶらで仲間にしろというのも少し虫がよすぎるようだ。じゃ、玄蕃、約束したぞ」
「たしかに承知した」
　そういいながら、玄蕃はじっと聞き耳を立てていたが、ことりとも物音を立てずに、もう鬼堂はそこから消えているようである。

「若菜、あけてみろ」
「はい」
　十四の時まで山で育った若菜は、怖いということをあまり知らない娘なので、つと立っていってそこのふすまをあけた。
「御家老さま、もうおりません」
「そうか――」
「どこから入ってきたのでしょう」
「さあ、三畳のほうのにじり口か、ふろ場のくぐりか、その二つのうちだろうな。さすがに器用なものだ」
　その器用さより、屋敷には厳重な守りがある上に、しかも庭では厳しい敵味方の乱闘がつづいている。無論、味方の人数のほうが数倍も多いはずだ。その目をくぐりぬけて、いわば本陣というべきこの茶室へ、鬼堂はいつの間にか一人でしのびこんでいる。人の守りなどというものはあまり当てにならないものだと、玄蕃はしみじみ考えさせられる。
「あの、入り口を調べてみましょうか」
「いや、それは後でよい」
「だれか一人、お庭へ残しておけばよかったのに――」
　若菜はちょっと不平そうにいう。だれか一人とは、四人侍か三人男のうちの一人で、それさえ庭に残しておけば、鬼堂にそんなまねはさせなかったろうにと、若菜は考えているようだ。
「まあよい、けがの功名といってな、今夜鬼堂にぶつかったことは、決してむだにはならない」
　それにしても、鬼堂はどんな風に味方をまとめて引きあげるだろうかと耳を澄ましているうちに、庭中の騒動はいつの間にかひっそりとしてきたようだ。
「御家老さま、黒住党は退散したようです」
　庭組の人数の指揮にあたっていた大森金蔵が、駆けもどってきて、興奮した顔をかくしき

れずに告げる。
「だいぶ騒いでいたようだが、一人もつかまらなかったのか」
「はっ」
「それでは、敵はよろこんで退散したろう」
「いいえ、裏口は北野がかためていますから、ここで何人かつかまるだろうと思います」
「なるほど、そちは追い出し組で、北野に手柄を立てさせる計略だったのか」
「そう約束したわけではありませんが、結果としてそうなりましたので、申し訳ありません」
　金蔵はさすがに赤面しているようだ。
「敵の人数はおよそ何人ぐらいいたのだ」
「黒住党は五人だと思います」
「天狗党らしいやつは見かけなかったのか」
「はい、中間の平吉は、天狗党を二人見かけた、おなじような黒装束のやつだと申していましたが、手前にはどうも見わけがつきませんでした」
「金蔵、今夜は中間はみんな中間部屋へ集めて、一人も外へ出さないことにしてある。知らなかったのか」
「それは聞いておりましたが、平吉は特に表門の軍兵衛どののいいつけで、裏門の北野のところへ連絡に行くのだと申していました」
「伝令なら、あぶない戦場を駆けぬけるより、塀外をまわったほうが早い」
「あっ」
　金蔵は思わず顔色をかえる。
「たわけめ、そんなことで庭内の大将がつとまるか。もう一度平吉をつかまえて、ここへつれてこい。しかと申しつけたぞ」
「はっ」
　金蔵は真っ青になって駆け出す。
「つかまりますかしら」
　若菜がまゆをひそめながら聞く。
「たぶん表でつかまるだろう」
「黒住党もですか」
「本当ならつかまるように陣が敷いてあるのだ。しかし、江戸者はおっとりとしすぎているでな、そこを突かれるとみんな逃げてしまうかもしれぬ」
　玄蕃はしようがないというようにわらっている。しかし、失敗をただわらってすませるような甘い玄蕃ではないから、なにかほかに考えていることがあるにちがいない。

2

　そのころ――。
　東がわの外庭の林の中で、木の上へ身をかくしている新三郎と伊太吉は、何度となく下を黒住党の忍者と思われる黒装束が、ちらっと姿を見せては消えていくし、それを追いまわしている屋敷の若侍たちが行ったり来たりするので、どうにもあぶなくて下へおりることができない。
「だんな、今夜の屋敷がわの戦法は、この間の晩とはまるっきり違うようだな」
　伊太吉がちょっと当惑したようにいう。そういえば、この間も黒住党とここではちあわせをやったのだが、あの夜は伊太吉はちゃんと茶室へ近づいていけたのだ。
「大倉玄蕃というやつは賞罰のきびしい男だというから、若侍どもも骨惜しみをしていられないのだろう」
　その機会がくるまで辛抱しているよりしようがないと覚悟をしてしまった新三郎は、もうのんびりと構えている。
「無論それもあるんだろうが、玄蕃というやつは手下に四人侍と三人男というのを持っていて、これがいつも猟犬のようによく働くんだって話だ。今夜はそれが働いているんじゃないかと思う」
「ふうむ、四人侍ってのは玄蕃の四天王という意味なんだろうが、三人男ってのはどういうやつらなんだね」
「いいかえれば、三人下郎ということになるん

だろう。侍が四人、下郎が三人、つまり七人の手足を持っていることになるんだろう」
「なるほど、うまいことを考えたもんだな。その七人は自分でも働くだろうが、こういう時は味方の働きぶりを見ていて、後で玄蕃に報告する。それが怖いから、若侍たちも油断ができないということになるんだ」
「さっき平吉をつかまえようとした三蔵という中間な、あいつも三人男の一人だろうと思う」
「たぶんそうだろう。あの体つきは柔(やわら)を心得ているやつだ。しかし、平吉はうまく逃げたらしいな」
「どうしてそんなことがわかるね」
「そのくらいのことはだれにだってわかるさ。もし兄貴が平吉で、運悪くつかまったとすれば、どうする気になるか、それをちょいと考えてみるんだな」
　新三郎はなぞをかけるようなことをいう。
「なるほど、一度はここへきて、よそながらおれたちに気をつけろと知らせるだろうな」
　伊太吉はさすがにわかりが早い。
「そのくらいのことは気のつく男なんだろう、平吉ってのは」
「うむ、あれはおれの兄弟分でね」
　伊太吉はうっかりそんなことを口にしたようだが、新三郎ははてなと思った。
　平吉はさっき三蔵に、おまえは淡路屋島五郎の手からこの屋敷へ入っているんだろうと、いきなりすっぱぬかれていた。その平吉は伊太吉と兄弟分だという。
　一体、平吉はなんの目的でこんな屋敷へ入りこんで、今夜伊太吉を手引きしたのか、これは百万両をねらっているというより、むしろ百万両を守るほう、すなわち天狗党の一味ではないかという疑問が濃厚になってきそうだ。
　そう気がついてみると、淡路屋島五郎という元締めは、なんとなく天野屋の遺児浪太郎ではないかとさえ思われてくる。

　伊太吉が見ず知らずの自分にはじめから好意を持って近づいてきたのも、伊太吉が天狗党の仲間だとわかれば、牢番新三郎とのいきさつがあるから、少しもふしぎはないわけである。
　——そうか、それでわかった。
　新三郎はふいに目がさめたような気がした。それにしても、鷲尾党にせよ、黒住党にせよ、こんなに躍起になってさがしている天狗の一族がすぐ自分の手のとどくところにいたとは、新三郎もまったく意外な気持ちだった。
　ぴ、ぴい。
　ぴ、ぴい。
　例の呼び子の合図が、どうやらみんな裏木戸あたりの庭へ集まっていったようである。
　こっちへ走ってくる足音は、ちょっととまっているようだ。
「だんな、黒住党はどうやら裏庭へ追いつめられたんじゃないかな」
　伊太吉はそっちへ耳を澄ましながらいう。
「さあ、相手は忍者どもだからな。なにか計略があるのかもしれない」
「そうか、そういえばそうかも知れねえ」
「しっ」
　新三郎はあわてて伊太吉を制した。するするとこっちの木の下へ、黒い影が一つねこのようにしのび寄ってきたからである。
「兄貴、いまのうちだ。早くおりてくんな」
　黒い影は平吉だった。
「そうか、よし。——だんな、おりよう」
　伊太吉はするすると素早く木からおりる。
　新三郎もそれにつづいた。
「こっちだ。——わけは後で話す」
　平吉は先に立って、さっき二人が乗りこえた塀(へい)ぎわまで走り、そこから川っぷちとは反対のほうへ十間ばかり進む。そこに大きな納屋が一つ建っているようだ。
「この納屋へかくれるのか、平吉」
「そうじゃねえんだ。今夜はここから引きあげ

よう」
「引きあげる――」
「うむ、さっき見ていたろう、兄貴、おれはあぶなくつかまるところだった。玄蕃が国からつれてきた四人侍三人男は、さすがにうっかりできねえ。今夜は深入りしないほうがいい」
「そうか、おめえがそういうんならそうしよう」
「今な、黒住党のやつらも引きあげにかかっているんだ。やつらが引きあげてしまうと、こんどは敵はこっちを追いまわしにかかる。だから、いまがちょうどこっちの引きあげどきなんだ」
「おめえもいっしょに引きあげるんだろう、平吉」
「そうしようと思う」
「しかし、おめえ、その中間のかっこうじゃまずいな。表に見張りでもあると、おめえの顔はみんな知ってるだけにまずい。よし、こうしよう。だんな、おめえさんの黒装束を平吉に貸してやっておくんなさい。表へ出りゃだんなはなにも顔をかくすことはありませんからね」
「よかろう」
新三郎はさっそく黒装束をぬぎ、頭巾(ずきん)をとって平吉にわたす。
「だんな、すんませんねえ」
平吉はおじぎをしてから、手早く黒装束を身につけはじめる。二十三、四でもあろうか、こうしてみるとまだかわいげをたぶんに残している童顔で、中間面には向かない顔なのである。
「平吉、さっきはよく逃げられたなあ。こっちはつかまったかと思って、ひやひやしていたんだ」
「実はねえ、だんな、あっしもこりゃだめかと思った。すると、いいあんばいに、あっしと三蔵との間へ、ちょろりと黒住党のやつが一人飛び出してきやしてね、こいつが三蔵とはち合わせをしやがった。天の助けでさ」
「平吉、支度ができたら塀を乗りこえよう。話は表へ出てからでもできる」
そばから伊太吉が注意する。

「ところが、兄貴、この塀を乗りこえても、この横町には裏にも表にも出口に見張りが立っているんだ」
「途中に東へぬける路地が二つあったはずだな」
「その路地がこっちのつけ目なんだが、ひょっとするとここもふさがれているかも知れないんだ」
「そうか。そういやあ、なるほど、そこをふさがなくちゃ網にほころびがあるようなもんだからな」
伊太吉はぬすっとかぶりの中で苦わらいをしている。
「それと、表通りは鷲尾軍兵衛、裏の河岸っぷちは北野周平、この二人が大将で関所を作っている。もう一つ怖いのは、この屋敷を中にして、東は茅町通り、西は筋違橋、北は藤堂さまの屋敷の角まで、要所要所に二、三人ずつ手くばりがあるらしいんだ。つまり、玄蕃は大体それから中に天狗党はちらばっていると見ているんだそうだ」
「ふうむ、玄蕃の考えそうなことさ」
いくぶんちゃかすようにいいながら、しかし伊太吉は内心どきりとしたようである。
「それでなあ、兄貴、ここを出たら三人いっしょでなく、ばらばらに逃げ出したほうがいいと思う。もし見張りに怪しまれたら、問答無用たたっ切って逃げる。敵はこっちをつかまえるより、ひもをつけてどこへ逃げこむかを洗い出すのが目的らしいんだ。こいつもよく頭へ入れておいてくんな」
「よし、わかった。そのつもりでやっつけよう」
「黒住党は相かわらず神田川へ船を用意してある。人数は五人らしい。やつらにいいように暴れさせておいて、鬼堂は別になにか仕事をしているんじゃないかと思う。それがすむと黒住党は裏から引きあげる、裏の北野組と小ぜりあいになった時が、ちょうどこっちの引きあげ時だと思うんだ」

平吉は敵の屋敷へ間者に入るだけあって、かなり鋭い頭の持ち主のようだ。
「平さんは軍師になれそうだな、伊太兄貴」
新三郎が感心したようにいうと、
「うむ、それで女に甘くさえなけりゃねえ」
と、伊太吉の目がわらっている。
「今夜はなあ、兄貴、まさか女の見張りってのはないだろうから、おれも安心しているんだ」
平吉はにこりとしながら、
「さあ、仕事にかかるかな」
というなり、もう身軽に塀にのぼって、横町の上手下手を見まわしている。
「それ、逃げた、――川っぷちだぞう」
「横町を気をつけろう」
川っぷちのほうから二声、三声どなるような声がひびいたと思う間に、
ぴ、ぴい。
ぴ、ぴい。
それがたちまち呼び子の音にかわった。
ばたばたと横町へ足音が走り出したのは、路地にかくれていた見張りがあわてて川っぷちのほうへ加勢に出かけるのだろう。
だあん。
銃声が二発、つづけざまに鳴った。
たぶん、黒住党がぶっ放したのだろう。
江戸で発砲は禁じられている。つかまれば重罪だ。それくらいだから、銃声を聞けばすぐ町役人が集まってくる。
町役人の見ている前では、まさか鷲尾党もあまりおおげさな追跡もできない。それを計算に入れての発砲だったのだろう。
「今だ、兄貴。おれは一足先へ行くぜ」
「よし、うまくやれよ」
「大丈夫だ」
若い平吉はするすると塀の向こうへぶらさがった。ひらりと横町へ飛びおりたようだ。
「さあ、だんな」

伊太吉が新三郎をうながす。こんな時の遠慮はかえってものわらいだ。
「心得た」
新三郎は塀へつかまって首だけ上へ出し、一応横町の前後を見わたす。人影はないようだ。
そのまま塀の上へあがって、外がわへぶらさがり、ひらりと飛びおりる。
新三郎はかまわず表通りのほうへ大股に歩き出す。こうして歩いていれば天下の浪人古賀新三郎なのだから、だれに遠慮気がねもいらないのである。
「おい、貴公はだれだ」
表通りへ出る角までくると、案の定、そこに若侍が二人網を張っていて、一人がいきなりちょうちんをつきつけてきた。
平吉は問答無用といっていたが、新三郎はまさか黙って辻切りのようなまねもできない。
「わしは浪人古賀新三郎だが、あなたがたはだれだ」
「拙者どもは尼崎松平家の家来だが、貴公はどこから出てこられたのだ」
「向こう路地から出て、川っぷちのほうへ行くつもりだったんだが、いま銃声が聞こえたので、あぶないからこっちへ出てきたんだ」
「貴公、いま古賀新三郎と名乗ったようだな」
相棒がそばから念を押す。
「さよう、古賀新三郎。二、三日前に鷲尾さんにひどい目にあった古賀だ。あんたがた知っているかね」
新三郎はわざと冗談のようにいって、苦わらいをしてみせる。
「ちょっと待ってくれ。いま鷲尾さんを呼んでくるから」
その男は表門のほうへいそいで駆け出していく。
――ばかなやつだなあ。
新三郎は内心、今だと思い、あきれたようにその男のほうを見送りながら、すっとちょうち

んをつけている男のほうへ寄って、

「あっ」

その男が飛びのこうとするより早く、だっと一つ猛烈な当て身をくれる。

その男はがくんと両ひざをついて、持っているちょうちんを取りおとしたから、あおりを食って灯が消えた。

新三郎はくるりときびすをかえして、表門とは反対の三丁目のほうへ、風のように走り出した。

「あっ、逃げた」

「追えっ、逃がすな」

これは横町から飛び出してきたらしい敵が二人、とっさに叫びあいながら、火のように後を追い出したようである。

――しまった。横町に敵がいるとはうっかりしていたな。

新三郎はどきりとはしたが、足にも腕にも自信があるから、後をも見ずに力いっぱい走りつづける。

3

この通りの左手は旗本の屋敷つづきで、路地はない。新三郎は小一町ほど走って、目についた右手の路地へ駆けこんだ。

幸い敵は長追いはせず、途中から引きかえしたらしく、もう追ってくる者はないようだ。

この路地はそのまま通りぬけると神田川のふちへ出る。左右へ曲がる路地が二つ三つあって、そのどこかの路地へ伊太吉と平吉は逃げこんでいるはずだ。

そういえば、この間お葉と二人でふしぎな船頭に助けられて走ったのも、この路地のどれか一つだった。

――よし、今夜は川っぷちへ出てみよう。

新三郎はゆっくりと神田川のほうへぬけていくことにした。

別に事を好む気持ちはないが、黒住党は船で

逃げるはずだから、できればその様子が見ておきたかったのと、彼らは引きあげぎわに短筒を二発までぶっ放している。御府内で発砲は禁じられているのだから、たぶんもう町方の者が駆けつけているはずだ。もし駆けつけていないとすれば、お役怠慢で、そんな町方は治安のたよりにはならない。

――ひょっとすると清川一馬に会えるかもしれないぞ。

清川は鷲尾屋敷の秘密をよく知っているのだから、度胸さえあればこの事件に手をつけないはずはないのだ。それは昨夜殺された上役渡辺源太夫の弔い合戦でもあり、大きくいえば江戸の治安をあずかる南北両奉行のおひざもとで、鷲尾党だの黒住党だのという奇っ怪な徒党が勝手なまねをしてのさばっているということは、奉行所の大きな恥辱になることなのだ。

そんなことを考えながら佐久間町河岸へ出てくると、ここはもうひっそりとして人影ひとつ見えないようである。あいにく曇り空になって、視界はそう遠くまではきかないが、神田川をこいでいる舟さえ見あたらない。

風のごとくきて風のごとく去る、さすがに黒住党だなあと、新三郎は思わず苦笑した。

川上一町あまりのところに鷲尾屋敷の裏木戸があって、平吉の話ではここは今夜北野周平が采配（さいはい）をとってかためるということだが、そっちもひっそりとしているようだ。

これは、おそらく大倉玄蕃が短筒の音を耳にして、町方の目を恐れ、急に北野組を屋敷内へ引きあげさせたのだろう。

――玄蕃というやつは、さすがにくせ者らしいな。

その玄蕃が兄新兵衛の敵なのだから、新三郎はいよいよ闘志がわいてくる。

新三郎は大胆にも鷲尾屋敷の裏木戸のほうへ歩いてみることにした。

――はてな。

なるべく川っぷちのほうをゆっくりと歩きながら、新三郎はなんとなく尾行がついているような気がしてきた。無論、振りかえってみるような愚はしない。

そして、ああそうかと思った。町中で剣戟ざたに及べば公儀の目がうるさい。今夜は尾行作戦で巣をつきとめる手段に出たのだ。

すると、伊太吉にも平吉にもひもがついているはずだが、はたして気がついているかどうか、ちょっとそれが心配になる。

鷲尾屋敷の塀にかかろうとする東の路地口まできてくると、さっき伊太吉と乗って神田川をわたった小舟が、そこにそのままつないであった。

ぶらぶらと裏木戸の前を通りすぎたが、邸内はまったくしいんとしている。

——送りおおかみがついているんでは、うっかり家へも帰れない。

平永町の浪宅はねぐらだけのことで、たとえ敵に知れたところで大したことはないが、家主の下総屋夫婦に迷惑がかかっては気の毒である。

だから、わざと和泉橋はわたらずに、まっすぐ筋違橋のほうへ歩く。ここから急に道幅が広くなって、佐久間町一丁目へかかる。

まだ十足と歩かないうちに、そこの路地口から、覆面抜刀のくせ者が五人ばかり、ばらばらっとこっちへ飛び出してきた。

「何者っ」

とっさに新三郎は柄に手をかけて一喝したが、敵は物をもいわずに、

「えいっ」

先頭のやつがいきなり切ってかかる。相当鋭い切りこみだったが、

「おうっ」

新三郎は身を沈めるようにして、同時に火のような抜きうちをかける。その抜きうちのほうが一瞬早かったらしく、

「う、うっ」

胴を払われた敵は、そのままよろめきながら、どぶうんと神田川へ水しぶきをあげていた。

「うぬっ」

残る四人は、新三郎のあまりにもあざやかな太刀さばきに思わず足がとまって、剣陣を作る。新三郎は川を背にしているからうしろの心配はないが、もう口をきくだけのゆとりはない。覆面の中の四人の目は、あきらかに死に物狂いの光をおびて、ぎらぎらと不気味に血走っているのだ。

——玄蕃の刺客だな。

新三郎にはすぐ見当がついた。こっちは、さっき見張りのやつに、古賀新三郎とはっきり名乗っている。玄蕃ほどのやつだから、自分が切った新兵衛の弟だと見て、今のうちに返り討ちにしておこうという気になったのだろう。

場所も屋敷の近くでは具合いが悪いから、わざと和泉橋をすぎてからとめた。

いや、いまその和泉橋を数人で走ってくる足音が耳につく。むしろ、敵はこっちが和泉橋をわたると見て、そっちへ本隊を伏せておいたのかも知れぬ。

どっちにしても、今夜討っ手にえらばれたやつは、新三郎を討ちもらすと賞罰のきびしい玄蕃にどんな罰をうけないとはかぎらないので、死に物狂いにならざるをえないのだ。

——ぐずぐずしているとあぶない。

世の中に死に物狂いほど怖いものはないのだ。

新三郎は早くもそう気がついたので、いささかまだ四人がかたくなっているのを見すまし、

「えいっ、——とうっ」

その四人の真ん中へ、思いきって切りこみをかける。乱戦の場合は一刀を左右へたたきつけて出る以外に手はないのだ。

「わあっ」

「う、うっ」

中央の二人がこの大胆な切りこみに悲鳴をあ

げてのけぞる間に、新三郎は人家のほうへ飛びぬけて、くるりと二人の敵のほうへ向きなおる。

「うぬっ」

残る二人は、思わず二人とも一刀を大上段にふりかぶって、追いうちをかけようとしているところだ。

捨て身の敵二人に同時に切りこまれては、一度に二つの剣は払いのけきれない。

「えいっ、――とうっ」

新三郎は肉を切らせて骨を断つ戦法で、もう一度自分のほうから地獄の中へ切りこみをかけていった。

おなじ捨て身でも、多少狼狽しているのと、死中に活を求めようと必死になっているのとでは、剣の速度が違う。右のやつはたしかに切ったが、かえす二の太刀と、左のやつが切りおろしてくるのとはほとんど同時になった。

が、こっちは十分身を沈めて二の太刀をなぎ払っていたので、敵の太刀が左肩へきた時は、こっちは敵の高股へ深く切りつけていたのである。

「わあっ」

二人が前後してぶっ倒れていく間に、新三郎はさんばら髪になりながら、もとの川っぷちへ飛びぬけ、くるりと川を背にしていた。

「それっ、油断するな」

「敵は手ごわいぞ」

ちょうどこの時、橋をわたりきった敵は七人、剣陣を作ってずらりと新三郎を半円形に包囲してくる。

――こんどは助からねえかな。

度胸のいい新三郎も、一瞬、人ごとのようにそう思った。左肩の傷はかすり傷だとは思うが、血が背中へ流れていくのがわかる。

――よし、こんどは逃げられるだけ逃げてみろ。

そう決心したのと、

「えいっ、――とうっ」

例の切りこみをこんどは左翼のほうへかけていったのと同時だった。

左翼の敵はまだその位置についたばかりで、まさかと思っていたのだろう。

「あっ」

「うぬっ」

愕然として刀をふりまわそうとする間に、二人とも胴と腰へ一太刀あびせられて、一人は川へ、一人はどっとそこへしりもちをつく間に、新三郎はだっと筋違橋のほうへ足にまかせて走り出した。

「それっ、逃がすな」

「追え、追え」

残る五人がいっせいに追いかけてくる。

距離にしてわずかに六、七間ほどだろうか。

いつもの新三郎なら足に十分自信があるのだが、いまの乱闘でさすがに息をつかいすぎているらしく、これ以上走ると、こんど追いつかれて戦う段になって息がつづかなくなるおそれがある。

――しょうがねえ、乗るか反るか、もう一度やっつけるか。

気持ちは案外冷静でそう決心しかけた時、

「古賀さん、こっちだ」

ふいに横町から声がかかって、ちらっと御用ぢょうちんが目についた。

「ありがとう」

夢中でその横町へ走りこんだのと、

「御用だ」

「御用だ」

御用ぢょうちんが二つ三つ、人数にすれば六、七人がばらばらっと河岸通りへ飛び出していったのと同時だ。

――あの声はたしかに清川だった。

そう気がついたとたん、おれもあわてていやがる、早くどこかの路地へ飛びこんでしまえば、おなじ逃げるにしてもずっと楽だったんだと気がついて、新三郎はわれながら苦笑してしまっ

た。
　そのかわり、こんどは目についた左の路地へ遠慮なく飛びこむ。そして、走るのをやめた。
　ひどい目にあったもんだ。
　まだどこから敵が飛び出すかわからないので、早く息をととのえておく必要がある。刀を鞘におさめる気にもなれない。
　曲がり角を十分注意しながら、路地から路地を二つ三つ曲がってくるうちに、ふっと左がわが黒板塀になってきた。
　——はてな。
　これは今朝見た京屋の塀のようだがと思いながら、その塀にそって足音をしのばせながら進んでいくと、案の定、右手にお嬢行者の門が見えてきた。
　——こりゃいかん。
　このまま歩いていくと、八百富の横をぬけて、また河岸っぷちの往来へ出てしまう。
　清川がうまくあそこで追っ手を追いかえしてくれていれば心配はないが、今夜の鷲尾党は玄蕃から古賀新三郎を返り討ちにしろと命じられているのだろうから、あのほかにも追っ手が出ていないとはかぎらない。
　とにかく様子を見るつもりで、八百富の台所口の前を通りぬけて、そっと路地の出口まで行ってみた。とたんに、
「それっ、逃げた」
「あっ、逃がすな」
　という声がすぐ近くで聞こえ、ばたばたとこの路地へ逃げこんできたやつがある。

4

　あまりにもふいだったので、新三郎は身をかわしきれずに、逃げてきたやつをどすんと胸でうけていた。
「あっ、古賀さん」
「おお、平吉」
　黒装束の平吉は、頭巾をはがれ、しかも両手

をうしろ手にしばられているようだ。
「逃げろ、平吉」
　とっさに一切を読みとった新三郎は、平吉のなわをといてやっている暇はなく、すっと路地口から一歩往来へ出た。
「あっ」
　平吉を追ってきたのは三人で、これは覆面はかぶっていない。
「だれだ、貴公は」
　こっちはさんばら髪で、しかも抜き身をさげているのだから、追ってきた三人はぎょっとしてそこへ棒立ちになる。
「そういうあなたがたは——」
「我々は尼崎藩の者だが、そこをどいてくれ。いま不埒を働いた下郎をなわつきにしてつれていく途中、その路地へ逃げこまれてしまったんだ」
「すると、貴公たちは鷲尾党の連中だな」
　新三郎はわざとわかりきったことを聞く。
「なにっ」
　図星をさされて、三人は思わずちらっと顔を見あわせている。
「一体、貴公はだれだ」
「浪人古賀新三郎、といっても、貴公たちは今夜国もとから着いたばかりだからおわかりにはなるまい。屋敷へ帰って玄蕃さんに聞いてみるがいい」
「貴公、平吉の味方だな」
「そんなことは知らんなあ」
「かまわん、たたっ切れ」
　一人が叫んで、三人いっしょに抜刀した。
「そんなまねをすると、おれのほうでも遠慮なく切るぞ」
　新三郎はとっさに抜刀を青眼にとってやりかえす。
「うぬっ、許さん」
　三人の顔にむらむらっと殺気があらわれたのを見てとった新三郎は、
「えいっ、——とうっ」

機先を制して、一気に切って出た。
　こっちはさっきからの戦闘のつづきで十分気合いがこもっている。敵は三人、まさか新三郎がそんな大胆なまねをするとは思ってもいなかったのだろう。
「わあっ」
「うぬっ」
　夢中で刀をふりまわした時には、もう左右の二人が手負いになってのけぞり、新三郎は川っぷちまで飛びぬけて、くるりと残る一人のほうへ向きなおる。
　それを追うように、その一人が、
「とうっ」
　上段から切りおろしてきたのである。三人の中ではこの男がいちばん腕の立つやつだったらしく、新三郎はあやうく真二つにされるところだったが、
「おうっ」
　その必殺の一刀を、間一髪、下から右の片手で思いきり跳ねあげた。戛然（かつぜん）と火花が散った時には、ひらりと新三郎は左へ飛び、敵は勢いあまって、
「しまった」
　と口走りながら、自分から川の中へどぶうんと飛びこんでいた。
「おい、どうしたあ」
　筋違橋のほうから二人ばかり、この乱闘の音を聞きつけて、一散に走ってくるようだ。
　新三郎は素早く八百富の路地へ逃げこむ。
「古賀さん、こっちだ」
　いつの間になわをといたか、そこに平吉が待っていて、手をとらんばかりに先に立ち、お嬢行者の門の前までくると、
「ここをしばらく借りやしょう」
　と、そっと戸をあけて中へ入る。
　つづいて新三郎が入ると、平吉はいそいで戸をしめて、かぎをかけてしまう。
「黙ってこんなことをして、悪くないのか」

「しっ」
　八百富のほうからこっちへ、ばたばたと駆けこんでくる足音がする。
「たしかにこの路地だ」
「畜生、まだそう遠くへ行っていないはずだ」
「あの二人は大丈夫かなあ」
　そんなことを話しあいながら、どんどん通りすぎていく。
「だんな、やられたね」
　血のにおいがするのだろう、平吉はしゃがんでいる新三郎の肩をなでまわしながら、
「こいつはいけねえ、血が出ている」
　と、左の肩を手ぬぐいでしっかりおさえてくれる。
「そいつはさっきの傷だ。大したことはないはずだ」
　しかし、まだ血がとまらないとすると、そうかすり傷ではないかも知れぬ。そういえば、帯の上あたりが血でぐっしょりぬれているようだ。
「もう少しの辛抱だ。我慢しておくんなせえ」
「なあに、大したことはない」
「しっ」
　向こうからまた走ってくる足音がする。
「そっちへ出ないとすると、どうしてもこの路地の中だな」
「無論、どこかへかくれているんだろうが、手負いの始末のほうが先だ」
「敵が古賀だとすると、油断は禁物だぞ」
「そうか、そんなに強いのか」
「向こうで七人、こっちが三人だとすると、十人やられている。幸い死んだやつはないようだが、半分は重傷だそうだ」
　人数は四人になったらしく、八百富のほうへ走り去っていく。
　平吉は黙って自分の腹にまいている晒（さらし）をときはじめた。そして、新三郎の両肌（はだ）をぬがせ、傷口にたたんだ手ぬぐいをあてて、たすきでもか

けるようにぐるぐると傷口を力いっぱいまきつける。
「そうしめつけると、左の手がきかなくなるぞ」
「我慢なせえ。あんまり血を出しちまうと、それこそ命のほうがあぶなくなりまさ」
「そんなに大した傷のようには思えないんだがなあ」
「傷は大したことはありやせんがね、血だけはとめておかなくちゃいけねえ、気持ちはなんともありやせんか」
「うむ、なんともない——どうだ、もう敵もこないようだから、そろそろ出かけてみようか」
「まあ、もう少し待ってみましょう。あっしはうっかり大通りへ出ようとして、花房町の角でいきなりうしろから組みつかれちまいましてね、だんなのおかげで命びろいをしたようなものの、今夜の玄蕃は手くばりはさすがにすごいようです」
「伊太吉は大丈夫かなあ」
新三郎は急にそれが心配になってくる。
「兄貴は大丈夫だろうと思いやす」
「そうか、そんならいいが、——はじめわしには尾行がついていたようだ。だから、今夜は尾行戦術かなと思って、和泉橋のたもとを通りすぎたとたん、覆面の刺客が五人出てきて、いきなり切りかかってきたんだ」
「あっしも後で考えてまずいことをしたと思ったんでさ。江戸詰めのやつらはだんなを古賀新三郎さんだと知っている。それが玄蕃にわかれば、よし、返り討ちにしてやろうという気になるにきまっていやすからね」
伊太吉の兄弟分だけあって、平吉はなんでもよく知っているようだ。
「わしもいい気なもんで、あの北の角で見張りにつかまった時、うっかり堂々とおれは浪人古賀新三郎と名乗ってしまったんだ」
「あれあれ、そいつは少しごていねいすぎやしたねえ」

「そこで覆面の刺客ということになったんだろうが、幸い八丁堀の清川さんが見まわりにきたのに出会った。そうなると覆面組は不利になる」
「よくしたもんですねえ、覆面のまま、まさか尼崎の家来だとは名乗れない。こいつは逃げる一手しかありやせんや」
「平吉うじ、そろそろ出かけよう。無断で人の家の門の中を借りて、長居をしては悪いからな」
新三郎は気がついて平吉をうながす。
「そうですねえ。けど、だんな、歩けやすか」
「うむ、大丈夫だ」
その実、じっとしていると、なんとなく眠気がさしてくるのだ。
平吉にもそれがわかったらしく、
「じゃ、だんな、出かけやしょう」
と、右の腕をつかんで立ちあがる。
新三郎は軽い目まいを感じて、残念ながら全身から力がぬけているようだ。
「もし——」
この時、玄関わきの切り戸があいて、老女が声をかけてきた。
「へえ、すんません、勝手に押しかけやして——」
平吉がいそいで言い訳をする。
「いいえ、おけがのようですから、こちらへお入りになって、しばらくお休みなさいまし」
「いや、わしはこんな血だらけなかっこうになっているから——」
新三郎は遠慮しようとした。
「あなたさまは今朝おみえになった方でございますね」
老女はじっと顔を見ながらいう。
「はあ、お薬という娘の供をしておじゃまにあがりました」
「それならまんざら縁のないお方ではございません。とにかく、お薬をさしあげますから、お入りなさいまし」
「だんな、せっかくああいってくださるんだか

ら、お言葉に甘えることにしましょうや」
そばから平吉もそうすすめる。
「そうか。では、そうさせてもらおうか」
正直にいえば、表へ出るのはまだあぶない。しかも、こんど敵にかこまれると、もうこっちの体力がつづきそうもないのだ。
老女に案内されて切り戸から入り、南の庭へまわると、狭い庭の突きあたりに母屋とかぎ形になってつづく離れがあって、そこの雨戸が一枚あいているらしく、灯がもれている。
「さあ、どうぞ御遠慮なくおあがりくださいまし。いまお薬をさしあげます」
老女はそういって、母屋のほうへ小走りに入っていく。
新三郎はどろ足袋を平吉にぬがせてもらい、廊下へあがったが、灯の光でみると、返り血と自分の傷の血とで、体中血だらけになっているようだ。
「こりゃひどい。これじゃ座敷へは入れない」
我ながら苦笑して、廊下へ座ってしまう。
「ずいぶん勇ましくやったもんですねえ、だんな」
平吉はいまさらのように感心しているようだ。
そこへ、老女が印籠と白湯とを盆にのせて、運んできてくれた。
「これはよく効く気つけ薬だと聞いております」
老女は手早く印籠から金色の小さい丸薬を五粒ほど取り出して自分の手のひらにのせ、
「失礼ですが、お口へ入れてあげますから、よくかんで、白湯でおのみなさいまし」
と、口の中へ入れてくれる。
「かたじけない」
いわれるままに丸薬をかみくだくと、なんともいえぬ芳香が口中いっぱいにひろがって、気のせいかたちまち眠気が消えていくようだ。
「あなた、ちょっと手をかしてください」

「へえ」
老女は平吉をつれてふたたび母屋のほうへ引きかえしていく。
――そうだ。ここにはめくらのお嬢行者がいるはずだ。どこに寝ているんだろう。
新三郎はふっと今朝見たお嬢行者の神がかった品のいい振りそで姿を思い出しながら、丹念に一粒ずつ妙薬を歯でかんでいく。

姥お多福

1

翌朝――。
鷲尾軍兵衛は、朝飯がすむとすぐ、茶室の大倉玄蕃に呼ばれた。玄蕃は茶室が気に入って、昨夜からそこを自分の居間にしている。
「若だんな、きっとゆうべのお小言にちがいありません。どうぞお口ぞえをたのみます」
腰ぎんちゃくの大森金蔵が青い顔をしてたのむ。大森は昨夜、裏庭の大将をつとめ、黒住党を一人もつかまえずに逃がした上、中間平吉に一杯くわされて、その相棒らしい一人と、古賀新三郎の三人まで、うまく逃げられてしまっている。賞罰のきびしい玄蕃だから、ひょっとすると打ち首にされるかもしれない。昨夜はそれが心配で、ろくに眠れなかったのだ。
「ついでに、若だんな、わしのこともおたのみいたします」
北野周平がそこへ両手をついた。
北野は裏木戸外の大将をつとめて、古賀新三郎を一度はうまく和泉橋で取りまいたが、もう少しというところで切りぬけられてしまったのだ。しかも、味方にだいぶけが人を出しているので、これも罰はまぬがれない。
「いや、わしだってゆうべは失敗しているんだ。人のわびどころじゃないかも知れないが、おまえたちの話が出るようだったら、なんとかとり

なしておいてやる」
　軍兵衛は浮かぬ顔をして、居間の廊下から庭下駄をはいた。
　とにかく、昨夜は散々の失敗で、黒住党の船の後をつけたやつは途中でまかれ、一度つかまえた中間平吉には逃げられてしまうし、古賀ももう一人のやつも、どこへ逃げてしまったのか、その行方さえ見当がつかないのだ。
　到底叔父玄蕃の小言はまぬがれないと思うと、軍兵衛はさすがに胸も足も重い。
「叔父上、お早うございます」
「うむ」
　玄蕃は六畳の間のほうで一人で茶を喫していた。その庭へ目をやっているきびしい顔はいつものことで、怒っているのか普通なのか、ただ見ただけではわからない。
「どうぞ――」
　小姓姿の若菜が茶をいれてきて軍兵衛の前へおくと、そのまましとやかに三畳の茶室のほうへ下がっていった。ちょっとうらやましいような美貌である。
「軍兵衛、ゆうべのけが人は何人だ」
　玄蕃は静かに茶碗を下へおきながら、鷲のような目をこっちへ向けた。目は鋭いが、声音は案外におだやかである。
「みんなで十二人です。江戸詰め組が十人、国もと組が二人、重傷者が三人ほどいますが、命には別条ないそうです」
「その十二人は古賀新三郎が一人で切ったそうだな」
「はい、そのかわり古賀も相当手を負っているそうです」
「どこで古賀を見失ったか、わかっているのか」
「はあ、和泉橋の向こうで、北野の組はもう一歩というところまで古賀を追いつめましたが、あいにく臨時回りの清川一馬の御用ぢょうちんにさまたげられました。それからはこっちもみんな頭巾をぬぐことにして、花房町の角に網を

張っていた二郎次の組が中間平吉をつかまえ、縛ってつれてかえる途中、京屋の角で逃げられたそうです。その角からまた古賀が飛び出してきて、二人を切り、一人はいきおいあまって自分から神田川へ飛びこんで、その気配で二郎次が一人をつれて駆けつけたが、その間に古賀はもとの路地へ逃げこんだ、それっきりいくらさがしても、古賀も平吉も行方がわからなかったそうです」
「そちは江戸へ出てきてからもう二月あまりになる。その辺の地理はすっかり調べてあるはずだが」
「はい、大体はわかっています」
「あの路地は京屋と八百富との間で、一方は京屋の塀、一方にしもた家が六、七軒、その京屋の塀のつきあたりまではどっちも路地はない。そのあたりで古賀も平吉も消えているのだ」
「なるほど――」
「すると、どういうことになるな」
「つまり、二人は京屋の塀をのりこえて逃げたか、その前のしもた家のどれかへ救いを求めてかくれているか、どっちかということになるんです」
「古賀は手負いだ。塀を乗りこえればその塀に血がついている」
「なるほど――」
「そちはまだあの辺のことを少しも調べていないようだな」
　玄蕃の鋭い目がじっと見すえてくる。身内の軍兵衛だからどうにかそれに耐えていられるが、ほかの者では青くなって一も二もなく恐れ入ってしまうところだろう。
「軍兵衛、もう少し苦労をせぬと、そちはおやじどのの跡はつげぬぞ」
　しようのないやつだといいたげな苦わらいが玄蕃の顔にちらっとうかぶ。
「叔父上、わしはこれから行って、もう一度あの路地を調べてきます」

若い軍兵衛はむきになって立ちあがろうとする。
「まあ待て――。ただ調べに行ってもむだだ」
「そうでしょうかなあ」
「天野屋の一味、つまり天狗党のかくれ家は、この屋敷からそう遠くないところにあるはずだと、ゆうべもわしはいっておいた。古賀はあの時の牢番新三郎の弟、平吉ともう一人は天野屋の一味、これくらいのことはそちにもわかっているだろう」
「それはわかっています」
「その三人のうち、二人まであの路地で消えたとすれば、あの路地の中に一味のかくれ家があると見ていい」
「なるほど――」
「あの路地の八百富の裏に、めくらの娘が老婆と二人きりで住んでいて、表向き看板は出していないが、人の吉凶を予言し、運勢をあてて、よくあたるからだいぶ客がついているそうだ。近所ではお嬢行者といっているが、娘の名は小浪(こなみ)、老婆は娘の乳母でお浜、死んだ親どもは西国浪人ということになっている。存じているかな」
「はあ、そんな娘の行者がいるということは聞いています。しかし、叔父上はゆうべ江戸へお着きになったばかりなのに、もうそんなくわしいことまでさぐっているんですか」
軍兵衛はいささかあっけにとられた形である。
「天野屋の娘千鳥は今年十八になるはずだぞ、なぜその娘を一応は千鳥ではないかと疑ってみないのだ」
「しかし、お嬢行者はめくらだというし、千鳥ならまさか乳母と二人きりで住んでいるということはないでしょうからな」
「そちはそのお嬢行者になにか占ってもらったことがあるのか」
「いや、ありません。わしはそんな神仏のお告

げなどということは信じないほうなんです」
「その娘を一度も見ないで、どうして千鳥ではないといいきれるんだね」
あっと軍兵衛は思わず目をみはる。
「そちは天野屋の一族、特に千鳥をさがしにわざわざ江戸へ出てきているはずだぞ」
「しかし、千鳥が巫女(みこ)のまねなんかするでしょうかなあ。おまけにめくらだというし」
「世をしのぶためには作りめくらということもある。たった二人きりで住んでいても、一族の者が近所から始終守っていることもできる。まずその娘を自分の目で見て、その家へ出入りする人間に尾行をつけてみる、どうしてそのくらいの思慮がつかぬのかなあ。たとえそれがむだであっても、そういうむだをいくつも重ねていくのがそちたちの仕事ではないのか」
そういわれてみると、まったく一言もない軍兵衛だった。
「叔父上、これからすぐ行ってみます」
「北野と大森をつれていくがよい。あの二人もなにか仕事をしなくては、わしの前へ出られぬはずだ」
「そうです、二人にもこんどはきっと手柄を立てさせます」
「よいか、軍兵衛、わしが出府したからといって、わしばかりをたよりにせず、そちはそちで大いに頭を働かせてみるのだ。しっかりやってきなさい」
「はい、そうします」
いまにみろと、軍兵衛は思った。
しかし、お嬢行者を見のがしていたのは、たしかに迂闊(うかつ)だったかも知れぬ。ことによると、古賀と平吉の行方も、その辺からわかってくるかもしれないのだ。
「おい、金蔵、周平、すぐに出発だ」
軍兵衛は母屋へ帰ってくるなり、わざと気難しい顔をして、おどかすようにいった。
「どこへ行くんです、若だんな」

「黒住党のかくれ家へ三人でこれから切りこめという軍師の厳命なんだ」
「なんですって——」
「黒住党のかくれ家がわかったんですか」
　案の定、二人の顔からさっと血の気がひく。
「うむ、わかったんだ。さあ、出かけよう。話は歩きながらでもできる」
「それはまあそうですがね」
　大森と北野は顔を見あわせながら、なんとなく立ちかねているようだ。
「おい、早くしないと、いよいよ罪が重くなるぞ。今朝の軍師はやけにふきげんだからな」
　軍兵衛は先に立って、もうどんどん内玄関のほうへ出ていく。
　大森と北野は観念したように、悄然（しょうぜん）と後からついてきた。
　軍兵衛は通用門から表へ出るまで、わざと一言も口はきかなかった。
「若だんな、こんな真っ昼間、三人で切りこんで大丈夫なんでしょうかね」
　大森金蔵がたまりかねたように、うしろからおずおずと声をかけてくる。
「二人ともわしの両側へならべ。わけを話してやる」
「お願いします」
「えらいことになったもんですなあ、若だんな」
　大森は右、北野は左へ肩をならべてきながら、ため息をついていた。
「まあ、安心しろ。実はな、わしが軍師にあやまって、やっと別の仕事にかえてもらったんだ」
「というと、どんな仕事なんです」
「二人とも八百富の裏のお嬢行者の話は聞いているだろう」
「それは聞いています」
「軍師は、そこへ客に化けていって、それとなく古賀と平吉の行方についておうかがいを立ててもらってこいというんだ」
「本当ですか」

　大森がいそいで念を押す。
「おめえたちにおれがうそをいったってはじまらねえじゃねえか」
「それはそうです。我々二人は若だんなに忠誠を誓っているお相手役ですからな」
　北野がほっとしたようにいう。
「周平、その言葉を忘れるなよ」
　すかさず軍兵衛は言質をとっておくことを忘れない。
「無論です。我々は若だんなあっての我々なんですからな。しかし、黒住党のかくれ家へ切りこむのがお嬢行者におうかがい立てる仕事にかわったのは、あんまり話がうますぎやしませんかな」
　大森はまだ本当にできないような口ぶりだ。
「金蔵、おめえこの仕事を少し楽すぎると考えているようだな」
「そりゃ、化け物のよう忍者を相手にするより、とにかく相手は娘っ子なんだから、お嬢行者におうかがいを立てるほうがずっと楽じゃありませんかなあ」
「金蔵、もどり橋じゃないが、もしそのお嬢行者がふいに鬼女に化けたら、おめえどうする」
「なんですって——」
「軍師はな、そのお嬢行者は、ことによると天狗党の千鳥かも知れないから、三人で行って試してこいといっているんだ」
「なるほど。そういえば、ゆうべ古賀も平吉もあの路地で姿を消していますな」
　北野の顔色がたちまち緊張してくる。
「それが本当に千鳥なら、我々は天狗党に取りかこまれる覚悟をしなけりゃならない。つまり、黒住党のかくれ家へ切りこむよりもっとあぶない目にあわされることになるんだ。そうだろう」
　軍兵衛は声をひそめて、大森のほうをじろりと見る。
「しかし、お嬢行者はめくらだっていいますぜ」
「世をしのぶために作りめくらになる例は、い

くらもある」
　軍兵衛がちょいと玄蕃の口まねをしてみると、大森はもうかえす言葉もなく、またしても顔色が少し変わってきたようだ。
　道は和泉橋通りへ突き当たって左へ折れ、橋たもとを左へ川っぷちの往来をしばらく行くと、やがて京屋の黒板塀が見えてくる。

2

　軍兵衛は金蔵と周平をおどかすような口をきいているうちに、自分もまたなんとなく、こいつ冗談ごとじゃないぞというような気がしてきた。事実、もし天狗党の中へ飛びこんでいくのだとすれば、三人きりではおそらく無事にかえれそうもないことになる。
　が、いまさらもう一度屋敷へ引きかえすというわけにもいかない。
「おい、二人ともそんな怖い顔をしていくと玄関払いをくわされるぞ。とにかく、向こうは女二人きりで住んでいることになっているんだからな」
「心得た」
　八百富の路地へ入ると、すぐその裏がお嬢行者の家の門になっていて、門の前は今朝もきれいに掃き清められ、打ち水までしてある。
　――いいか。
　軍兵衛は二人に目くばせしておいて、門の戸をあけ、玄関の格子の外へ立って、
「たのうむ」
と、奥へ声をかけてみた。
　家の中はひっそりとして、物音ひとつしない。
「たのうむ」
　軍兵衛はもう一度声をかけて、かまわずがらがらと格子をあける。
　とたんに目の前の障子が静かにあいて、
「おいでなさいませ。どなたさまでございましょうか」
と、そこへ三つ指をついたのは、切り髪姿の

品のいい、五十ばかりの老婦人である。これがお嬢行者の乳母なのだろう。
「主家の名ははばかりあるので失礼させていただくが、拙者は芦谷君太郎と申す者、主家の大事について、ぜひ行者どのにおうかがいを立てていただきたい儀があっておたずねいたした」
　軍兵衛にしては至極丁重に下から出る。
「さあ、せっかくでございますが、お嬢さまは行者の修業をしたというわけではなく、お目が御不自由なので、なぐさみに自然とそういうことをおぼえたとでも申しましょうか、とてもお武家さまがたのおうかがいを立てるなどということはできかねます。失礼があってからでは取りかえしがつきませんので、おことわりさせていただきます」
　乳母ははっきりと、筋のとおったことわり方をする。
「いや、こちらの行者どのが、それを稼業にしているのではなく、ただ慈悲の心から諸人の相談相手になっているのだということは承知の上でまいっているので、我々は決して無理や失礼なことはいわぬ。ただ、主家のためにおうかがいを立てていただければ、たとえどんなお告げがあろうとも、黙って引きさがります。ぜひ一度取り次いでみていただけまいか」
　軍兵衛は神妙な顔をして、あくまでも食いさがっていく。
「それほどおっしゃってくださるのでしたら、お嬢さまがなんと申しますか、一度うかがってまいります。しばらくお待ちくださいませ」
　乳母はていねいにおじぎをして、そこから左手に見える二階の階段をあがっていった。
　気がついてみると、どこからともなく奥ゆかしい香のにおいがほのかにただよってくる。乳母と二人きりの暮らしだと聞いてきたが、ひっそりとして本当にほかにはだれもいないようだ。

「あの乳母は武家の出ですな、若だんな」
大森がそっとささやく。
「うむ、品よくかまえているが、なかなかしっかりしている。若いころは美人だったぜ、きっと」
そう答えたのは北野である。
まもなく乳母が二階からおりてきて、
「お目にかかりますそうです。どうぞおあがりくださいませ」
と、少しもこっちを疑っているような様子はない。
「かたじけない。失礼します」
軍兵衛は二人をうながして、二階へあがっていった。
そこの障子の前へひざまずいて、
「失礼いたす」
と、軍兵衛が声をかけると、
「どうぞお入りなさいませ」
と、中から娘らしい声がこたえる。
障子をあけて中へ入りながら、軍兵衛はなるほどと目をみはった。そこは八畳の間で、正面からやや右よりに違いだなのほうを背にして座っているのは振りそで姿の若い娘で、両方の目に白い目おおいをしているが、色の白い美しげな顔形だ。なによりもそののびのびとした体つきにつつましやかな若さがにおいあふれているのが、ひどく男心をひく。
金蔵も周平もあっと息をのんでいるようだ。
いちばん後から乳母が入ってきて、行者のそばへ座った。
「お嬢さま、芦谷さまとおっしゃる方でございます」
乳母の言葉に引きつづいて、
「拙者は芦谷君太郎です。主家の名は失礼させていただくが、よろしくお願い申す」
と、軍兵衛は軽く会釈する。
「なにをおうかがいなさりたいのでございます」

お嬢行者は絶えず伏し目になったまま静かに聞く。どこかに冷たさのある声音だ。
「昨夜、主家へくせ者が三人忍びこみまして、残念ながら三人とも取り逃がしました。一人はたしかに手負いになっているはずですが、どっちをさがせばつかまえることができるか、おうかがいを立てていただきたい」
軍兵衛の目は、それとなくお嬢行者の一挙一動を見のがすまいと、体中をにらんでいる。
「昨夜のくせ者は三人だけでございますか」
しばらく考えてから、お嬢行者はそのままの姿勢で聞く。
軍兵衛のうしろに控えている周平と金蔵は、またしてもあっと顔を見あわせているようだ。
「いや、ほかに五人、別のくせ者が忍びこんでいましたが、これはおよそ我々にも見当がついているのです」
軍兵衛はすかさずいいぬける。
「五人ではなくて、あたくしには黒い影が六人に見えます」
そうだった。黒住鬼堂はいきなり茶室へあらわれたそうだから、実際には六人になる。軍兵衛もちょっと不意を突かれた形だが、さりげなく、
「あるいはそうだったかも知れません、なにぶん我々は相当あわてていたもんだから」
と、苦わらいをする。
「三人のくせ者は、おさがしにならなくても、そのうちにまたあなたがたの前へ、自分から出てくるようです」
「なるほど――」
これはよく事情を知っている者でなければいえない言葉なのだ。
「一体、その三人の目的はなんでしょうか」
「怨恨のように思えます。なにかお心あたりはございませんか」
「さあ。なにぶん主家のことで、大名がうらまれるとすれば、百姓どもでしょうかなあ」

軍兵衛は一応空っとぼけてみせる。
行者は伏し目になったまま答えない。その体つきのどこかに、気のせいか、うそをいってもちゃんと知っていますと、内心冷笑しているような驕慢（きょうまん）さが感じられる。
「どうでしょう、その三人はつかまるでしょうか」
「それは申しあげられません。申しあげないほうがよいと思います」
お嬢行者の声音は今までと少しもかわらないのだが、軍兵衛にはそれがひどく皮肉に耳へ突き刺さってきた。
「それはどういう意味なんでしょうな。わからないからいえないというのか、それとも、わかってはいるがなにかの事情で口にしかねるというのか」
「あたくしより芦谷さまのほうが、事情はよく御存じのはずです」
「では、行者どの、これだけはお答え願いたい。くせ者との勝負はどっちが勝つでしょう」
「それも申しあげないほうがよいと思います。ただ申しあげられることは、御信心をお忘れにならないようにということだけでございます」
「なにを信心しろといわれるのです」
行者は答えない。
「すると、つまり、信心をしないと我々のほうがくせ者に負けるということですか」
「負け勝ちは人の世のことでございます。信心は後生のためにするもので、この世の因果はすでにきまっていますから、人の力ではどうすることもできません」
「そんな風にいわれると、余計気になりますな。それをはっきりいうと、どういうことになるんです」
軍兵衛はそろそろずぶとい面構えになってきた。ここにいるのはたかが女二人、いまに仮面をはいでやるぞという腹がある。

「はっきり申しあげますと、人は因果をまぬがれることはできないということです」
「すると、行者どのはどういう因果で盲になられたんです」
「芦谷さま、そのような罪なことをお口になさるものではございません。――もう御用もおすみのようですから、どうぞお引きとりくださいませ」
乳母がそばから落ち着いた声でそれとなくたしなめる。
「いや、失礼だが、お乳母どの、我々はいま行者どのから、おまえたちはこの世の因果で、くせ者に勝てない、切られて死ぬぞと宣告されたもおなじことなんだ。そんなことをいわれたんじゃ、だれだって気持ちが悪くて、そのままじゃ帰れないじゃないか」
「いいえ、お嬢さまの申しましたことが全部当たっているということもいえません。お嬢さまのは、さきほども申しあげましたとおり、ほんの素人のおなぐさみにやっていることなので、もしお気にさわるようなことがございましたら、別の本当の行者さまをおたずねになって、お気持ちを晴らしていただきとうございます」
乳母はわびるように頭をさげる。
「無論、素人は承知の上できたんだが、あるうわさによると、行者どのは本当のめくらではなく、世をしのぶために作りめくらになって、もっともらしく構え、金もうけをしているんだと聞いてもいる。どうだろうな、お乳母どの、そんな世間の疑いを晴らすためにも、我々の前でその目おおいを取って見せてもらいたい。それできれいに手を打とうじゃないか」
軍兵衛は無理を承知でそんな難題を持ちかける。
「そんな無理をおっしゃっては困ります。どうぞ穏便にお引きとりくださいませ」
「いいや、無理でもあろうが、わしも一度いいだしたことだ。ぜひ行者どのの目を見ないかぎり、

ここは動かぬ。どうせない命と行者どのにいわれているんだ。こうなれば男の意地だからな、お乳母どの」
　もうふてぶてしさをかくそうとはしない軍兵衛だ。

3

「そんなにあたくしの目がごらんになりたければ、お見せいたします」
　お嬢行者の小浪は静かな声でいった。
「よろしい、とくとこれにて拝見いたす」
　この娘が目おおいを取ったらどんな顔になるだろうと、半分は好奇心もあるから、軍兵衛は正面を切って座りなおす。
「ただ一つ、おことわりをしておきます」
「おことわりとは、その目を見たらおとなしく帰ってくれという条件ですかな」
　軍兵衛は冷やかすように先まわりをする。
「いいえ、あなたがたはそれでおとなしく引きあげるような方々ではないようです」
「よくわかりますなあ。――それで」
「人の因果をあばけば、御自分もいつかはその因果をうけなければなりません。お気をつけなさいますようにと申し上げておきたかったのでございます」
「つまり、あんたのめくらの目を無理に見ると、わしもいつかはめくらになるということかね」
「はい」
　そんな子供だましのような手にのるものかと、軍兵衛は内心せせらわらいながら、
「よろしい、無理は承知の上なんだから、そのくらいのことはわしも覚悟しよう」
　と平気でやりかえす。
「若だんな、そんなことをいって大丈夫なんですか」
　大森金蔵は少し心配になってきた。さっきからのお嬢行者の予言は、たしかに思いあたる節が多いだけに、こんなことで自分までめくらなんかにされちゃたまらないと思ったのである。
「金蔵、おまえめくらになりなくなかったら、下を向いていりゃいいじゃないか」
　軍兵衛はあくまでも強気だ。
「さあ、目を見せていただこうか、行者どの」
　乳母がうらめしそうに軍兵衛の横柄な顔を見ている。
　お嬢行者はうつむいたまま両手を耳へかけて、白い目おおいを外し、
「ごらんくださいませ」
　と、静かに顔をあげる。
「あっ」
　思わず声を出したのは、下を向いているはずの金蔵だった。
　障子にさしている明るい日ざしをうけて、お嬢行者の両方の目はひとみが不気味にどんよりと濁っている上に、右目のまわりに青痣（あおあざ）がくっきりとあらわれている。それは、目鼻立ちが人なみすぐれてととのっているだけに、痛々しいというよりはむしろすさまじい顔に見える。
　――こりゃ作りめくらじゃない。
　一目でそれとはっきりわかった軍兵衛は、その醜怪（しゅうかい）さについまゆをよせながら、
「たしかに拝見いたした。お気の毒ですなあ」
　と、心にもない同情をする。
「もうよろしゅうございますか」
「よろしい。おしまいください」
　行者はうつむいて、もとのように目おおいをかける。
「失礼ですが、その目は生まれつきですか」
「はい」
「お気の毒ですなあ」
　もう一度口さきだけでいいながら、待てよ、この娘は千鳥でないにしても、こんな化け物だから、ゆうべ古賀が手負いになって救いを求めてくれれば、案外親切にかくまう気になるかもしれないと、軍兵衛はふっと考えついた。
「お乳母どの、ゆうべこの路地はだいぶ騒がし

かったらしいな」

「そうでございましょうか」

乳母の返事は冷たい。

「本当のことをいってもらいたいな。我々はゆうべ古賀新三郎という浪人者と平吉という下郎をこの路地へ追いこんで、とうとう逃がしてしまっているんだ。平吉はともかくとして、古賀は手負いになっているんだから、そうは逃げられない。たしかにこの家へ逃げこんだにちがいないと、わざわざ教えてくれた者があるんだ。あんたがたは古賀をかくまっているんだろう」

「あなたさまは芦谷君太郎さまと申されましたね」

「うむ、わしは芦谷だ」

「芦谷さまはどうしてそう私どもにいいがかりばかりおつけになるのです」

「いや、いいがかりじゃない。ちゃんと古賀がここへ入ったのを見ている者があるんだ」

「そんなことはございません。もう御用はおすみになったのですからお帰りください」

たまりかねたように乳母はひらきなおる。

「あいにくそうはいかないんだ。どうせわしはそのうちに目がつぶれると、たった今、行者どのから宣告されているんだ。まだ目の見えるうちに、一通りこの家を家さがしさせてもらうから、そう思ってもらいたい」

軍兵衛は女たち二人を頭からのんでかかっている。

「乳母、とめてもむだです。好きにさせておきなさい」

お嬢行者はおだやかな中にもどこか毅然たるところがあるようだ。

「金蔵、周平、行者どののおゆるしが出た。いっしょにこい」

「はっ」

この座敷にも西がわに一間の押入はついているが、まさかいつも人の出入りの多いこんなところへかくまい人を入れておくはずはないと見たので、軍兵衛は北野と大森をつれて、どかどかと階下へおりてきた。

恐れをなしたか、乳母はついてこようともしない。

「若だんな、目は大丈夫でしょうかな」

大森はまだそれを気にしている。

「ばか、それどころじゃない。古賀はきっとこの家にかくれているんだ。油断するなよ」

もし、古賀なり平吉なりを見つけて、縛って帰るか、切って帰るか、いずれにせよ片をつけて帰れば、叔父玄蕃の前へ大威張りで出られると、軍兵衛は張り切っているのだ。

階段をおりたところが三畳の玄関の間で、玄関からあがって正面のふすまをあけると八畳の茶の間、右手の板戸をあけると台所だ。

軍兵衛は念のために台所のほうから入って、八畳の茶の間へ出た。そこの押入や戸だなをがらがらとあけてみたが、物がきちんと入れてあって、人の入れるすきはない。

そこから廊下へ出ると、右手に廊下はかぎ形になって、離れの一間があるようだ。しかも、そこだけがいわくありげに雨戸がしまったままになっている。

大体、この家は二階の一間、階下は玄関の三畳、いまの茶の間と、雨戸のしまっている離れの四間きりで、町中のことだから庭もねこの額ほどのほんの狭いものである。

「気をつけろ、あの離れが臭い」

軍兵衛は二人にささやいて、つかつかとそっちの廊下へ曲がり、いきなりがらっと障子を引きあけて、柄に手をかける。

が、そこは六畳の間で、正面に一間の床の間と押入とがならび、きれいに片づいていて、無論、人の気配さえしない。

「おかしいな」

軍兵衛はてっきりここが臭いと意気ごんでいただけに拍子ぬけがして、薄暗い座敷の中をじろじろと見まわす。残っているのはそこの押入

だけだが、もしそこにかくれている人間がいるとすれば、座敷になにかそれらしい形跡が残っているはずなのだ。しかし、そこには火ばち一つ、座布団もおいてない。

――すると、やっぱり二階の押入の中かな。

とにかく、念のためにここの押入を調べてから、もう一度二階へ引きかえす気で、がらりとそこのふすま戸をあけてみる。

「あっ」

とたんに白い粉のようなものがぱっと顔へ飛んできて、軍兵衛は思わず一足うしろへさがったが、同時に両眼に焼きつくような痛みを感じ、

「う、うっ、畜生――」

両手で目をおさえながら、どっとそこへしりもちをついた。

「どうしたんです、若だんな」

廊下に立っていた大森と北野は、ぎょっとしながら軍兵衛と押入を見くらべている。

「痛いっ。金蔵、周平、押入の中だ。たたっ切れっ。畜生、痛いっ。目の中が燃えているんだ。う、うっ」

軍兵衛は悲鳴をあげながら座敷中をころげまわりはじめる。

「どうしたんです、若だんな」

「おかしいなあ、押入の中にはだれもいないようだがなあ」

大森と北野は顔を見かわしながら、おそるおそる軍兵衛のそばへ寄ってきたが、なんのことか少しもわからない。

「ばかっ、押入をよく見ろ。う、うっ、畜生、粉だ。白い粉だ」

「白い粉がどうしたんですか」

「痛いっ、痛いっ、白い粉の目つぶしだ。たたっ切れっ。押入の中のやつをたたっ切れっ」

「若だんな、白い粉なんかどこにもついていませんがねえ」

「ばかっ、押入の中をよく見ろ」

「おかしいなあ」

二人はまたしても顔を見あわせながら、さすがに押入の中をのぞいてみるだけの度胸はない。遠くから北野がそっと戸のあいていないほうの押入をのぞいてみて、

「若だんな、押入の中にはだれもいませんがなあ」

と、いかにも調べてみたようなことをいう。

ふっと気のついた金蔵は、いきなり刀を抜いて、そっちの押入の中をふすま戸越しに、ずぶっずぶっと突き刺してみた。

上の手ごたえは柔らかいから布団でも入れてあるのだろう。下のほうは葛籠(つづら)を貫いたような手ごたえだが、人の悲鳴も聞こえなければ、切っ先に血のりもついていないから、人間はかくれていないことになる。

「若だんなはたしかに人のいるのを見たんですか」

「ばか、人がいないのに目つぶしを食うはずがあるか。痛っ」

「白い粉の目つぶしだといいましたね。白い粉なんかどこにもついていないんですがなあ」

「ううっ、畜生、痛い」

軍兵衛は両手で目をおさえて、まだえびのように体をちぢめているが、もうころげまわらないだけ痛みは多少うすれたのだろう。

「周平、二階へ行って、行者と乳母をつれてこい」

「なるほど、そうでした」

北野周平ははっと気がついたように廊下へ走り出ていく。

「金蔵、台所へ行って水を持ってこい。目を洗ってみるんだ」

「はっ」

大森もどたばたと台所へ駆け出す。

「畜生、あのめくらめ、屋敷へつれていって拷問にかけてやる。痛いっ、――おれの目はつぶれてしまうんかなあ、畜生」

軍兵衛は一人でわめき立てながら、まだ起き

あがる気力さえないようだ。
「鷲尾軍兵衛、人の因果をあばけば、おまえもその因果をうける。思い知るがよい」
どこからか、お嬢行者の声がはっきりときこえてくる。
「うぬっ」
軍兵衛はぎょっとして声のほうへ起きて座り、
「うぬは行者だな。出てこい」
と、狂気のように抜刀した。
「めくら軍兵衛、暗やみ地獄で天野屋の一族が苦しんだだけ、苦しみもがいて死ね」
「わかった、うぬは千鳥だな」
身の危険を感じて、軍兵衛はよろよろと立ちあがり、声のほうへだっと切りつけた。それはふすまを切ったような手ごたえである。
「若だんな、行者も乳母も二階にはいません」
どかどかと廊下を帰ってきた北野は、目のふちを真っ赤にただらせて目をつむったまま狂人のように刀をふりまわしている鬼のような軍兵衛の顔を見て、
「あっ」
と、真っ青になりながら、そこへ棒立ちになってしまった。

4

それから数日、一時は花に浮き立った江戸の市民たちも、ようやく平常にかえって、江戸は今年も明るい若葉の季節に入った。
神田連雀町の松葉屋は相かわらず夕方から宵にわけて毎日定連で繁盛しているが、看板娘のお葉はこのごろあまり店へ顔を出さないようである。
ここしばらく古賀新三郎が店へこない。しかも、鷲尾屋敷でけがをして、それっきり平永町の浪宅へもどらないといううわさもあり、お葉はそれを心配しているのだと父親の松五郎にも店の奉公人たちにもわかってはいるが、だれ

もそれは口にしないことにしていた。変な気やすめをいうと、勝ち気なお葉がいやな顔をするからである。
その日、ちょうど昼飯どきの客が一通り片づいて、夕方からの定連がくるには少し間のある八ツ（二時）すぎごろ、南の同心清川一馬がふらりと松葉屋の店へ入ってきた。
「いらっしゃいまし」
店にいた小女が愛想よく出迎えて、すぐに帳場の松五郎に知らせると、渡辺の変死事件で世話になって以来、特にその恩を感謝している松五郎は、いそいで店へ出て、
「こりゃだんな、おいでなさいまし。さあ、どうぞお上がんなすって」
と、二階へ招じようとする。
「いや、ここでいい。茶を一つもらってすぐ帰るんだから」
清川はわらいながら、そこの空き樽の一つに腰をおろして、
「さっそくだがなあ、松葉屋、新の字はまだここへ顔を出さねえか」
と、声をひそめて聞く。
「いいえ、実はあっしも心配しているんですがねえ、なにかだんなのほうへうわさでも入りましたんで」
「いや、あれからもうかれこれ十日ほどたつ。軽い傷ならそろそろなおるころだと思ってな。出て歩けるようになりゃ、いちばん先にここへ顔を出すはずなんだから、ちょいと寄ってみたんだ」
清川はなんとなく暗い顔つきに見える。
「いらっしゃいまし、清川さま」
そこへお葉が板場から茶をいれてきてあいさつをする。いつもながらのお葉だが、さすがに少しさえない顔色である。
「やあ、どうした。このごろひどくふさぎこんでいるって話だな」
「そんなことありません。ただちょいと心配し

ているだけです。もう十日にもなるのに、そんなに重い傷だったのかしらと思って」
相かわらずはっきりとした口をきくお葉である。
「お葉、だんなもいまそれを話していなすったところなんだ。軽い傷ならもうそろそろ出て歩けるはずだってね」
松五郎がそばから口を入れる。
「行者さんのほうはどうなんでしょう」
「これもまだどこへかくれているのかまるっきり見当がつかないようだな」
「あたしはあの行者さんが天野屋の娘の千鳥さんのような気がするんですけれど、違いますかしら」
「どうしてそんな気がするんだね」
「だって、いくら軍兵衛が行者さんを冷やかして家さがしをしたからといって、深いうらみでもなければめくらにまでするようなまねはできないと思うんです」
「あの行者は本当のめくらで、しかも右の目のふちにひどい青痣(あおあざ)があったそうだ。すると、千鳥という娘は目くらだということになるのか」
「いいえ、あのお嬢さんが千鳥さんなら、きっと作りめくらです。それに、あの時、軍兵衛が離れで目つぶしを食って、ついていった二人が介抱している間に、行者さんもお乳母さんもどこかへ姿を消してしまった。本当のめくらなら、そんな早業はできないはずです。だいいち、あの家はまだそっくりそのままになっているんですってね」
「うむ」
「自分がめくらで、お乳母さんと二人きりで細細と暮らしているとすれば、とても家なんかすてる気になれない。それでなくてさえ、女というものは苦労性で、家や着物や道具に未練があるもんなんです」
「お葉は軍兵衛たちがどうして行者の家を家さがししたか、聞いているのかね」

「聞いています。うちへくる定連の話だからあんまり当てになりませんけれど、あの晩、古賀さんと鷲尾屋敷に中間奉公をしていた平吉とかいう男が、あの八百富の路地で姿を消している。ひょっとすると行者さんの家が女所帯なんでそこへかくれているんじゃないかと考えて、軍兵衛たちがわざといやがらせに押しかけたんだろうといっている者があるんです」
「それで、お葉はどう思うんだね」
「その前の日、つまり古賀さんたちが鷲尾党に追いまわされた晩の朝、あたしは古賀さんをたのんで、あの家へおうかがいを立ててもらいに行っているんです。ですから、古賀さんはお乳母さんとも行者さんとも顔見知りなんで、切羽詰まって一度はあの家へ飛びこんだかも知れないと思います」
「さすがにお葉はかえるの子だなあ。座っていてそれだけのことが考えられれば大したもんだ」
清川は松五郎とお葉の顔を見くらべて、感心したようにいう。
「本当は、清川さまはもっとくわしいことを御存じなんでしょう。ぜひうかがわせていただきたいわ」
お葉は目の色をかえているようだ。
「お葉、御用のことは口にしちゃいけねえ。だんなが御迷惑をなさる」
松五郎がそばから遠慮して、娘をたしなめる。
「まあいいや。お葉姉御もこの事件には引っかかりがあるんだから、おれの調べたことを一通り話しておこう」
清川はわらいながら、茶を一口のんで話し出す。
「あの晩、鷲尾屋敷へ国もとから大倉玄蕃という、軍兵衛からいえば義理の叔父(おじ)にあたる男が着いた。これがそもそも十年前に天野屋を闕所(けっしょ)にした時の軍師で、すごい頭を持っているやつなんだ。つまり、軍兵衛では埒(らち)があきそうもな

いんで、自分で江戸へ乗りこんできたんだな。無論、目的は天狗党退治と、百万両の埋蔵金を突きとめるにある。その晩、おれは今夜はなにかありそうだと見たんで、佐久間町の番屋へ詰め、手下の者をこれはと思うところへ出して張りこませておいたんだ」

「すると、玄蕃は江戸についたその晩から、仕事をはじめたことになるんですね」

松五郎は目を丸くしている。

「いや、どっちかといえば、黒住党と古賀組がけんかを売ったことになるんだろう。もっとも、古賀は伊太吉という男にさそわれて玄蕃の様子をさぐりに鷲尾屋敷へ忍びこんだ、そこへ黒住党がこれもおなじ目的で押しこんだんで、すかさず玄蕃が采配をとってこれを撃退したということになるんだろう。その采配がなかなか急所急所を突いているんで、さすがの古賀だんなも和泉橋であやうく命をおとすところだった。もうお葉姉御たちも知っているだろうが、古賀だんなは尼崎で玄蕃に切られた牢番新三郎の実弟だから、玄蕃は今のうちに返り討ちにしておこうと考えたんだろうな」

「あら、古賀さんはそんな人だったんですか」

お葉はびっくりしたような顔をする。

「なんだ、姉御は知らなかったのか」

清川は思わず苦わらいをする。

「それで、あたし、やっとわかりました」

「なにがだね」

「いちばんはじめに古賀さんとあたしが鷲尾屋敷をぬけ出して、こんどはあぶなく黒住党につれていかれようとした時、妙な船頭があたしたちを助けてくれたんです。その時、その船頭が、自分は牢番新三郎に恩をうけているから、その恩を古賀さんにかえすんだといっていました。兄弟ならよく似ているのはあたりまえだわ」

「すると、その船頭は天狗党の一味ということになるな」

「ええ。ことによると、あたし、その船頭は千

鳥さんの腹ちがいの兄さんじゃないかと思っているんです」

「名は名乗らなかったんだね」

「いまにわかる時がくるからって、黙って別れていったんです」

「そうか——。そういう関係があるから、古賀だんなはあの晩一度は行者の家へ逃げこんだと見ていい。いや、自分で逃げこんだのではなくて、中間平吉につれこまれたんだろう。ということは、伊太吉も平吉も天狗の一味ということになるんだ」

「じゃ、あの行者はやっぱり千鳥さんと見ていいんですね」

「姉御のその勘はどうやら当たっているようだ。それとおなじ勘を玄蕃も持っていたんだな。だから、軍兵衛に大森金蔵と北野周平をつけて、翌朝、行者の家へさぐらせにやったんだろう。ところが、あいにく軍兵衛はただ威張ることとしか知らない不肖の子だから、行者の目おおいを無理にはいで、めくらだということをたしかめてから、女二人きりの家だと甘く見て、家さがしまでやった。もし行者が古賀をかくまっているとすれば、天狗の一味のはずだ。そこへ気がつけばもっと用心したんだろうが、軍兵衛にはそれだけの頭がない。離れの雨戸がしまっているんで、こいつ臭いと思い、いきなりそこの押入を引きあけた。とたんに目つぶしをくらったんだ」

「じゃ、その押入の中に、だれかいたんですね」

「そりゃいたんだろうねえ」

「古賀さんなんですか」

「そうじゃないようだ。だいいち、その時、大森か北野かどっちか一人がいきなり押入の中をふすま戸ごしに刀で突いてみたが、人はいなかった。軍兵衛は白い粉の目つぶしだったといったそうだが、廊下に立っていた二人は、白い粉も見ていないし、人の影も見なかったといって

いるそうだ」

「だって、軍兵衛は目つぶしを食ったから目がつぶれたんでしょう」

「うむ」

「じゃ、人がいたことはたしかなんでしょう」

「北野と大森が二階へ行者をつかまえに行ったが、乳母も行者も姿を消している。いそいで離れへもどってみると、めくらの軍兵衛は刀をぬいて、半分あいている押入のふすま戸へ夢中で切りつけていた。後で聞くと、千鳥だと名乗る女の声で、暗やみ地獄へおちろといったんだそうだ」

「じゃ、軍兵衛に目つぶしを食わしたのは千鳥さんなんですか」

「そういうことになるらしい」

「わかったわ。二階からその離れの押入へぬけられる抜け道があるんです」

「家をこわしてみなければわからないが、どうもそうらしい。だいいち、軍兵衛が北野におぶわれて屋敷へ帰ったのは何人もの人が見ているが、行者と乳母が外へ出たのはだれも見かけていないんだ」

「その白い粉ってのはなんでしょう」

「粉ではなく、水を霧のようにして吹っかけたんじゃないかという話だ。その水の中になにか強い薬がとかしてあったんだな。軍兵衛は目がつぶれた上に、顔中がやけどをしたように引きつってしまったそうだ」

「まあ、怖い――」

お葉は思わず自分のほおをおさえて、まゆをひそめている。

5

「清川さま、お嬢行者の家はまだそのままになっているんでしょう」

お葉がふっと思い出したように聞く。

「うむ、そっくりそのままだそうだ」

「よく大倉玄蕃が黙って見のがしておくんですねえ」

「いや、見のがしちゃいないようだな。あの家の家主は表通りの八百富だそうで、留守にしておいちゃ不用心なんで、あれから毎日なにかとあの家の面倒を見ている。玄蕃は度々家来をやってあの家を調べさせているそうだが、これは現にあの家で鷲尾軍兵衛というけが人を出しているんで、八百富のほうでもことわるわけにはいかないんだな。しかし、いくら調べてみても表からじゃからくりがなんにもわからない。いっそ家をこわしてみようということになって、あの家を売ってくれと再三八百富に掛けあっているそうだが、これは八百富のほうでうむといわない。家賃も半期分ちゃんと入っているし、家財道具がそのままになっているんだから、住み主に無断で人に売るわけにはいかないという。こいつは理屈が立っているから、玄蕃のほうでも無理にとはいえないんだな」

「そりゃそうでしょうねえ。――もう一つうかがいたいのは、中間の平吉さんのことなんですが、平吉さんは湯島代地の淡路屋の元締めの手からあの鷲尾屋敷へ中間奉公に入っているんでしょう」

「うむ」

「淡路屋の元締めのほうでも、身元はわからないんですか」

「どうもはっきりしたことはわからないらしいな。島五郎も度々玄蕃に呼ばれて、あれこれと聞かれるんだそうだが、中間や人足には渡り者が多い。身元をいちいち疑っていた日にゃ稼業(かぎょう)にならない。そのかわり、武家奉公には不都合を働いたやつは手討ちという約束がある。そりゃこっちで平吉をつかまえれば、事情を聞いて、引きわたす必要があれば屋敷のほうへ引きわたすが、今のところどうもしようがありませんと、淡路屋でも困っているようだ」

清川は役目がらもう島五郎のほうはちゃんと調べてきているようだ。

「あたし、元締めに会ってみようかしら」
　お葉が妙なことをいい出す。
「会ってどうするんだね」
「声を聞けば、この間の船頭さんかどうかわかると思うんです」
「なるほど――」
　清川はしばらくお葉の顔をながめていたが、
「お葉、余計な口をきくようだが、毛を吹いて傷を求めるということもある。あんまりこの事件に深入りしないほうがいいぜ。鷲尾党にしても、天狗党にしても、何人かの人間が生きるか死ぬか、命をかけてしのぎを削っているんだ。人の迷惑などは考えていられない。場合によっては、玄蕃はもう一度お葉をさらっていって、新の字をおびき出すおとりにしてやろうぐらいのことは考えていないとはかぎらない。おやじに心配がかけたくなかったら、まあ、よく考えてみることだ」
　と、心から諭すようにいう。
「それはよくわかっているんですけれど」
　けど、古賀さんは命の恩人なんだものと、お葉は胸の中で考えているのである。
　そのころ――。
　鷲尾屋敷では例の離れの茶室へ、玄蕃がふところ刀の四天王を呼んで、それぞれの報告を聞いていた。
　二郎次は田舎の大尽が用たしかたがた久しぶりで江戸見物に出てきたという触れこみで、下男の供を一人つれ、もう五日ばかり行者の家とは横町一つで向かいあっている上旅籠京屋へ泊まりこんでいる。
「どうだ、なにか手がかりはついたか」
　老獪な玄蕃は、四天王に対しては決してきびしい顔は見せない。
　むしろ、おまえたちだけがたよりだという気持ちを、少しもかくそうとはしない風がある。
「殿さま、あの家はたしかにくさいところはあります。むしろ、くさいところだらけだといってもいいくらいで。まったく妙な家ですが、今のところ行者と古賀がかくれている、そういう密室がどこかにあるという手がかりはなにもつかめません」
「それで、あの家がくさいというのは、どんなところだな」
「第一に、女くさい――」
　二郎次はにやりとわらってみせる。
「ふうむそんなに女くさいか」
　玄蕃の顔に女好きらしい微笑がこぼれる。
　ほかの家来たちには絶対に見せない顔なのだ。
「日が暮れますとな、舟や駕籠でまず女どもが着きます。それがそれぞれ用心のいい座敷へすっと消えていきます。芸者、素人娘、大丸髷の新造、御後室さま、御殿女中――」
「御殿女中は昼間だろう」
　うれしそうな玄蕃の顔だ。
「昔は役者が長持ちで大奥へ運びこまれたそうですな。いまはその逆手を使うのかも知れません。とにかく、それぞれに大町人の金主がついていて、そのほうの頭の切れる番頭が腕によりをかけて下ごしらえをするのですから、どんなことだってできないことはありませんでしょう」
「つまり、男には女、女には男という仕組みなのか」
「そのようです。女が運ばれれば男が、男がくれば女が、必ずまもなくつきます。男は大体公儀のお役人衆、そのお役人の名ざしの女を必ず手に入れてくる、その辺が大町人の金の力なんでしょうな」
「名ざしというと、人の女房でもつれてくるのか」
「大体は双方知った仲のようですが、あの奥方をとか、どの旗本の娘をとか、そんなのまでうまくさらってくるようです。もっとも、京屋ではただ料理を出して座敷を貸しさえすればいい

ので、今夜の客はどこのだれだなどということは少しもわからない。それはみんな黒幕の番頭がついていて、うまく送り迎えをしてしまう。おもしろいのはそういうあいびき宿だから、座敷は男と女の二人きりで、ひっそりと用をたし、ひっそりと帰る。どんちゃん騒ぎなどする者は一人もありません」

「なるほど、青くさい話だのう」

「いや、まったくの話――」

二郎次はちょっとおどけた顔をして、

「ただ青くさいだけではなく、どの座敷も用心深くできていますから、さざめごとを人に聞かれる心配はまあ絶対にありません。したがって、相当すさまじい泣き声などが聞こえる時もありましてな」

「それで、二郎次、おまえのような逗留客はどういうあつかいなのだ。ほかにも田舎の客はあるのだろう」

「はい、それはまたそれで、結構親切にあつかってくれます。それだけ割高な旅籠賃を払っているのですからな」

「たとえば、どんなところが普通の旅籠とちがうのだ」

「だいいち、食べ物、寝具からして違う上に、女中が一人つききりで面倒を見てくれます。ただし、女中は二人一組みで、絶対にくどけないような仕組みになっています」

「なるほど、考えたものだな。おかみのお京の身状はどんな風だ」

「これはいつも玄関わきの帳場に座っていますが、年ごろ二十七、八、大丸髷の品のいいおとなしやかな美人で、無論、あれだけの屋台っ骨を女一人の腕で切りまわせるものではありません。陰に亭主とかだんなとか、たとえば情夫にしても、よっぽどしっかりした策士がついているはずなんですが、それとなく女中に聞いてみても、そんな人はないんでしょうとわらっていて、本当のことはいいません。また、事実、わしはまだ五晩ほどの客じゃありますが、五晩ともおとなしく帳場の奥の居間で一人で寝ているようです。くさいといえば、これがいちばんくさいんじゃないかという気がしますな」

「そうか――」

玄蕃の顔が急に冷静になって、

「二郎次、敵の仕組みがそう巧妙にできていては、普通の手段ではなかなかぼろは出すまい。思いきり金をつんでな、女中を一人手に入れるのだ。くさい仲になってどろを吐かせてみるがよい。そうしなさい」

と、これは命令である。

「承知いたしました」

できてもできなくても命令は絶対に実行しなくてはふところ刀の役には立たないのだから、二郎次の顔も自然と緊張してくる。

「三郎三、おまえのほうはどうかな」

これはお嬢行者の家を中心にして近所のうわさの聞きこみをやっている。身なりはわざと加役あたりの手先という気持ちで、小商人風に作っている。

「残念ながら、変わった聞きこみはまだなにもございません。町方同心の清川一馬という腕利きが熱心に手をまわしていますが、これもまだなんにもつかめないようです」

「如才もあるまいが、千鳥とばあやがあの家をぬけ出したのは真っ昼間だ、いきなり遠くへ走るわけにはいかぬ。門の前は京屋の塀だ。裏は西がわで、おめかけ横町の道があの家の塀に突きあたって行きどまりになっている。南隣は家主の八百富、北隣はこれも囲い者で女所帯だ。この四軒のうちのどれかへ一時のがれて、日が暮れてからどこかへ脱出したことになるのだが、その時はすでに要所をこっちの手の者がかためている、どうしても二人はまだ一郭内にかくれているはずなのだ。そのつもりで当たっているんだろうな」

玄蕃の頭の中にはその町内の地理がすっかり

入っているようである。
「はい、そのつもりで骨を折っております。手前は古賀もあの一郭内のどこかで傷を養っているという見込みで、医者の出入りも気をつけていますが、それさえまだ一度もあの町内へ入った様子はないようです」
「西と北の家は囲い者だが、男の出入りはどうだ」
「西の行きどまりの家は、多町の青物市の主人がだんなで、昼から時々ふらりとやってきて、夕方には帰っていきます。北隣のほうは本町の薬種問屋の番頭がだんなだそうですが、これは主人のかわりにこの月のはじめから長崎のほうへ出向いていますそうで、男の出入りはありません」
「どこかへ出かけるようなことはないか」
「毎日、夕方前にきまってふろへ出かけますが、そのほかは外出しません」
「松葉屋のお葉はまだ一度も行者の家を見にこないか」
「お葉もあれ以来、一度も外へ出ないといううわさです」
「それがいちばんおかしい。お葉は古賀におもいをかけている娘だ。古賀の行方がわからなければ、一度は行者の家を見にきたくなるはずだがな」
　玄蕃の表情がなんとなく冷酷になって、
「三郎三、おまえのほうも思いきった手を打ってみよう。薬屋のめかけをなんとか手に入れてな、お葉をうまくその家へさそいこんでおとりにするのだ。古賀、平吉、伊太吉の三人がいっしょか、あるいはそのうちの一人か、必ず網に引っかかるはずだ。やってみなさい」
と、これも命令なのだ。
「はい」
「場合によってはな、めかけもお葉も縛っておいて、三人が網にかかったらおまえは逃げる。町の中だからな、三人はそこでつかまえなくても、ひもさえつけておけばゆっくり料理ができるはずだ。それならおまえもやりいいだろう」
「はい、それならいつでもできそうです」
「よし、機会というものは、いつ、どこへくるかわからぬ。二郎次も三郎三もすぐに立ちなさい」
「かしこまりました」
　二郎次と三郎三は言下に立ちあがる。
「四郎太、島五郎のほうはまだわからぬか」
　これも小商人といった身なりで、あれ以来、淡路屋島五郎の外出先を執拗につけている。島五郎にはまだきまった女房がない。その行く先に女の家があるか、あるいは千鳥をたずねないともかぎらない。島五郎を千鳥の兄浪太郎と見て、その証拠をつかもうとしているのだ。
「元締め衆の付き合いで色街へは時々出入りしますが、一人でどこかへ立ち寄るというようなことは、まだ一度もありません」
「出入り屋敷は別として、この十日ほどの間にどことどこへ出かけたか、いってみなさい」
「新吉原へ一度、柳橋から深川へ一度、二度とも連れがあって、九ツ（十二時）には家へもどっています」
「そうか――。事件があった当座だからな、用心しているのかも知れぬ。いま聞いてのとおり、三郎三がお葉に手を出すと、あるいは島五郎も動き出すかも知れぬ。おまえも早く持ち場へつくがいい」
「かしこまりました」
　四郎太もすぐ二郎次たちの後を追っていく。
「五郎蔵、いそがしくなりそうだから、本陣はいつでも人が動かせるように、家来どもには足どめをしておきなさい」
　五郎蔵はこの本陣のたばねをいいつけられているのである。しかも、本陣は絶えず黒住党と天狗党にねらわれていると見なければならないのだから、その警固も兼ねなければならないのだ。

「心得ました」
五郎蔵は早々に母屋のほうへ引きかえしていった。

6

田舎のお大尽二郎次は、和泉橋の橋たもとで京屋のほうを見張りながら待っていた供の市助をつれて、京屋へ帰ったのはやがて八ツ半（三時）をまわった時刻であった。
「市、別に変わった出入りはなかったか」
途中で市助に聞いてみると、
「ありません。まだちょいと時刻が早いからね」
と、市助はわらっていた。
「ところでな、殿さまから大変な注文が出た」
「どんなことです」
「女中を手に入れて、口を割らせろといいなさるんだ」
「あんまり悪い仕事でもないな、二郎さん」
市助はにやにやする。
「なにをぬかす。お京ならともかく、あのおかかりじゃあな」
二郎次は苦わらいが出る。お大尽を受け持っている女中はおかくといって、もう四十を一つ二つ出ているだろう。やや太り肉の無口ではあるが、親切な女で、女中としては申し分がない。が、色じかけに出るにしては姥桜すぎるし、顔のほうもお多福そっくりという代物である。
「けど、二郎だんな、あれは情が深いよ」
「醜女のなんとやらか」
「そのかわり、御意のままになんでもべらべらしゃべってくれる。我慢してあれになせえ。失礼だが、お京じゃ二郎さんには荷が勝ちすぎます」
「知らねえな、市、おれの腕を――」
「知ってますよ。だんなのはねじ伏せてから泣かせるほうで、ねじ伏せるまでに手間がかかっちゃ仕事にならない」
「わかったよ。だから姥お多福で我慢しろっていうんだろう」
「そのとおり、そのとおり」
組んでの仕事はいつも相棒になりつけているので、この二人はぴったりと呼吸があう。
「お帰りなさいまし。今日はお早いんでございますね」
玄関を入って、帳場座敷の前をとおる時、おかみのお京が愛想よくおじぎをしていた。憎いほど男心をひきつける大年増ぶりである。
――畜生め、目の毒だ。
二郎次は内心ため息をつきながら、ずんずんいちばん奥の自分の座敷へ帰ってきた。
廊下を入ると六畳で、奥が八畳の二間つづきの座敷だ。
用たしに出た逗留客が帰るにはまだ間のある時刻だし、無論あいびきの客は日が暮れてからだから、家中はどこもがらんとして、この時刻は寂しいくらいである。
「お帰りなさいまし。今日はお早いんですね」
かかりの姥お多福がさっそく茶器の用意をして入ってきた。こっちが主従二人だし、お多福は四十をすぎているから、用心棒のお供はついてこない。
「だんなさま、ちょいとお帳場へ行ってまいります」
市助はすぐに気軽に立って出ていった。
「御用ならあたしがしますのに――」
茶を入れながら、お多福がいう。
「なあにね、市は番頭さんになにか聞きたいことがあるんでしょ」
お大尽はにこにこしながら、
「なにしろ、今日はかせぎましたでな。おかげでざっと一箱の取り引きができました。市にもちょっぴり分け前をくれたで、なんか魂胆があるんでしょ」
と、上きげんの顔をしてみせる。
「あの、一箱といいますと、千両箱のことですか」

お多福は思わず目をみはっているようだ。
「そうそう、縁起がいいで、おかくさんにも少しおすそわけするかな」
お大尽は大きな紙入れを出して、小判を十枚、早くもなくおそくもなく紙にくるんで、
「はい、縁起もんだから、とっておいておくれ」
と、お多福の厚ぼったいひざの上へのせてやる。
「あら、こんなに、あたし、どうしましょう」
さっと人のよさそうな目を輝かしながら、しっかりとその重い紙包みをつかんで、もじもじしている。
「なあに、こんなにとおどろくほどでもない。縁起もんだでな、きれいにおさめておいてもらいましょ」
「そうですかあ。なんだか申し訳ないようで、あたし」
「お帳場さんにもだれにも内緒ですぞ。せっかくの縁起に逃げられると困るでね」
「それはもう、いうなとおっしゃればだれにも黙っていますけれど、本当にこれいただいてもいいんですか」
「いいとも、いいとも――。早くしまいなされ」
「ありがとうございます」
お多福は金包みを押しいただいて、素早く帯の間へ入れてしまう。旅籠の女中などでは、めったに手にしたこともない大金なのだろう、わくわくしているようなのが、その体つきではっきりとわかる。
――このお多福、案外、肌の色は白そうだな。
男心というやつは妙なものだ。年に似合わずむっちりと張りのある肌に、なんとなく浮気心を感じてきて、そのお多福さえあまり気にならなくなっている。いや、この目の細い柔和な顔が、いざとなったらどんな好きそうな顔になるかと、ひどくたのしみにもなってくるからふしぎである。

「おかくさん、三十七、八かな」
「あら、なにをおごりましょうか、だんなさん」
思わぬ大金に興奮している女は、我にもなく若やいだ声になって、若く見られたのはやっぱりうれしいらしい。
「なあに、おれはこれでも目の高いほうでな、肌の色ですぐ見当がつくのさ。おかくさんは肌で男を泣かせるほうだろう。もう何人ぐらい男を腎虚で殺したね」
「いやですよう、だんなさん。御冗談ばかし」
顔が赤くなったのは、まんざら思いあたらぬこともないのだろう。
「いんや、おまえさんは男を泣かせるおなごにできている。どうだね、おかくさん、おれと田舎へ帰るのはいやかね」
「そんな、からかうもんじゃありません」
「おら、田舎者だからね。女はからかわねえです。おまえさまは縁起のいいおなごだ。ぜひ国へつれて帰って世話したいな」
「うそばっかし――。だめだめ」
「うそではねえ。おら三十七だ。年上の女房は家の守りだっていうから、ぜひ女房になってもらおう」
「あたしは、男を殺したくなるほうだから、だめなんです」
「あれ、かわいがって殺されたんじゃ、あわねえ話だね」
「ちがうんですったら――。だまされてすてられるなんて、いやですもの。それだけ情が深いのかしら」
自分では気がつかないようだが、女の目はもうすっかり熱ぼったくなっている。
「おらだまさねえ。本当に女房にすべ」
お大尽の手がのびて、女の腕をつかみにいくと、
「いけない、お供さんが来ますったら」
さすが少し後じさりをしたが、つかまれた腕を振り切ろうとはしなかった。

「供の者はまだ帰らねえです」
「いやっ、いやっ、夜にして――」
「夜は夜、約束しておかねえと、男は安心できねえだ」
内ふところへ手がすべりこんで、鳥の子もちのような豊かな乳房をわしづかみにしてやると、
「放して、――お供さんがくるから」
口ではいっても、姥お多福の肌はしっとりと汗ばんで、もう体の自由を失っているようだ。
――こりゃ役得というやつだ。
廊下に見張りがついているのだから、あわてることはいらないのだ。ゆうゆうと思いのままにお多福を泣かせてしまうと、二郎次は急に白白しい気持ちにかえってきた。
が、横座りに起きあがった姥お多福は、いそいで髪を気にしながら、
「だんなさん、だましたんじゃないでしょうね」
と、まだ興奮からさめきらぬ甘い体つきだ。
「だまさねえ。おれ、びっくりした」
「どうして――」
「おれはおめえに殺されるかも知れねえ、腎虚でな」
「ふ、ふ、そうかしら」
お多福はうれしそうにわらいながら、
「恥ずかしいな、あたし泣いたりして」
と、そんなあけすけなことをもう平気で口にしている。
「おめえ、今夜、本当にくるんだろうな」
「腎虚になってもいいの、おまえさん」
「いいとも――。もう女房だもんな」
「じゃ、お供さんをどこかへ遊びに出しておいてくださいよ」
「承知した。二人きりでゆっくり先の相談をすべ」
「きっとですよ」
女は何度も念を押してから、立ちしぶるようにして出ていった。

「泣かしたね、だんな」
入りかわりに帰ってきた市助が、にやりとわらいながらいう。
「これも忠義のためだからな、市」
「結構でごぜえます。――けど、罪だねえ、だんな。あの女のうしろ姿を見ていると、体中でいそいそしてやがった」
「そうだろうなあ。しようがねえ、これからがこっちの仕事なんだ」
「まあ、大丈夫だな。泣かせながら口を割らせれば、べらべらしゃべっちまうだろうよ。とにかく、うまくいってよかった」
その夜、おかくがそわそわと二郎次の座敷へしのんできたのはまだ四ツ（十時）を聞いたばかりで、京屋の女中が床に入るには少し早い時刻だった。
おかくはふだん着のままである。

お京の寝間

1

田舎のお大尽二郎次は、今夜は胸に一物あるので、どてら姿のまま寝床の上へあぐらをかいて、一服つけていた。
「あら、まだ寝ないで待っていてくれたんですか」
姥お多福のおかくは、気もそぞろに座敷へ入ってくるなり、もう体中をわくわくさせながら、男の左横へきてぺたりと座った。
「おら、待ちかねてな、とてもひとりじゃ寝られねえだ。それでも、おまえ、よくこんなに早くきてくれたな」
二郎次だんなはさっそく左手で女の肩を抱きよせて、するりと内ふところへ手をすべりこませる。

「まだお店しまったわけじゃないんだけれど、あたしは今夜いいあんばいに奥の寝ず番だもんだから」
「奥の寝ず番てのは、一晩中、奥へ詰めているんかね」
「そうなんです。逗留のお客さんは、寝ちまえばたいてい朝まで用はないんだけど、この廊下の外れの寝ず番部屋で、毎晩一人ずつ、帯を解かずに、お客さんの手の鳴るのを待っていることになっているんです」
「なるほど、ここんちはよく行きとどいているだね」
「おかみさんが商売上手ですから」
「きれいな大年増だが、おかみさんにゃ無論だんながあるんだろう」
「さあ、どうかしら——。あんたもおかみさんに浮気おこしたんかね」
　ちょっとなじるような声になる。姥お多福でもやきもちは一人前のようである。いや、こういう女にかぎって、人一倍やきもちは強いものなのだ。
「おれは田舎者だでな、あんなおすましの女は性にあわねえ。だいいち、あんなに気取っていたんじゃ、抱いてもおもしろくないもんな」
　お大尽は、ほどよくなぶっている女の乳房を、わざと感情的にぎゅっとわしづかみにしてやる。
「痛いよう、あんた」
「かわいいんだもん、しようがねえ」
「ほかの女に、浮気おこしちゃいやだよ」
　おかくの舌はたわいもなくもう甘ったるくなって、体中が燃えているようだ。
「ここんちの表のほうの偉いお客な、お泊まりさんはすくないようだね」
「そんなこと聞いちゃいやだ。ここのうちじゃ、お客のうわさをする者は、すぐに出されちまうんだもの」
「いいでねえか、おまえはどうせおれと二、三

日うちに田舎へ帰っちまうんだ」
「それがだめなの」
「あれえ、おまえ、それじゃ心がわりしたんか」
「ちがうんだよう。——ねえ、あんた、お供さんはどうしたの」
　おかくはふっと真顔になって、あたりへ耳を澄ましているようだ。
「あれは、約束どおり今夜は小遣いをうんと奮発して、吉原へ遊びにやったです。だから、今夜はおかくにも思いきり泣いてもらうべ」
「いやだ、恥ずかしい」
「なにが恥ずかしいもんか。おれ、この間、間違えて表のはばかりへ行ったら、ほかの座敷でもひどく泣いてるところがあったようだ」
「まあ、よくだんな、人に見つからなかったねえ。そんなことしたら、ここのうちは大変なんだから、これからは気をつけてくれなくちゃ」
　またしてもおかくは顔色をかえるのである。
「どうしてなんだ、おかく」
「おまえさんだから話すんだけど、——本当に、お供さんはいないんでしょうね」
「そんなに疑うんなら、そこのふすまをあけておくべ」
　二郎次だんなが気軽に立ちあがろうとすると、
「いいんですよう。こうしていておくれよ。もう放れたくないんだもの」
と、胸の男の手を上からしっかりおさえつけて、熱ぼったい体を押しつけてくるのだ。
「そりゃ、おれだってもう放したくねえもんな。おかくはおれの女房だもん、だれに遠慮はいらねえです」
　二郎次は空いた右でゆっくり女の帯をときにかかる。
「あんた、まだお客さんのお手が鳴るかもしれないから」
　口ではそういっても、姥お多福はすでに体の自由を失っているようだ。

「なにが大変なんだか、話してみろ」
「本当に内緒だよ、あんた」
「わかっているとも――。けど、その話を聞かねえうちは、おれ気にかかって、本気になりきれねえもんな」
「ここのうちでねえ、うっかりお客さんのうわさをいって暇を出された女中のうちに、後でだれかにそっと殺されちまった女があるんですとさ」
「へええ、おかみさんがそんなことをいいつけるのか」
「違うんだよ。表のお客のことは、おかみさんだって知らないんだって。おかみさんはたのまれて座敷を貸すだけで、後はお客さんのほうですっかり支度をするのよ。急所急所にお役人の目が光っていて、暇を出された女中には隠密がつくんです。だから、これは生かしておいてはあぶないと思うと、お役人が手をまわして、そっと切ってしまうんだって話なんです」
「おっかないんだなあ、おかく」
「でもね、なんにも知らんふりをして、こまめに働いていさえすれば、ずいぶんいいお金になるんだから、ここへ奉公する者は男でも女でも、決して人のかげ口、お客さまのうわさはしないようにって、おかみさんからかたくいい聞かされているんです」
「おかく、おれたちも田舎へ帰って、こんな商売をやるべ。もうかるぞ」
「だめだよう、田舎じゃ」
「うんにゃ、そんなことはねえ。お城下町へ出て、御城内のお役人や、町の金持ち町人を相手にするんだ。下ごしらえはおれがうまく手をまわしてやる。店はおまえがここのうちのようにうまく切りまわす。やれるだろう、おかく」
「そりゃ、下ごしらえしてくれりゃ、あたしにだってできないことはないけどさ」
「ここには、おかく、密室ってのはないのか。つまり、だれにもわからないかくし部屋ってや

つだ」
「そんなのはないようだよ」
「じゃ、おまえはどの座敷でも入って、みんな間取りを知っているわけだな」
「知っているわ。ただ、お帳場の奥の座敷は、おかみさんとお客さま、つまり、その日のお客さまの下ごしらえをする大番頭さんやお役人さんが忍んできて相談をするところなんで、ここだけは女中頭のお舟さんしか出入りできないことになっているんです」
「どんな間取りになっているんだ」
ここがくさいと二郎次はにらんだのである。
「お帳場が八畳、これはあんたも知ってるでしょ」
「うむ、いつもおかみさんが座っているところだ」
「その奥がふすま一重で十畳の座敷、ここが下相談の間なんです」
「うむ」
「その十畳に六畳のかくれ間がついていて、おかみさんの居間です」
「おかみさんはいつもそこへ一人で寝るわけだ」
「そうよ。その六畳に土蔵がついているんです。もっとも、土蔵とおかみさんの居間との間に廊下がついていて、その片一方が手洗いになっているのよ」
「わかった。おかみさんはその手洗いのところの雨戸から間男を引っぱりこむんだな」
「またそんなこと――。おかみさんは、そんなところから男を引っぱりこまなくたって、下相談にくる人はたいてい頭巾で顔をかくしているから、おおっぴらでお帳場からつれて入れるじゃありませんか」
「よし、おれたちもそうすべ。なあおかく」
そのおかくは、もうすっかり帯をとかれて、白々ともちはだを男に見せている。
「あんた、本当にこんな商売する気なの」

「やるべ。もうかるぞ、おかく——。おかみさんのだんなってのは、どんなやつだ」
「それがはっきりわかんないんだけど、若い立派なお侍で、時々くる背のすらっとした人が、たぶんそうじゃないかとあたしは思ってるんだけど——」
「顔は頭巾をかぶってるからわかんねえってわけか」
「いやだなあ、あたしばかし裸にして——」
姥お多福は身をよじらせながら、自分でなにをいっているのかわからないほど、体中の血がじれきっているといったかっこうである。
「おかく、おかみさんのとこへ、このごろ医者はこなかったか」
二郎次は姥お多福をゆっくり仰向けに倒していきながら、その耳もとへ聞く。
「どうしてさ——」
「おれ、おかみさんははらんでいると見た」
「そうかしら」
「父なし子はうみたくねえだろうからな」
「でも、医者なんかこなかったようだけど」
「よし、そんならおれがおかくの医者になってやるべ」
しかし、待ちかねていた姥お多福は、もう返事をしなかった。というより、返事ができないほどの幸福を全身に感じて熱いため息をついていたのである。

2

この京屋の間取りは、そういうあいびきをするには実によくできていた。たいていの声は絶対に外から聞かれないように、隣座敷というものがないのである。しかも、廊下との間に必ず控えの間がついている。
二郎次だんなが今夜は特に念を入れて姥お多福を散々泣かせ、くたくたにして眠らせてから、自分だけそっと寝床を抜け出して身支度にかかったのは、やがて四ッ半（十一時）をまわるこ

ろだったろう。
無論、二郎次の身支度というのは忍び装束である。
京屋では、この時刻にはすでに帰る客はみんな帰り、泊まり客はまくらについて寝入りばなというところになる。
奉公人たちもそれぞれの寝ず番が起きているだけで、後の者はみんな寝床へ入ってしまったころだ。
二郎次のねらいは女主人お京の居間である。
京屋の表門は八百富に近いほうにあって、門を入ると左手に土蔵があり、突き当たりは内塀になっている。その内塀を右へ七、八間行った奥に玄関があるのだ。
つまり、土蔵は路地一つ隔てて八百富の家と並び、門を入った突きあたりの内塀の向こうがお京の居間、その東隣が覆面の客と下相談をする十畳の座敷、その次が八畳の帳場、ここまで内塀がつづいて、その並びに玄関の土間があることになる。
これを裏の北庭から見ると、左から帳場の間、十畳の客間、この二間は北がわに床の間と押入がとってあるから、庭から羽目板が見えるだけだ。その十畳の客間の押入の裏がしゃれた手洗いになっていて、そこからお京の居間の廊下が北から西にかぎの手について、土蔵の壁で行きどまりになる。
帳場には寝ず番がいるから、無論、そこからお京の居間へ忍びこむことはできない。忍びこむとすれば庭からだ。
幸いやみ夜だから、二郎次は暗い西の庭を影のように軒下づたいに進み、まず土蔵のほうの雨戸の外へぴたりと身を寄せて、中の気配に耳をすます。
もしこの京屋が天狗党の息のかかった家とすれば、お嬢行者と古賀はこの土蔵の中にかくまわれているだろうし、お京の亭主かだんなというのは、千鳥の兄浪太郎にちがいあるまい。だ

いいち、こういう店は相当の財力がなければ、これだけの地盤は築けないはずだ。天野屋の百万両という金が物をいっているにちがいないのである。
　それにしても、彼らはさすがにうまいことを考えたものである。大町人が公儀の役人に賄賂として女をおくる、一晩逢う瀬をたのしんで別れてしまえば、男にしても女にしても後くされがないのだからこんなおもしろい火遊びはないだろうし、その下ごしらえは全部大町人の策士にまかせて、京屋はただ座敷を貸し、酒肴の用意さえすればいい。しかも、ここはそういう場所なのだから、必ず外からかくし目付がそれぞれ厳重に警戒していてくれるにちがいないのだ。
　その警戒をうまく利用して、天狗党は頭巾をかぶり、公儀の役人に化けさえすれば、自由にここへ出入りできるのである。
　――今夜こそきっとなにかしっぽをつかんでやるぞ。
　闘志をみなぎらせて耳をすませる二郎次は、もうさっき姥お多福をおもちゃにして、苦痛のうめき声さえもらすのをたのしんでいた男とはまったく別人になっていた。
　いや、二郎次としては、むしろ、命がけで人の秘密をかぎ出す、このほうが女をもてあそぶよりよっぽど強烈な刺激を感じるのだ。
　この廊下の雨戸は、土蔵ぎわのほうに戸袋がある。
　――はてな。
　人一倍敏感な耳を持っている二郎次は、たしかに、そっと居間の障子があいて、その戸袋ぎわの雨戸のそばへ出てくる人の気配を全身に感じた。きぬずれのやわらかな気配からいって女だ。無論、あの大丸髷のお京の寝姿にちがいあるまい。
　一体、いまごろなにをするつもりか、ことりと雨戸の桟を外す音がした。
　二郎次はするりと縁の下へもぐりこむ。

　頭の上で雨戸が一尺ばかりそっとあいて、あたりを見まわしてから、
「あなた、だれもいませんのよ」
と、居間のほうへひどく甘ったるい声だ。
「そうか――。気のせいだったかな」
低い男の声が答える。
「いやですわ、おどかしては」
「しかしな、お京、今夜はやっぱり帰ることにしよう」
「いやっ、いやっ、あなた」
　女はびっくりしたように居間へ走りこんで、それでも障子だけはうしろざまにしめ、いきなり男にすがりついていったようだ。
　一尺ほどあけっ放しの雨戸の間から、暗い庭へそこだけあるかなきかの光がただよっているのは、居間の灯もすでに有り明け行燈にかわっているのだろう。
「いやですというのに――、帰っちゃいやだ。十日の上も待たせておいて、――いやだ、帰さない」
「ばかだな。わしは、その十日の間、おまえとおなじで、きれいな体なんだよ」
「いいえ、わかっています。あなたがきれいなのは、――あなたは、あなたは、あたしまでこのごろ女はきたないと思うのかしら」
「うむ、女はきたない」
「あれ――」
　男がいきなり女の口をくちびるでふさいだらしい。
　お京の居間の次の間は十畳の客座敷で、ここには人はいない。その向こうの帳場の間にお舟が寝ず番とはいいながら、こたつの中でごろ寝をしているはずだ。
　よし――。
　二郎次は縁の下からはい出して、大胆にもするりと雨戸の間から廊下へ忍びこんだ。
「いやっ、放しちゃ」
「こうか――」

熱ぼったいささやき声の、その声のあるうちを利用して、二郎次の体はすうっすっと横歩きに、息をころして西の廊下へまわっていく。
「うれしい、あたし」
「おまえ、雨戸をあけっ放しじゃないのか」
「あら」
「しめておいで——。不用心な女だ」
二郎次はどきりとしたが、
「もう帰らない、あなた」
と、お京は念を押しながら、とろんとした声音で、すぐ立ちあがりそうもない。
それに、こっちはもう手洗いの前の廊下まできて、後は暗い客座敷のふすまさえあければいいのだ。ただちょいと当てが外れたのは、お京の居間と客座敷の間はふすま一重ではなく、間に両方の押入と床の間がついているから、一間の隔たりがある。
「しょうがない、帰らないことにするから、雨戸をしめておいで」
「本当ですよ」
お京はもう一度念をおしてから、やっと立ちあがったようだ。
二郎次はするりと暗い客座敷へ入っている。こんどはこっちがわの押入へ入らなければ、隣の声は聞こえないだろう。
——あの男の声はたしかに聞きおぼえがある。
それは淡路屋の元締め島五郎にちがいないのだ。とすれば、どうしても顔を見ておく必要がある。これからお京を愛撫する段になれば、無論、頭巾をかぶったままということはないはずだし、後のむつごとの中に当然天狗党の話が出てこないはずはない。
——こっちの押入から、天井へぬけてやろう。うまくいくかな。
その天井から下をのぞいた時の男女のからみあった肢体をはっきりとまぶたにおもいうかべながら、男のほうより大丸髷のお京のあやしい

その時の顔に、たまらない興奮を感じてくる二郎次である。
そのころ——。
鷲尾屋敷の例の茶室では、大倉玄蕃が目を細めて、若衆姿の若菜の肩を抱き寄せ、しどけなく襟をみだした胸のゆたかな乳房を左手でもてあそびながら、寝酒をたのしんでいた。
「若菜、もう一つのめ」
どこかに白痴美というようなものを持っているおとなしい若菜は、酔うと自由奔放な痴態な姿を見せてくる。いつも剃刀のような神経をとがらせている玄蕃にはそれがたのしいのだ。
「もう苦しいからいや」
「そういわずとのめ。酔うとたのしくなるぞ」
玄蕃は自分が酒を口にふくんで、熟れたいちごのように赤く燃えている若菜のくちびるへ押しつけて、無理に口の中へそそぎこんでやる。
まゆをひそめて、ごくりと酒が白いのどを鳴らしてとおると、
「まあ、邪険なお殿さま」
若菜はそういう荒っぽい愛撫をよろこぶように、とろんとうるんだ目にあやしい媚びをふくんで玄蕃をにらむのである。
「愛いやつ」
「うそばっかし——」
「なぜだな」
「殿さまは苦いお酒ばかり若菜にのませて、後でわらいものになさる」
「なんでわらうものか——」
「若菜は恥ずかしいのに」
さすがに自分でも自分の痴態の恥ずかしさは知っているのだ。
「いやいや、若菜はわしの宝だ」
「本当——、殿さま」
「なんでわしがそなたにうそをいうものか」
玄蕃にとっては一刻千金の春の深夜の三昧境である。
「玄蕃——」

ふっと、湯殿のほうのふすま越しに、低い声が呼んだ。例の忍者、黒住鬼堂の不気味な声音である。
「鬼堂か」
玄蕃は平気で若菜の肩を抱いたまま、しかし、今夜は特に五郎蔵が念を入れて警戒にあたっているはずなのだから、思わず太いまゆをひそめる。
「おぬし、怒ったな」
鬼堂に微笑が感じられる。
「なにを――」
「夜詰めの者を責めるな。わしはそのための忍者だでな」
「気の毒に――」
「なんでじゃ」
こんどは鬼堂が聞いた。
「忍者にはおなごのたのしみがあるまい」
「しっぺがえしか、玄蕃」
「田舎侍は義理がかたいでのう」
「まあよいわ。――取り引きにかかろう」
「そうか――、なんぞよい土産を持ってきたか」
玄蕃の顔から微笑が消えて、我にもなく若菜の乳房をわしづかみにしている。
痛かったので、若菜は声を立てるかわりに、玄蕃のたくましい肩にかみついていく。
「おぬしの采配、田舎侍にしては相当のものじゃ」
「世辞をいうな」
「惜しいことに、手足のほうが少し劣る」
「なにっ」
「二郎次は京屋のお京の居間に忍びこんだ。それがまずい。わざとお京が雨戸をあけたのを、策だとは気がつかなんだ。それっきり、二郎次はもとの庭へ出てこぬ」
「あれは辛抱人じゃ。どこかへうまく身をかくしたのだろう」
「賭けるか、玄蕃」
しかし、玄蕃にはその自信がつかぬ。

「明日の朝、二郎次の死骸が見つかったらおぬしの負け」
「待て、鬼堂。――なぜ、おぬしは二郎次を救わなんだのだ」
「救おうにも距離が少し遠すぎた」
「お京の部屋にいたやつはだれだ」
「そこが取り引きだ。五十万両こっちへ出すか」
玄蕃は答えない。下手人のおよその見当はついているからだ。
「負け惜しみが強いのう、玄蕃」
「千鳥のかくれ家を教えたら、取り引きに乗ってもよい」
「おぬし、千鳥のかくれ家はおよそ見当がついているはずだぞ。むしろ、千鳥を手に入れてこいといいたいところだろう」
「無理か、鬼堂」
「少し虫がよすぎはせぬか、玄蕃。わしが千鳥を手に入れれば、百万両はそっくりわしのものだ。なにも相談などにはこぬ」
「わかった。今夜はわしの負けだ。こうしてくれ、明日二郎次の死骸が手に入ったら、その時必ず取り引きしよう」
「疑い深いのう。まあよかろう。しかし、これだけはいっておくが、仕事は協力したほうが早い。時期を失すると、手おくれになるぞ。敵は、我々の攻撃をふせぐのが目的ではなく、復讐するのが目的なのだ。第一にねらわれているのは、玄蕃、おぬしだぞ」
「わかっておる」
玄蕃はきっぱりといいかえす。
「それならよい。では、また明日出なおすとするか」
「待て、鬼堂」
いまからでは二郎次を助けに行ってもおそいかと聞いてみたかったのだが、鬼堂はもう風のごとく去ってしまったようである。
「素早いやつ」
玄蕃はため息をついた。気がついてみると

さすがにわきの下にじっとりと冷や汗をかいている。

「殿さま、二郎次は殺されたのですか」

若菜がぽかんとした顔で聞く。信じられないのだろう。

「うむ、そうかも知れぬ」

玄蕃は苦い顔になりながら、

「よし、打つだけの手は打ってやらねばならぬ」

たちまちすさまじい闘志がわいてきたらしく、やっと若菜を放して、ぽんぽんと手を打った。

「はっ」

茶室の庭から、すぐに五郎蔵の返事がかえってくる。

3

翌朝――。

お葉はまだ店をあける前に、神田の明神さまへ朝まいりに出かけた。

いまさらになって苦しい時の神だのみみたいで、ちょっとうしろめたい気はしたが、どうしても古賀のことが心配になってしようがない。

色恋は別にしても、無事でさえいれば十日の上も顔を見せてくれないような男では絶対にないのだ。八丁堀の清川の話では、あの晩、古賀は鷲尾党に追われてけがをしているようだというし、どこかで傷養生をしているのだとは思うが、はたしてその傷は快方に向かっているのか、それともいまだに生死どっちのものともつかないような重い傷なのか、それさえわからないだけに気がもめる。

もう一つは、その翌日、お嬢行者の小浪が乳母のお浜といっしょに行方をくらましたきりになっていることだ。

清川の話では、古賀が平吉という中間といっしょに鷲尾党に追われて姿を消したのは八百富と京屋との間の路地の中で、お嬢行者の家はその路地の中にある。

当然そのお嬢行者に不審を持った大倉玄蕃は、翌朝、鷲尾軍兵衛に北野と大森の二人をつけて、行者の家へ内偵にやった。軍兵衛は例によって傍若無人に行者の家を家探しして、離れで何者とも知れぬ者にあやしい劇薬を顔へぶっかけられ、両眼をつぶされてしまった。

お嬢行者と乳母はそれっきり行方をくらましているのだという。

これはだれが考えても、めくらのお嬢行者は千鳥で、めくらは世を忍ぶ変装だったと考えたくなってくる。

しかも、古賀の兄はお庭番で、どうやら尼崎の牢番になり、浪太郎といっしょに大番頭磯右衛門を助けて、大倉に切られて死んでいるらしいという事実がわかってみると、千鳥がけがをした新三郎を助けてどこかへいっしょに行方をくらましているのだと考えたくなるのは、お葉ばかりではないはずだ。

さすがに昨夜はお葉もよく眠れなかった。古賀はずいぶん親切にしてくれて、お葉は二度までも命がけで助けられている。無論、これからだってその親切にはかわりはないだろう。

しかし、その親切は古賀新三郎という人柄から出てくるので、悔しいがそこに色恋の感情はかけらほどもまじってはいない。どう考えても、その意味ではまだ手ひとつ握ってくれたことはないのである。

片おもいでは、いくらお葉が勝ち気でも、ほかのこととは違うから、これだけはあきらめるほかはない。

「それに、あたしはあの時、ちゃんと行者さんから申し渡されている」

災難は外からきて外へ去っている。もう心配はないでしょうといわれたのはよくわかった。

しかし、そのためにまだまだ苦労するのは、親の罪をつぐなうのですから、辛抱しなければいけません。後にはきっとしあわせになれます。

これもすぐに納得がいった。が、その後で、

「これから家へ帰ると、たのみになる人が待っていますよ」
といわれたのである。これがどうにも納得できなかった。
あの時は自分がいちばんたのみになる人と信じている新三郎といっしょに行ってもらって、その新三郎と並んでお嬢行者の前へ座っていたのである。
「家へ帰らなくたって、たのみになる人はここにいるのに、どうしてあんなことをいうのだろう」
お葉はちょっと不平でたまらなかったが、行者の心眼には、あの時すでに、古賀は一生をともにする人ではないと、ちゃんとわかっていたのだろう。
そして、家へ帰ってみると、きていたのは八丁堀の清川一馬だった。その清川のおかげで、二階で渡辺が殺されたことはついに外へ出ずにしまったのだから、なるほど、清川はたよりになる人だったに違いない。
だから、清川を好きになろう、そんな気持ちにはとてもなれないお葉だが、
「古賀さんにはやっぱり縁がないんだわ」
と、何度も涙をふきながら、やっとあきらめがついたのは、もう明け方に近いころだった。
色恋はあきらめても、うけた親切は親切でかえさなくてはならない。
「あたしはあたしだけの真心をきっと古賀さんにかえしてみせる」
お葉は改めてそう決心して、こんどは色恋ぬきに、あれこれと考えているうちに、眠ってしまっていた。
その考えていたことの一つが、明神さまに朝まいりをして、古賀の無事を祈願してから、とにかく一度お嬢行者の家を見てこようということだった。
だから、今日からお葉は岡っ引きの娘のお葉で、もう恋娘のお葉ではなかった。

「まず古賀さんの生死を確かめるのは、あたしの古賀さんへの恩がえしなのだ」
お葉はそう思って、明神さまへ朝まいりをすまして、そこからまっすぐお嬢行者の家へ足を向けた。
はじめは、家主の八百富の店へ寄ってあの晩のことを聞いてから、隣の行者の家を見せてもらう考えだったが、考えてみると、それは昨日清川からくわしく聞いて、ちゃんと頭の中へ入っている。それより、行者の家の北隣の、日本橋の薬種問屋の番頭のめかけだという家へ行って、一通り話を聞いて、それから行者の家を見せてもらおう、そのほうがなにか拾い物がありそうだと気がついたので、八百富の店は素通りをして路地へ入った。
そこは六尺路地で、左は八百富の納屋の羽目板、右は京屋の黒板塀、その塀の中はすぐ土蔵になっている。
八百富の家の羽目板を出外れると、そっちがそこから三尺引っこんで、路地は九尺の横町になり、左側に三軒おなじような門構えの家がつづく。三軒とも八百富の家作で、一軒目が問題の行者の家、二軒目が薬屋の番頭の妾宅ということになる。
時刻はもう四ッ（十時）をすぎて、今日もいい春日和だった。
「ごめんくださいまし」
お葉は妾宅の門を入って、行者の家とおなじ造りの玄関の格子戸をあけた。
「はあい」
台所のほうから返事があって、まもなく玄関の障子をあけ、
「どなたでしょうか」
と、そこへ怪訝そうにひざをついたのは、まだ十六、七とも思われるおとなしそうな下女である。
玄関は三畳で、左手に二階へあがる階段が見えるのも、行者の家とおなじだから、この三畳

の向こうは茶の間になっているはずだ。
「あたしは十日ほど前にお隣の行者さんのところへ一度おうかがいを立てにきたことのあるお葉という女なんですけれど、少しあなたにうかがいたいことがあってお寄りしましたのよ。御迷惑かしら」
お葉は笑顔を作って、ものやわらかく切り出してみる。
「どんなことでしょう。あたしにわかることですかしら」
ちらっと小女の顔に不安そうな色がうかぶ。
「いいえ、あなたの知っていることだけを聞かせていただけばいいんです。行者さんのお宅はしばらくお留守なんですってね」
「ええ」
「どちらへお引っ越しになったかわかりませんかしら」
「わからないんです。また荷物も道具もそのままのようですよ」
「実は、あたしの兄が、たしか行者さんがどこかへいなくなった前の晩、どうも行者さんのお宅でお世話になったらしい様子があるんです。というのは、兄はだれかとけんかをして、けがをしていたと、そのとき出会った八丁堀のだんなから聞いているんですが、それがこの路地へ逃げこんで、それっきりいまだに帰ってこないんです。なにか十日ばかり前、お宅の前でごたごたしたことはありませんでしたかしら。たぶん、時刻は四ツ（十時）前後だと思うんですけれど――」
「そんなことありました。十日ほど前です。うちの前を人がばたばた駆け出して、行ったり来たりするんで、うちはおかみさんとあたしと二人きりだもんですから、とても怖くて――」
小女は正直にまゆをひそめてみせるのだ。
「それで、お隣の門をあけて、だれか中へ入ったような音は聞きませんでしたかしら」
お葉は思わず声をひそめている。

小女は小首をかしげるようにしながら、ふっと格子戸の外のほうへ目をやって、
「あら、仁吉さん――」
と、急に困ったような顔になる。
ぎょっとしてお葉が振りかえってみると、ここへ入る時表の門の戸はしめてきたので、庭のほうからでもまわってきたか、一見加役の手先といった身なりの野暮ったい男が、開いている格子戸の中へぬっと入ってきながら、
「お絹ちゃん、その人はだれだね」
と、なれなれしく小女に聞く。
「あの、この人は、たった今――」
そういう小女のほうへお葉が目を向けたとたん、男の手がうしろからいきなりお葉の首にからみついて、
「おい、声を立てるとこのまま絞め落とすよ」
と、耳もとへ低い声で吹きこむようにいう。
「いけない、仁吉さん」
小女は泣き出しそうな顔になって、はっと立ちあがる。
「静かにするんだ、お絹」
のどをしめつけられているお葉は、わずかに足をばたつかせるだけで、もう声も出ない。いや、意識さえたちまちかすんでくる。
――殺されちまうのかしら、このままあたしは。
悔しいなあと、お葉は思った。
が、おちそうになった一歩手前でのどの手がゆるみ、むさぼるように夢中で息をしている間に、素早く両手をうしろ手に縛られ、なれた手つきでもうしっかりと手ぬぐいでさるぐつわまでされてしまう。
「こっちへあがるんだ」
男に引っ立てられて、ふらふらっと玄関へあがると、驚いたことにはそこで別のぬすっとかぶりの男が、小女のお絹をおなじように縛りあげている。
そして、茶の間から廊下へ出て、そこの廊下

からかぎ形につづく離れへつれられてくると、そこにも一人、丸髷に結った二十三、四の、たぶんここのめかけなのだろう、色っぽい年増が、これも両手両足を縛られ、手ぬぐいでさるぐつわをされて、もうそこにころがされていた。
　外の路地を小商人の流していく売り声がのどかに耳に聞こえている、それは真っ昼間の出来事なのである。

4

——さあ、これでよし。
　玄関の三畳でお絹の荷造りをすませたぬすっとかむりの市助は、軽々と女の体を抱きあげた。むっちりとした体つきで、もうすっかり女にはなっている。
「おとなしくするんだぜ。なんにも悪さはしねえからな」
　市助はやさしく耳もとへいってやりながら、内心惜しいには惜しいなと思った。
　花ならば今ようやくつぼみからほころびて咲いたばかりの新鮮な初花で、それが自分の胸の中で甘い肌のかおりを鼻へただよわせてくる。
　仲間さえいなければ、ここでちょいとこの初花をかわいがってみたいところだ。
　——やめておけ、市助。
　昨夜、相棒の二郎次は女でしくじっている。おかくを泣かせただけを役得にしてやめておけばよかったのに、一人でお京の寝間へ忍びこんでいったようだ。それっきり、今朝になってもまだ帰ってこない。
「仕事は必ず二人で組んでやれ。一人ではあぶない。女には決して手を出すな」
　これだけはいつも玄蕃からやかましくいわれているのだ。女に手を出すなとは、出来心で手ごめにしてはいけないということである。
　今日のこの手順は、三郎三と組んでいる仁吉の手柄だった。
　仁吉は昨日めかけのお梶がふろへ出かけた留守にここをたずね、自分たちは加役の手先の者でこのごろ隣の行者の留守の家をねらって、時時凶悪などろぼうが昼寝に入りこんでいる様子がある。その見張りをいいつけられているので、場合によってはいつここの家の庭を借りにくるかも知れないから、ふいに入ってきても大きな声を立てないようにと、お絹にうまく話しこんでいくらか金をつかませておいた。
　それがさっそく今日役に立ったのである。
　仁吉はさっき八百富の店の前の河岸っぷちに立っていて、向こうからくるお葉の姿を見かけると、てっきり行者の家をさぐりにきたものと見てとって、三郎三と、今日はこっち組へ手伝いにきている市助に合図をおくり、一足先にめかけの家の庭へ入りこんでいた。
　茶の間にいためかけのお梶は、昨日お絹から話を聞いているらしく、わざわざ廊下まで出てきて、
「御苦労さまです」
と、気味悪そうにあいさつをしていた。
　仁吉は玄関わきに見張っていて、もしお葉が一人で行者の家へ入りこむようなら、こっちの庭から三人で塀を乗りこえていって仕事をするつもりだったが、お葉はいきなりこっちへたずねてきた。
「それなら、三人で一人ずつ、いっしょに縛ってしまおう」
　そうとっさに手はずをきめて、三郎三はお梶を、市助はお絹を受け持つことになったのである。
　市助がお絹を抱いて奥の離れの六畳へ運んでくると、もうそこにお梶とお葉がおなじように荷造りされてころがされている。
　どっちもいい女だが、市助はどうせいたずらをするんならやっぱりお葉だと思った。大丸髷の根ががっくりと落ちてうらめしそうにこっちをにらんだお梶のほうも、ぽったりとした体つきのいかにも年増盛りといった色っぽさはある

が、お葉のほうは年こそもう十九になっているがまだ生娘で、その張りのあるすんなりとした肢体に、なんともいえぬみずみずしさが感じさせられる。
　おなじ新鮮さでも、お絹のはまだ未熟といった味だが、お葉のはすでに熟れきって、しかもかおり高い。味わうなら今がしゅんといった肌の色なのだ。
　――畜生め、目の毒だなあ。
　市助はそこへお絹をころがしておいて、なわをかけられているだけに、一層くっきりと豊かに盛りあがってみえるお葉の胸のあたりを、あざやかにまぶたに焼きつけながら、廊下から庭へ出た。
　三郎三と仁吉の姿は見えない。仁吉は庭づたいに表へまわり、門のかぎをしめて持ち場についたのだろう。三郎三はそこの塀を乗りこえて隣へ移り、そこからこのあけ放した離れの六畳を見張っているはずだ。
　――へたなまねをすると、だんなにいいつけられる。
　市助は内心苦わらいをしながら、自分をそこの庭から塀を乗りこえて隣の庭へ移った。
　そこはちょうど十日ばかり前に軍兵衛が目をつぶされた行者の家の離れの真裏で、やっと四尺ほどの空き地になっているところだ。
　三郎三はそこの節穴から、案の定、もう隣の離れを見張っていた。
「さぶだんな、どうやら思う壺になりやしたね」
「うむ」
「仁吉はもう表かね」
「たぶん、そうだろう」
「じゃ、たとえだれがお葉を助けにきたって、こんどこそこっちの目をのがれることはできねえなあ」
　この家のまわりは、いや、この一郭は、もう二重にも三重にも味方の目が光っているのだ。
「けどねえ、だんな、おれは今のうちにお葉だ

けはこっちの離れへ運んでおいたほうが安全だと思うんだがなあ」
「どうして――」
「もし、助けにきたのが天狗党でなくて、ほかの者、たとえば町方だった場合、せめてお葉だけでもこっちの手へ残すようにする、それが本当のような気がするんでさ」
「なるほど――」
　三郎三もちょっと考えていたようだが、
「しかしなあ、市、そうするにしては、ここの離れは少し不用心じゃないか」
　と、気むずかしい顔をする。
「例の若だんなの目つぶしの件かね」
「無論それもあるが、あの時、二階の千鳥と乳母が姿を見せずに消えたという、この家にはなにかそんな仕掛けがあると見ておいたほうがいいようだ」
　さすがに三郎三は用心深い。
「よし、さぶだんながここは一人でよければ、おれが一度この家を調べてみようと思うんだが、いけませんかねえ」
　市助は急にそんな冒険心がわいてくる。
「ここはおれ一人でもいいが、大丈夫か、市」
「まあ、まかせといておくんなさい」
　市助はにやりとわらってみせて、さっさと西庭から離れの廊下のほうへまわってくる。
　――ふん、お葉をこっちへ運んでしまえば、なんとかならねえものでもねえからな。
　半分はそんな気持ちがある。どうにもあのしゅんの味が煩悩を突ついてしようがないのだ。
　三郎三の持ち場からいえば、真裏になっている離れの南の廊下のほうへまわってみると、どこの雨戸もぴたりとしまっていて、離れの戸袋口の雨戸だけが五寸ほどあいている。家主はここから家の中へ出入りして、留守の間の見まわりをやっているのだろう。
　市助は一度あたりを見まわしてから、人目のないのをたしかめ、そこの雨戸を一尺ばかりあ

けて、体を横にしながらするりと廊下へ入りこんだ。
　外からくらべれば薄暗いが、その暗さに目がなれると夕あかりぐらいにあたりは明るい。
　まず離れの障子を一枚あけてみた。
「あっ」
　六畳の真ん中に、だれか手足を縛られ、手ぬぐいでさるぐつわまでされて、北をまくらに仰向けに寝かされている。
「二郎だんなだ」
　ねずみ色の忍び装束でそれとすぐわかった。いや、二郎次はぽかんと大きな目をあいて、たしかにこっちを見ているのだ。
「どうしたんだね、だんな」
　市助はそばへ寄るなり、まずさるぐつわをとってやって聞いた。
　二郎次はにやりと薄わらいをしただけで、ぼんやりこっちの顔を見ている。その目がいかにもだるそうで、顔になんの表情もない。
「だんな、おれの顔がわかるか、二郎だんな」
　市助はぞっと背筋へ悪寒が走ってきて激しく二郎次の肩をゆすぶった。
　しかし、二郎次の目はただぽかんとこっちを見ているだけで、体ひとつ動かそうとしないのである。
「こいつはただごとじゃねえ」
　市助は思わずぬすっとかぶりの手ぬぐいをとって額の脂汗をふいた。
　昨夜、市助は京屋の庭に忍びこんでいて、二郎次がこの姿でお京の居間の廊下の雨戸口からするりと中へ消えていくのを、たしかに見とどけているのだ。
　それっきり、九ツ（十二時）になっても出てこない。いつの間にかその雨戸はしまってしまったようだし、この分だと仕事は長びくと見たので、一度河岸っぷちの往来へ出た。すると、そこの桟橋に灯のない屋根船が一艘ついていて、意外にも、

「市、――市助」
と、三蔵が小声で呼ぶのである。
「ああ三の字か――。どうしたんだ、今ごろ」
「おれより、おめえこそどうした。二郎だんなは無事か」
「いや、だんなはさっきお京の寝間へうまくもぐりこんだようだ」
「やっぱりそうか――。ひょっとすると、二郎だんなはもう殺されているかもしれねえんだとよ」
「なんだって――」
「しっ、うそか本当かわからねえが、黒住鬼堂が殿さまのところへ知らせてくれたんだそうだ」
　まさかと市助は思ったが、今朝早く朝帰りのふりをして京屋へ帰ってみると、
「お供さん、お大尽がゆうべのうちにいなくなっちまったんだよ、どうしよう」
　姥お多福のおかくが青くなって、その話をするのである。
「だれにも黙っていておくれ、きっとだよお、供さん。あたしはゆうべお大尽にくたくたにされちまって、恥ずかしいけどついそこで眠っちまったんだよ。目がさめたらお大尽がいないんで、とにかくあたしは支度をして、寝ず番部屋へ帰っていたんだけどさ、今ここへきてみるとまだ帰ってきた様子がないんだよ。どうしようねえ」
「うちのお大尽とくると好きだからねえ。まさか、ここのおかみさんの居間にでも入りこんで、今ごろそこでのほほんと寝ているんじゃないんかな」
　それとなく気を引いてみると、
「あたしもそう思ったんで、帳場へ行ってみると、おかみさんは今、朝まいりに出かけたところだって、お舟さんがちょうど居間を掃除しているところだったんだよ」
　と、だんだん青ざめた顔になってくるのだ。
　――すると、やっぱり殺されたな。

市助はその時、はっきりとそう思った。
「しょうがねえです。おかくさんはなんにも知らないことにしてな。人に聞かれたら、お大尽はたぶん吉原で居つづけだろう、いまお供さんが迎えに行ったからって、そういっておけばいい。おれ、夕方またちょいと様子を見にくるから、おめえもここのおかみさんの様子をよく見張ってもらいたいね」
「じゃそうするから、夕方になったらきっともう一度きておくれよ」
　市助はそう約束して京屋を出てきている。まだ時刻は五ツ（八時）前のことだった。
　その二郎次が、昨夜のままの姿で、ここにこうして縛ってころがされているのだ。しかも、命はあるがまるっきり正体はないらしい。
　――一体、どんな目にあって、こんなことになったのか。
　それを考えると、市助はたまらない不気味さと恐怖におそわれてきて、体中がぞくぞくしている。
　いや、この離れにはたしかにどこかに何か仕掛けがあるんだ。それでなければ、京屋から二郎次をこんなところへ人目につかずに運んでこられるはずはない。
　そう気がついたとたん、市助は二郎次のなわをといてやるのも忘れて、四つんばいにはい出すようにして、廊下から庭へ逃げ出していた。
　うつろな二郎次の目がまぶたに焼きついていて放れない。
「市、待ってくれよ」
　いまにも二郎次がうしろから追ってくるような気がする。
　――生きた幽霊。
　がくがくするひざを踏みしめながら、市助は泳ぐようなかっこうで、三郎三のいる離れの裏へいそぐ。
　まだ昼には少し間のある明るい春の真っ昼間なのである。

5

　その日、清川一馬が連雀町（れんじゃくちょう）の松葉屋へ寄ってみると、多町の安二郎がきていて、なんとなく店がごたついているようだ。
「どうかしたのか、松五郎」
「へえ。こりゃだんな、御苦労さまで――。実は、お葉のやつが今朝、神田の明神さまへおまいりに行くといって出かけたっきりいまだに帰ってきませんので、いま安にきてもらってその話をしているところなんで――」
　おやじの松五郎はひどく不安そうな顔つきである。
「そうか、そいつは少しおかしいな。ここから神田明神なら、行って帰って四半刻（しはんとき）（三十分）とはかからない。ことによると、帰りにお嬢行者の家のほうへでもまわったんじゃないのか。昨日だいぶ気にしていたようだからな」
　清川はすぐ頭にぴんときた。
「あっしもそれが心配になりましてね」
「よし、ちょいと行ってみてきてやろう。安、いっしょに行け」
「へえ、お供いたしやす」
「だんなにわざわざそんな御足労をかけちゃ申し訳ありません」
　松五郎が恐縮するのを、
「なあに、おれにゃほかにも調べてみたいことがあるんだ」
と、一馬は気軽にいって、安二郎といっしょに松葉屋を出た。
　表に配下の手先を二人待たせてあるから、一行は四人ということになる。
「だんな、古賀新三郎って人は、なにかそのほうのお役で動いているんでしょうかね」
　一足さがって歩く安二郎が、声をひそめながら聞く。
「さあ、そいつはわからねえが、尼崎（あまがさき）で兄貴が殺されているとわかれば、敵討ちっていう気持

ちにもなるだろうからな」
「それはそうでござんすね。お葉さんもとんだ事件へまきこまれちまって、親分は心配が絶えねえようです」
「そうだろうな。しかし、お葉のは半分は自分が好きでこの事件の中へ飛びこんだようなところもある。親の血をひいているんだから、まあ、しょうがねえだろう」
清川は苦わらいをしている。
「一体、この事件はどうおさまりがつくんでござんしょうねえ」
「その判断はちょいと難しいな。簡単にいえば、大名が、というより大名の家来が、御用町人の百万両をねらって、その家を取りつぶした。そのやりかたがひどくむごたらしかったので、遺族の者が復讐をたくらんでいる。どっちが勝つかという勝負なんだが、本当ならこの勝負は自分たちが勝手につけるものじゃない。そのために公儀には法というものがあるんだ。法に背いて勝手に復讐をすれば、たとえ勝っても処罰はまぬがれない。ところが、その法をおかしてまでも遺族の者たちが復讐してやろうと結束しているところに、この事件の大きな問題があるんだ」
「なるほどねえ」
「まあ、こっちは、はたの者がなるべく迷惑をしないように、町方の立場から監視している。そりゃ、無論、法に背くやつがあればどっちだって見のがすわけにゃいかないが、あくまでも冷静な立場から監視しているよりしようがあるまい」
「天野屋の百万両ってやつは、本当にどこかに隠してあるんでしょうかねえ」
「さあ、そいつもわからねえな。また、そんなものがあったってなくたって、おれたちには関係のねえ話だ」
「おっしゃるとおりで――」
「しかし、百万両といやあ千両箱にしても一千個、そんなものを一体どこへかくしているのか、

話としちゃおもしろい話題にはなるな」
筋違橋をわたって、神田川を少しくだると佐久間町になって、もうそこに八百富の店が見えてくる。
「安、おまえちょっと八百富の亭主に当たってみてくれ、行者の家は八百富が家主なんだ。お葉が家の中を見る気なら、ことわっていくはずだからな」
「承知しやした」
「おれは行者の家の前で待っている」
清川は手先二人をつれて、一足先にそこの路地へ入って行く。
ここの路地は抜けられるようになってはいるが、物売りの小商人のほかにあまり人は通らない。
三軒並んでおなじ門構えの家だが、どこもぴったり門木戸がしまったままひっそりとしている。
「だんな、行ってきやした」
まもなく安二郎がせかせかと路地へ入ってきた。
「どうだった、様子は」
「ちょうど亭主の富造はひる飯を食っているところでしてね、連雀町の松葉屋の娘さんなら顔は知っているが、今日は店へはこなかったそうです。しかし、ここを通ったかどうかは、ついうっかりしていて、はっきりとはいえないんだそうで――」
「ふうむ。おかしいな」
「今朝からこの路地になにか変わったことはなかったかって、ついでに聞いてみやすとね、そういえば、いましがた、行者の家の隣のおめかけさんの家から、人足が二人がかりで唐草模様の上おおいをかけた長持ちを一棹かつぎ出したそうで、あの家へはだんなが久しく来ないようだから、いよいよ売り食いをはじめたのかも知れませんていっていやすがねえ」
安二郎は親分松五郎から多町の岡っ引きの地

盤をゆずられるだけあって、聞きこみも如才がない。

「よし、そのめかけの家へ行ってみよう。——嘉助、おまえはこの路地の裏を一まわりしてみてきてくれ。弥之吉(やのきち)はここを見張るんだ」

「へえ」

　清川は手先二人にいいつけて、すぐにめかけの家へ入っていった。人足が二人がかりで運ぶ長持ちなら、人一人楽に入れるのだ。こいつ臭いとすぐに気がついたのである。

「今日は——。ごめんなさい、今日は」

　安二郎は玄関の格子の前へ立って声をかけてみたが、中からはなんの返事もない。

　その間に清川は注意深く玄関前の地面を見ると、乱雑な人の足跡が入り乱れていて、それが左手の庭へまわる木戸の中へつづいているようである。

「安、これを見ろ。庭へまわってみよう」

「へえ」

　木戸をあけて隣の塀(へい)との間の二尺ほどの間を通りぬけて、離れのある庭へ出てみる。

　そこのお嬢行者の家の庭との境の塀板が、二枚ほどはぎとられて、そのまま立てかけてあるようだ。しかも、塀を乗りこえたらしい土の跡がいくつか生々しく残っているのだ。

　もうただごとではない。

「今日は——。だれもいないのかね」

「かまわぬ、その離れの障子をあけてみろ、安」

「へえ」

　安二郎はひらりと廊下へ飛びあがって、用心しながら、がらりと障子を一枚引きあけた。

「あっ、だんな——」

　手足を縛られた若い女が三人、手ぬぐいでさるぐつわをされて、派手にそこへ投げ出されているのだ。ぎょっとして安二郎が一足飛びさがって叫んだのも無理はない。

「なんだ、お葉もいるじゃないか」

　清川は残りの障子をあけて、つかつかと座敷へ入り、まずお葉のなわを解いてやった。

　その間に安二郎がお梶とお絹のなわを解いてやる。

「悔しい、あたし」

　勝ち気なお葉は、青い顔をして起きあがるなり、そんなことを口走る。

「まあいい。——わしは八丁堀の清川だが、おまえはここの女あるじか」

　清川はやっと起きなおって座ったお梶のほうへ声をかける。

「はい、梶と申します。あたし、もう殺されるのかと思って、生きた気持ちもしませんでした。どうもありがとうございます」

　お梶はほっとした顔つきで訴えるようにいう。これもまだ人心地のつかないような青い顔色だ。

「とんだ災難だったな。そっちは下女か」

「お絹といいます。あたしがうっかりしていたんです。すいません」

　お絹はいまにも泣き出しそうな顔をしている。

「そうか——。とにかく、お葉の話から聞こう。どうしたんだ、お葉」

　清川は物慣れた調子で、まずお葉のほうを向く。

「あたし、お隣の行者さんのことを聞きに、こちらをおたずねして、玄関へ立ってこのねえやさんと二言三言しか話さないうちに、ふいに仁吉とかいうどこかの小者風の男が入ってきて、いきなりうしろからのどを絞められてしまったんです。そして、もうすんでのことで落ちそうになって、はっと気がついてみると、手足になわをかけられ、手ぬぐいでさるぐつわまでされて、その男にここへ運びこまれてくると、このお梶さんがあたしとおんなじように縛られてころがされていて、後からこのねえやさんもぬすっとかぶりの男に縛られて、運ばれてきたんです」

「そうか――。お梶はどんなやつに縛られたんだね」
「はい。昨日、あたしの留守に、加役の手先の者だといって、その仁吉とかいう男がきて、このごろお隣の行者さんの留守宅へどろぼうが入りこんで昼寝をしている形跡がある、それをつかまえるんだから、いつふいにこの庭を借りても、大きな声を立てないようにと、お絹にことわっていったんだそうです。ですから、その仁吉らしい男がさっき家の庭へ入ってきても、黙って見てると、そこへこの方が玄関へおいでになったんです。あたし、なんですか気味が悪くなって、茶の間からこの離れへかくれようと廊下へ出ると、そこに頭巾で顔をかくしている侍と、ぬすっとかぶりの小者が二人で立っていて、騒ぐと殺すぞといいながら、侍のほうがあたしを縛ったんです」
お梶はどうやら少し落ち着いて、血色が出てきたようである。
「お絹はその間に、そのぬすっとかぶりに縛られたんだな」
「はい、すいません。あたしは茶の間でつかまってしまったんです」
「お葉、それからどうしたんだ。おまえは松五郎の娘だから、くせ者のやったことはよく見聞きしていたんだろう」
「いいえ、それがだめなんです。女っていざとなると意気地がないもんだと、今日はつくづく自分で自分が情けなくなっちまって」
お葉はひどく悔しそうである。
「まあ、わかってるだけ話してみろ」
「くせ者たちはその三人で、ここの障子をあけっ放しにして、侍とぬすっとかぶりの男は、この塀を乗りこえて隣へ行ったんです。そこからこっちをのぞいているようでした。仁吉のほうは、ここの家の玄関を見張りに行ったようです」
「それは、一体、どういうつもりなんだろうな」

清川はわざと小首をかしげながら聞いてみる。
「あたしは三人とも鷲尾党のやつで、古賀さんか天狗党か、どっちかがあたしたちを助けにくるのを見張っているんだと思いました」
「まずそんなところなんだろうな。それからどうした」
「まもなく、隣の家になにかあったらしく、ぬすっとかぶりのほうが塀を乗りこえてきて、命が惜しかったら静かにしていろよといって、この障子をしめて、玄関のほうへ走っていきました」
「うむ」
「あたしはその間に、口の手ぬぐいさえなんとかすればお梶さんのなわをといてやれると思ったんですが、なんだかそこの庭にだれか立っているような気がして、これはなまじ変なまねはしないほうがいいと思ったもんですから、じっとしていました。案の定、それからしばらくすると、何人かの足音がここへ入ってきて、塀の板をはがすような音がしたんです。だれも一言も口はききません。それからすぐ、こんどは隣の庭から重いものを運び出してくるような足音がして、それが玄関から出ていってしまうと、後はしいんとなったんです。あたし、その時がいちばん怖かった。こんどはきっと恥ずかしい目にあわされるんだと思っていたら、安さんの声が玄関でしたんで、ああ助かったと思って――」
お葉の目がこの時になって急に涙ぐんでくる。
「そうか、それでわかった。その重いものを持ち出したというのは、さっきここの門から長持ちを一棹、人足が二人でかつぎ出していくのを見ていた者があるんだ。長持ちなら、楽に人間一人詰めて運び出せるからな」
「まあ、怖い――。じゃ、だれか人間を運んだんでしょうか」
お梶がいかにも気味悪そうに目をみはる。

「お梶、おまえのところへはしばらくだんなの足が遠のいているようだって、家主の八百富が心配していたが、本当か」
「ええ、お店の御用で長崎のほうへ出かけているもんですから」
なんとなく顔が赤らんでくる。
「お店っていうとどこなんだ」
「本町の唐津屋さんという薬種問屋で、そこの番頭をつとめている伊太郎といいます」
「本町の唐津屋っていうと、たしか蘭方の薬をあつかっている店だな」
「はい」
「八百富は、おまえのところへしばらくだんながこないんで、いよいよ売り食いをはじめたんじゃないかと心配していたぜ」
「いいえ、そんなことございません」
「この北隣はだれが住んでいるんだ」
「家の前の京屋さんの板前さんで、直さんという人です。おかみさんは京屋さんの女中頭のお舟さんですから、二人とも夜でないと帰ってこないんです」
「ふうむ、京屋の奉公人か」
清川は、はてなと、なにか胸に突きあたるものを感じた。

6

今夜の大倉玄蕃は、宵からなんとなく黒住鬼堂のくるのを心待ちにしている気持ちがあった。
いまさら鬼堂と手を握るのは、実に心外である。鬼堂と手を握るということは、百万両の半分五十万両をそっちへ渡すということなのだ。
しかも、鬼堂は忍者として隠密の仕事はお家芸だが、白昼堂々と敵とわたりあうとなると、どれだけの実力があるか疑問である。したがって、敵と引っ組んで実際に戦うのはこっちで、つまり、彼らは獲物を追い出す猟犬の役にしか立たないだろう。

猟犬は猟師の飼い犬である。その飼い犬にその日の獲物を半分やる猟師はまずいない。
――まったくばかげた話だ。
玄蕃はなんとも苦い気持ちである。
が、昨夜、二郎次が失敗して、一体どんな毒薬をのまされたのか白痴同様の廃人にされ、しかもその生ける屍がお嬢行者の家の問題の離れにころがされていたとなると、さすがに傲岸の玄蕃もこのままではこれからの手が打ちようがなくなってきたのだ。
ということは、天狗党の復讐態勢はこっちが考えていたよりはるかに上まわっていると見るべきで、いつその手が自分の首をねらってくるか、予断をゆるさない不安さえ感じさせられる。
いや、敵はすでに軍兵衛に復讐を果たし、昨夜は自分の手足となっている一人、二郎次をこれ見よがしに翻弄してかえしている。
しかし、軍兵衛にせよ、二郎次にせよ、自分が策をさずけて、こっちから仕掛けていった勝負なのだ。ことに、今日のお葉をおとりにとる策は、こっちとしては第三の矢を放ったので、矢は見事にお葉を射とめたかに見えたが、その返礼が思いもかけない二郎次の生ける屍だったのだから、これも完敗と見るほかはない。もう少しぐずぐずしていれば、三郎三まで二郎次とおなじ犠牲者にされていたかも知れないのである。
そこで、改めて敵の反撃を検討してみると、第一のわなが京屋ということになる。わかっている敵は、めくら行者の小浪、乳母のお浜、京屋の内儀お京、淡路屋島五郎、屋敷へ入りこんでいた中間平吉、これが天狗党の一味で、古賀新三郎とお葉は別だった。しかし、古賀がかつての牢番新兵衛の実弟だったとすると、これもまた強敵の一人で、いますでに天狗党と手を握っていると見ていい。
もう一人、この間の夜、古賀といっしょに屋

敷へ入りこんでいた男があるが、これは名前がわからない。

　仮にこれが領分内のことなら、次に打つ手は、行者の家と京屋を取りまいて建物をこわして逃げ道をふさげば、一挙に勝負はつく。が、将軍のおひざもと江戸では、そんな乱暴な事は絶対にできない。といって、もう一度間者なり刺客なりを入れてみても、これは自分からあり地獄へおちるようなもので、むしろ敵はそれを待っているくらいのものだろう。

　と考えてくると、玄蕃にはちょっと次に打つ手がないのだ。いやでも鬼堂の力を借りて敵の急所をさぐり、そこを突いていく以外に手はない。

「いっそお京を屋敷へさらってくる手はどうでしょう」

　そういう案が三郎三の口から出た。

「いや、それより、出入りの元締めなんだから、島五郎を呼びよせて、そのまま監禁するほうが早い」

　これは四郎太の案である。

「両案とも、それができれば問題はない。その手段があれば知恵をしぼって考えてみろ。ただし、島五郎にせよお京にせよ、こんどは自分がねらわれる番だと、ちゃんと承知しているぞ。ということは、ねらってきたら二郎次同様白痴にしてやろうと、手ぐすね引いて待っているということだ」

　玄蕃がそういってやると、二人とも、いやわしには自信がありますとやりかえしてくる勇気も才覚もないようだった。

　今夜も屋敷の夜番は五郎蔵があたり、四郎太は島五郎をつけ、三郎三はともかくも京屋を見張りながら、それぞれすきもあらばとねらっているはずだ。

　どっちも玄蕃には大した期待は持てない。夜警に当たっている五郎蔵の手くばりでさえ、黒住鬼堂にかかっては、おそらく昨夜同様なんの

役にも立たないだろう。

「殿さまは今夜はごきげんが悪い」

　若菜は酌をしながら、むっつりしている玄蕃の顔を見てわらった。

「うむ、今夜は気が重い」

「若菜のお酌でお気にいらなければ、ほかのおなごを呼べばいいのに」

「そんなことをしては、若菜が怒るであろう」

「それは怒ります。明日、黙って国もとへ帰ってしまう」

　ぷっとふくれて見せる若菜だ。

「帰られては困る。わしが寂しい」

「それなら、いつものとおり若菜をなぶってよろこべばいいのに」

　若菜はそれを待っているようにいう。

「いや、なぶるのはもう少し後にしよう。今夜は客人があるかも知れぬでな」

「ゆうべの人——」

「うむ」

　玄蕃はさっきから茶室へ出るほうのふすま戸へそれとなく耳を澄ましながら、心たのしまぬのである。

「玄蕃、きたぞ」

　そのふすま戸の向こうに鬼堂が立ったようだ。

「おお、来たか」

「今夜は待ちかねたであろう」

「そうでもない」

「相かわらず気が強いな。どうだ、手を打つか」

　鬼堂はもうすっかりこっちの弱みをつかんでいるようだ。

「その前に一つだけ聞きたい」

「なんだ」

「おぬしはだんなのいいつけで働いているのか、それともおぬしの一存か、どっちだ」

「知れたこと、おれはだんなの家来だ」

　鬼堂の主人は老中稲垣伊勢守である。たぶん伊勢守のいいつけだろうと玄蕃も読んではいた

が、それが事実だとわかれば、五十万両はあながち死に金にもなるまいと思った。
　若菜はぽかんと少し口をあけて、玄蕃の顔とふすま戸のほうを見くらべている。これは玄蕃が向こうの声に負けはしないかと心配しているようである。
「鬼堂、手を打とう」
「そうか、そのほうがおたがいの得だ。――なんなりと聞け、知っているだけは答える」
「二郎次が今日、行者の家の離れへ運ばれていたのを知っているか」
「知っている」
「あれは毒をのまされたのか」
「たぶん、オランダわたりの強い眠り薬だろう」
「京屋から運ばれたのか」
「無論、そうだ」
「抜け道、地下道のようなものがあるのか」
「あると見ていい。おれはまだ入ってはみないが、京屋の蔵から八百富の納屋の下を通り、行者の離れから、めかけお梶の家の離れ、その隣の直吉の家の離れまで抜けている」
「なにっ」
　玄蕃はまったく意外だった。
「なるほど、あの三軒は八百富の家作だったな」
「直吉を知っているか」
「知らぬ」
「京屋の板前で、女中頭のお舟の亭主だ」
「そうか――。お梶の亭主は、本町の薬種問屋唐津屋の番頭だったな」
「そのとおりだ。しかし、長崎へは行っていないぞ。敵は江戸にいるでな」
「すると、唐津屋清兵衛も天狗の一味と見ていいな」
「知れたこと――」
「古賀新三郎と千鳥は京屋の蔵の中だな」
「お京の亭主は淡路屋島五郎、これが天野屋の妾腹にできた浪太郎だ。おぬしもおよそ見当はついていたろう」

「鬼堂、行者の家から抜け道へ入りこんで、蔵の中へ出るのは難しいか」
　玄蕃は我にもなくふすま戸をにらんでいる。
「抜け道へ入りこむのはそう難しくはない。しかし、たぶん二郎次とおなじ目にあって、明日どこかへころがされていることになるだろう」
「しかし、千鳥を手に入れなければ、百万両はこっちのものにならんぞ」
「なるほど――」
「決死の者を三人、五人、それで足りなければ何人でも次々に入れていく。それでもだめか」
　鬼堂はちょっと考えているようだったが、
「おもしろい、さすがに玄蕃だ。しかし、もう一刻（二時間）待て、一度様子をさぐってこよう」
　と、どうやら乗り気になってきたらしい口振りだ。
「それはありがたい。味方はなるべくむだには死なせたくないからな」
「よかろう。刺客はいつでも出発できるように用意しておいてくれ。一刻ほどのちに必ず知らせに来る」
　鬼堂はもう足音ひとつ立てずそこを去ったようである。

六郷の渡し

1

　京屋の蔵の二階は畳敷きになっていて、隠れ座敷に造ってあった。
　古賀新三郎はここでお嬢行者の小浪と乳母のお浜に傷の介抱をうけたのである。肩の傷が思ったより重く、五針ほど縫ったくらいだったが、本町の蘭薬商唐津屋清兵衛の番頭伊太郎が蘭方医術の心得があって、その行きとどいた手当をうけたおかげで、化膿もせず、今日でやがて半月近く、傷はすっかり全快した。

今日は床あげをして、ひそかにふろへも入ったほどである。新三郎がこの京屋の二階へかくまわれてから会った顔は、淡路屋島五郎とお京、医者がわりの唐津屋の番頭伊太郎、それと小浪とお浜の五人だけである。

ここへきてからの小浪は、目おおいを取り、濁った目の仕掛けも外したので、見ちがえるようにきれいな十八娘になっていた。ほとんどつききりで看病してくれたのは、この小浪と乳母のお浜だから、もう気心はよくわかってきたが、身の上話といったようなものはどっちもまだ一度もふれたことはなかった。

島五郎、お京、伊太郎の三人もおなじことで、ここの人たちは浪人古賀新三郎として世話をしてくれているし、新三郎もお嬢行者の家へあの晩平吉に偶然つれこまれたその縁でやっかいになっているのだというつもりにして、余計なことはなにも聞こうとはしなかった。

だから、傷がすっかり全快した以上、明日はよく礼をいって、新三郎はこの二階から出なくてはならない。

蔵の中は冷えるから、いつも置きごたつがこしらえてある。今夜はそのこたつにさしむかいにひざを入れて、新三郎は小浪と二人きりで話していた。

蔵には東がわと西がわに明かりとりの窓がついている。夜はいつもこの窓をしめきって、灯はなるべくつけないようにしてきたのだが、今夜は東がわの京屋の屋根のほうの窓を少しあけ、そっちへ光が行かないように行燈を暗くして灯もつけてあった。

そういえば、夜、小浪が二階へあがってくるのも、今夜がはじめてなのである。

「新三郎さま、今夜はここで少しお芝居をしますのよ」

小浪はあいた窓のほうを背にして、こたつへひざを入れるなり、小声でいって人なつこい微笑を見せた。薄暗い部屋の中で、そこだけが花が咲いたように明るく見えるほど、小浪はろうたけて美しい。

「どんな芝居をするの」

「いまにわかりますわ」

「わしのような大根役者で間にあうかな」

「新三郎さまでなければ間にあいませんのよ」

「芝居をするというからには、御見物衆があるわけだね」

「それはありますわ」

「怖いなあ。幕があいたら教えてくれるか、小浪さん」

「教えてあげますわ。けれど、新三郎さまは千両役者ですから、あたくしのきっかけですぐわかると思いますのよ」

いきいきとした小浪の張りのある目が、意味ありげにこっちを見て、なにかいいたげである。ひどく人なつこい目だ。

小浪がもし天野屋の遺児千鳥なら、早く親を失ったふしあわせな娘ということになる。しかも、一族といっしょに絶えず鷲尾党にねらわれてきたのだから、自然に疑い深くなって、娘心などというものを持ったことはおそらくないだろう。その娘心を自分でも知らずに見せている、そういう風情が、看病されているこの半月の間に、度々はっきりと新三郎にも感じられた。

手が不自由だったので食事を養ってもらう時など、まるでままごとをしているようなたのしそうな目をして、

「さあ、ああんとお口をおあけなさい」

と、こっちを赤ん坊あつかいにしてよろこんでいた。

いまもその時の目になっているようである。

「小浪さん、まだ幕はあいていないんだろう」

「ええ、まだのようですわ」

「じゃ、今のうちにいっておくけれど、おかげでわしもどうやら元の体になれた。明日はここをおいとましようと思っている。小浪さんにもいろいろお世話になりました。どうもありがと

う」
新三郎は心から礼をいって、頭をさげた。
「あら、まだここは出してあげませんよ」
小浪はびっくりしたようにいう。
「そうか――。出ちゃいけなければ、そっちの都合で、決して無理に帰ろうとはいわない。わしはこの恩がえしはきっとするつもりでいるんだ」
「ええ、新三郎さまにはたくさん恩をかえしていただきますのよ」
平気で小浪はそんなことをいう。
「いいとも――。わしで役に立つことがあればね」
「でも、新三郎さまは、こんな蔵の中で、長い間ずいぶん退屈だったんでしょう」
「そんなことはない。小浪さんがとても親切にしてくれたんで、今となってはなつかしい思い出になることのほうが多い。――かたわになるかと思って、はじめはちょいとつらかったけれど」
「本当――。あたくしも新三郎さまの手が不自由になったらどうしようとずいぶん心配しましたのよ」
「ありがとう。もう大丈夫だ。さっきここで居合いを少しやってみたが、どこもなんともないんで、すっかり安心してしまった」
「あら、そんなことをして大丈夫かしら」
「刀が抜けないようじゃ、わしはここからうっかり外へ出られない体なんだ。そういえば、小浪さんはあれからまだ一度も家へ帰ってみないようだね」
「帰りません。もうお嬢行者はやめますのよ」
「ふうむ。じゃ、これからどうするつもりなんだろうな」
ちょうど五ツ（八時）の鐘を打ち出していた。
小浪はその鐘の音に耳を澄ましながら、目はじっと新三郎のほうを見ている。その目になんとなく情熱のようなものが燃えてきたようだ。今までに、こんな大胆な目を見せたことはない。気のせいか、ふっくらとした胸も肩も切なげにため息をつきながら、あやしいなまめかしさえみなぎらせているようだ。ほおがほんのりと赤らんできたと思うと、小浪は思いきったようにつと立ちあがった。
恋娘――、いささか唖然として目をみはっているうちに、小浪はよろめくように男のそばへきて、
「新三郎さま、小浪にあなたの命をくださいませ」
と、肩を投げかけるように座りながらいうのである。
「命を――。どうしたんだ、小浪さん」
あきれかけながら、――そうか、芝居の幕があいたんだなと新三郎は気がついて、小浪の肩へ左手をかけ、顔を見ようとした。
「見ないで、恥ずかしい」
小浪は長いたもとで火のようになった顔をかくしてしまう。これが芝居かと思うほど、胸をはずませながら、体中が熱ぼったくなっているのだ。
「小浪さん、わしに命をくれって、本当か」
小浪ははっきりとうなずいてみせる。
「よし、命をやろう。それで、わしにどうしろというんだ」
「いっしょに、旅に出てくださいまし」
「旅に――」
これはまた意外なせりふである。
「こっちを向けよ、なにも恥ずかしいことなんかないじゃないか」
新三郎は両手で肩をつかんで、小浪の体をぐいとこっちへ向かせる。
「それで、いつ旅に出ようっていうんだ」
「明日なの」
小浪はやっと顔からたもとを放したが、さすがにこっちの顔は見られないようだ。

「明日な――。どうしてまたそう急に旅へ出なければならないんだ」
「元締めが、そのほうがいいっていいますのよ」
「島五郎がか」
「ええ。江戸にいては、鷲尾党が、大倉玄蕃がもうここをねらい出したから、あぶないっていうんです」
「そうか――。じゃ、みんないっしょに行くのか」
「いいえ。みんなで動いてはすぐ玄蕃のほうへわかってしまうから、乳母と三人で、しばらく上方へ行っていろといいますの」
「なるほど――」
しかし、用心棒が自分一人というのは、万一、敵の追っ手をうけた場合、相当危険である。そんなことをあの用心深い島五郎が考えないはずはない。この小浪の、いや、千鳥の体には、百万両という金がかかっているはずだ。
「元締めはまた、ずいぶん思いきったことを考えたもんだなあ」
「新三郎さまなら、きっと大丈夫だからっていいますのよ。三人きりのほうが、かえって目立たなくていいんですって」
「それはたしかにそうなんだが、万一ということがある」
「万一ということは、江戸にだってある。そんなことは天命に待てばいいので、ただ肝心なことは新三郎さまの覚悟ひとつだといいますの」
「無論、わしは小浪さんに命はやる。しかし、小浪さんはわしといっしょに、もしそういう時がきた場合、死んでもいいのか」
「死にます、あたくし」
小浪ははじめて顔をあげた。その目に激しい情熱がこもって、必死に男の目を見すえてくる。
「元締めもそれを承知なんだね」
新三郎はもう一度念を押してみずにはいられなかった。それほど小浪の顔は真剣そのものなのである。

「はい」
「よし、わかった。明日、いっしょに上方へ立とう」
「きっとでございますよ」
「わしも侍だ。誓言しよう」
「うれしい――」
小浪は小走るようにいって、すっと立ちあがると、なんのためらいもなく少し離れた行燈(あんどん)のそばへ行って、ふっと灯をふき消した。
――これも芝居のうちか。
一瞬真っ暗になったあたりへ、鋭く目も耳も働かせながら、新三郎は冷静になろうと息をのむ。小浪も行燈のそばにじっと立ちつくしているようだ。
正面にあいている蔵の東の窓が、そこだけぼうっと夜空の星あかりにそれと目についてきた。冷んやりとした蔵の中はしいんとして、物音一つしない。
「新三郎さま、どこ――」
ささやくような声で小浪が呼ぶ。
「ここだ」
小浪はひざまずいて、手さぐりしながらいざりよってくるようだ。
そっちへ差し出した手がふれると、その手をたよりに胸へすがりついてきて、
「抱いて、新三郎さま。小浪を抱いて」
と、あえぐようにいう。
「これも芝居か、小浪さん」
「いやっ、いやっ、本当に抱いて」
我にもなくしっかりと小浪の肩を抱いて、ふれあったほおがまるで火のように燃えているのがわかると、新三郎は小浪のくちびるを求めて上からのしかかるように口を吸いに行く。
「小浪――」
「切ない、新三郎さま」
激しいくちびるの愛撫(あいぶ)に、かたくなっていた生娘の女体から次第に力がゆるみとけて、いまはただ切なげに息をはずませているだけだ。

2

一刻（二時間）ほど待てといった黒住鬼堂が、ふたたび鷲尾屋敷の茶室のふすま戸の向こうへきたのは、まだ半刻（一時間）もたたないうちであった。
「玄蕃――」
「おお、早かったな、鬼堂」
「おれたちの世界は夜だけだ。一刻もむだにはできぬでな」
「それで、首尾は」
「妙な話になった」
「というと――」
「まず京屋の蔵の二階をねらったと思え。今夜は東の窓があいて、かすかに灯かげがただよっている。無論、常人では気がつくまい」
「のぞいてみたか」
「見た。京屋の屋根から窓へ飛びついてな」
「それで――」
「古賀と千鳥が置きごたつへさし向かいに入って、千鳥が古賀をくどいていた」
「古賀の傷はもうすっかりなおった様子か」
「なおったらしいな。ふろへも入ったらしく、さっぱりとした顔をしていた」
「小浪はまだ偽めくらのまねをしていたか」
「いや、今夜はもとの千鳥にかえっていた」
「すると、千鳥が古賀をくどいていたことになるのか」
　玄蕃はきらっと目を光らせながら、杯を膳へおいた。若菜が黙ってそれへ酒をつぐ。
「千鳥は古賀のそばへ立っていって、命をくれといった」
「命をな――」
「島五郎が、江戸にいてはあぶないから、古賀と二人で、乳母をつれて、明日上方へ立てといいつけたんだな」
「古賀はなんといっていた」
「万一追っ手がかかったらどうする気だと心配

していたが、万一は江戸にいたってあると千鳥が島五郎の言葉をつたえると、よし、それなら明日立とうと古賀が承知してな、千鳥は行燈を吹き消しに立った」
「それで――」
「後は見るにも及ぶまい。十八娘ははじめから古賀に身をまかせて、いっしょに上方へ立つ気だし、島五郎もそれを承知で千鳥を古賀に守らせる腹になったんだろう」
「島五郎はお京の部屋か」
「いや、島五郎は留守だ」
「それはおかしい」
「しかし、島五郎の見張りは四郎太がやっているんだろう。三郎三は京屋を見張っていたが、四郎太の姿は見えなかった。留守と見るほかはあるまい」
「なるほど――」
「板前の直吉、女中頭のお舟は、無論、まだ京屋にいる。八百富も家にいる。小浪の家は空き家同様、隣はお梶と小女の二人、その隣も留守ということになる。どうだ、玄蕃、穴さがしを決行してみる度胸があるか」
「むだだろう。というより危ない」
「急に弱気になったな、玄蕃。明日、千鳥が江戸を立つとすれば、天狗どもは抜け穴のある家のどこかで策をねっているはずだ。たとえば、もしその見込みが外れたとしても、抜け穴は京屋の蔵の二階へ通じている。そこで甘い夢を見ているのは千鳥と古賀だぞ」
「しかし、今夜無理に危険をおかさなくとも、千鳥はどうせ明日道中へ出る」
「陰供がつくぞ」
「それはつくだろう。忍者とちがってな、こっちは野戦のほうがやりいい」
「すると、おぬしも出馬する気か、玄蕃」
「なるほど、家来どもではちとたよりないな」
　玄蕃は思わず苦わらいをする。
「百万両の仕事だぞ。おぬしがしりごみするよ

うなら、この鬼堂が千鳥をさらってみせる。まあ、気長に考えておくことだ」
あっと玄蕃がふすま戸をにらんだ時には、どうやら鬼堂はもうそこを離れて、庭へのがれたようである。
独力で千鳥を手に入れた場合は、その入れたほうが百万両を独占するのは当然のことだ。百万両を二つに分けるのは、どうしても二人がかりでなければ千鳥が手に入らないという場合だけである。
鬼堂はいまそれをいいにきたのだろう。
――わしも少しぼけたかな。
玄蕃は苦いものを奥歯でかみしめながら、急に頭の中が火のように回転し出す。
その夜――。
小浪はとうとう朝まで蔵の二階から自分たちの居間へは帰らなかった。あまりにも芝居がうまくいきすぎて、筋書きどおりだけではおさまらなくなってしまったからである。
しかし、小浪は新三郎とそんなことになってしまったのを少しも後悔はしなかった。この二階で傷の手当をしてやっていた時から、もう新三郎が好きになっていたし、好きだからこそあんな芝居もできたのである。
いや、むしろそこまで行くことを、心のどこかで望んでいたと、今なら正直にいえもする。
「ねえ、これまで芝居だと思ってはいやですよ、新三郎さま」
やみは女を強くする。自分の女体の中に男というものをはっきり感じて、夢のような甘い興奮の絶頂がすぎると、小浪はしっかりと男の体を抱いて、いそいで念を押していた。
新三郎は黙ってもう一度強く口を吸ってくれてから、
「じゃ、どこまでが芝居だったんだ」
と、耳もとへ聞きながら、ぐいと抱きおこしてくれた。
「あの灯を消すところまで」

「御見物衆は――」
「黒住鬼堂なんですって」
「なにっ」
さすがに新三郎はびっくりしたように窓のほうを見ていた。そして、
「とにかく、あかりをつけよう」
というのである。
「いやっ、恥ずかしいんですもの」
「ばかだなあ。もう夫婦になったもおなじなんだよ。一生やみの中で暮らすわけにはいかないんだからね」
「小浪はそれでもかまいませんのよ」
「冗談いうなよ。せっかく目があいているのに、なにもめくらのまねなんかしなくてもいいだろう。――ああ、そうか、行者さんはこの間までめくらだったんだな、かわいそうに」
そっと肩を抱いて、目をなめてくれたのである。小浪はかっと胸が熱くなってきて、
「きっと一生おそばにおいてね、新三郎さま」
と、思わずまたしても男の胸へしがみついていた。
物心ついてから、そんな甘え方をだれにもしたことがないし、また、する人もなかった小浪なのである。
それが、やっと甘えられる人ができてみると、その人のどこかにさわっていないと安心できない、そんな気持ちで、
「さあ、明日のことがあるんだ。くわしいことを一通り話してみてくれ」
新三郎が行燈に灯を入れて、東の窓をしめきり、こたつの座へもどってくると、小浪はそのそばへぴったりと肩を寄せて座って、もう男の腕をしっかり自分の胸へ抱きしめていた。
「灯がついても、恥ずかしがらないねえ」
「いやっ、そんなことおっしゃっては」
やっぱり顔が赤くなる。
「どうして鬼堂にあんな芝居を見せなくちゃならなかったんだろうな」

「江戸でにらみあっていたんでは、玄蕃に復讐（ふくしゅう）する手段が難しいんですって」
「なるほど――」
「鬼堂は前からこの蔵に目をつけて、時々屋根へのぼっていることもあったんです。だから、窓があいていればきっとのぞきにくる。その時、あたしたちが上方へ行くとわかれば、それが玄蕃の耳へ入って、東海道へ誘い出せるとみんなで考えたんですって」
「そうか――。しかし、玄蕃が自分で出てくるかな」
「だって、あたくしが鬼堂につかまっては大変だと考えるでしょう」
「うむ、それがあったな。すると、元締めたちはもうちゃんと道中で玄蕃を討つ計画を立てているわけだね」
「ええ」
「一つ間違うと、逆に小浪をさらっていかれる、それも無論承知しているんだな」
「思いきって決戦に出ようっていう覚悟らしいんですのよ」
「こっちの人数は何人ぐらいなんだろう」
「それは、江戸を立ってから、どこかで元締めが新三郎さまにお目にかかって、自分から話すといっていました。敵の目が多すぎるから、江戸では安心してお目にかかれないんですって」
「そうか、そのくらいの用心は当然かもしれないな」
「あたくしもそのほうの話はあんまり聞いてませんの。女はなんにも知らないほうがいいんだって、みんな仲間外れなのです」
「しかし、困ったなあ」
「なにがですの」
「元締めは、わしが小浪さんを黙ってお嫁にするとは、まさか計算に入れていなかったろうからなあ」
「いいんですのよ。小浪は新三郎さまのお嫁になりたかったんですもの。これは敵討ちとは別ですわ」
「それはそうなんだが、おれは、百万両をねらってこんなことになったと、元締めに思われたくないんだ」
「そんなことありませんわ。もし元締めがそんなことを考えるようでしたら、小浪も百万両などいりません。みんなで分けてもらうことにします」
「本当か、小浪さん」
「もうさんはいりませんわ、小浪とお呼びになって――。あたくし、新三郎さまのお嫁になれさえすれば、ほかのものはなんにもいりませんのよ」
　それは愛情というものに飢えている小浪の本心だった。
「わかった。わしもまた、小浪さえあれば、ほかになんの欲もない男なんだ」
「うれしい、新三郎さま」
「じゃ、死ぬも生きるもいっしょときめて、明日は二人で江戸を立つことにしよう」
　こうして、小浪はとうとうその夜、蔵の二階へ泊まってしまったのだが、お京も乳母のお浜もそれを黙認して、別に呼びにもこなかったところを見ると、この芝居は若い二人がそうなることをあらかじめ承知の上で、島五郎が書いたのかも知れない。

3

　翌朝――。
　まだ夜明け前の七ツ（四時）ごろ、古賀新三郎と小浪は、お京と乳母のお浜が蔵の中へ運んでくれた旅支度をして、心ばかりの門出の祝いの膳（ぜん）についてから、二人きりでこっそりと京屋を旅立ったのである。
「古賀さん、いまさらあたしからなにもくどくどと申しあげることはございません。ただもう、小浪さんのことをくれぐれもよろしくお願いいたします」

お京はそういって若い二人に別れの杯をすすめてくれた。胸の中では、それがまた同時に祝言の杯という気持ちがたぶんにあったにちがいない。

「お嬢さん、乳母もいっしょにと思ったんですけれどね、元締めがかえって足手まといになってはといいますので、こんどは残ることにしました。道中へ出れば、もう古賀さんだけがたよりなんですから、わからないことはなんでも教えていただいて、決して体に無理をなさらないように、旅でわずらいでもするとそれこそ大変ですからね、ようござんすか。乳母はただそればかりが心配で――」

お浜は何度も涙をふきながら、子供にでも教えるようにあれこれと、小浪のことばかり心配していた。

「乳母も達者でね」

小浪もさすがに目のふちを真っ赤にしながら、膳にはほとんど箸をつけなかったようである。

こうして真新しいわらじをはいて表へ出ると、江戸の町はまだひっそりとした星空の下に暗くしいんと寝しずまっていた。

新三郎は片手に小田原ぢょうちんを持ち、片手で小浪の手をひいてやって、筋違橋をわたり、大通りをまっすぐ日本橋のほうへ向かう。

無論、まだ歩いている者などには一人も行きあわないから、とうとう二人きりになったという感じがいっそう深い。

が、事実はそうではないはずだ。このちょうちんの灯を目あてに、すでに敵の目がどこからか尾行しているだろうし、また味方の目もいくつかこっちへ光っているはずである。

いってみれば、新三郎と小浪が京屋を一足外へ出た時から、もう敵味方の激しい闘いの幕は切っておとされているのだ。ということは、また、一つ間違うといつどこで若い二人の命はこの世から消されてしまうかわからないということでもある。

それだけに、新三郎は、自分一人をたよりにして、こうしてわが手にすがっておとなしく歩いている小浪が、いじらしくてたまらなくなってくるのだ。

「小浪は前に旅をしたことがあるのか」

今川橋へかかるころ、新三郎は何気ない調子で小浪に話しかけてみた。

「ありますのよ、十三ぐらいの時――」

小浪の声は思ったよりあかるい。

「ああ、そうか、江戸へ出てくる時だね」

それは尼崎で天野屋の一族がふいにむごたらしい運命のあらしに見まわれた時のはずである。つまらない話を持ち出してしまったと、新三郎は内心はっとしたが、

「乳母と二人で、大坂までは船でしたけれど、大坂から歩きましたの」

と、小浪は別に気にもしていないようだ。

「じゃ、旅の味は知っているわけだな」

「ええ。でも、心細い道中でしたわ。乳母に負けないように、歩くにはよく歩きましたけれど」

「なるほど、そりゃ心細かったろうなあ、普通の道中とは違うんだからね」

「心細いのは、江戸へきてからもずっとでしたわ。なんだかうそのよう」

「なにがうそのようなんだ」

「あたくしねえ、わらってはいやですけれど、今日はもう自分でもふしぎなくらい、心細くも寂しくもなくなっているんですのよ。昨日まであんなに寂しかった自分が、まるでうそみたいな気がするんですもの」

小浪は胸にあふれているよろこびを隠そうともせず、しっかりと手につかまってくるのである。

「ああ、その気持ちなら、わしだっておなじだ」

「どうしてなのかしら。あたくし、さっきから、これがもし夢だったらどうしようと、そんなことばかし考えているんです」

「夢じゃないさ。わしとおまえはもう別々には生きられなくなったんだ。たとえば、小浪がおなかが痛くなれば、わしもいっしょに苦しむようになる。昨日までは、わしは駆け出したいと思えばいつでも勝手に一人で駆け出せた。ところが、今日は駆け出す前にまず小浪の足のことを考える。たのしみも苦しみも一人でするんじゃない、二人でするんだ。それが夫婦というものなんだ」
「うれしい、あたくし。本当は、こんどの旅は命がけでとても心配なはずなのに、あたくし、新三郎さまとならいつ死んでもかまわないような気がしていますのよ。ねえ、死んでからでもこうして手を握っているの、わかるものですかしら」
　そんな無邪気なことをいい出す花嫁なのだ。
　一つ間違えばまっすぐ地獄へ通じるような心重い道中へ踏み出してきて、こんなうれしい話がして歩けるとは、新三郎もちょっと意外だった。
「小浪、わしもおまえとなら、いつ死んでもたのしい旅ができそうな気がしてきたな」
「いいえ、死んではいけませんのよ。二人でもっともっとたのしく生きなくては。まだ、ゆうべ御夫婦になったばかしなのですもの」
「それはそうだ。なにも無理に死ぬことはないんだ」
「あたくし、生きていて本当によかった。あなたとこうして歩いていると、とてもたのしい。もう、あたくし、昨日までのように一人ぼっちじゃないんですものね」
「昨日までだって、蔵の中ではよく二人きりでいられたじゃないか」
　新三郎はこのかわいい花嫁をちょいとからかってみたくなる。
「それはそうですけれど、あの時はいつあなたがあたくしから離れていくかもしれないと思って、なんだか悲しい時のほうが多かったのですもの」
「じゃ、小浪は、もうあの時からわしのお嫁になりたかったのか」
「いいえ、自分にはもうお嫁になったつもりでいましたのよ。ですから、時々、新三郎様の傷がこのままいつまでもなおらなければいいいなと、よくそんなことを考えましたのよ」
　小浪は正直にいってから、
「でも、本当によかった。もう一生御夫婦なのだし、こうしてだれにも遠慮なく二人で歩いていられるのだし、あたくしとても安心で、これがもし夢だったら悲しいなあとそれが怖いくらい」
　と、ぴったり肩をよせてくるのである。
　日本橋から品川へ二里、だれにもじゃまをされず、そんな甘い言葉をかわしながら、新三郎はこれはまったくすばらしい花嫁だと、正直にいえば自分たちはおとりになっているのだということさえ、うっかり忘れがちになっていた。
　そして、やがて高輪(たかなわ)海岸にかかるころ、東の空から白々と夜が明けかけてきたので、新三郎は小田原ぢょうちんを消して、たもとへしまった。往来にはまだほとんど人通りはなく、品川の青楼から朝がえりの客をのせた駕籠(かご)が時々、えんほい、えんほいと朝霧の中を威勢よくすれちがっていくぐらいのものである。
「小浪、高輪の大木戸を出ると、少しいそがしくなるかもしれないよ」
「どうしてですの」
「敵も江戸の中では思いきったことができない。しかし、江戸を出てしまえば、支配が町方から代官の手に移る。取り締まりがのんびりしてくるから、仕事がしいいということになるんだ」
「怖い、あたくし――」
　無邪気な花嫁は、そっとたもとをつかんでくる。
「おかしいな、小浪は行者さんだった時、もっ

と強い娘に見えたがなあ」
「昨日までは強かったんですのよ。一人の時は強くなければ負けてしまいます。今日はもうあなたがいるからだめ。本当は、あたくし、気の弱いやさしい娘なんですもの」
「そうか――。しかし、大木戸を出たらまた強い娘にならないと、敵は決して遠慮なんかしないからな」
　しかし、事実は敵は大木戸まで待っていなかった。
　高輪海岸は左手に波の音を聞いて八町ほどつづく。右手が町つづきで、泉岳寺の前を通りすぎてからまだそう歩かないうちに、ふいにある寺の門のあたりから、つかつかと旅支度の侍が二人、行く手へ出てきて立ちふさがったのである。
「早いなあ。もう出たようだぞ、小浪」
　新三郎は苦わらいをしながら、小浪をうしろへかばうようにして、彼らの前へ進んでいった。
「あなた、しっかりしてね」
「大丈夫だよ」
　どっちもまだ三十前の田舎侍くさいがっしりとした侍どもで、さすがにもう目が血走っているようだ。
「貴公たちはわしになにか用がありそうだな」
　新三郎は用心深く抜きうちのきかない距離のあたりへ立ちどまる。
「貴様は古賀新三郎だな」
「さよう――。あなたがたは」
「名乗るまでもなかろう。鷲尾党の者だ」
「お手やわらかに願いたいなあ。わしは女づれなんだ」
「その女は、天野屋の娘千鳥だな」
「それは違う。これはわしの家内で小浪というんだ」
「なにっ、家内だと――」
　二人はきらっと目を光らせながら、
「うそをつけ。その娘が千鳥だということも、

その千鳥が行者の小浪に化けていたということも、もうこっちは調べあげているんだ。その娘をおとなしくわたしてもらおう」
　と、頭から高飛車に出てくる。
「それは困る。これはわしの家内なのだ。人の女房を横取りするのは山賊の行為だ。侍のすることじゃない」
「黙れっ、すなおに千鳥をわたさなければ、貴様をたたっ切ってつれていくぞ」
「そうか――。鷲尾さんは五年前に、天野屋一族にあらぬ罪をきせ、みな殺しにして財産を横領したそうだが、まだ少しも後悔していないようだな。いいか、貴公たち、ここはまだ江戸のうちだぞ、尼崎の片田舎とちがって、ここで貴公たちがおいはぎ強盗を働いて、町方の者につかまると、気の毒だが、主家が断絶をする。それでもここで刀を抜くかね」
　新三郎は二人をからかいながら、それとなくあたりへ気をくばっている。
　二人きりでここへ出てくるというのは、少し大胆すぎるようだからだ。
「ええ、面倒だ。たたっ切れ」
「心得た」
　二人は目をつりあげながら、さっと同時に抜刀した。
「うぬっ」
　すかさず抜きあわせた新三郎は、海辺のほうへ小浪をかばいながら、青眼の構えをとる。
　今になっても敵の加勢が出てこないところを見ると、どうやら敵はこの二人きりらしい。
　――そうか、この二人はこっちの様子をさぐりにきたんだな。
　とっさに新三郎は気がついた。つまり、大倉玄蕃は、こっちにどんな陰供の手くばりがあるかを見るために、まずこの二人を刺客（せっかく）に向けてみたので、あながちここで決戦をしようというのではないのだろう。
　よし、敵がこの二人だけならちゅうちょする

ことはない。それに、ここでこっちの陰供を見せてしまうのは玄蕃の手に乗るようなものだから、なるべく早く片づけてしまう必要がある。
「とうっ」
新三郎はじりじりと間合いをつめて出る。
「えい」
「おうっ」
二人のほうも選ばれてここへ出てくるくらいだから、十分腕には自信があるらしく、一歩もさがろうとはしない。
双方の距離が一刀一撃のきくところまで縮まると、いやでも白刃が火花を散らすことになる。
「とうっ」
こっちは真剣勝負に何度か経験があるから、相手の強弱は構えているうちに直接に肌へ感じてくる。
敵はこっちの度胸のいい強引さにいささかかたくなってきたようだ。もう少しで間合いが一撃の頂点に達するところまで迫ると、右の敵がたまらなくなったように、じりじりと少し外がわへまわりこむようにさがりはじめた。
踏んごんで出る絶好の機会だ。
「えいっ」
新三郎は地をけって、一刀をまず左の敵の胴へたたきつけ、つばめがえしの二の太刀で、
「おうっ」
右の敵を片手なぐりに火のようになぎ立てる。
「わあっ」
「う、うっ」
はじめからこっちの捨て身の気力に圧倒されていた敵は、一人は腰の上あたりを、一人は高股のあたりを鋭い切っ先にかけられて、ひとたまりもなくのけぞり倒れていく。

4

「小浪、行こう」
新三郎は刀をぬぐって鞘におさめると、真っ青になっている小浪をうながして、もうさっさと大木戸のほうへ歩き出していた。
双方刀を抜いてからはほんのあっという間の短い血闘で、敵はその二人きりで加勢はなかったらしく、どこかで見ているはずの味方の陰供も、飛び出してくる暇はないようだった。
「あなた、背中の傷はなんともない」
小浪はなによりもそれが心配らしく、そっと腕につかまりながら聞いていた。
「いや、傷はもう大丈夫だ」
それっきり二人とも大木戸を出るまでは口もきかずに、なにかに追い立てられるように自然に足が早くなっていた。
「くたびれたか、小浪」
大木戸を出てから新三郎はふっと気がついて、足をゆるめながら、いたわるように聞いた。
「いいえ」
かむりを振ってみせた小浪は、いくらか汗ばんだような赤い顔になっている。
「なにも逃げることはなかったんだ」
新三郎は我ながらおかしくなってくる。
「ねえ、あたくし少し心配になってきましたのよ」
「どうして——」
「本当に元締めはあたくしたちに陰供をつけておいてくれるんでしょうか。さっきは、どこからも、だれも出てきませんでしたわ」
「敵はたった二人きりだから、わし一人で大丈夫と見ていたんだろう」
「そうですかしら。でも、たった二人きりだって、相手が強ければどうなるかわかりませんもの、あたくし心配ですわ」
小浪は不服というより、むしろ不安でたまらないようである。
「いや、元締めはわしを十分信用しているから小浪をお嫁にくれたんで、目的はおたがいに大倉玄蕃を倒すことにあるんだ。だからおたがいの敵はなるべく自分の力で倒していく、あまり

人の力をたよってはいけないんだ」
「それはわかっていますけれど――」
「それに、さっきの二人は玄蕃がこっちの手くばりの様子を見によこしたんだから、陰供は出ないほうがよかったんだ。たとえば、わたしたちが本当に二人きりで歩いているとわかれば、玄蕃は安心して小浪をさらいにくる。そこをねらって、逆に玄蕃を片づけようというのが、たぶんこんどの元締めのねらいなんだろうからね」
「そううまくいきますかしら」
「それは玄蕃だって、そう一筋なわでいくような生やさしい敵じゃないんだから、これから毎日しのぎをけずるようなあぶない勝負がつづくと思わなけりゃならないだろうね。しかし、うまくいかなければこっちの負けで、みんな命がないことになるんだから、どうしても勝つという覚悟で、あくまでも闘っていくほかはないんだ。怖くなってきたのか、小浪」
新三郎は冗談のように聞いてみる。
「あなたといっしょなら、あたくしなにも怖くはありませんわ。覚悟はちゃんとできていますのよ。ただ、あなたと別れるのだけは、もうどうしてもいや」
小浪の本音はそこにあるようだ。つまり、今は一族の復讐(ふくしゅう)ということより、男の愛情というものに少しでも長くひたっていたい、そんな娘心のほうが強くなっているのだろう。
品川の宿を出外れて、やがて鮫洲(さめず)へかかるころ、ようやく海から朝日がのぼってきた。品川から川崎へ二里半、いつの間にか前にもうしろにも旅支度の人の姿がちらほらと、みんな川崎へいそいでいるようだ。
「小浪、おなかがすいてこやしないか。おまえ、今朝は膳(ぜん)にあまり箸(はし)をつけていなかったようだからな」
「少しすいてきましたの。でも、まだ我慢できますのよ」
鮫洲橋をわたると鈴ガ森で、そこの海辺のほうの一本松の下によしず張りの掛け茶屋があるが、朝が早いからまだ店の前をよしずでかこったまま、茶店の者は出てきていないようだ。
「よし、あそこを借りよう。おまえが腹をすかせるだろうと思って、わしはちゃんと握り飯を用意してきているんだ。なにも無理に腹をすかせて歩いていることはない」
新三郎はわらいながら、よしずのすきから茶店の中へ入って、二つにかさねてある上の床几(しょうぎ)を取りのけて席をこしらえてやった。
「親切なだんなさま――」
「いや、これが夫婦というものなんだ。さっき、おまえが腹を痛くすると、おなじようにわしが苦労するんだといったろう。小浪が腹をすかせると、それがわしにすぐわかる。さあ、おあがり」
新三郎は左の肩から斜めにしょっているふろしき包みをおろして、中から竹の皮包みの握り飯を出してやる。
「うれしいわ、あたくし」
小浪は本当にうれしそうな顔だった。
「茶のないのが残念だが、そのうちにどこかでまた掛け茶屋が見つかるだろう」
「あなたは召しあがらないんですか」
「そうだな、わしは朝飯を食ってきたんだが、一つだけ付き合うかな」
三つ用意してきた握り飯の一つを、新三郎もつきあうことにした。
人目をさけたよしず張りの中の二人きりの朝飯は、波の音を聞きながら、本当に旅へ出てきたようで、若い二人にはとてもたのしかった。
ふっと茶店の横の一本松のほうのよしずの外へ、往来のほうを向きながら立ち止まった男がある。
「あなた――」
小浪がどきりとしたように新三郎の顔を見る。
「うむ」
長脇差(わきざし)をさした股旅姿(またたびすがた)の男で、三度笠(さんどがさ)を目深

にかぶっているから顔はわからない。
ちょうど往来に人足が絶えていた。
「古賀さん、伊太吉だ」
「やっぱり伊太さんだったか」
新三郎はどうもそうらしいなと見ていたのである。
「さっき高輪で切った二人ね、あれは高輪の尼崎の下屋敷へ運ばれていった。命は助かりそうだぜ」
「ああ、そうか。高輪には尼崎の下屋敷があったねえ」
「玄蕃はゆうべのうちにそこへ人数を集めている。本陣はまだそこにあるんだ」
「人数は——」
「二十人ぐらいと見ていいだろう。これはみんな尼崎の家来たちばかりだから、甘く見ちゃいけないようだ」
「よし、わかった」
「これから先に、敵の第二の待ち伏せがある。どこで出るかわからないが、六郷の渡しまでの間で、きっと出る。人数は五人ほどだ。できればこっちはまだ顔を出したくないんだが、どうだろうねえ」
伊太吉は相談するようにいう。
「敵としては、小浪を高輪の下屋敷へさらっていきたいんだろうな」
「たぶんそうだろうと思うんで、そっちのほうの手くばりはおれが引きうけることになっていやす」
「よし、じゃ、五人のほうはわしが一人で引きうけよう」
「真っ昼間の表街道なんだから、敵もそうあくどいまねはできないと思うんだ。勝負は簡単につくと見ているんですがね」
「まあ、そうだろうな」
「古賀さん、それとは別だが、小浪さんのことはたのみますよ」
「それも安心してくれ。わしの目の黒いうちは

な」
「じゃ、たのみます」
伊太吉はすっと往来へ出て、鈴ガ森のほうへすたすたと歩き出した。
見ると、小浪が体中をかたくして、じっとうなだれているようだ。
「どうしたんだ、小浪」
「あたくしもういや。——つまらない」
「なにがつまらないんだ」
「伊太吉たちは、あなたは死んでもいいと思っているんです。あんまりです」
「なんだ、そのことか。それなら、さっきもいったじゃないか。自分の敵はなるべく自分で片づける、そういう建て前でないと、幾人味方があったって、本望をとげることは難しいんだ。みんなそのつもりで苦労しているんだから、そうおまえのようにわしに都合のいいようにばかり考えようったって無理なんだ」
「もういいんです。あなたが死ねば、あたくしだってそのそばで死ぬ気でいるんですから」
小浪はすっかりつむじを曲げてしまったようである。
「そんな心配をしなくたって大丈夫さ。わしはめったに負けるような男じゃない。小浪だってよく知ってるじゃないか」
新三郎はわざとあかるくいってわらってみせる。
「でも、あたくし、やっぱり心配ですのよ。胸が痛くなるほど」
「わかったわかった。お嫁さんを泣かせるようなことは決してやらないから、まあ見ていなさい。——あの伊太吉はやっぱり一族なのか」
「ええ、大番頭磯右衛門(いそえもん)の息子で、磯吉というのが本当の名なんです。血のつながりもあるんですって」
「そうか、磯右衛門のせがれか」
兄の牢番(ろうばん)新兵衛は、その磯右衛門を牢から助け出して、自分は玄蕃に切られているのだ。

「平吉という男は——」
「伊太吉の弟ですのよ」
「みんな一族ってわけだな。味方は何人ぐらいいるのか、小浪は知っているのかね」
「十二、三人じゃないのかしら。くわしいことは元締めが教えてくれないのです」
なんとなく寂しそうな小浪の顔なのである。

5

六郷の渡しへかかろうとする土手の手前の左がわに、農家が片手間に店を出しているといったような休み茶屋がある。
わらじをぶらさげた軒下へ床几(しょうぎ)を二つばかり並べて、土間の障子をあけ放し、土間にも床几をおいて、店に塩せんべいや駄菓子(だがし)の屋台をおき、そのわきの手桶(ておけ)の中にところてんが浮かしてあるという本当の掛け茶屋で、酒類や御飯物などはおいていない。
その表のほうの床几に、いましがた掛けて渋茶をもらってひと休みしているのは、どこか江戸の大店(おおだな)の若夫婦といった身なりの一組みで、中年の番頭が一人ついている。
女房のほうは赤い手柄をかけて初々しい丸髷(まるまげ)に結い、結いつけ草履という軽い旅支度だし、若い主人も中年の番頭もわらじははいているが、別に荷物らしいものを持っていないところから見ると、これから川崎の大師まいりでもして、日いっぱいに江戸へ帰ろうという主従らしくも見える。
若女房のほうはまだ新婚早々で、丸髷が気恥ずかしいといった感じだが、年はもう十九か二十、すらっとした体つきの人目につく器量で、ただちょっと気になるのは、どこかさえない顔色で、物おもいに沈みがちといったところのあることだ。
それに引きかえて、そばに掛けている若主人のほうは至極明るい顔のすっきりとした江戸前の男ぶりで、渋い道中差しがぴたりと身につい

ているのはよっぽど旅なれた男なのだろう。
その旅なれているというかっこうからいえば、別の床几に掛けている番頭のほうも、きりっとしたわらじのはき方で、中肉中背の体つきにも五分のすきもないようだ。
時刻はやがて四ツ（十時）をすぎるころで、前の街道を渡しへいそぐ人たちが、つづくともなく絶えるともなく、たいていの者がみんな若女房のほうを横目にかけていくようだ。
さっきから店の土間の床几に、中間一人をつれた勤番者らしい旅支度の侍がこっちへ背を向けて休んでいたが、ふっと表のほうを振りかえって、若女房に目をとめ、はてなといいたげな顔をしながら、
「失礼だが、そこにいるは江戸神田連雀町の松葉屋のお葉ねえさんじゃなかったかな」
と、無遠慮に声をかけてきた。
年ごろ三十がらみの、どこか鋭い顔つきの侍である。
「あら、どなたさまでしたかしら」
丸髷のお葉はびっくりしたように目をみはる。
「やっぱりそうだったか。わしの名をいったところで、そっちはたくさんの客だからわからないだろうが、こっちは一度見に行っただけでも看板娘だから忘れっこない——。連れは御亭主かね」
「ええ」
「いつ嫁に行ったんだ。看板娘が丸髷になっちまったんじゃ、松葉屋の定連がさぞがっかりするんじゃないのか」
勤番者は臆面(おくめん)もなくお葉に話しかけながら、じろじろとその亭主だという男の顔を見ている。
「お葉、お店のお客さまだった方のようだね」
亭主のほうは人のいい微笑をうかべながらお葉に聞いている。
「あたし、どなただったか思い出せないんです

けれど」
　お葉はちょっと当惑しているようだ。
「貴公も松葉屋の定連だったんだろうな、無論」
「そうなんです、お武家さん」
「うまく看板娘をくどき落としたもんだなあ。いつ女房にしたんだ」
「まだほんの夫婦になったばかりなんです」
「そうだろうな。つい二、三日前まではまだ丸髷じゃなかった。貴公はどこの者なんだ」
「神田多町の青物市場の、八百清のせがれで一太郎といいます」
「そうか、連雀町とは近いところだな。夫婦でどこへ行くんだ」
「箱根へしばらく湯治へ行ってこようと思って出てきました。失礼ですが、お武家さまはなんとおっしゃるんですか」
「名乗ってもわかるまいが、おれは中倉五郎蔵といってな、尼崎の家来だ」
　五郎蔵は悪びれもしないで、ずばりと名乗りをあげる。
「ああ、これはどうも失礼しました。お葉からちょいとおうわさはうかがっていました」
「どんなうわさだ、八百一」
「いいえ、もうそんなことはよろしいんです。八百屋とはなんの関係もないことなんですから。ねえ、お葉」
　八百一はお葉の顔を見ながら、これも悪びれたところは少しも見せない。
「お葉は古賀新三郎という男とだいぶ仲よくしていたんじゃないのか」
　五郎蔵はなに食わぬ顔をしてすっぱ抜く。
「いいえ、本当はそれほどでもなかったらしいんです。そうだろう、お葉」
　八百一がまじめに弁解する。
「そうか――。それほどでもなかったのか。それならいいが、あの男はあれでなかなか食えない女たらしでな、なんでもお嬢行者の小浪の家へ入りこんで、とうとう小浪をくどき落としたらしいという話だ」
「小浪って、あのめくら行者のことですか」
「それが、その小浪って小娘も相当な女狐(めぎつね)でめくらは作りものでな、つまり、その作りものを古賀に見破られたんで、しようがなくて身をまかせてしまったらしいんだな」
「本当ですか、中倉さん」
「本当だとも」
「お嬢行者の家は、どこかへ二人とも行方をくらましたまま、まだ帰ってこないって聞いているんですけれどもねえ。中倉さんはお嬢行者の行方を知っているようですねえ」
「そりゃあ知っているさ。八百一は古賀がけがをしたのを知っているか」
「そんなうわさですねえ。それっきり古賀さんは松葉屋へも姿を見せないので、そのうわさは本当かも知れないって話していたんです。ねえ、お葉」
　お葉は黙って足もとへ目を伏せたまま、軽くうなずいてみせただけだ。
「実は、それが大した傷じゃないんだ。あいつはずるいから、それを口実にしてあの晩行者の家へあがりこんで、小浪の作りめくらを見つけてしまったんだな。そこで、おれのいうことをきかないとそいつを世間へばらすぞと脅迫したんだ。小浪はしようがないんで、古賀を当分かくまうことにして、行者の家の前に京屋という出会い茶屋みたいな家だ、あそこの蔵の二階へかくまうことにして、傷の介抱をしてやりながら、古賀のいうこともきいていたというわけなんだ」
「おどろきましたねえ、古賀さんはそんなお嬢行者をくどいて、どうする気なんでしょうね。おかみさんにする気はあるんですか」
「それはあるとも――。お嬢行者はあれで小金もためているし、行者という稼業(かぎょう)があるから、女房にしておけば古賀は一生食いっぱぐれがない」

「中倉さまはよく古賀さんのそんなかくれ家までわかっているんですねえ」

八百一はあきれたような顔つきである。

「おれはな、古賀とは敵同士なんだ。お嬢行者にも恨みがある。お葉はそれを知っているはずだな、おい」

五郎蔵はじろりとお葉のほうを見すえながらいう。

「あたし、もうそんなことは忘れてしまいました」

お葉は目を伏せたまま、そっちを見ようともしない。

「そうか、まあ、そのほうが無事というもんだ。いつまでも女たらしの古賀なんかにつきまとっていると、ろくなことはない。おれはおまえのその丸髷姿を見て、よく古賀を思い切ったと、実は感心しているんだ。まあ、こんなことは新しい御亭主の前でいうことじゃないが、あんなやつの子供でもはらまされちまってからじゃ間にあわない。なあ、八百一、そうだろう」

こんどはじろりと男のほうを見て、にやにやわらってみせる。

「そんなことはありません。お葉は古賀さんとはなんでもなかったんです。ただ、なにか間違えられて、とんだ災難をくってしまったんです。本当に古賀さんとはなんでもなかったんです」

「そうかなあ。でも、つい二、三日前までは、ずいぶん古賀の行方を心配して、さがしていたんじゃないのか。八百一はどんなうまいくどき方をして古賀のほうをあきらめさせたんだね」

五郎蔵のいうことはだんだん露骨になってくるようである。

「どんなことって、おれは本当は古賀さんは死んだんだと思っているんです。だから、しばらく箱根へでも湯治に行って、もうそんなことは忘れるようにってお葉にすすめて、江戸を立ってきたんです。古賀さんが生きているなんて、おれにはどうしても考えられません」

八百一の顔もなんとなくむきになってきたようだ。

「そうか、そりゃ八百一にすればそのほうが都合がいいだろうからな。まあいいだろう、今もいうとおり、たとえ古賀は生きていたって、お葉にとっちゃ死んだも同然の男なんだ。古賀なんかのことはもうきっぱりあきらめて、親切な八百一といっしょになったほうがお葉のしあわせなんだ」

「そうですとも――。お葉、古賀さんは本当に死んでいるんだぜ。だれがなんといっても迷うんじゃねえぞ。そのわけはおれがよくいって聞かせたろう。あれが本当なんだ。いいだろうな」

八百一が強引に押しつけていくと、お葉は黙ってうなずいてみせる。うつむいている顔がひどく青ざめているようである。

「さあ、じゃそろそろ出かけようか。川崎でおひるにしてもいいからな」

八百一は急にそそくさと立ちあがろうとする。

「まあ、もう少し待ってみろよ、八百一。ことによると、いまここを古賀と小浪が夫婦気取りで通るかも知れないぞ」

「なんですって、中倉さん」

八百一はどきりとした顔つきだ。

「そうびくびくしなくてもいいだろう。どうせ古賀はもう小浪に夢中になっている男なんだ。それを見たほうが、お葉だっていっそあきらめいいはずだ。なあ、お葉、そうだろう」

なんとなく冷笑をうかべながら、底意地の悪いことをいい出す五郎蔵だ。

「中倉さん、おれたちをあんまりからかわないでください。古賀さんのことなんか、おれたちはもうどっちでもいいんです。――さあ、お葉、出かけよう」

そこへ、ちょうど表から入ってきたおなじような勤番侍が軒下へ立って、土間の五郎蔵に、

「きたようだぞ、五郎さん」

と、妙に目をぎらつかせながら告げた。
「そうか、心得た」
五郎蔵はかたわらの中間に素早く目くばせをしておいて、つかつかと軒下まで進み、蒲田のほうを見ながら、
「八百一、あれを見ろ。おれのいったことはうそじゃあるまい」
と、八百一のほうへいう。
「あっ」
八百一はそっちを見て、思わず立ちあがっていた。
旅支度の古賀新三郎と、これも初々しい旅姿の小浪と肩をならべ、なにか話し合いながら六郷の渡しのほうへ進んでくる。それはだれが見てもむつまじいというかっこうで、新婚の夫婦としか見えない。
その前にも、うしろにも、近くにはちょっと旅人の姿はないようだ。
この茶店の前は青麦畑で、それがすぐ六郷の土手へつづいていた。

6

「小浪、あの茶店は怪しいな」
新三郎は自分たちのずっと前を歩いている勤番者風の侍が土手の手前の掛け茶屋へ入るのを見て、小浪にいった。その男はさっき道筋でわらじのひもをなおしていて、こっちが近づいていくと、何気なく立ってすたすたと前を歩き出したのだ。その時から、こいつくさい、敵の物見だなと、新三郎はにらんでいたのだ。
「人数は五人ぐらいだと、伊太吉がいっていましたね」
小浪は体中をかたくして、そっとたもとにつかまってくる。
「うむ。何人いたって、わしの小浪をねらっているやつはみんな切る」
「あなたなら大丈夫ですわ」
「わしは負けやしない。だから、小浪は安心して、切り合いがはじまったら少し離れているんだ。けがでもすると困るからな」
「そうしますわ。きっと勝ってくださいね」
二人とももう決して弱音は吐かなかった。いくら愚痴をいってみたところで、くるものは必ずくるのだ。そういう約束になっている道中なのだから、命のあるかぎりただ全力をつくして闘うよりしようがないのである。
——はてな。
茶店が近づくと、そこの軒下の床几に休んでいる丸髷姿の若女房があざやかに目についた。お葉のようである。
しかも、お葉の連れは町人姿に変装はしているが、清川一馬にちがいない。供の番頭はこれも多町の岡っ引き安二郎である。
三人ともじっとこっちを見ている。
一体、この三人はなにをしにこんなところへ出てきているんだろうと、こっちも思わず三人のほうを見ながら近づいていくと、つかつかと茶店の土間から、さっきの勤番者を入れた三人のやつが往来へ出てきて、前へ立ちふさがった。
土間にまだおなじようなやつが二、三人控えているようである。
「古賀新三郎さんですな」
真ん中の目つきの鋭いやつが、いきなり声をかけてきた。ほかの二人はもう妙に顔を引きつらせているが、こいつだけは落ち着いている。
「どなたでしたかなあ」
「中倉五郎蔵です。名前ぐらいは耳にしていると思うんだが」
「すると、玄蕃さんの四天王の一人の五郎蔵さんですな」
新三郎の顔に微笑がうかぶ。
「連れはお嬢行者の小浪だな」
「いや、いまは古賀の女房の小浪です」
「小浪は軍兵衛どのをめくらにした。二郎次の頭を狂わせたのも小浪の一味の者だ。小浪は我我の敵だ。こっちへ渡してもらいたい」

五郎蔵はぬけぬけとそんな理屈をこねる。

「小浪、気にしなくてもいいよ。この方々は自分でも恥ずかしいから無理に理屈をこねているんだ、本当は三人とも山賊の手下なんだ。こんな真っ昼間、街道筋へなど出てこられる顔じゃないんだが、どうもみんな頭がおかしくなるようだな」

新三郎は思いきった悪態をかえす。

「それが貴様の返事なんだな」

「五郎蔵、うしろを見ろ。おまえたちが惨殺した天野屋の一族が、血みどろになっておまえたちを地獄へ手招きしているぞ」

叱咤するように新三郎が突然すごい舌刀を飛ばした。

「うぬっ、たたっ切れ」

案の定、五郎蔵はどきりと血相をかえて、いきなり抜刀した。が、それはその言葉のとおり、あくまでも自分がたたっ切ってやるという決意の抜刀ではなく、少しうしろに下がって待機している左右の味方に、たたっ切れと号令をかけたつもりのほうが主だったらしく、抜刀しながらすっと味方の線まで一歩後退した。そこで剣陣を作って、改めて三人で切って出る安全策を取る気だったのだろう。

要するに、敵は一人だと、はじめから少し甘く見すぎていたのだ。

大将からしてそんな生ぬるい気持ちでは、いくら決死の刺客たちでも、一瞬闘志が戸惑いするのは当然で、すでに何度かこういうあぶない真剣勝負の場数を踏んでいる新三郎が、そんな敵のすきを見のがすはずはない。

まして、新三郎はうしろに、どうしても自分一人の手でまもりぬいてやらなくてはならない可憐な小浪をかかえているのだ。

「えいっ」

一足さがろうとする五郎蔵の逃げ腰へ、猛然と地をけって躍りこみざま、大胆不敵な抜きうちをかけたから、まさかと甘く見ていた五郎蔵は、あっと狼狽しながら夢中で引っ払おうとしたが、すでにおそく、その空いた胴を火のような切っ先にかけられて、

「わあっ」

悲鳴をあげながら大きくのけぞっていく。

「うぬっ」

「それ、やった」

同時に左右の二人がかっとなって抜刀したが、それは真ん中の五郎蔵が、どっとうしろへよろめき倒れたのと同時で、新三郎は右へ抜きうちした片手なぎを、その位置でつばめがえしに左へかえす。

「う、うっ」

それが、左から必死に切って出ようとしたやつの腰のあたりを一寸ばかり切っ先にかけて切りさげていたので、

「う、うっ」

そやつはひとたまりもなくがくんとそこへ両ひざをついている。

切った新三郎は、とたんに右足をぐいと引いて、もう切っ先を右から出ようとする右の勤番侍のほうへぴたりと青眼につけている。

そやつは目の前で味方が二人もろくも切り倒されたのを見ると、愕然として急に闘志がくじけたらしい。

あっと叫びながら、一気に麦畑の中までさがって、ぼうぜんと青眼に身をかためて、体中をこちこちにしているようだ。

まだ茶店の土間に侍が二人、中間が一人残っていて、おそらくこの三人は切りあいの最中に小浪をさらっていく手はずになっていたのだろう。それが、あっという間に二人を倒され、一人は麦畑の中まで逃げたとなると、どうにも加勢に切って出る勇気が出なくなってしまったのだろう、三人とも唖然としてこっちをながめているばかりだ。

そういう敵に対して、余勢をかりてこっちから挑戦していくほど、新三郎は分別のない血気

は持ちあわせていなかった。
「小浪、おいで」
うしろの少し離れた往来の真ん中に真っ青になって立ちつくしている小浪に声をかけると、新三郎は血刀を右にさげたまま、ゆっくりと土手のほうへ歩き出した。
歩き出しながら、茶店の軒下にひとかたまりになっているお葉たちのほうへ軽く会釈しているほど、新三郎は冷静さを失ってはいない。
ぱっと小鳥が飛び立つように、小浪が新三郎のほうへ走り寄っていく。
それと見たお葉が、いきなり清川の八百一の手をつかんで、
「渡しまで送ってあげて――」
耳もとへそうささやきながら、ぐいぐい手を引っ張って二人の後を追い出す。
「よし、わかった」
清川は苦わらいをしながら、おとなしくお葉に引っぱられていく。
番頭の安二郎がそのあとへつづいた。
敵はだれも追いかけようとはしない。
六郷堤へのぼると、河原の向こうに渡し場が見えてきた。
清川が振りかえって安二郎にいいつける。
「安、そこで敵の様子を見張っていてくれ」
「へい」
安二郎は土手の上へ立ちどまった。
「古賀さん、渡しまで送ってあげますのよ」
お葉はまだ清川の腕をつかんだまま、前の新三郎のほうへ声をかけた。
「ありがとう。なんのあいさつもせずに江戸を立ってきた。おとっつぁんによろしくいっておいてくれないか」
そこでちょっと立ちどまって、新三郎は血刀をぬぐい、鞘におさめる。
「いいのよ、古賀さん。あたし、なんにも聞きたがりはしません。お達者でね」
お葉の青い顔にほのぼのとした微笑が浮かん

でくる。
「ありがとう。命があったら、また松葉屋へのみに行かせてもらうよ」
新三郎も笑顔になって、わざと清川には声をかけず、目礼だけして、小浪の手を取って歩き出す。
小浪はつつましくお葉のほうへおじぎをして、新三郎に引っぱられていく。
ちょうど川崎のほうから渡し舟がついて、四、五人の客をおろし、待っていた四、五人の客をのせて、いま出ようとしているところだ。
二人は途中から走り出して、その渡し舟にのった。舟はすぐに岸放れする。
「お葉、とにかく、おれたちも川崎へ渡って、そこでひと休みしよう」
清川がお葉をうながした。
「清川さま、やっぱり本当だったんですね」
お葉は感慨深げな顔になっている。
「うむ、おれも半信半疑だったが、やっぱり本当だ。こうなると、おまえをそんなかっこうでつれ出したのは、少し罪だったな」
「そんなことありません。清川さんはこれからどうなさるの」
「おれはな――」
清川はふっとあたりへ鋭い目をくばりながら、お葉を体で道の外の河原へ押していき、あたりに人のいないのをたしかめてから、
「おれは御用で、あの二人のあとをずっとつけていく。だれにもいうなよ。鷲尾党にも、黒住党にも、おれが御用できていると見られたくなかった。いや、そうわかっては困るんだ。だから、お色ごとできたように、おまえに無理をたのんだんだ」
と、ちょっとすまなそうな顔である。
「それで、さっきの鷲尾党のやつら、それを本当にしたかしら」
「そりゃしたとも――。その丸髷がなによりも物をいうんだ。やつらは南の清川だとちゃんと

知っている。その清川が、古賀のいない間にうまくおまえをくどいて物にしてしまった。江戸にいてはいつ古賀が出てくるかわからないんで、無論事件とはなんの関係もなく、おまえの歓心を買う気で箱根へつれ出したと、そう読んでいる。まあ、こっちの策はこれでうまく成功したことになるんだ」

「あたしもなにかわけがあるんだと気がついてはいました」

「お役のためだ、まあ勘弁しろ。そのかわりな、おまえは今日これから安をつれて、ついでだから川崎の大師まいりでもして、ゆっくり日いっぱいに江戸へ帰ってくれ。帰りは駕籠にするがいいぜ」

「あたしがいっしょじゃ、御用がつとまらないのかしら」

　お葉が妙なことをいいだす。

「そんなこともないが、おれの御用も命がけなんでな」

「一つだけ聞かせてください。小浪さんの敵になるんですか」

「いや、敵でも味方でもない。しかし、鷲尾党とはどうしても敵になるな」

「じゃ、あたしもいっしょに行きますから、あたしを清川さんの本当のおかみさんにしてください」

　きっぱりといって、男の顔をまともに見あげながら、さすがに真っ赤な顔になる。

「そいつは、お葉、ここでおまえとおれが二人できめちゃ悪いだろう」

「いいえ、いいんです。あたしはこの丸髷を結った時から、ちゃんとそう心をきめていたんです。いくら御用でも、女が心にもない丸髷になんか結えるはずはないじゃありませんか」

　そう必死にいいきると、お葉は一人で立っていられなくなったように、ひしと清川の胸へ顔をうずめていった。

毒矢

1

　川崎の宿を出外れると、小浪は新三郎のたもとをつかんで、ぴったりと肩へ寄りそうようにして歩いていた。

　この分ではまたいつ敵が出るかも知れない。そして、どんなことで二人は別れ別れにされてしまうか、それさえもわからない。考えると、ただもうそれが悲しくなってきて、

　――いやだ、別れるくらいならいっそ死んでしまうからいい。

　その切ない気持ちが恥も外聞も忘れさせて、小浪にそんないじらしいかっこうをさせているのである。

「小浪、くたびれたのか」

「いいえ、まだ大丈夫ですのよ」

「そうか。川崎から神奈川へは二里半だ。ちょうど中食の時刻になるから、神奈川で少しゆっくり休むことにしよう」

　新三郎はなるべく小浪の足をいたわるようにして歩く。

「ねえ、また敵が出ますかしら」

「そうだなあ。敵のことは出るまで考えないことにしよう。出たらまた勇ましく闘えばいいんだからね」

　こっちはそのために道中へ出てきているのだから、それよりしようがないのである。

「あたくし、本当は悲しくてしようがありませんのよ」

「どうしてだ」

「死んでもあなたと別々になりたくない、そんなことばかり考えてしまうんですもの」

「それは大丈夫だ。夫婦は二世だっていったろう。あの世までちゃんといっしょなんだ。それに、今はこうしていっしょに歩いているんだか

ら、先のことはあんまり心配しないほうがいい。心配したってしようがないことなんだからな」
「それはそうですけれど――」
「まあ、わしを信用して、小浪はわしの腰にしっかりとぶらさがっていればいいんだ」
「あら、本当――。そうすれば切られる時もいっしょですものね」
そんな無邪気なことをいい出す小浪である。
「おまえ、そんなにおれのそばを離れるのが心配なのか」
新三郎はなにかじいんと胸にひびくものがある。
「ええ、死んでももう離れるのはいや。もし離れたままになってしまったら、どんなに悲しいだろうと、考えただけでも胸がどきどきして、泣きたくなってきますのよ」
小浪はしっかりと腕をつかんでくるのだ。
「よし、わかった。じゃ、もう死んでも離れないし、もし離れるようなことがあっても、わしはきっとすぐ迎えに行ってやるから、安心して強くなってくれなくちゃだめだぞ」
「本当に、すぐ迎えにきてくれる」
「行くとも。わしだって、小浪のいない世界になんか、もう一日も生きていたくはないんだ」
「うれしいわ。生きるのも死ぬのもいっしょね」
「そうだとも――。それが本当の夫婦というものなんだ」
新三郎はこの純情愛すべき小浪をはげますようにそう答えてから、ふっと思い出して、
「あのなあ、小浪、わしはこれだけは聞くまいと思っていたんだが、やっぱり聞いておかないと困ることがありそうだから、一応聞いておきたい。しかし、もし答えたくなかったら、無理に答えなくてもいいんだよ」
と、あらかじめ念を押しておく。
「どんなことかしら。あたくし、知っていることならなんでもいいます」
「そうか。じゃ聞くが、おまえはどうして鷲尾

党からねらわれているのか、そのわけを知っているのか」
「ええ、知っています。あたくしは死んだ天野屋浪右衛門の娘で、ただ一人生き残った末っ子ですの。元締めも父の子なのですけれど、これは外へできた子で、母が違います。それに、子供の時から江戸で育って、そういう血筋があるということは、鷲尾党でさえうっかりしていたくらいなんですって」
「うむ、それはわしも聞いている。天野屋には百万両という財産が小判でたくわえてある。鷲尾党はそれをねらって、天野屋を抜け荷の罪におとして闕所にした。そして、その店や屋敷中をさがしてみたが、とうとう目当ての百万両の小判は出てこなかった。――そういう話なんだろう」
「ええ」
「ところで、その百万両の小判のかくしてある場所は、当主しか知らない。当主は跡つぎの子供にだけそれを教えることになっている、そういうおきてが天野屋にはあるんだそうだね」
「ええ、あたくしもその話は後になって、元締めから聞かされましたの」
「すると、いま残っている天野屋の本当の血筋といえば、小浪一人きりなんだから、おまえだけがそのかくし場所を知っていると、だれしも考える。だから、鷲尾党はおまえをねらっているんだが、おまえは本当にそれを知っているのか。わしの聞きたいのは、その場所ではなくて、おまえがそれを知っているかいないかということだけでいいんだ」
「それなら、あたくし、知っています」
小浪は正直に答える。
「そうか、やっぱり知っているのか。しかし、そのころおまえはたしか十三ぐらいだったはずだね。しかも、天野屋の家にはいなかった。一体、だれがそんなことを教えてくれたんだろうな」
「本当は、あたくし、その場所を知っているの

ではなくて、その場所を書いたものを持っているだけなんですのよ。あたくし、それをまだあけてみたことはありませんの」
　これは意外な話である。
「ふうむ。それだけわかれば、もう後のことは聞かなくてもいいんだが、どうもわしにはまだふにおちないな。そういうものが、どういう手順でおまえの手にわたったのか、どうしておまえはそれをあけてみる気にならないのか。——そんなことを聞きたがっちゃ悪いかね」
「いいえ、かまいませんわ。あなたはもう小浪のだんなさまですもの。あたくしなんにもかくしたくありません。みんな話してしまいますけれど、ただ一つ、お願いがありますのよ」
「というと――」
「あたくしがそれをあけてみないのは、あたくしはそんなものほしくないからです。それと、もう一つは、もしそれを見てしまうと、どんなことで人に話したくなるかわかりませんでしょ。それが怖いからなんです」
「なるほど」
「ですから、あなたにもそれはあけてみてもらいたくありません。あたくし、その書いたものは、というより、百万両の小判は、いまにみんなでわけてしまってくださいと、はじめから元締めにたのんでありますの」
「まいった。偉いなあ、小浪は」
　新三郎は思わず胸をうたれて、急にうれしくなってくる。
　おそらく、こういう無欲の娘だから、行者になって人の予言もできたのだろう。いや、小浪は生まれながらにして仏心を持ってきているのかも知れない。
「わしもねえ、小浪、そういう金にはあまり欲はないんだ。だから、実はおまえがそんな金を持っているようなら、みんなにやってしまうほうがいいとすすめるつもりでいたくらいなんだ」

「まあ、うれしい。似たもの夫婦ということがあるでしょう。あたくしたちはきっとそれなんですわ」
　小浪ははればれとした顔になって、思わず新三郎の腕を胸へ抱きしめている。道の両側はからりと広がった青麦畑で、近いところには人目がなかった。
　空のどこかでひばりがさえずっている。
「小浪、おまえはきっとしあわせになれるよ。いまはあぶないところにいるけれど、おまえのような心のきれいな娘を、天が見すてておくはずはない」
「いいえ、あたくしにはもうだんなさまがありますから、娘ではございませんのよ。これでもあたくしは古賀の家内でございます。ですから、あたくし、だんなさまといっしょでなければ、しあわせになってもしようがございませんのよ」
「そりゃ、わしだって小浪といっしょでなければ、しあわせになったってしようがない。まったく似たもの夫婦なんだなあ」
　新三郎は我にもなくわらい出す。
「だんなさま、ちょいとこの手をお借りいたします」
　小浪はそうことわって、新三郎の右手を八ツ口から自分の素肌へ誘い、みぞおちのあたりへ持っていく。
「ほらね、この腹まきの中にお守りの袋があって、その袋の中に書いたものが入っていますのよ」
「ふうむ、しかしまあ、小浪、亡くなった親御さんたちには、そんなことをいっちゃ申し訳ないが、おまえは物騒なものをあずけられてしまったもんだなあ」
「本当ですわ。いま考えてみると、これはたしか伊太吉がその時おとっつぁんからいいつけられて、あたしのところへ持ってきたんだと思います。それからあたしは乳母と二人で船で大坂

へ逃げ、大坂から東海道を江戸へ下ってきたんです。このお守り袋のわけは、乳母からよくいい聞かされてわかっていましたけれど、江戸へ着いて元締めにはじめて会った時、あたくしは乳母とも相談して、これは元締めにあずかってもらいました。それをまた昨日元締めから、とにかくこれはおまえが持っていくようにってわたされたんですの」
「そうか。じゃ、昨日まではずっと元締めのところにあったんだね」
「ええ。天野屋の血筋の男は元締め一人なんですから、本当はこれは元締めがうけついだほうがいいんですけれど、おれは淡路屋へ養子に入っているんだから、そうはいかないんだって、どうしてもあたくしのいうことをきいてくれないんです」
「それは、元締めの気性としては、そういうだろうね」
新三郎はふっとある疑問を感じてきた。
島五郎はひょっとするとこの守り袋の中をあけて見ているかも知れない。それと、もう一つは、はたして百万両の小判が本当にある場所にかくしてあるかどうかということである。
が、そのどっちも新三郎には用のないことなので、それ以上好奇心を持つことはやめることにした。
「ねえ――」
「どうした」
「さっきのひと、お葉さんでしたね」
「うむ、松葉屋のお葉だ」
「あちらも似たもの夫婦なのじゃありませんかしら」
小浪には自分がしあわせだから人もしあわせに見えたのだろう。
「そういえば、お葉は一度行者さんのところへわしといっしょにおうかがいを立てに行っている。おぼえているか」
「おぼえていますわ。あの時は、お葉さん、まだだんなさまが好きだったんでしょ」

「そうかも知れないな」
「だんなさまのほうは、どうだったのかしら」
「なんだ、それ、やきもちか」
「ええ」
小浪はちょっと赤くなってわらっている。
「おかしいな、あの時、行者さんはお葉に、今うちへ帰るとたのみになる人が待っているといっていたぜ。その時、待っていたのが今日の連れの男で、あれは八丁堀の清川一馬という同心なんだが――、お葉にそういったことはおぼえているだろう」
「ふ、ふ、本当にそれを後で思い出しましたのよ。あの時、行者さんは、まだあなたがだんなさまになるなどと夢にも思っていません。ですから、お葉さんにはっきりと本当のことがいえたんですけれど、あたくし、あの蔵の中でだんだんあなたが好きになってきてから、ひょっとするとあなたもお葉さんが好きなんじゃないかしらと、時々とても心配になってしまって――」
「正直にいうと、おれはお葉がきらいじゃなかった。しかし、女房にしようとは一度も考えたことはない」
「あの時、行者さんにもたしかにそう見えたんです。でも、お葉さんはあなたといっしょになりたかった。それがわかっているような気がしたんで、あたくしあなたを横取りしたんじゃないかしらと、ちょっと心配になっていたんです。でも、さっきお葉さんに会って、もう安心しました。あのお二人は、きっとしあわせになれます」
「そうか。しかし、清川はどうしてあんな風をして、江戸を出てきたんだろうな。ついでに、行者さん、おうかがいを立ててみてくれないかなあ」
「あたくしもう行者さんではありませんのよ。古賀の家内ですのよ」
「家内になると、おうかがいはだめになるもん

なのか」

「ええ、女は家内になると、だんなさまのことばかり考えているようになりますのよ。だんなさまの血が体の中へ入っているんですもの、それが本当ですわ。だから、やきもちだってやくようになりますのよ」

小浪はそんなうまいことをいって、明るくわらい出していた。

2

神奈川の宿で中食をとって、そこから程ガ谷へ一里九町、程ガ谷から戸塚へ二里九町、その夜は戸塚泊まりで、江戸の神田佐久間町からだとちょうど十一里ほど歩いたことになる。

鎌倉屋という旅籠についたのは、夕方がやがてたそがれになろうとするころだったが、さすがに小浪はかなり疲れているようだった。

座敷は夫婦づれだから、次の間つきのいちばん上座敷へ案内させたが、敵にねらわれている体だから、新三郎はまず座敷の位置をよく頭に入れておかなくてはならない。

ここは店からあがって廊下をまっすぐ奥へつきあたり、その廊下をかぎ形に左へ折れて入った別棟の座敷で、廊下にそって六畳と八畳の二間つづきになっている。客の多い時は無論この二間を別々に使うようになるのだろうが、今夜はその二間をこっちだけで使っていいのだ。

この別棟には二階があって、間取りはたぶん下とおなじになっているのだろう、階段は母屋の廊下を曲がったところについている。だから、新三郎たちの座敷の前の廊下は、ほかの客の通らない廊下になっているわけだ。

廊下から入った八畳の座敷のほうは、正面に一間の床の間と押入がついていて、左に一間のひじつき窓がある。右は六畳の間につづくから、外からくせ者が入るとすれば、廊下のほうと、この一間の窓のほうと二つしかない。

廊下のほうは庭になっているが、窓のほうは

障子をあけると四尺ほどの空地をおいてすぐ板塀になっている。板塀の向こうは隣の家で、この空地の道はぐるりと床の間のうしろをまわって母屋の裏までつづいている。そっちがわの塀の外、つまり、この旅籠の北がわはずっと畑になっているようだ。

——しかし、表から敵が忍びこむとすれば、この畑のほうの塀からだろうな。

新三郎がそこまで見とどけて座敷へ帰ってくると、小浪はまだ上っぱりの道行きをぬいだままのかっこうで、ぼんやり火ばちの前に座っていた。ちゃんと茶道具がとどいているのに、それに手をつけた様子もない、いかにもくたびれたというかっこうなのである。

「どうした、小浪、だいぶまいっているようだね」

新三郎は両刀を床の間へおいて、火ばちのそばへ座りながらわらった。

「寂しいんですのよ。なにをしていらしたの、だんなさまは」

小浪はちょっとうらめしそうに目をあげる。

「なんだ、お嫁さん、すねていたのか」

「だって、あたくし、一人でいるのなんだか怖いんですもの」

「ああ、そうか。よし、なぐさめてやろう」

新三郎はわらいながら、ひょいと小浪の肩へ手をかけて引きよせ、

「あら、だれかきませんかしら」

と、さすがに小浪がどぎまぎとほおを赤らめている間に、素早く右手をうなじへまわし、左手でしっかりと胸を抱いて、仰向けになった女の顔へ、

「だれがきたってかまわないよ」

といいながら、思いきりくちびるをくちびるへ押しつけていく。

「小浪はわしのお嫁なんだからな」

こんどは強く口を吸いにいくと、小浪は切なげに熱い息づかいになりながら、目をつぶって

全身から力がぬけてくる。

「小浪――」

口をわずかに放して感情的に名を呼ぶと、小浪は熱っぽい目をそっとあけて、

「だれかこないかしら」

と、またしてもそれを気にする。が、その声はもうっとりと夢うつつになって、女体はもうすっかり甘い陶酔の中へとけこんでしまっているようだ。

新三郎は誘われるようにもう一度その口を激しく吸いにいって、なんとなくあやしい衝動に駆られてくる。

廊下の障子にようやく水色のたそがれが静かにただよいはじめたようだ。

放したくない、放れたくない、そんな熱い感情が交流して、それが次第に愛欲の世界へまで激しく燃えあがっていく。

――いつ消えるかわからない命。

そんな気持ちが新三郎にも小浪にもあった。しかも、二人の体はもう昨夜おたがいにおたがいの秘密を知っているのだ。

二人だけの世界、その甘美な愛欲の興奮の中にこそ、一切を忘れた二人だけのふしぎな世界があるようだ。

「少しお行儀が悪かったかなあ、小浪」

あらしのあとのように興奮のおさまった新三郎は、ゆっくり火ばちの前へ座りなおしながら小浪のほうへいった。

「いやですわ、恥ずかしい」

小浪はまだこっちへ背を見せて横座りになりながら、しきりに髪をなおしている。

「恥ずかしいことはないさ。これが御夫婦というものなんだ」

小浪は答えない。うしろを向いたまま、まだほおをほてらせているようである。

「おれはねえ、小浪、さっきおまえにしかられたけれど、ここは今夜一晩おれたちの大切な本陣になるんだ。それはまた夫婦の愛の巣だということにもなる。だから、安心して眠れるように、あらかじめ地の利を調べに行ってきたんだ」

「ごめんなさい、あなた。あたくし、たぶんそうだとは思っていたんですけれど、一人になったら急に寂しくなってしまって、いっしょにお茶ぐらいのんでからだっていいのにと、うらめしかったの」

「ああ、そうか――。なるほど、いっしょにお茶をのんでそれからちょっと抱いて口を吸ってやってからでも、地の利のほうはいいにはよかったんだな」

「そうですのよ。今日は一日中歩いていて、怖い目に二度まであって、小浪がたよりにしているのはだんなさま一人なんですもの。もっといたわってくれてもいいのに、少し怒っていましたの」

はっきりとそんなことをいってのけるお嫁さんなのである。

「おどろいたなあ。わしのお嫁さんは、虫も殺さないような顔をしていて、やきもちをやくことも、すねることも、ちゃんと知っているんだねえ」

「あら、本当――。あたくし、自分でもびっくりしていますのよ」

「それで、もうごきげんはなおったんだろう」

「どうして――」

「いまだんなさまが、どんなに小浪をかわいがっているか、ちゃんと愛情の誓いを見せたじゃないか」

「いやですわ、そんなことばかしいって、恥ずかしい、あたくし」

「だから、いつまですねてばかりいないで、ここへきてお茶でも入れたらどうなんだ」

「あらあら、本当――。ちょっとお待ちになってね」

小浪はわらいながら、いそいで立って廊下へ出ていくのである。

――夫婦なんておかしなもんだなあ。

新三郎はしみじみ思うのである。あきらかに敵にねらわれているとわかっていて、その敵の見えない間は、けろりとして夫婦の愛情に酔っていられる。ことによると、おれも小浪も人と少し変わっているんじゃないかなと、そんな気さえしてくるのだ。

　座敷に灯が入って、差し向かいで夜食をすませると、後はもう寝るばかりだ。

「小浪、明日はまた小田原までの旅だ。おまえそんなに歩けるかなあ」

　新三郎はやっぱり心配になってくる。

「大丈夫ですのよ。ここから小田原までどのくらいありますの」

「ざっと十里あまりかな。まあ、今日ぐらい歩くと思っていればいいんだが、旅というやつは二日目三日目ぐらいがいちばん足が痛くなるんだ」

「じゃ、また暗いうちに、ちょうちんをつけて立つんですか」

「いや、明日は六ツ半（七時）に立てば、日いっぱいに小田原へ着ける。だから、今夜はもう御夫婦ごっこはやめて、ぐっすり眠っておくんだ」

「またそんなこと——」

「いや、これは冗談じゃないんだ。御夫婦ごっこは体にいちばんこたえるんだ」

「そうですかしら——」

　小浪の目がいたずらっぽくわらっている。

「しかし、今日はおまえ、わりによく歩いたねえ。途中でおぶってやらなくちゃならないかなと、おれは心配していたくらいなんだ」

「大丈夫ですわ。怖いことさえなければ、あたくし明日だって歩けます」

「そういえば、元締めのほうからまだなんともいってこないねえ」

　たとえば、明日もそのまま小田原へ向かうようにという状態でも、それならそうとなにか連絡があるはずなのである。

「あたくし、そんな話はいや。考えると悲しくなるんですもの」

「そうか、それはそうだろうな」

　無理はないと新三郎は思ったので、

「じゃ、また御夫婦ごっこの話のほうがいいかな」

　と、わざと冗談のようにいうと、

「だって、御夫婦なんですもの」

　と、はっきり答えて、うっとりとその言葉を自分でかみしめているような目になる。

「あの、こちらさまは古賀さまでございますね」

　女中が廊下へきてひざまずいたようだ。

「うむ、古賀だが」

「いまお店へ江戸の京屋からきた者だという方がみえて、ちょっとお顔を貸していただきたいといっていますけれど」

「よし、すぐ行く」

　島五郎からの連絡だなと新三郎は思ったので、すぐに立ちあがった。

「あなた、これを持っていらして」

　小浪にもすぐぴんときたらしく、立って床の間から大小をたもとで抱いてくる。

「そうだったな。おまえ、おれが帰ってくるまで、ここから出ちゃだめだぞ」

「ええ、どこへも出ませんわ」

　にっこり笑ってみせる小浪だった。

　新三郎は小刀を帯し、大刀を左手にさげて廊下へ出た。

　時刻はやがて五ツ（八時）になろうとする、旅籠屋（はたごや）ではまだ夜食の後かたづけでいそがしい盛りのころだった。

3

　新三郎が鎌倉屋の店先へ出てきてみると、店は案外がらんとしていて、土間に下男風のおやじが一人、人待ち顔に立っている。

「江戸の京屋から使いにきたというのはお前さんか」

　島五郎が連絡によこした人間にしては少し変

だとは思ったが、ほかにそれらしい者もいないので、新三郎は声をかけてみた。

「へい」

おやじもなにかきょとんとした顔をしている。

「わしは古賀新三郎だが、どんな用だね」

「いいえ、おれがたずねてきたのは古賀さんではないんです。古名川信蔵さんという浪人さんです」

「ふうむ、古名川信蔵ねえ。おやじさんは江戸の京屋からきたといったな」

「違います。おれは江戸の京橋からたのまれてきたんです」

「それじゃ話が違う」

「おれも変だと思いました。古名川さんはきれいな女のひとをつれているはずなんで、御新造さんづれの浪人さんだというと、ここの女中さん、それなら離れのお客さまだろうといって引っこんでいったんで、やれ見つかったかなと思って待っていると、知らないお武家さんが出てきなすったんでね」

「そうか。実は、わしも家内づれだから、それで女中が早合点をしたんだろう」

新三郎は苦わらいをしながら、そこの帳場格子の中に番頭が帳つけをしているので、

「番頭さん、このおやじさんのさがす人を、もう一度よく聞いてやってくれぬか」

とたのんでやった。

「かしこまりました。どうもすみません」

番頭が恐縮しながらすぐに立ちあがってきたので、新三郎はそのまま中廊下へ出た。

実は、その中廊下の突き当たりへくるまでは、まだうっかりしていたのである。が、そこまできて、思わずはっと目をみはった。

そこに自分たちの座敷の真上にあたる二階座敷への階段がついている。その階段を、黒い人影が音も立てずまるでねずみのような素早さでのぼっていくのが、ちらっと目についたのだ。

中廊下にはそんな人影はなかった。すると、その人影は離れ二間の自分たちの座敷の廊下のほうから出てきたに違いない。

――しまった。

なにか激しい不吉な予感に襲われた新三郎は、離れの廊下へ曲がるなり、一気に自分たちの座敷の前まで走った。

「小浪――」

がらりと障子をあけてみると、案の定、そこに座っていたはずの小浪の姿が見えない。

「小浪、どこにいるんだ」

次の間の六畳のほうをあけてみたが、無論そんな灯のないところにいるはずはない。

もう一度八畳の間のほうを見まわすと、座敷のすみに男の袴と女の道行きがきちんと畳んであって、そのそばに小浪のふろしき包みがさっきのままおいてある。部屋の中は少しも取り乱した形跡はない。

――黒住鬼堂一味の仕事だ。

現に、たった今、忍者らしいやつの一人が、この上の二階座敷への階段をあがっていくのを新三郎は見てきているのだ。

「うぬっ、逃がさぬ」

新三郎は座敷を出ると、足音をしのばせるようにして、階段をあがっていった。

あの江戸の京屋からきたというおやじが、そもそもくせ者だったのである。出ていってみると、京屋が京橋になって、古賀が古名川になっている。こっちがまんまと一杯ひっかかっている間に、鬼堂一味は小浪をさらっていったのだ。

そのほんの短い間に、小浪はどんな風にさらわれていったのか、新三郎はわきの下へじっとりと冷や汗を感じてくる。

二階の間取りは、想像していたとおり下とそっくりおなじで、手前から六畳、八畳と二間ならび、その二間とも灯が入っていて、廊下は行きどまりになっている。

いきなり飛びこんでいっていいものか、それ

とも声をかけてからにしようかと、一瞬ためらっていると、
「そこへきたのはだれだね」
中から聞きおぼえのある声がとがめるようにいいながら、八畳のほうの障子がさっとあいた。
「やあ、古賀のだんな」
「清川さんか――」
新三郎は唖然(あぜん)とした。顔を出したのは八百屋の若だんなになりすましている清川一馬で、部屋の中には丸髷姿(まるまげすがた)のお葉が、びっくりしたようにこっちを見ている。
「どうした、だんな、顔色をかえて」
「清川さん、いまここへ黒装束のくせ者が一人あがってこなかったろうか」
「なにっ、くせ者が――。鬼堂一味か、古賀さん」
「うむ」
「ここへはあがっちゃこないが、どうしたんだね」
「江戸から使いの者がきたというんで、わしが店へ出てみると人違いだった。引きかえしてくると、そこの階段を黒装束の男が一人こっちへあがってくるのが目についた。しまったと思って、部屋へ飛びこんでいってみると、小浪がさらわれているんだ」
「よし、下へ行ってみよう」
さすがに清川はのみこみよく、むだ口は一言もきかずに、やることが敏捷無類(びんしょうむるい)だった。
「お葉、おまえはここを動いちゃいけねえ」
床の間から道中差しを取ってくると、お葉にそういいつけ、次の間から顔を出した多町の安二郎に、
「安二郎、お葉をたのむよ。おれはすぐ帰ってくるから」
といいおいて、もう廊下へ飛び出してきた。
先に立って階段をおり、座敷の前へくると、六畳のほうも八畳のほうも障子をあけ放してしまう」

「だんな、小浪さんはどこへ座っていたんだね」
「ここだ」
手あぶりの前の小浪の座っていた座布団を示すと、そこからくるりとあたりを見まわして、
「小浪さん、抵抗した様子は少しもないな」
こんどは立っていって、西がわのひじつき窓の障子をあける。ちゃんと雨戸がしまっているのを、それもあけて、
「だんな、ちょうちんをかしてくれないか」
と、暗い外をじっと見まわしている。
新三郎はいわれるままに、小田原ぢょうちんに行燈(あんどん)の灯をうつして持っていった。
それを受けとった清川は、ひらりと窓から下へ飛びおり、ちょうちんの灯で地面を見まわしながら、
「だんな、やっぱりここからつれ出されたらしいよ。わらじの跡がいくつもついている」
と、落ち着いた声でいうのだ。
「やっぱりそうか」
新三郎もつづいて窓から飛びおりる。
そのわらじの跡を追って、離れの角を北へ曲がるとすぐ、そこに女の櫛(くし)が落ちていた。
「これは小浪さんのだろう」
「うむ」
手に取ってちょっと鼻の先へ持っていくと、なつかしい小浪のにおいがした。
――小浪、おれが悪かった。堪忍してくれ。
なんともいえない悲しさが胸いっぱいに突き刺さってくる。新三郎はその櫛をそっと胴巻きの中へしまう。
そこから五、六間行ったところに、不浄用の木戸が一つあるのだ。
その木戸も中からちゃんと輪かぎがかけてある。
「一杯食わされたなあ、だんな」
清川はかぎを外して外へ出てからいった。
裏は広々とした青麦畑道だが、月の出は明け

方に近いやみ夜だから、あたりは真っ暗で、空にきれいな星あかりがあるだけだ。
「わしがうかつだった」
「いや、敵はそれが稼業の忍者どもだからな、一枚うわてなんだ」
「小浪は声ひとつ立てられなかったんだろうか」
「うむ、忍者の一人は、いや、二人かも知れないな、これは宵から鎌倉屋へ泊まっていた。だんなが店先へ呼び出される。敵は六畳の間のほうから、つまり小浪さんの座っているうしろのふすまをあけて、いきなりのどをしめて仮死状態にする。一人が西がわの窓をあけ、そこに待っていた仲間に小浪さんをわたす。一人だけ後へ残って窓をもとのとおりにしめ、離れの廊下の角へ行ってだんなの帰りを待っていた。そこへだんなが引きかえしてきたんで、わざと目をひくように階段をあがる。だんなが小浪さんのことを心配して座敷へ飛びこんだすきに、階段をおりて逃げた。つまり、こいつは味方の仕事がうまく運ぶようにおとりになって時をかせいでいたんだ」
すらすらといってのける清川の筋書きは、たしかにそうだったろうと、新三郎も納得するほかはないほど、一点のすきもないようだ。
「やつらは小浪をつれて、どっちへ逃げたろう」
念のために新三郎は清川の意見を聞いてみた。
「いくらやつらでも、小浪さんをそのままかついで宿場は出られない。どこかで荷造りをする。だから、まだ戸塚の宿は出ていない。だんなはこれからまっすぐ程ガ谷口のほうへ走って、そこで見張っていてくれ。わしは一度旅籠へ引きかえして、後始末をしてから、藤沢口のほうへ手を打つ」
「たのむ、清川さん」
「引きうけた。黒住党は小浪さんの命までは取らないから、その点は、だんな、安心していて

大丈夫だ」
「ありがとう。恩に着る」
時にとって、この清川の助力ほどありがたかったことはない。新三郎は迷わずにそこから街道筋へ出て、まっすぐ宿外れのほうへ走った。
戸塚の宿は通りぬけ十五町あまり、人家三百五十軒余の、相当繁盛の宿場町である。
それにしても、陰供についているはずの伊太吉たちは、一体なにをしているのだろう。今夜のことは無論、自分の失敗なのだから、人を責めようなどとは決して思わないが、こんな大事を見のがしているようでは、天野屋一味の復讐は到底おぼつかないと、新三郎は妙に腹さえ立ってくる。そんな杜撰な計画のために小浪を犠牲にしてしまっては、あまりにもかわいそうすぎるのだ。
「もし今夜のことを島五郎一味がなんにも知らずにいるようなら、おれは二度と小浪を彼らの自由にはさせぬ」
新三郎は歯をくいしばりながら、宵すぎの町を宿外れのほうへ走りつづけた。

4

それから半刻（一時間）ほどたって、時刻にすればちょうど五ッ半（九時）ごろ、九曜の紋のついたちょうちんに前後をまもられた長持ちが一丁、もう寝しずまりかけている戸塚の宿を足早に、程ガ谷の宿のほうへ通りすぎていった。
先頭に九曜の紋のついたちょうちんといっしょに、御用と書いたちょうちんが一つ並んでいるのは、この長持ちは公儀の大官、老中か若年寄かそういう重職の息のかかっている公用の長持ちなのだろう。
長持ちをかついでいる肩がわりつきの人足四人のほかに、小者が四人、士分の者が五人ついて、よほど急ぎの用らしく夜道をかけているのだ。
もう往来はほとんど人通りがないので、長持

ちの一行は無事に戸塚の宿を外れ、吉田村へかかってきた。そこに、鎌倉街道へわかれていく道がある。
　あたりは広い青麦畑で、並木道がそこで二つにわかれていくから、星あかりでもそこが岐路だとすぐわかる。
　長持ちの行列は、そこまでくるとひと休みするように立ちどまった。
　すると、どこからともなく黒装束の男が一人、すっと先頭のちょうちんの灯の前へ姿をあらわして、右手をあげて行列のほうへなにか合図をした。
　長持ちの前後にあったちょうちんの灯がいっせいに吹き消されて、あたりは一瞬黒々としたやみに塗りつぶされる。
　次の瞬間、長持ちの一行はそのやみの中をひたひたと鎌倉街道のほうへ進み出した。
　後に士分の者が二人、小者が一人残って、それぞれ並木のかげへひっそりとかくれて立つ。
　黒い夜風が時々、ざあっと麦畑をなびかせて吹きぬけていった。
　無ぢょうちんの行列の先頭に立っていくのは、忍者風の黒覆面黒装束の男だ。
　本街道から鎌倉街道へ入って、麦畑の中の道を十二、三町ほど進むと、道はしばらく丘陵の右ぎわにそってきて、そのあたりから雑木林が次第に深くなる。林の中は星空におおわれて、ほとんど真っ暗になるから、ちょうちんがなければ歩けない。そこから小者の一人がちょうちんに灯を入れ、長持ちをかついでいる人足の足もとを照らしながら進んだ。
「止まれ」
　まもなく、先頭の黒装束が声をかけて、行列は立ちどまる。
　左手に百坪あまりの空き地があって、その入り口の鳥居の立っている前だ。なにかの小さな社の前で、正面に堂が建っているようである。
「鬼二郎か」

　ふっと暗い境内の中からおなじような黒装束の男が二人出てきて、そのうちの一人が低い声で聞いた。
「うむ」
「御苦労だった。うまくいったそうだな」
「それが、張りあいのないほどうまくいきすぎてな」
「結構結構——。長持ちをうけとろう」
　その男は長持ちをかついでいる人足の前へ行って、
「一同、御苦労でした。しばらくここで見張りかたがた休息していてくれるようにという大先生の命令です」
　と、一同に声をかけ、自分は人足にかわって、長持ちの先棒に肩を入れる。
　ついてきた一人が後棒にかわった。
「鬼二郎、この組の指揮は今までどおりおまえが取れということだ」
「心得た」
　先棒の黒装束が小者の手からちょうちんを取って、長持ちは境内へ進み、堂の裏がわへ回っていく。
　そこにおなじかっこうの黒住鬼堂が一人で待っていた。
「大先生、荷物がつきました」
「よし、そこへ静かにおろしてくれ」
　鬼堂はまずちょうちんをうけ取って、そこの木の枝へつるす。
　長持ちはちょうどその灯の下へおろされた。
「鬼太郎と鬼三郎は、まもりについてくれ」
「はっ」
「敵は鷲尾党も天狗党も必ず尾行していると思わなければならぬ。決して油断してはならんぞ」
「承知しました」
　鬼太郎と鬼三郎は左右へ別れて、堂の横手へ出ていく。
　この堂の裏はちょうど山ふところのようにな

っていて、うしろは急崖になっているかち、正面の入り口さえかためていれば、絶対にほかから敵に不意を突かれるような心配はない。

　鬼堂は手早く長持ちの上おおいを取ってそこへおき、こんどは棒を引きぬいて、堂の羽目へ立てかける。

　それから、長持ちの錠を外して、そっとふたをはねのけた。

　中には布団を敷いて、小浪が行儀よく仰向けに寝かされて眠っている。血の気のない青白い顔だが、ふっくらとした面輪に、閉じた目の長いまつげが妙に印象的である。

「この娘は、こうして見ると、やっぱりちょいと類のない美人なんだな」

　鬼堂は思わずその寝顔に見とれている。

「さあ、これからが勝負だ」

　鬼堂はまたしてもつぶやくように一人言をいう。

　小浪は清川が想像したようにうしろからのどを絞めて失神させられたのではなく、オランダわたりの眠り薬をかがされて裏の麦畑道までかつぎ出され、そこで長持ち詰めにされたのである。

　この眠り薬は二刻（四時間）あまりたたないとさめないから、時刻にすれば九ツ（十二時）ごろでないと、小浪は正気にかえらないのだ。

　だから、百万両の埋蔵金の場所を聞き出すとすれば、正気にかえるまで待たなければならないのだが、鬼堂の考えではその秘密は口授ではなく、なにか書いたものにして持っているだろうという見当なのだ。

　その書いたものは体のどこにかくしているか、それがまず問題である。

「いちばん常識的なところは守り袋の中だ。次は帯か衣類のどこかに縫いこんでおく。もっと凝った工夫をすれば、元結いのようにこよりにして髪にしばりつけておく。――どっちだろう」

　鬼堂は小浪の体中を見まわしながら考える。

守り袋ならいちばん簡単だが、衣類だと裸にしていちいちそこを切り裂いてみなければならない。

「とにかく、守り袋からさがしてみろ」

　鬼堂は無造作に小浪の襟へ両手をかけて、ぐいと押しひろげてみた。ちょうちんの黄ばんだ光の中へ、白々とした豊かな双の乳房がはずむようにこぼれ、甘い肌のにおいが鬼堂の鼻をくすぐる。

「目の毒だな」

　不犯の忍者は苦わらいをしながら、見ると、みぞおちのあたりにちらっと白いさらしの胴巻きらしいものがのぞいているようだ。

　かまわず手を差し入れてさぐっていくと、たしかに守り袋らしい固いものにふれた。胴巻きをほどくのはちょいとやっかいなので、そこを無理につかみ出して、小柄で切り裂いてみる。

　中から出てきたのは金襴の小切れで作った守り袋だった。

　手早くひもをほどいて中身をぬいてみると、何枚かの守り札のほかに、薄い紙をその形に折りたたんだものが入れてある。

「しめた、これだな」

　ほかの守り札は用がないから、もとのように袋に入れて胴巻きの中へかえしておく。

　この紙一枚が百万両の値打ち物だと思うと、それをひらく時、鬼堂はさすがに胸がちょっとわくわくした。

　ていねいに折り畳みをひらいていくと、それは半紙一枚になって、簡単な絵図がかいてある。紙も相当古びているし、墨の色も決して新しいものではない。たしかに埋蔵金の場所を教える絵図のようだが、ただ見ただけではなんのことか判断のつけようがない絵図である。

　一枚の半紙の左がわの真ん中よりやや下に富士山らしいものをかき、右がわのやや上のほうに二つの峰を持つ山がかいてあるのは、おそらく筑波山のつもりだろう。

その山と山との間に三本の線が川のように上から下に流れ、二本の線で橋をあらわしたところが五ところある。

その橋の三つ目の少し上から左へまた川のような三本の線がのび、これにも二本の線で橋が七つかかっている。そして、四つ目と五つ目の橋の間の上へ、大小の四角が五つ、かぎ形にならんでいる。

文字は右がわの山の上へ「火」という字が一字、左がわの山の下へ「水」という字が一字、その二文字だけしか書いてない。

「おかしいなあ。一体、これはなんのことだろう」

しいてこじつければ、富士山と筑波山の間を流れている川は隅田川だ。橋は千住大橋、吾妻橋、両国橋、新大橋、永代橋で五つになる。その三つ目、両国橋のやや上から左へ入る川は神田川だ。

川口のほうから橋は柳橋、浅草橋、新シ橋、和泉橋となって、その和泉橋と次の筋違橋の間の上に、家が五軒ある。

形からいうと、京屋と八百富の家が川にそって並び、あとの三軒は八百富の裏へ並んでいる。これは、八百富の裏がお嬢行者小浪の家、次が唐津屋の番頭のめかけお梶の家、その次が京屋の板前直吉の家ということになるのだろう。直吉の女房お舟は京屋の女中頭だ。

「この五軒の家は地下の道でつながっているはずだ。その地下に百万両がかくしてあるというつもりなんだろうか」

すると、その上の「火」という字と、下の「水」という字はなんのことだろう。鬼堂にはそれがわからない。

「ことによると、小浪はこのほかになにか口授されていることがあるかも知れないな」

それだとすると、小浪が正気にかえるまで待たなければならなくなる。

正気にかえった小浪が、はたしてすなおにその口授を白状するだろうか。それも疑問だ。なによりも考えなくてはならないことは、まもなく鷲尾党も天狗党もここをかぎつけて小浪を奪いにくるだろうということである。

なるほど、こっちは今夜うまくこうして小浪を長持ち詰めにしてここへ運んではきているが、それをうっかり見のがしているような鷲尾党でもないし、天狗党にいたってはわざわざ小浪をおとりに使って、大倉玄蕃をおびき出したと思われる節さえあるのだ。

「どうする、鬼堂」

鬼堂は自分の胸に聞いてみた。

せっかくこの絵図を手には入れたが、小浪の口授を聞かなければ、はっきりとした断定は得られない。しかし、小浪をこのままこっちのものにしておくのは、まず不可能と見るほかはない。

しかし、玄蕃の助力があれば、小浪をこのまま江戸へつれてもいけるし、また玄蕃はこの絵図を見ただけで正確な判断をくだすことができるかも知れないのだ。

そのかわり、百万両は山分けにしなければならぬ。

「百万両が半分の五十万両になってしまうのは、なんとも惜しい気がするなあ」

そこまで考えて、鬼堂はふっと思いついたのである。

絵図はすでに手に入ったのだから、小浪はこのままここへおいて、鷲尾党と天狗党の出ようをしばらく待ってみることだ。

どうせ、小浪は九ツ（十二時）ごろまでは正気にかえらないのだ。それまでに鷲尾党も天狗党もここが発見できないようなら、百万両はそっくりこちらのものだし、もしどっちかが小浪をここへ横取りにくるようなら、その出かたによって、こっちにもまた取るべき手段が生じてくるだろう。

なによりも安心なことは、たとえ小浪を奪わ

れても、絵図はこっちが取りあげているのだから、敵はどうすることもできないということだ。

「よし、おれの腹はきまった」

鬼堂は絵図をふところへしまって、もう一度長持ちの中の小浪の顔を見た。

小浪は白々としたあやしいまでになまめかしい胸を押しひろげられたまま、まだこんこんと眠っている。

「これはたしかに目の毒だ」

鬼堂はそうつぶやきながら、小浪の襟をもとのようにあわせてやり、長持ちのふたをとってかぶせる。

そして、つるしてあるちょうちんを手にして、ふっと灯を吹き消した。

5

鬼堂が木の枝につるした小田原ぢょうちんを吹き消してからそういくらもたたないうちに、だれかがひたひたと堂の右がわを裏へまわってくる足音がした。

鬼堂は小浪を詰めた長持ちの前へひっそりと立ちながら、その足音で、味方がなにか注進にきたんだなと、すぐにわかる。

「大先生――」

「ここだ。鬼二郎か」

「はい、鷲尾党がいま鎌倉街道へ入ってきたと前衛から注進がありましたが、どういたしましょう」

案の定、玄蕃の間者はこの境内をちゃんと見とどけているようだ。

「向こうの人数は――」

「大倉玄蕃と供侍が三人、中間二人だということです」

「小人数だな。そのまま黙って通して、この境内へ入るようなら、そこで止めて一応用件を聞いてみろ」

「かしこまりました」

鬼二郎は表のほうへ去っていく。

玄蕃は手勢を二十人ばかりしたがえ、前後に間者を放して用心深く本陣を進め、今夜は程ガ谷と戸塚の中間、境木の立て場へ泊まったはずである。

それが士分の者たった三人をしたがえてここへ出向いたとすると、はじめから今夜はこっちが仕事をすると見こして、微行で戸塚へ様子を見にくる途中、先発の間者と出あって、急にこっちと談合する腹をきめたのだろう。そうでなければ、こんなに早くここへこられるはずはない。

いずれにしても、もうここをかぎつけたのはさすがに玄蕃である。へたに敵にまわすと、向こうにもどんな采配があるかわからない。玄蕃は天野屋の一族を絶滅してまでその遺産百万両をねらうような男だから、甘く見るととんだ失敗をしそうだ。

――なまじ欲張ってむだ骨を折るより、五十万両ずつ山分けにしてしまったほうが、結局得かも知れないな。

鬼堂はまたしてもふっとそんな気になってくる。

たとえば、命がけで百万両をそっくりこっちのものにしても、それは主人のものになるので、こっちの恩賞がそのために倍になるとは考えられない。

――そんな恩賞などより、おれはこの小浪という娘をもらったほうがいい。

いつになく鬼堂は忍者にあるまじき邪念をおこして、我ながら愕然とした。忍者が女に心をひかれるようになっては、もうおしまいである。忍者を廃業しなくてはならない。

鬼堂はこれまでずいぶん人の屋敷へ忍びこんで、度々美女のしどけない寝姿を見ているし、閨房の男女のあやしい秘事を見せつけられたことさえ一再ではない。が、それに心を動かすようでは、忍者としての隠密はつとまらないのだ。

それが、今夜は、さっき自分でちょうちんの灯を吹き消した時から、長持ちの中に眠ってい

る小浪の白々とした胸のあたりの豊かさが、かえってくっきりとまぶたに焼きついてきて、妙に忘れかねているのである。

「禁断の木の実だぞ、鬼堂」

が、それを取ろうと思えば、造作なくわがものにできる女体なのだ。そのかわり、忍者という職は捨てなければならない。

「いいじゃないか、このすばらしい女体がわがものになるんなら」

鬼堂はやみの中の長持ちを見すえながら、だんだんあやしい衝動に駆られてくる。

五十万両ずつ山分けにすると話がきまれば、この長持ちはおれがもらっていっても玄蕃に文句はないはずだ。そして、おれは黒住党を鬼太郎にゆずって隠居する。

そんなことを考えながら、鬼堂は我にもなく長持ちの前にしゃがみこんでいた。女体にさわってみずにはいられなくなったのである。

風が絶えず頭の上の森のこずえを鳴らして、ざあっと吹きすぎていった。

鬼堂はぎょっとして立ちあがった。たしかに人の足音を耳にしたのである。

「鬼二郎か――」

「はい、玄蕃がいま境内の前までできまして、大先生にお目にかかりたいと向こうから申し出ました。ここへ案内してもいいでしょうか」

「向こうの人数は、やはり六人きりか」

「そうです。供侍が三人、中間が二人ついているだけです」

「よし、行ってみよう。案内しなさい」

あわてることはない。この長持ちはどうせおれのものなんだと思ったので、鬼堂は鬼二郎のあとからゆっくり社の横手へまわっていった。

そこの木立の中に、見張りの鬼太郎が黒い影のようにひっそりと立っている。

「かわりはないか」

こっちから声をかけると、

「はい」

と、低い声で答える。

「御苦労だな」

その労をねぎらっておいて、鬼堂は境内の出口のほうへ歩を進めた。

玄蕃は中間の一人に無じるしの小田原ぢょうちんを持たせ、自分は風よけ頭巾（ずきん）、革羽織、野袴（のばかま）、わらじがけという厳重な身支度で、左右と背後を供侍にまもらせて、用心深くそこに立っていた。

こっちの人数はみんな物陰にひそんでいるとみえて、そこには一人も姿が見えない。

「きたな、玄蕃」

鬼堂は前へ立って、気軽に切り出す。

「うむ、きた」

玄蕃はひそかに目を光らせているようである。顔をつつんでいるから、語気でこっちの腹を計るほかはないのだろう。

「さっそくここへ出向いてくるとは、さすがに玄蕃だが、まさかひもはついていないだろうな」

「それは大丈夫だ」

「一つだけ聞いておきたいが、道中へ出た天狗（てんぐ）の人数はおよそわかっているのか」

「わからぬ。おぬしのほうではわかっているか」

そう正直に出られると、鬼堂のほうでも、

「いや、こっちでもわからぬ」

と、正直に答えるほかはない。

「やっぱり、わからないか」

「わからぬ。古賀と小浪、清川とお葉と多町の安二郎の三人一組み、これだけはわかっているが、あとは皆目わからぬ。この二組みと連絡をとる者さえ見かけないようだ」

「実は、こっちも今のところその二組みしかわかっておらん」

さすがに玄蕃は頭巾の中でちらっと太いまゆをよせたようだ。

「まったく姿をかえて、一人ずつ歩いている。これならちょっとわからないな」

「そう考えるほかはないが、それではいいざとい

う時に間にあうまい、――もっとも、間にあわないから、おぬしの今夜の長持ち詰めがうまくいったということにもなるのだが」

玄蕃はやっぱり戸塚の鎌倉屋のまわりへ見張りを伏せておいたようである。

「しかし、一人も敵の姿を見かけていないとなると、おぬしはかえって気が重かろう」

鬼堂が人ごとのように同情すると、

「御同様にな」

玄蕃はあっさり受け流して、

「おぬし、長持ちの中はもう調べずみらしいな」

と、それとなくさぐりを一本入れてくる。

「うむ、それはすんだ」

「宝物は見つかったか」

「その返事は現場へ行ってしよう。玄蕃、ちょうちんを持ってわしといっしょにくるか」

目でわらってみせると、玄蕃はちょっとこっちを見すえてから、

「よし、行こう。三蔵、ちょうちんをよこせ」

と、小者のほうへ手を出す。

「いいんですか、だんなさま」

はっとしたのは三蔵だけではなかったようだが、

「大事ない。おまえたちはここに待っておれ」

玄蕃は野太く供の者たちを制して、三蔵から小田原ぢょうちんをうけ取り、

「鬼堂、案内してくれ」

と、肩をならべてきた。

「玄蕃、まずきめておこう。五十万両ずつ山分けの件、承知だろうな」

鬼堂は堂のほうへ歩き出しながら持ちかける。

「それはなあ、鬼堂、おぬしが小浪の体からそれだけのものをちゃんとさがしているのなら、山分けにしてもよい」

「すると、小浪を運び出してきたのは、なんの手柄にもならんのか」

「小浪の体から宝物が出なければ、ただ娘をさ

らってきたのとおなじだからな」

「抜け目がないのう、玄蕃」

「いや、抜け目のないのはおぬしのほうだ。小浪の体から宝物が出て、そのなぞが一人で解ければ、おぬしは百万両を山分けにしようなどとはいわぬ男だ」

それはたしかにそのとおりなのだから、鬼堂も一言もない。

「よし、こうしよう。わしは今夜、小浪の体をここまで運んできた。その小浪の体から百万両のありかがわかったら、五十万両ずつ山分けにする。これならどうだ」

「うむ、それでよい。実はなあ、鬼堂、おぬしは今夜、見事に小浪をここまでさらってきた。しかし、小浪がたとえどんなものを持っていても、そのなぞはおぬしには解けまい、そう考えたので、百万両ははじめから山分けにするつもりで出向いているのだ」

玄蕃はそう告げて、低くわらい出す。

「そうか、それならありがたい。そこで、さっそくだがなあ、玄蕃、宝物は江戸へ持ってきてあるか、国もとにかくしてあるか、おぬしの見込みはどっちだ」

「その前に一つだけ聞くが、小浪はまさか死骸(しがい)にしてあるんじゃなかろうな」

「いや、そんなことはない。オランダわたりの眠り薬で、ただ眠らせてあるだけだ」

「ふうむ、眠り薬でな。それで、それはいつごろさめるんだ」

「まあ二刻(ふたとき)ほどだというから、今夜の九ツ（十二時）には正気にかえるだろう」

「そうか――。すると、おぬしが手に入れたのは、なにか絵図のようなものか」

玄蕃の勘はさすがに鋭い。

「うむ、絵図だ。小浪の守り袋の中から出てきたのだ」

「どんな絵図だね」

「それがどうも、京屋から八百富、その裏の小

浪の家、あの辺の位置を知らせているような図面なんだ」

「それはおかしい。宝物が江戸へ運ばれているとは思えない」

ちょうど二人は社の裏手へまわってきて、玄蕃のかざしているちょうちんの光の中へぼんやりと長持ちが浮かびあがって見え出してきた。

「あれだな」

つかつかとそばへ近づいていった玄蕃は、じろりとあたりを見まわしてから、

「鬼堂、とにかく長持ちのふたを取って見せてくれ」

と、鬼堂のほうを振りかえる。

「心得た」

鬼堂は玄蕃とならんで立って、中腰になりながら何気なく長持ちのふたを取る。

「あっ」

中は空だ。

「どうした、鬼堂、空じゃないか」

玄蕃は憤然と鬼堂をなじるようににらんだが、実はその前に、復讐を誓っている敵が当然まだ身近にいる危険のほうを先に直感すべきだったのである。

「いや、こんなはずはないんだ」

当の鬼堂も、あまりにも事の意外さに愕然と長持ちの中へ目をみはった時、

「しまった」

玄蕃は右のふくらっ脛に刺すような痛みを感じ、我にもなくちょうちんを取り落としてよろきめながら、それでも素早く吹き矢のようなものを抜きとって、

「鬼堂、気をつけろ、天狗だ」

自分ではっきり叫んだつもりだったが、その実、もう声にはなっていなかった。

そして、目は、地におちてめらめらと燃えあがるちょうちんのいやに赤く見える火の中へ、

「うぬっ」

とうめいて、刀の柄へ手をかけながら、おな

じようにしりもちをついた鬼堂をちゃんと見ている。

――やっぱり、やられたか。

吹き矢を吹きこむような音はたしかに耳にしているが、敵の姿はついに目に入らなかった。

こんなに用心深く武装してきたが、まさか足をねらわれるとは気がつかなかったと玄蕃は苦わらいをしながら、全身にまわっていく猛毒をどうしようもなく、たちまち意識を失っていく。

ざあっと森のこずえを風が吹き鳴らしていた。

6

そのころ――。

黒い波のように絶えず風に吹きなびかされている麦畑の中を、古賀新三郎はまだぐったりと眠りこけている小浪を帯でしっかりと背負って、ぐんぐん本街道のほうへいそいでいた。

先に立って道案内をしていくのは、伊太吉の磯吉である。

新三郎が伊太吉といっしょになったのは、怪しい長持ちの行列が戸塚の宿外れを出た時で、その後をつけようとする新三郎の肩を、うしろから軽くおさえたのだ。

「古賀さん、往来をつけるのは正直すぎる。敵はこっちの尾行をちゃんと計算に入れているはずだからね」

そういわれてみると、まったく一言もなかった。それからも新三郎は伊太吉のいうなりに動いた。そして、麦畑づたいに敵が鎌倉街道の森の中の社へ長持ちを運びこむのを見とどけると、こんどはその手前の林の中を丘のふもとまで進んで、その斜面をゆっくりと社の横手まで近づき、

「ここで待っていておくんなさい。おれがくるまで、決してここを動いちゃいけませんぜ」

そう念を押して、伊太吉は社の境内のほうへ忍びこんでいったようだった。

「こんなことをしていていいのかなあ」
新三郎は不安でたまらなかった。あの長持ちの中はたしかに小浪なのだ。ぐずぐずしていては黒住党の手でどうされてしまうかわからない。
だいいち、今夜の黒住党は、自分の目で見ただけでも十五、六人の人数である。しかも、味方はまだ伊太吉たった一人に会ったきりなのだ。無論、伊太吉一人というわけはないから、もうみんなこの社のまわりに集まっているのだろうが、それが何人ぐらいいるか、新三郎にはまるっきり見当がつかないだけに、胸が痛くなるほどつらかった。
どうせいざとなれば自分も切りこむつもりで、新三郎は伊太吉が声をかけてくるのを、いまかいまかと、とうとう半刻近く待たされてしまった。
あっちが社の裏とおよその見当はつくが、ここは林の斜面で、なにも見えない。絶えず風があるので、人の声らしいものさえ聞こえないのだ。
「小浪、おまえに万一のことがあれば、おれもきっと生きてはいない」
新三郎は何度も何度もそう心に誓いながら、あくまでも伊太吉を信用して、伊太吉の声のかかるのを待ちつづけた。それはなまやさしい辛抱ではなかった。
そして、ふいに自分の立っている左手のほうがぽっと赤くなって消えて、足もとのほうでわあっという人の叫び声が聞こえ出した。
——いよいよはじまったな。
新三郎が緊張して、思わずそっちへ耳を澄ました時、
「古賀さん——」
すぐ自分の下の林の中から、伊太吉の呼ぶ声がした。
「おお、ここだ」
駆けおりていってみると、伊太吉が小浪を抱

いて立っている。小浪だとはその甘いにおいですぐわかったのだ。
「こりゃどうしたんだ」
夢中で小浪を抱きとろうとすると、
「いけねえ、背中を出しなせえ」
伊太吉は息を切っているようだ。
「よし、こうか」
背中を向けてしゃがむと、伊太吉はすぐに小浪をおぶわせ、自分のさらしの腹まきをといて、しっかりと小浪を背中へ縛りつけてくれた。
「伊太さん、小浪は正気がないようだな」
「うむ、眠り薬でやられているらしい」
「大丈夫なんだろうな」
「大丈夫だ。さあ、行こう」
伊太吉はさっさと先に立って歩き出して、とにかく元の麦畑の中へ出てきたのである。
「伊太さん、よく一人で小浪が取りかえせたなあ」
まだ正気はつかないが、背中へ体温のかよう小浪をゆわえつけて、肩は重いが、肩は重ささえ新三郎にはむさぼるようになつかしく愛しい。心から伊太吉に感謝せずにはいられないのだ。
「古賀さん、おかげですっかりすんだんだ」
「すんだとは——」
「おれたちは今夜、大倉玄蕃をやっつけて、一族の恨みを晴らしたんだ。ついでに、古賀さんの兄さんの敵も取ったことになる」
「なんだって」
「今はねえ、古賀さん、これだけしかいえないんだ。表ざたにできない敵討ちなんだからねえ。わかるだろう、古賀さん」
「それはわかるが、しかし——」
「わけが聞きたいんだろう。そいつはねえ、古賀さん、水くさいようだが、おれたちは今夜のことは一切だれにもいわぬ。おたがいの間でも、二度とこのことは口にしない約束になっているんだ。たとえどんなことがあってもね」

伊太吉は特に後の言葉へ力を入れる。
「なるほど」
その気持ちは新三郎にもわかるような気がする。
「古賀さん、小浪さんをたのみます。おれたちは今夜それぞれ江戸へ引きあげるけれど、古賀さんは小浪さんをつれて、このまま箱根へ湯治にでも、十日ばかり遊んできてもらいたい。こんど江戸へ帰れば、ちゃんと家を用意しておくからと、これが元締めのことづけなんだ」
「そうか。じゃ、もうなにも聞かないことにしよう」
聞いてもむだだと新三郎は思ったのだ。
「そうしておくんなさい。ただ、くれぐれも小浪さんのことをたのみます」
「そりゃ伊太さん、小浪はもうおれの女房なんだから、だれにたのまれなくたって大切にする」
「まあ、そりゃそうでござんしょうが――どうもありがとうござんす」
伊太吉は明るくわらいながらおじぎをして、本街道へ出ると、そこから自分はまた麦畑の中へ姿を消していった。
その夜、鎌倉屋へかえって寝床の中へ寝かされた小浪は、九ツ（十二時）すぎころやっと正気にかえり、しばらくは、頭が痛い、胸がむかむかすると、泣きべそをかいて訴えていたが、新三郎がそばにつきっきりで介抱をするのだから、それだけでも安心だったらしく、やがてこんどは本当の眠りに入ったようだった。
翌朝――。
今朝はうまく起きられるかなと心配していたが、それでも起きるには起きて、無理に朝飯を少しとると、なんとなく顔にいつもの血色が出てきたようである。
「どうなんだ、気分は――。気がすすまなければ、今日は一日ここでゆっくり静養してもいいんだよ。もう別にいそぐ旅ではなくなったんだからな」

新三郎は昨夜から小浪の顔色ばかり見て、すっかり甘い亭主になりきっている。
「御飯をいただいたら、あたくし、とても気分が軽くなってきましたのよ。なんですか、まるで夜が明けたみたい」
小浪は自分でも思いがけなかったらしく、きょとんとした顔をして、目を輝かせている。
「そうか、そりゃよかった。飯が胃へおさまったんで、麻薬の気が体からすっかり消えたのかも知れないな」
「うれしい、あたくし」
「どうだ、歩けそうかな」
新三郎もほっとした気持ちで聞いてみると、
「きっと歩けますわ。もう大丈夫ですのよ」
と、よみがえったようにはればれとした声音である。
もう遅立ちの客もどんどん宿を立っていく時刻だ。
「古賀さん、ちょっとじゃまをしてもいいですか」
ふっと廊下の障子に人影がさして、清川の声が呼ぶ。
「やあ、どうぞ」
「お早うございます」
相かわらず八百屋の若だんな姿の一馬は、もう立つばかりの身支度で入ってきて、行儀よくあいさつをする。
「実はいま、わしのほうからあいさつに出ようと思っていたところなんだ。ゆうべはどうもいろいろとありがとう」
新三郎も座りなおってあいさつをかえす。清川とは、昨夜、この旅籠（はたご）の裏で上と下へ別れたきりなのである。
「御新造もすっかり元気になられたようですな」
「はい、おかげさまで」
まともに御新造と呼ばれると、まだ顔を赤らめる初々しい小浪だった。

「古賀さん、余計なことかも知れないが、一言だけ耳に入れておこうと思って、立ちがけにおじゃまをしました。ゆうべ、あの社の裏で、大倉玄蕃と、黒住鬼堂、鬼堂の一番高弟鬼太郎の三人が、三人とも吹き矢で足をねらわれて横死しました。吹き矢の竹に猛毒が塗ってあったようです」
「吹き矢で足をねえ」
初耳なので、新三郎は思わず目をみはる。
「つまり、ほかのところは武装していて、矢がとおらないおそれがある。そこで、下手人はうしろから脚絆だけのふくらっ脛をねらったんですな。しかも、ごく近いところからねらったようですが、下手人の姿はついにだれも見かけていません。人数もほんの四、五人で、目的を果たすと、風のように引きあげてしまったんでしょうな」
「なるほど――」
それは昨夜の伊太吉の話で新三郎にも納得がいく。
「一人は某家の老職、あとの二人は某大官の隠密、仕事が仕事だけに、どっちも横死したとはいえない。表ざたになると困るんで、両方ともそれぞれ死骸を長持ち詰めにして、ゆうべのうちに江戸へ運んでしまいました。いずれこれは病死ということになるんでしょう。したがって、表向きに下手人をさがすということは、まあおそらくないでしょう」
「ありがとう。それでやっとわしにも納得がいったようです」
「ゆうべここから御新造がさらわれたことも、ここの家へかたく口どめをしておきました。そのほうが後腐れがなくていいんです」
「かたじけない、清川さんにはすっかり世話になってしまったなあ」
「いや、これはわしの役目なんだから、おっと、こいつは口がすべったかな。――古賀さんはこれからどっちへ行くんです」

「わしたちは、しばらく箱根へ湯治に行ってこようと思っているんだ。だんなのほうは――?」
「わしも箱根へ湯治に行くといってお葉を引っぱり出したんだが、お葉はひとまず江戸へ帰りたいというもんだから。そうそう、お葉もお二方にあいさつをしていきたいといっていたんですがね、どうせまた江戸で会えるんだからと、今日は一足先に立たせました。御新造がすっかり元気になったと聞いたら、あれも安心するでしょう」
「どうぞ、お葉さんによろしくおっしゃってくださいませ」
小浪が心からそこへ両手をつかえる。
「そう申し聞けます。じゃ、古賀さん、いずれまた江戸で」
清川はそうあいさつをして足どりも軽く廊下へ出ていく。たぶん、店の間でお葉が待っているのだろう。
「小浪、これですっかりすんだねえ。清川のいまの話は、我々ももう忘れることにしよう」
新三郎はさりげなく小浪にそういい聞かせる。
「あなた、一つだけあたくし心配なことがありますのよ」
「どうしたんだ」
「ゆうべ、お守り袋の中のものを、だれかに抜かれているかも知れませんの。今朝見ると、腹まきがそこだけ刃物で切り裂かれているんです」
「いいさ、小浪は金なんかいらないんだろう」
「ええ、いりません」
「それなら、百万両はほしい亡者どもに勝手にさがさせればいいんだ。わしとおまえはもうこの宝さがしからぬけることにしよう」
「そうでしたわ。あたくし、長持ち詰めになどされるの、死んでももうたくさん」
「そうだとも。おれもゆうべのような暗い心配は、二度とごめんだ。――さあ、こっちもそろ

そろお立ちの支度をしようか」
新三郎は立ちあがって、廊下の障子をさっと左右にあけ放す。
今日もいい道中日和で、まだ朝のうちの薫風（くんぷう）が、旅情をそそるようにさわやかに座敷いっぱいに流れこんできた。

いろは剣法

初恋

宇田川源吾が伯父牧村将監から、至急帰国するようにという書状を手にして、早々に江戸を立ったのは、花に間もない三月初旬のことだった。

——いったい、どんな急用ができたんだろう。

源吾にはどうも見当がつきかねる。

伯父は宇都宮藩の城代家老をつとめ、奥底の知れない気むずかし屋として、一藩からけむたがられていた。その伯父に源吾が呼びつけられるのは、たいてい小言をいわれるときにきまっていたが、それは国もとにいたころのことで、近くにいればどうしても日常の言動が耳にはいりやすい。おまけに、こっちが日ごろあまり言動を慎まないほうときていたから、少年のころはまったくよく呼びつけられた。

しかし、おととしの秋、修業かたがた江戸見習いとして出府してからは、野州宇都宮とは二十里あまりも離れているうえに、もうこっちも二十四という一人まえの分別だけは持っているつもりだ。わざわざ国もとまで小言をいわれに呼びつけられるようなまねをした覚えはない。

——すると、やっぱり真弓さんのことかな。

源吾はちょっとうぬぼれたくなる。

伯父には真弓という娘がひとりきりで、男の子はない。どうしても真弓に養子を取らなければならないのだ。そして、真弓はことしもう十九になる。とっくに養子をきめていいはずなのに、いまだにそれをしないのは、伯父はまた当主松平佐渡守が部屋住みのころ鷹野に出て、百姓の娘に産ませた鷹之助さまという若君を預かっている。

鷹之助さまと真弓とはおなじ夜に牧村の屋敷

で生まれ、鷹之助さまの生母は非常に難産で、お産がすむとそのまま息を引き取ってしまった。

真弓は、病身だった伯母の死後、牧村家の家政を預かっていた女中頭千代の腹に生まれたので、伯父は娘の真弓のほうを里子に出し、若君鷹之助さまを手もとにおいて千代の乳で育てさせた。

この鷹之助さまに、残念ながら酒乱の悪癖がある。そのために、元服すれば当然城へあがるべき若君を、伯父はいまだに遠慮して手もとへおいている。場合によっては、これを牧村家の家督にしようという腹があるらしく、だから、いまだに真弓の養子をきめかねているのだろう。

が、当主佐渡守には、皮肉にもその後、江戸の正室にも愛妾にも男が生まれず、ことしは鷹之助さまを城へ迎えて嫡子届けを出すか、それとも姫君に養子を迎えるか、どっちかにきめなければならなくなってきた。

「りっぱに若君があるのに、なにも他家から養子を迎えることはないではないか」

藩内にはそういう意向が強く、国もとの仕置家老矢沢主馬がその旗頭で、それにはまだほかにそれだけの理由があるのだという。

伯父将監は、まだどっちともにえきらないでいるようである。源吾としては、御家督のことは重役どもにまかせておくとして、まかせておけないのは真弓のことだ。これは鷹之助さまの問題がどうきまろうとも、断然自分が嫁にもらうことにしている。伯父がいまさらなんといっても、当人同士がちゃんと約束しているのだからしかたがない。

源吾は十のとき両親に死別して、十六で元服するまで伯父の屋敷へ引き取られ、真弓とはきょうだいのようにして育てられた。

里子がえりの真弓は、けっしてうとんじられるというのではないが、なんとなく伯父にも生母の千代にも遠慮がちで、

「お乳母さまは真弓よりお乳をあげた若さまのほうがずっとかわいいのですわ」
　と、子どものころからちゃんと承知していた。産みの娘より、乳をあげた鷹之助さまのほうがかわいい、源吾から見ても、お乳母さまにはたしかにそういうところがあった。
　伯父の屋敷へ引き取られてからも、あまり寂しい顔は人に見せなかったほど、ずぶとい根性の骨を持って生まれた源吾は、自分がみなしごだけに、そういう真弓がふびんで、いつもやさしい遊び相手になり、事あれば味方にもなってきたが、その深い愛情が突然恋愛感情にかわったのは、一昨年の秋、いよいよ当分江戸詰めになると話がきまって、一日伯父の屋敷へあいさつに行ったときだった。
　伯父はちょうど来客中だったので、ふだん慣れているからかまわず、真弓の部屋へ先にあいさつに行った。
「こんにちは——」
「あら、いらっしゃいませ」
　あけ放した居間で、侍女を相手に針仕事をしていた真弓は、これに慣れっこになっているから、針を持ったままにっこりする。侍女が会釈をして、すぐ茶を入れに立っていった。
「源吾さま、お乳母さまにお会いになりましたか」
「いや、茶の間にはいなかったようだよ。どうして」
「真弓、このあいだしかられましたの」
　わざと針に目を逃げながら、真弓が寂しそうにいう。内気ではあるが芯じまりで、ふっくらと色白な面だちが、年ごろになって急に美しく見えだした真弓だ。藩中では宇都宮一だろうという評判があって、いや、諸侯の姫君にもあれだけの気品と美貌を持つひとは、江戸にも何人とはいないだろうという者さえある。
　正直なところ、このごろ真弓は見るたびに美人になると、源吾もひそかに感心していた。

「なにをしかられたんだね」
「あの、男と女はふたりきりで同席してはいけないのですって」
「なんだ、男女七歳にしてか——冗談じゃない」
　源吾は笑いだしてしまった。それはあかの他人にいうことで、小さいときからいっしょに育った自分たちには通用しないことだ。
「つまり、わしが真弓さんの居間へのこのことはいりこむのは、けしからんというのかえ」
「源吾さまとは申しませんけれど、ここへひとりで来られる男は、昔から源吾さまだけですもの」
「あ、そうか」
　それはたしかにそうにちがいない。ここへひとりで遊びにきたい若者はおおぜいいるだろうが、そういう特権をもっているのは源吾ひとりで、だいいち、ほかの男では真弓のほうから座を立ってしまうにちがいないのだ。
「お乳母さま、急に堅苦しくなったもんだな。もっとも、自分が伯父貴とふたりきりでいて真弓さんを産んだ経験者だからな」
「いや——、源吾さまは」
　真弓がおこったようににらみつけて、生娘らしいほおを桜色にする。
「これは失礼。御生母さまを悪くいっては申しわけないな」
　なんの邪心もない源吾は、いっこう平気だ。
「真弓さん、わかったぜ」
　源吾はおもちゃにしていた物差しでぴしゃりと自分のひざをたたいた。それがあまりすばらしい音だったので、
「まあ、痛くありません？　そんなにたたいて」
　と、真弓はやさしいまゆをひそめる。
「ありがとう。おかげで竹刀でたたかれつけているんでね」
「そう申せば、このあいだは慶三郎さまにお負

けになったのですってね」
　慶三郎は矢沢主馬の末弟で、年は二つほど上で、宇都宮藩の指南役小松崎の道場では源吾と並んで双璧といわれ、秋の紅白試合では両軍の大将同士で対戦した。腕まえは正直にいってほとんど互角だが、あまり勝負に拘泥しないたちの源吾のほうが、とかく負けがこむ。
　ことしは勝ち残った白軍四人を三人まで抜いたが、四人めが大将どうしの慶三郎で、面を一本入れたが、胴籠手を取られて、ついに敗軍の将となってしまった。
　その慶三郎は、このごろ別殿にいる鷹之助さまのところへ、取り巻きを連れてよくごきげん伺いにくる。
「春のときは勝ったよ」
　源吾はけろりとして答えた。
「ほんとうはどちらがお強いのでしょう」
　真弓は源吾のほうが強いといってもらいたいらしい。
「さあ、ほんとうのことは真剣勝負をやらんとわからんさ。真剣を持って、相手を倒したほうが強いんだ」
「そんな乱暴なこと、真弓はきらいです」
「わしも乱暴は好まんな。剣術なんかへたくそでも、人間は腹さえできていれば、めったに人に切られることはないそうだ。ばかが刀を抜いたら、逃げるにかぎる」
　源吾はあいかわらずひざを物差しでぴしゃぴしゃやりながら、
「そうだ、剣法より男女七歳の話だったっけ。お乳母さまは真弓さんを鷹之助さまと同席させたいんじゃないかなあ」
　と、思い出したようにいった。
「まさか、そんなこと――」
「それじゃ、慶三郎かな」
　これは矢沢主馬が末弟慶三郎をなんとか牧村家の養子にはめこみたい野心があると、知る者はみんな知っている事実で、慶三郎がよく鷹之

助さまのごきげん伺いかたがた遊び相手にくるのは、当人にもそういう下心があるからだと見ていいのである。
　真弓は娘心でそんな話題は好まないらしく、黙って針を運んでいる。
「とにかく、お乳母さまがそんなに心配しなくったって、わしのことならもう二、三日で江戸詰めになるんだ。同席したくたって、江戸からじゃ通いきれやしない。ご安心なさいませさ」
　そういって笑いながら、源吾はふっとそのとき気がついた。
　お乳母さまとしては、一方は自分の乳で育てた若君、一方は自分の腹を痛めた娘、しかもうまくいけば鷹之助さまは御家督になるかもしれない若君なのだから、これは当然いっしょにしたい気にもなるだろう。
　あいにく、鷹之助さまのほうは、娘より酒のほうで、将監から堅く酒を禁じられてから、酒のほうばかりねらっている。困ったことに、酒がすぎると殺伐になって、すぐ刀を抜きたがるのだ。酒の気がないとむっつりとして、世の中のすべてがあじけないらしく、考えこんでばかりいる。それがふびんさに、お乳母さまが伯父にかくれては、ほんの少し、酒を運んでいるという。
　その酒のほうへの関心を、なんとかして真弓のほうへ移せないものか、もしそんなことを考えたとすれば、じゃまになるのは源吾ということになる。あんまり近しくさせておいて、まちがいがあってからではまにあわないし、そうかといって、今まできょうだいのようにさせておいたものを、急にたずねてきてはいけないという口実も見つからない。
　――そうか、そのための江戸詰めなんだ。
　そこへ気がつくと、源吾は妙に興ざめた気がしてきて、江戸へ行く自分はなんでもないが、ひょっと鷹之助さまの酒乱のいけにえにされるかもしれない真弓が、たまらなく心配にもなっ

できた。
「真弓さん――」
　思わず声が低かったので、真弓ははっときれいな目をあげる。
「結婚ということは、女にも男にも一生の大事なんだ。けっして情に負けちゃだめだぜ」
　それがどういう意味なのか、利発な真弓にはすぐのみこめたらしく、はっきりと一つうなずいていた。
「わしがこっちにいれば、少しは力になってやれるんだが、――かまわんから、思いあまったことがあったら、手紙をお出し。すぐ加勢に駆けつけてきてあげる」
　いざという場合、伯父にもお乳母さまにも平気で食ってかかれるのはおれだけだと、源吾にはそういう覇気と自負があったのだ。
　そっと真弓がはなをすする。うなだれているひざへ涙がこぼれて、いそいでそで口を目へ持っていった。
「なあんだ。――どうしたんだえ、真弓さん」
「真弓も、真弓もいっしょに、江戸へ行きたい」
「無理いいなさんな。それとも、真弓さん、いっそ源吾のお嫁になるか」
　いつもの冗談口のつもりだったが、意外にも真弓がはっきりとうなずいてみせたのである。
「ほんとうか、真弓さん」
　源吾はびっくりして、もう一度たしかめずにはいられなかった。そして、真弓はまたはっきりとこっくりをして、さっと耳たぶまで赤くなり、つと、たもとで顔をおおってしまった。
「よし。じゃ、わしは真弓さんをきっとお嫁にする。きめたよ」
　あとになにをいっても、たもとの中でうなずくだけのういういしい真弓だった。

悪いひも

　おかしなものである。一度そうふたりの間で約束ができてしまうと、それはもうずっと昔からちゃんときまっていたように、なんの不安も不自然さも感じなかった。
「いま江戸へ立つまぎわになって、伯父貴に話していくのもどうかと思うから、話はおりを見てからにしよう。それまでいろいろ事情もかわってくるだろうし、もしかほかから結婚の話が出て、せっぱ詰まったら手紙をくれよ。すぐ飛んで帰って、伯父貴に話し、いかんといえば略奪して逃げ出すだけだ。それでいいだろう」
「ええ」
　真弓はもうおちついてわらっていた。
「つまり、おれに手紙をくれるときは、真弓さんはいつでも逃げ出せる用意をして待っていればいいんだ」
「どんなもの用意しておけばいいのでしょう」
　そんな子どもみたいなことを聞くお嫁さんでもあった。
　さいわい、国と江戸へ別れてから、真弓からは一度も手紙をうけとらなかった。ということは、真弓に一度も結婚問題がおこらなかったからで、それはまた鷹之助さまに対する伯父の腹がいまだにえきらないということにもなるのだ。
　真弓から一度も手紙はこなかったが、国の留守屋敷をあずけてある老僕幸右衛門からときどき出府の者にことづけてよこす包みの中には、必ずさらしもめんのはだじゅばんが数枚はいっていた。その一枚一枚のえり下に、よくみると白糸で朝顔の花が一輪、器用に縫いとってある。国を立つとき、別にそんな約束はしなかったが、それが真弓の心づくしだとは源吾にはすぐわかった。
　たぶん、まだ牧村の屋敷にいた時分だから、真弓は九つか十ぐらいだったろう。
「源吾さんはどんな花がいちばんお好き」
　と聞かれたことがあって、朝顔だよと答えたことをおぼえている。

「どうして朝顔がお好きなの」
「夏の朝、早く起きて、きれいに咲いた朝顔を見ると、はっきり目がさめるからさ」
それは夏だったからそう答えただけで、特に花のなかで朝顔が好きだったわけではない。が、こうつけ足してやるのだけは忘れなかった。
「それに、朝露にぬれて、ぱっとひらいた朝顔の花は、真弓さんによく似ているよ。きれいで、おちついて、どこか寂しいところもあってね」
子どもの時分、里子がえりの遠慮がちな真弓には、たしかに可憐といったおもかげがあったのだ。真弓は自分が朝顔の花に似ているといわれたことを、いまだに忘れずにいたとみえる。
――なかなか味なことをやるお嫁さんだなあ。
源吾はその一枚一枚のはだじゅばんを身につけるたびに、とてもうれしい気がした。
そんなわけで、真弓からは直接のたよりはなかったが、真弓のうわさはよく江戸へつたわってきた。ますます美人になるといううわさと同時に、
「いつまでひとりでおく気なんだろうな。もうことし十九じゃないか。だいいち、真弓さんがかわいそうだし、おれたちまで気がもめてしょうがない」
というおせっかいなやつがあると思えば、
「きまっているじゃないか。あのひとはいずれ奥方さまになるおかたさ」
ときめている者もある。
「いや、そうとはかぎっておらんぜ、主馬殿の舎弟慶の字が、しきりに通いつめているというし、慶の字はこのごろすっかり若君の腰ぎんちゃくになっているからな」
なかにはそんなうがった消息をもたらす者もあった。そういう中へ源吾の名が一度も出てこないのは、ずっと国もとを離れていたからだろう。

そこへ、こんど、至急帰国せよとの伯父の手紙なのだ。どんな用か、それは帰ってみるまでは見当もつかないが、
――真弓のことじゃないかな。
なんとなくそんな予感がしないこともないのである。源吾は、その日、早朝に筋違橋内の上屋敷を出て、日のながいころだから、十里はたっぷり歩ける。今夜の泊まりは松戸の宿か幸手宿か、そんなつもりで千住から草加へかかろうとしたのは、やがて四ツ（十時）に近いまだ朝のうちだった。
春の旅はどこを見ても青麦畑と菜の花畑と、のどかにうらうらとかげろうが燃えて、空のどこかであげひばりさえさえずってくれる。正直にいって、さぞ待ちかねているであろう恋人の身近へ帰る旅であり、源吾は心も足もひどく軽くたのしかった。
「あら、宇田さんじゃございません。お珍しいところで――」
ちょうど、並木道で、道ばたの木かげへしゃがんでわらじのひもを直しているのが、いなか道では目にたつようにあだっぽい旅じたくの女で、しかもほかに連れはないようだし、いずれは男を手玉にとってきた色街の女だろうが、それにしても女のひとり旅とは大胆なものだと感心して通りすぎようとしたとたん、ひょいとあねさまかむりのその女が、さっと顔を輝かしながら飛びつくように走りよってきた。
「なんだ。ひなにはまれな美人がいると思ったら、きみだったのか」
源吾もびっくりした。
源吾が国を出て足かけ三年、正味この一年半ばかりの間に江戸でおぼえたことといえば、小野派一刀流の家元中西忠兵衛の道場へ通ったことと、茶屋酒をおぼえたぐらいのものだった。道場通いのほうは好きで自分から思いたったことだが、茶屋酒のほうは江戸の悪友に誘われる

からつきあいでしかたなくおぼえたので、いちばんよく遊んだのは辰巳（たつみ）と呼ばれる深川の色街だった。

　意外にもいま旅姿で前に立った女は、深川へ行くたびに悪友が源吾の相手としてよんでくれた辰巳のお国という芸者で、酒席では深いなじみだ。年は二十一だというから、芸者としては年増（としま）の部にはいるが、芸も器量もみずぎわだっているうえに、男殺しにかけてもすごい腕だといううわさも聞いた。源吾にもたしかにそれらしいと思い当たる節がないでもなかったが、あいにくこっちはいつも真弓のはだじゅばんを身につけている。どこへ行ってもけっして女のはだにはふれたことがないから、お国ともただ酒席だけの深いなじみで、

「宇田さん、あんたって人、どうしてそう行儀がいいんだろう」

　と、ふたりきりの部屋でお国がしみじみ顔を見ていったことがある。むろん、それはあきらかに男をけいべつした顔ではあったが、

「悪く思うな。おれは女ぎらいなんだ」

　と、平気でわらっていると、どこかにびっくりした目をかくしきれなかった。

　そういう妙な因縁のあるお国だったのである。

「どこへ行くところなんです、宇田さんは」

「おれは国へ帰るところだが、きみこそどこへ行くんだ」

「ああ、宇田さんのお国は宇都宮でござんしたね。縁って、どうしてこう不思議なもんかしら。恥ずかしいけれど、あたし、ほんとうのことをいうと、悪いひもにからみつかれてしまって、へたをすると命までなくなりそうだから、そのひもにないしょで宇都宮へくらがえをしていくところなんです」

「ふうむ、それはきのどくだな」

「宇都宮ってとても繁盛なお城下町なんですってね」

「なあに、江戸から見れば百分の一にも足りないが、そうびっくりするほど寂しい町でもない。しかし、きみのような江戸芸者が宇都宮へ行ったら、田舎者はびっくりするだろう」

「さあ、どうですか、こんなおばあさん芸者になっちまっちゃねえ。あたしは伝馬町（てんまちょう）の丸屋さんて家へ住みこむんですけど、なじみがいに、宇田さん、ひいきにしてやってくださいね」

　口ではいっても、自信たっぷりのお国のようだ。

「承知した。国にもきみを知っている者が何人かいるはずだからな」

「不思議な縁ですねえ。ほんとうにいい人と道連れになったわ。いくらあたしがあばずれでも、女のひとり旅で、どうしようかと思っていたところなんです。でも、宇田さんは御迷惑かしら」

　肩をならべていそいそと歩きながら、そんな遠慮もする。

「かまわないさ。こっちも私用で帰るのんきな旅なんだ」

「うれしいわ。今夜の泊まりはどこかしら」

「そうだなあ。おれは幸手あたりと考えていたんだが、女の足じゃせいぜい松戸泊まりだろう」

「あたし、今夜こそ宇田さんを本気でくどいてみようかな」

「よしたほうがいいねえ。それこそ悪いひもになって、しじゅうこづかいをせびりに行くようになるぜ」

「宇田さんならどんな苦労したって、きっと養ってみせるわ」

「と、はじめのうちは、江戸へ捨ててきたひもにも実意を持っていたんだろう」

「大違い。一度でもほれたことがある男なら、女ですもの、捨てるなんてそんな気になれるもんですか。たかが死んだおっかさんが奉公していたうちの若だんなだものだから、義理にから

まれて、大きな声はたてられないし、とうとう女にされちまって、それから深川へ売り飛ばされて、ずるずるべったりにさんざん絞られて、別れるっていえば殺すっていうんです。ご家人(けにん)くずれで、打つ、買う、飲むの悪党なんだもの、つくづく泣かされました」
「しかし、今までしんぼうしたんだから、少しぐらいはいいところもあっただろう」
「あるもんですか。女なんて弱いものなんです。一度つけこまれたが最後、なんだかそれが弱みになって、いやでいやでたまらないのに、どうしても逃げきれないんですね。年も若かったから、あばれられるとこわくもあるし、――でも、もうそんなのはたくさん。あたしだって、今のうちなんだもの、一生に一度は自分から死ぬほど男にほれてみたいんです」
「つまり、宇都宮へそんな男をさがしに行くのかえ」
「うらみますよ、宇田さん」
お国がじっとたもとをつかんでくる。
「そんな口のきき方がありますか」
「なにか悪いことをいったかな」
「どうして、あんたって人は、そう薄情にできているんだろうな。あたし、ほんとうのことい っちまおうかしら」
ためいきをついて、ふっと立ち上がったとき、
「おうい」
うしろのほうから呼びかける男の声が耳についた。ぎょっとしたように振りかえったお国が、
「ああ、どうしよう、来たわ」
顔色をかえてぴったり肩をよせてくる。並木街道をいっさんにこっちへ走ってくるのは、どうやら御家人くずれらしい五分月代(さかやき)、着流しの侍で、
「宇田さん、お願い、助けて。あの男、あたしを殺しにきたんです」

と、お国はふらふらとそこへひざを突きそうになり、夢中で源吾の腕へしがみついてきた。

御家人くずれ

「なんとかは犬も食わんということがあるぜ。まあ、きみたちでなるべくうまく話をつけろよ」
痴話げんかなどは他人の口を出す幕じゃないと思ったので、源吾はわらいながら少し女のそばを離れて立った。
その間にぐんぐん追いついてきた着流しの男は、なるほど、三十がらみの苦みばしった男ぶりで、鋭い目になんとなく凶暴の色がある、ひどくすごみのききそうなつらがまえだ。
「お国、てめえそんなかっこうをして、どこへ行こうってんだ」
「さあ、どこへ行くんですかねえ」
お国は覚悟のまえらしく、冷たい顔をしてそっぽを向く。
「あの若僧は、てめえの連れか」
「さあ、どうですか」
「どうですかじゃわからねえ。連れか、連れでないか、はっきりいってみろ」
「いまさらそんなこと、あんたにいったってしようがないでしょ」
「ふうむ、それがおめえのあいさつなんだな」
「断っときますがね、宇田さんはあんたなんかと違って、ちっとも世間ずれがしていない若だんななんだから、あんまり変なまねはしないでくださいよ」
お国の口ぶりは、源吾が聞いていても、はなはだ思わせぶりだ。これでは誤解が生じやすい。いや、むしろ誤解を生じさせようとして、わざとそんないやがらせをいっているのかもしれぬ。
「なにをぬかしやがる。変なまねをして、おれのつらへどろを塗ったのはてめえたちのほうだ、とおれが取ってもいいんだな」

「どろってなんのことさ、五郎さん、あたしは別におまえのおかみさんになったおぼえは一度もないんですからね」
「まあいい、てめえのほうはあとまわしだ」
五郎さんと呼ばれる御家人くずれは、つかつかと源吾のほうへ進んできた。
「おい、若僧——」
どう血迷っているのか、はじめからけんか腰である。
「おれは公儀直参最上伴五郎だ。見知りおいてくれ」
「拙者は宇都宮藩宇田川源吾という若僧です。なにか用ですか」
源吾はむろん身にうしろ暗いことなど毛頭ないのだから、冷静に相手を迎えた。
「いわなくても知ってるだろうが、あのお国はおれの女房も同様な女だ」
「それは初耳ですな」
「そうか、初耳ならよくおぼえておけ。ところで、おまえはあの女のなんにあたるんだ」
なんでもないと答えるのは造作もないが、ちらっとお国のほうを見ると、しきりになにか目くばせをしている。つまり、どうしてもこの男と別れたいから、わけがあるようにいってくれとたのんでいるのだろう。それがまたなかなかいろっぽい目つきである。
「困ったなあ」
と、源吾は思わず口に出た。
「困る——？　なにが困るんだ。遠慮なくいってみろ」
「それが困るんだ。どうも困るよ」
源吾は正直に当惑の顔をお国のほうへ向けた。
「いいのよ、宇田さん、宇田さんは黙っていればいいんです。みんなあたしが悪いんだもの」
すかさず横合いからお国がうまい芝居をする。
「しかし、この人はだいぶおこっているようだから、ただではすまなくなる」
「ごめんなさいね、迷惑ばかりかけて」
「よし、わかった。ただの仲じゃないというんだな」
伴五郎のすごみのきく目が、ふたりの顔を見くらべながらきらりと光る。
「誤解しちゃ困る。それは誤解なんだが、しかし、聞くところによると、お国はあんたがきらいになったというんだ。その訳はわしのような若僧の口にすることじゃないが、とにかくお国はあんたと別れたいという希望を持っている。あんたも男なんだから、いやだという女のあとを追いまわしてもしようがない。きれいに別れてはどうかね」
そんな口はきかないつもりだったが、乗りかかった船でやむをえず、源吾は当たらずさわらずにいった。
「おい、若僧、てめえのいうことはそれだけか」
「それだけだ。わしは若僧だから、こんな事件にはあんまり関係したくないんだ。まあ、ふたりでよく話しあってみたまえ」
「人の女を寝取っておきやがって、むしのいいことをぬかしやがる。間男は重ねて四つと昔から相場がきまっているんだ。成敗してくれるから、刀を抜け」
「だれが間男をしたんだね。血迷っちゃ困る」
「いいから抜けというのに。ごたくはもうたくさんだ」
その目にはっきりと殺意のみなぎっているのを見て、源吾は、つまらんことになったなあと、はじめて少し後悔を感じた。まさか、女ひとりのために、武士ともあろうものが抜刀ざたにも及ぶまいと甘くみて、若いから多分にからかう気持ちのあったのがいけなかった。男と女の問題というものは、そう簡単なものではないらしい。
が、ここまできてしまっては、もういくら弁

明しても相手の耳へははいりそうもない。いや、弁解すればするほど、相手はのぼせあがるばかりだろう。人の痴話げんかのとばっちりをうけて、ばからしい話だが、刀を抜くほかはないのだ。

「貴公、ちょっと待ってくれ」

「逃げる気か、きさま」

「いや、逃げはせんが、その女に遺言があるんだ」

「なにっ」

思いがけない相手のことばに、伴五郎はいささかあきれた顔をしたが、

「しようがねえ、待ってやるから早くしろ」

と苦笑した。

「ありがとう――おい、お国うじ」

源吾はあらためてお国のほうを向いた。

「聞いてのとおり、われわれはここで真剣勝負をすることになった。それはどっちかが死ぬということだ。わしとしてはまことにつまらん話だが、きみと偶然ここで出会ったのが不運とあきらめるほかはない。そこで改めて聞くが、きみはこの男とほんとうに別れたいんだね」

「別れたいんです」

言下に答えて、お国もさすがに尋常ならざる顔色になっていた。

「もう一度考えてみる気はないかね。とかくきみたちは縁あっていままで夫婦のような間がらになってきているんだ。かりに、わしが目の前でこの男を切っても、きみはいい気味だとわらって見ていられるかね。あとでしまったといわれても、これだけは取りかえしのつかないことになるんだぜ」

「ばか、いいかげんにしねえか。切られるのはてめえのほうだ」

横から伴五郎が憎々しげに冷笑した。

「たいせつな話なんだから、きみはしばらく黙っていてくれ。――どうなんだね、お国うじ。ほかのこととは違う。生死の問題なんだからな、意地やみえを捨てて、もう一度よく考えてみてくれ」

お国の顔はしだいに蒼白（そうはく）になってきた。が、すぐにきっぱりと答えた。

「あたしは死ぬ気で江戸を逃げ出してきたんです。その男に未練なんか露ほどもありません」

そう言いきって、ぷいと、畑のほうを向いてしまうのだ。よほどこの悪いひもにいじめられてきたのだろう。この意地の強いかっこうは、そう見るよりほかはない。

「そうか。じゃ、しようがないな」

源吾はしかたなく大きなためいきを一つついた。

女ごころ

「おい、遺言がすんだら、早くしたくをしてもらいてえな」

伴五郎がひやかすように催促をする。

ここまで女に話しこんでいるのに、それでもまだ自分との仲を疑い、たかが女ひとりのために理性を失っているとすれば、この男はまったくくだらない人間だ。

「きみ、女は目の前で、きみが生きようと死のうと知ったことじゃない、そう言いきれるほど、きみがいやになっているんだぜ。それでも、きみはまだこの女に未練があるのかね」

「未練なんかあるもんか。てめえをたたっ切ってから、この女もあの世へおさらばをさせてやるだけのことよ」

「わしがきみの立場なら、これだけあいそづかしをされれば、きれいに別れてやるがね」

「おい。てめえ、そんなに命が惜しいのか」

「また何をかいわんやだ。きみはくだらん人間なんだなあ」

源吾はそういいながら羽織をぬいで、道ばたの草の上へおき、手早く下緒（さげお）をとってたすきにした。

「ぬかしやがったな、若僧」

血相を変えて伴五郎もたすきがけになり、しりをはしょって、
「来い」
さっと抜刀するなり、青眼につけた。
無言で抜き合わせる源吾だ。
――こいつはできる。
源吾はびっくりした。御徒町の心形刀流らしいが、何度か真剣勝負をやって、人を切った経験もあるのだろう。腕に自信があるから、はじめから人を若僧あつかいにして、真剣勝負に誘ったにちがいない。つまり、人を切ることをたのしみにしているような、一種の性格破綻者なのである。
――よしっ。
源吾のからだじゅうへ闘志がみなぎってきた。源吾はこれまで道場剣術を修業してきただけで、真剣勝負をやったことは一度もない。が、剣法とは竹刀で勝つ修業ではなく、一生に一度あるかないかはわからぬが、その真剣勝負に負けないための修業なんだと、いつも心がけてきた。そして、真剣勝負は腹ひとつのものだ、相手の剣を恐れあなどりさえしなければ、きっと相討ちにはこぎつけられるだろうという信念を持ってきた。
中西道場に寺田五郎左衛門という組み太刀の名人がいる。高柳又四郎、白井亨とともに、天下の中西道場で三羽がらすといわれる大先輩だが、この人はけっして竹刀打ちのけいこをしない。木剣で組み太刀のけいこばかりしている。それが自分の信念とおなじところを行っているような気がしたので、源吾は江戸にいたこの一年半ばかりの間、もっぱら五郎左衛門について組み太刀の教えをうけ、
「おまえはいい肝ったまだ」
と、ほめられたことがある。
はたして、いい肝ったまかどうか、偶然にもここで強敵と真剣を合わせるようになり、その肝ったまを自分でためす機会がきたのである。

ふしぎと、源吾は、こいつ強敵だと思った瞬間、さっと心眼がさえてきた。もうなんにも考えない。あるのは、間合い六尺ばかり離れたところに、敵のきっさきが殺気をおびて春日にぎらぎらと光っているばかりだ。
その敵のきっさきは、こっちののどへ吸いつこう、吸いつこうとする。それが実にはっきりとわかる。つまり、敵は突きが得意なのだ。来れば、払って前へ飛びぬける、飛びぬけるときこっちは片なぎがきくと思うから、来るなら来いと、源吾は突きを誘うように、
「えい」
自分のほうからぐいと一歩押して出た。
敵もその気構えを察したらしく、その手には乗れない。
「おう」
気合いだけうけながら、じりじりとひと足さがった。
うぬという顔つきで、歯がみをしているようだ。
しばらく対峙して呼吸を計りながら、またしても敵は闘志をかりたてて突きに出ようとする。その出鼻を、
「とうっ」
源吾はすかさず一歩圧倒して出た。その組み太刀から出た正確な呼吸と気魄に、敵は気合い負けがして、やっぱりひと足さがるよりしかたがない。
伴五郎の顔は蒼白になって、顔にあぶら汗が吹き出してきた。実をいうと、もう手も足も出ない。と見た源吾は、われにもなく、
「おうっ」
青眼の構えが、さっと大きく右半身の上段にかわった。まっこうから切りおろして、敵が突きの相討ちにくれば、払って飛ぶ。払ってくれば、逆に飛んで胴へきまる太刀に確信が持てたからだ。必殺痛烈な上段にかわって、ぐいと一歩踏みこもうとしたとたん、

「待って、宇田さん」
道ばたにまっさおになっていたお国が、なんと思ったか、無謀にも源吾の胸の中へぱっと身を投げ出してきた。
「あぶない」
その声はあとから出たので、いわば横合いからふいに切りつけられたのもおなじだから、源吾はひらりとうしろへ飛びさがる、空へしがみついた形のお国は、ばったりすそを乱して足もとへ倒れながら、
「殺さないで、お願い、宇田さん、あの人を殺さないで」
と、狂気のように源吾の足へすがりついてきた。
「そうか、そうか。——だいじょうぶだ」
一瞬きょとんと気抜けはしたが、そこに必死な女心を感じた源吾は、やっぱりそれがほんとうだと思い、急に胸があかるくなる。
「五郎さん、もうやめよう」
「ふん、いい度胸だな、若僧」
挑戦するように鼻の先でわらった伴五郎は、
「いずれ改めてあいさつをするぜ」
ぱちんと刀を鞘におさめ、もう一度引きつるような冷笑をうかべて、くるりと江戸のほうへきびすをかえす。自分では堂々たる悪党ぶりのつもりだろうが、死人のようなこわばった顔色なのだから、源吾にはあくたれ小僧の負け惜しみとしか見えない。
「おい、きみはいっしょに行かなくてもいいのか」
源吾はたすきをはずしながら、お国に聞いた。
お国は黙って起きあがって、着物のどろを払いながら、
「助けてもらいさえすればいいの。女って、いざとなると、やっぱりだめね」
と、つぶやくようにいった。
「それがほんとうだとわしは思うな、一度でも

好きだった男が、殺されていい気持ちのはずはない。きみはやっぱり心のやさしい女さ」
源吾は心からそういいながら、自分もまたあの男を切らずにすんでよかったと、やっぱり胸が軽い。遠くへ立ち止まってこわごわこっちの様子をながめていた上り下りの旅人たちが、ようやくこっちへ動きだしたようである。
その夜は、女づれだから、予定のごとく松戸泊まりになった。
「あたし、宇田さんと道連れになって、ほんとによかったわ。もし、あのときあたしひとりだったら、今ごろはきっとあの男に殺されていましたわ」
お国はそんなことをいって、もう伴五郎には未練を感じないらしく、ひとりでうきうきしていた。
「女ってそんなものかねえ」
源吾はそういうお国の気持ちが妙に割りきれない。もし、なにかのことで、自分が真弓にこんなふうにあいそづかしをされたらどうだろうと考えてみて、寂しくさえなってくるのだ。
「でも、宇田さんは強いんですねえ。あたしすっかり見なおしちまったわ」
「どうもありがとう。しかし、わしのほうが強くて助かったな。万一、これが逆だと、きみはけっして命がけであの男を引きとめてくれる気にはなれなかっただろうからな」
「おこりますよ、宇田さん。あたしは、あんたが切られるようだったら、ひとり殺しちゃ申しわけない、むろんあいつにむしゃぶりついていって、いっしょに切られる気でいたんです。いやんなっちまうな、そんなにあたしは薄情な女に見えるかしら」
お国はやるせなげにいろっぽいふうをして、こっちの出ようによっては、いつでもからだごと燃えあがってきそうなふぜいを隠さなかったが、源吾にはそういう女心がどうしても解せない。むしろ、この女のいちばん美しかったの

は、あの男を殺してくれるなと必死に身を投げ出してきたときの姿だったと、ひそかにながめていた。

伯父の前

翌日は少し無理な旅をして、宇都宮の城下へはいったのは、ながい春の日もやがて灯ともしごろであった。

お国とは、城下町へはいってから、さようならと、あっさりたもとをわかった。

こんどの帰国は、伯父から急用という書面でいそいで帰ってきたのだから、源吾はむろん家へ着くとすぐ、小者を伯父将監の屋敷へ走らせ、夜中ですがただちに参上いたしましょうかと、聞きあわせてやった。それには及ばぬ、明朝でよろしいから、今夜はゆっくり休息せよという伯父の返事である。

だから、源吾が伯父の屋敷をたずねたのは、その翌朝だった。

「おじさん、昨夜帰国いたしました。いつもお変わりなくてけっこうです」

伯父の前へ出て、改めて帰国のあいさつをすると、

「うむ、帰ったか」

と、むっつり答えただけで、足かけ三年ぶりに会う伯父は、あまりきげんのいい顔ではないようだ。

「なにか急用との書面のようでしたが」

「うむ」

伯父は黙って手あぶりの中の火を見ている。花の冷えとでもいうか、きょうは薄曇りで妙に寒々とした朝だった。

「おまえ、こんどは婦人の道連れがあったそうだな」

突然、伯父はぎろりと目をあげる。

「へえ、もうそんなことがお耳にはいっているんですか」

源吾はびっくりして目をみはった。そして、

ああそうかと気がついた。

きのうお国といっしょに雀ノ宮まできて、もう夕がたに近かったが、女の足には無理な旅だったので、その神社の前の掛け茶屋でしばらく足を休めた。宇都宮へまだ二里の道のり。あいにく、そこへ同藩の若侍が四、五騎、遠乗りをかけてきて、たちまち誤解されやすい婦人づれを見つかってしまったのである。しかも、その先頭がいつも競争相手という形になっている矢沢慶三郎で、あとの四人はいずれも慶三郎の取り巻きだ。どかどかと茶店へはいってきて、

「やあ、宇田さんじゃないか。いいところを見せるなあ」

と、ひやかし半分にすっとんきょうな声をあげたのは、ひと足さきに帰国していた笹田久利助で、江戸では二、三度いっしょに深川へ誘われたこともあるから、お国ともよく知っている。

「あら、笹田さん、お珍しいところで――」

「冗談いうな。ここはわが藩の領地だ。わしがここにいるのは珍しいことでもなんでもないが、名にし負う辰巳の里に住むおまえこそどうしたんだ。さては、みごと金的を謝当てたかな」

笹田がお国と源吾を見くらべながら、おおげさな表情をしてみせる。

「おかげさまで、どうやら思いがかないましたの。これからはなにかとお世話になりますことでございましょうから、どうぞよろしくお願いいたします」

そこは稼業がら、お国は如才なく相手になって、はなはだ思わせぶりな軽口をたたいていた。

「驚いたなあ。宇田さん、ほんとうか」

「なにが――?」

源吾も笹田が念を押す意味はちゃんとわかっていた。が、それはあくまでその場の冗談で、まさかそんなことを笹田が本気にしているはず

はないと思ったから、わざと通じないふりをしていた。冗談を真にうけていっしょうけんめい弁明するくらいばからしいことはないからである。
「なにがって、貴公、なかなか堂々たるもんじゃないか」
「それほどでもないさ」
「いや、どうして、たいした度胸だ」
「笹田さん、あんまりからかわないでくださいまし。顔を見るなり皆さんの前でなぶりものになさるなんて、少しなじみがいがないじゃございませんか」
お国がわざといろっぽくにらんでみせる。
「やあ、こりゃどうも。とんだ不粋で恐縮恐縮。国侍は国へ帰ると、とかく江戸まえがすぐはげがちなんでね。——さあ、諸君、粋をきかせて、われわれはひと足さきに出かけるといたしますかな」
「そうしよう。いずれ改めてごあいさつがあるだろうからね。じゃ、源吾、失礼」
慶三郎がにやりとわらいながら立ち上がったので、あとの連中も口々にあいさつをしながら茶店を出ていった。
それがもう伯父の耳につたわっている。国もとは狭いなあと、源吾はあきれざるをえない。
「源吾、その婦人とおまえは、どんな関係があるのだ」
「いいえ、関係などと、そんな深いわけはありません。あれは深川の芸者で、お国というんですが、こんどつごうで宇都宮へくらがえをすることになったと、途中で出会ったもんですから、いっしょに連れてきてやったまでなんです」
「そんな芸者を知っているくらいでは、江戸でだいぶ遊んだといううわさも、あながちうわさばかりではないようだな」
声は穏やかだが、どこかに冷たいものがある。

「驚きましたねえ。どんなうわさがお耳にはいっているか知りませんが、遊んだというほど遊んではいません。ただ、つきあいでときどきひっぱり出されただけで、それが証拠には割り勘のほか自分の金で遊んだことなど一度もないんですからね」
ほんとうのことなのだから、源吾はさばさばとしたものだ。
「ふうむ」
伯父は改めて源吾の顔を見ている。
「おまえ、ほんとうに自分の金で遊んだことはないのか」
「ありません。やぼにできているせいか、歌ひとつうたえないんですから、金をつかってまで遊ぶ気になれないんですね」
「人に金を借りたおぼえはないか」
「貸した覚えはありますが、借りた覚えはありません」
「ふうむ」
またしても、伯父は甥の様子をまじまじとながめている。さっぱりとしたもめん物を身につけて、どこにも放蕩児くさいにおいはみじんもない源吾なのだ。
「おまえ、あの女のために、草加でだれかと真剣勝負までしたそうだな」
「へえ」
これは意外だ。あのときは、そばにだれも知っている者の目はなかったはずである。どうしてそれが伯父の耳にはいったろう。
「驚きましたねえ。そんなことまでお耳にはいっているんですか」
「相手はお国とかいう女の前夫だということだな」
「そうだという話です。その勝負で、てまえは二つだけすばらしい経験をしました」
「経験——?」
「てまえにとってはありがたい経験でした。伯父さんですから正直に話しますが、てまえは剣

法は竹刀打ちじゃないという説です。いざというときは腹で切る。腹でなければ人は切れないという信念を持っていました。ですから、こんど江戸では中西道場の寺田五郎左衛門先生について、もっぱら組み太刀の手ほどきをうけてきましたが、それがこんど実地に役にたちました。相手は御家人くずれで、最上伴五郎という男でした。御徒町の心形刀流の門下で、腕も免許だそうですが、無頼のために破門された、それくらいですから、何度も真剣の下をくぐっている。お国の話では、人切り最上といって、やくざ仲間では有名なやつだそうです」

源吾は若々しい目を輝かしながら、しだいにことばに熱が乗ってくる。

――どうもおかしい。

将監は甥の青年らしいあふれるような気魄に圧倒された形で、自分が耳にした悪評とはまるっきり違うようだがと、ひそかに小首をかしげるのであった。

帰国の真相

「ごろんぼ剣客なんかとけんかしてもつまらないとは思ったんですが、最上はわしとお国との間を誤解して、どうしてもわしを切るというんです」

他人には相当気むずかしく見える伯父だそうだが、源吾はひざもとでしばらく育てられて、父親も同然に思っているから、話にうそもてらいもない。

「聞いてみると、最上はお国のいわゆる悪ひもというやつで、そのためにお国はいくら働いても江戸ではうだつがあがらない、だから、こんどこっそり宇都宮へくらがえをするんだという。そこで、わしは改めて女に聞いてみたんです。真剣勝負となると、どっちが切られるかわからない。きみはかりにも一度この男と夫婦同様の仲だったんだ。万一、わしがこの男を切ってしまってからではまにあわない。ほんとうに

わしがここでこの男と真剣勝負をしてもいいのか、つまり、きみはほんとうにこの男と仲直りをする気持ちはないのか、もう一度よく考えてみてくれといいました。そんな気持ちはありません、この男は悪党ですと、女は至極はっきりしているんです。もうしようがない。こっちは別に切る気はなかったんですが、生まれてはじめて真剣勝負というやつをやってみました」

「おまえが切られたら、どうするつもりだったのか」

将監が苦い顔でじろりと甥を見すえる。

「切られないといううぬぼれがあったんですね。一つには意地だし、もう一つは、人は腹で切るという自説を実地にためしてみたかったんです。いい経験をしました。最上もすごい腕でしたが、これは根性が腐っていますから、相討ちになるなというところまでわかってくると、命が惜しくなるんです。急にがたりと気魄がおちてくる。それと、寺田先生に仕込んでいただいた組み太刀の価値が、この勝負ではっきりとわかりました。実にありがたかったです」

「それは血気というものだ。武士はそんなくだらない女のことで刀など抜くものじゃない」

将監はいよいよ苦い顔をする。

「それはてまえもそう思います。おじさんですから、こんなばかげたことをお話しするんで、他人に自慢のできることじゃありません」

それは百も承知の源吾なのだ。

「もう一つの経験というのは、わしは切れると思ったから、ぎりぎりのところで青眼から上段に刀を振りかぶりました。最上の顔がまっさおに見えたとたん、ふいに横から女がなにか金切り声をあげて、わしに飛びついてきました。思わず身をかわして飛びのいたんで、女は敵とわしの間へつんのめりましたが、夢中で叫んでいるのを聞くと、殺さないで、お願い、あの人を殺さないでと、金切り声をあげている。はっとわしは気がついて、ああ、これがほんとうの女

の姿なんだと思うと、なんといったらいいでしょうねえ、とても人間らしいあたたかい気持ちで、美しいなあと思いました」
「すると、おまえは、そのお国という女とは、ただそれだけのことで、別に深い関係はないというのだな」
伯父は、またしても、およそ源吾の感激などとは別のことをいいだす。
「なんにもありゃしません。いったい、だれがそんなつまらないことを、伯父さんのお耳へ入れたんです」
「いや、なんでもなければそれでよい」
「ああ、そうそう。肝心なことを忘れていましたが、おじさんの火急の御用というのを聞かせてください」
そのためにいそいで帰国した源吾なのである。
「別に用があったわけではない。おまえが江戸でよく遊ぶようだから、まちがいのないうちに国元へ呼びもどしてはどうかと忠告してくれた者があるので、呼びもどすことにしたのだ」
これは意外な話である。源吾はぽかんとしてしまった。自分は、事実、江戸でそんなに放蕩（ほうとう）をしたおぼえはないが、考えてみると、こうして呼びもどされたからには、伯父はその忠告をほんとうにしているわけだ。
「驚いたなあ。それは、おじさん、忠告ではなくて、中傷というやつです。けしからん話だ」
「しかし、そんな中傷が出るようなところへ足踏みしたおまえにも、絶対におちどがないとはいえまい」
「それはそうですけれど、あんまりつきあいをしなければ、あいつは変人だとつまはじきされますからね。わしはさっきも申し上げたように、遊びなどそう好きではないが、これが世間だと思うからつきあっていただけです」
源吾は妙に腹さえたってきた。
「まあよい。おまえが放蕩者でなければ、これ

に越したことはないのだ。中傷の出どころなど、そう気にかけるには及ばぬ」
そこへ若党が来客を取り次いできたので、源吾は不満ながら伯父の前をさがらなければならなかった。
――どこかに大きなわながある。
源吾は早くもそれを直感した。ありもしないことをいって人を中傷するのは、その中傷するほうになにか目的があるからだ。いったい、それはだれなのか、その男の目的はなんなのか。こいつゆだんはできないとは思ったが、別に恐れる必要はない。なにかたくらんでいるようなやつは、必ずそのうちにしっぽを出す。こっちは、八方破れで、そのときを待っていればいいのだ。
そんなことを考えながら、源吾の足は当然当家の茶の間へ向かった。ともかくも、伯父の次にはまずお乳母（んば）さまに帰国のあいさつをするのが順序だからである。
「あ、お帰りなさいませ。お乳母さまでございましたら、新殿のほうだと存じます」
茶の間へ行ってみると、そこにいた顔見知りの女中がそう教えてくれた。新殿には、まだ正式ではないが、若殿の鷹之助さまがいる。いずれ一度はあいさつに出なければならないが、それより先にちょっとでもいいから真弓の顔を見ておきたい。
これもまだ正式ではないが、あのときは夫婦約束をしたのと江戸へ立ったのとが同時で、以来足かけ三年、顔を見ることができなかったのだ。お嫁さんだって待ちかねているだろうしと思うと、源吾はかっての知れた廊下を歩きながら、さすがに胸がわくわくした。
「真弓さん」
居間の障子の外から呼んでみる。
「はい」
なつかしい声が答えた。
「源吾です。失礼――」

すっと障子をあけて顔を出すと、白々とした真弓の顔がほんのり桜色になって、夢ではなく、現実にぱっと目の中へ飛びついてきた。うるんだような涼しい目に、にっこりとなつかしげに微笑している紅のくちびる、すばらしいなあと、源吾はからだじゅうが熱くなってくる。
　が、それは一瞬のことで、真弓は急に身をかたくしながら伏し目になり、かき消すように顔から微笑さえなくなってしまった。

絶交

「ゆうべ帰ってきたんだ」
　源吾はそれを、居間に真弓ひとりだから、お乳母さまの男女七歳にしてを気にしているんだと取ったので、かまわず後ろの障子をしめて、少し離れたところへすわってしまった。
「お帰りなさいませ」
　真弓は目を伏せたまま小声に答えて、会釈をする。
「真弓さんはちっとも変わらないなあ。いや、とても美人になったね」
　それは思ったままが口に出たことばだった。別れたときはまだ十七で、からだのどこかにおとなになりきれないういういしさが残っていたが、ことしはもう十九になっている。肉づきもすっかり均斉がとれてきて、しっとりとした娘ぶりに深沈としたなまめかしささえにおいこぼれているのだ。
　――おや。
　うっとりと見とれながら、源吾ははじめて気がついた。うつむいている真弓の顔が、なんとなく青ざめてきたのだ。
「どうかしたのか、真弓さん」
「いいえ」
「おかしいなあ。わしの帰ってきたのが、あんまりうれしそうじゃないね」
「源吾さまこそ、あの、お帰りになりたくなかったのでございましょう」

それをうつむいたまま、はっきりというのだ。
「どうしてさ」
「こんどもお道づれがあったのでございますってね。うかがいましたわ」
　ああ、そうか、ここへも中傷がきていると、源吾はびっくりした。
「なんだ、また放蕩の中傷か。今もさんざっぱらおじさんにそれを追及されてきたばかりなんだ。冗談じゃない。だれがそんなうわさをふりまいたんだえ」
「でも、真弓、もし源吾さまが、そのかたのほうがお好きなのでしたら、お約束はあきらめます」
「違う、違う。そんなんじゃないんだ。そりゃ、江戸のつきあいで、ときどき遊里へ友だちと行ったのはほんとうだ。そのときの知り合いで、深川のお国という芸者と道づれになったのも事実だが、わしは一度だって女になどはだはふれたことはない。だいいち、いつもちゃんと朝顔のはだ着を身につけているんだから、そんなことができるはずないじゃないか。おれの顔をしっかり見てくれよ、真弓さん」
　しかし、真弓はうつむいたまま顔をあげようともしないのだ。
「信用できないのかえ」
　源吾は悲しかった。
　あとでよく考えてみれば、真弓はそういううわさをまえから耳にして、長い間ひとりで煩悶してきたにちがいない。だから、そのくらいのことばでは、なかなか納得がいかなかったのだろう。いや、まちがいだったと心ではわかっても、感情がすっかりほごれるまでは少し時間がかかったはずだ。
　が、源吾にすれば、身に一点のやましさもないのに、いちばん自分を知ってくれるはずの真弓から疑われる。しかも、その根拠がただ人のうわさからなのだと考えると、悲しみが急に怒りに変わってきた。

「わしは、おじさんも、真弓さんもけいべつする。単なる人のうわさで、そんなにまでわしを放蕩児あつかいにしたいならかってにするがいい。もうむだな弁解なんかするものか」
あっと真弓が青い顔をあげた目の前で、源吾は威勢よくもろはだ脱ぎになり、今までたいせつにはだ身につけていた朝顔のじゅばんを手早くむしりとった。もとのとおりにはだを入れて、そのじゅばんをたたんでそこへ出し、
「真弓さん、これかえす。わしはこれを一度もけがしたおぼえはないが、きたないと思ったら焼きすてさせるといい。もう、真弓さんにもおじさんにも、二度と会わない」
きっぱりと言いきって立ち上がった。顔から血の気のひいているのが、自分でもわかった。
「お待ちになって、――源吾さま」
さすがにすがりつかんばかりに呼びとめたが、源吾はもう振りかえってもみなかった。
――男として、これだけはずかしめられれば、もうたくさんだ。
火のようなくやしさが胸にうずをまいて、目の前はまっくらである。
その怒りは、伯父の屋敷の玄関を出て、門を飛び出してもまだおさまらない。
――おれは浪人しよう。江戸の中西道場へ帰って、一生、剣の道で生きよう。だれがこんな小人ばかりいる宇都宮なんかにいてやるもんか。
そのくせ、別れぎわにすがりつかんばかりにしていた真弓の必死の顔が、目にちらついて離れない。あとでおれの潔白がわかれば、きっと後悔して泣くにちがいないんだ。かってに泣くがいいとも思う。
おこった顔など人に見せたくないから、源吾はすぐ自分の屋敷へ帰ってきた。
「どうかなさいましたか、若だんな」
出迎えに出た幸右衛門が、源吾の顔色を見て目をみはった。

「じいや、おれは少しおこっているんだ。しばらくひとりにしておいてくれ」
さっさとひとりで居間へ引きあげたものの、どうにもむかむかして、じっとしている気にはなれない。源吾は木剣を持って庭へ飛び出し、組み太刀の型を十回、五十回、百回、と力いっぱい振って、五百回に及んで大汗をかき、いささか疲労して、さすがに胸の火もしずまりかけてきた。
ふんどし一本になって井戸ばたへまわり、からだじゅうの汗をぬぐって、居間へもどってくると、幸右衛門が着替えのしたくをして待っている。
「汗になったでしょう。取りかえておきました」
かさねてあるはだじゅばんは、朝顔の花が縫い取ってあるやつだ。
「じいや、これでないのを出してくれ」
「洗ったのはまだかわきません」
そういえば、これはまだ真新しい。幸右衛門は主人が新しいのではもったいないといっているように取ったのだろう。
「けさ着て出たのも新しいのか」
「そうです。そういえば、あれはどこへ脱いできたんです、ありませんね」
「うむ、いいんだ。どうして新しいのが家にあるんだ」
侍だから、はだ着は毎日取り替える。江戸を立つとき着替えを二枚ほど用意してきたが、それはみんな二、三度水をくぐったやつだ。つまり、新しいのは江戸にもないのだ。
「つい二、三日まえとどいたばかりで、だれかにお願いしようと思っているところへ、突然若だんなが帰ってきなすったんです」
「ああ、そうか」
「けさのはどこへ忘れてきたんです」
「まあいい」
「よくはありません。あれは人さまの真心がこもったもんだ。一枚もそまつにしてはなんねえ

と、幸吉にもよくいいつけてありますだ。どこへ脱いできなすったね」
　若党幸吉はじいやのせがれで、江戸にいる間じゅう、身のまわりの世話をさせたが、こんどの帰国が突然だったので、ひと足あとから荷物の始末をして帰ってくることになっている。
「そういえば、幸吉はきょうあたり江戸を立つ日だな」
「わしは、若だんな、けさのじゅばんの話をしているです」
　がんこじじいはなかなか強硬だ。真弓と夫婦約束のあることは話してないが、幸右衛門はただきょうだい同様に育った源吾が出府について、真弓が女らしい情義からじゅばんの仕送りを思い立ったと信じ、ひそかに感謝しているのだろう。
「じいや、わしはきょう伯父の屋敷へ行って、まっすぐ帰ってきただけじゃ」
「じゃ、御家老さまのお屋敷へ脱いできなすったんかね」
「真弓の部屋で脱いで、真弓にかえしてきたんだ」
「なんでね」
「江戸へ立つとき、真弓はおれのお嫁になると約束したんだ。けさ行ってみたら、江戸で道楽をしてきたんだから、江戸の女のほうが好きなんだろうというようなことをいう。そんなにおれを侮辱するんなら、おれも真弓をけいべつする、もう二度と会わない、これは返すって脱いで突っかえしてきたんだ」
「へえ」
　幸右衛門は、ふんどし一本で力んでいる若主人の顔を、あきれてながめている。
「ほかのじゅばんを出してくれ」
「まあ待ちなされ」
「いつまでおれを裸にしておくんだ」
「江戸でおまえさまが放蕩しているってうわさは、きのうやきょうのことではねえ」

「なんだ、じいやまでそんなことを本気にしているのか」
「わしんところへは、せがれからちゃんと手紙がきてるです。わしには、だれがそんなうわさ振りまいて、なにをもくろんでいるんか、ちゃんとわかっていますだ。それはまあそれとして、お嬢さまがそのうわさを耳にしたのも、きのうやきょうではねえ」
「それがどうしたんだ」
「お嫁の約束はきょうまでわしは知らなかったが、それならなおさらのこと、お嬢さまは毎日毎日おまえさまのことで胸を痛めていなすったろう。娘っ子というものは、男ができるとみんなそんなもんだ」
「それは男を信用しないから、自分が悪いんだ」
「信用しないものが、こんなじゅばん縫って、わざわざとどけてくれると思いなさるかね、若だんな」
　ぐっと源吾は返事に詰まる。
「お嬢さまは毎日毎日おまえさまの放蕩を心配しながら、それでも真心こめてこのじゅばんを一枚一枚縫った。約束はふたりだけのものだから、だれにも相談はできねえ。どうか、うわさがうそであってくれろ、そんなおまえさまではけっしてない、そう思っても、もしやと、そこは了見の狭い娘心だ。どんなにつらかったか、――かわいそうだと、おまえさま思いなさらねえかね。おまえさんの顔を見たとたんに、お嬢さまはつもりつもった愚痴が出たんだと、そうは考えられなかったかね」
「寒い。かぜをひく。じいや、早くそれを着せろ」
　源吾はいきなり立ち上がって、幸右衛門に背を向けた。
「まあ、おまえさまがそんなにおこったんで、お嬢さまも胸ん中では、今ごろやれやれと安心して、よろこんでいなさるかもしれない」
　背中へ着物をきせてくれながら、老僕がいう。

「冗談じゃない。おれは浪人するつもりだったんだ」
「ほんとうかね、若だんな」
「ほんとうだ、そんなうわさを信用するなんて、伯父貴（おじき）も真弓もくだらなすぎる。おれは江戸へ出て、日本一の剣客になってやろうと腹をきめた」
「若だんなは江戸へ出て、もっと腹ができたと思ったにな」
「けいべつをするのか、じいや」
「そんなこと考えたんなら、若だんなのほうがもっとくだらないな」
「どうしてだ、いってみろ」
「おまえさまが浪人すると、うわさをふりまいた人たちが、手をたたいてよろこぶ」
　あっと源吾は目をみはって、きょうはおれの惨敗だと苦笑せずにはいられない。

老僕は語る

「いったい、うわさの出どころはどこなんだ」
　茶をいれてもらいながら、源吾は改めて幸右衛門に聞いてみた。
「矢沢主馬さまは御城代さまに、ことしこそ鷹之助さまをお城へ移すようにと、しきりにすすめていなさるそうだ」
「そんな話だな」
　それは源吾もよく知っている。
「しかし、なにぶんにもあの酒乱さまではな、御城代さま容易にうむとはいえますまい。これもじいやの考えだが、もし酒乱さまを一生お城へ移さないと、そこはお預かりして育てた人情で、御城代さまはせめて牧村の家名なりと鷹之助さまにゆずりたい、そのときは娘の真弓さまをお嫁にしてとは、だれしも考えることでしょう」
「あいにく、そうはいかんな」

「それ、そこだて、——おまえさまたちはそうされたくない。お乳母（んば）さまがまたぜひそうしたいと思う。今から考えると、おまえさまの江戸詰めは、お乳母さまの胸から出たことだ。つまり、お乳母さまは、若いふたりをそばへおくときっとはだじゅばんになると、まえから用心していたんだ」
「うむ。それはおれもそう気がついた。ところが、真弓がおれのお嫁になりたいといいだしたのは、その江戸詰めの話がきまってからなんだから、お乳母さまはよけいなことをしたことになるんだ」
「なあに、江戸詰めの話がなくても、それはおんなじことだ。心に思いがあれば、いつかはそうなる。これは縁ものだでな」
「しかし、今はどうなるかわからない。男の口から、もう二度と会わないと断言してきたんだ」
「けど、おまえさま、一度脱いできたお嬢さまのはだじゅばんを、また着ているではないかね」
「いや、寒いから着たんだ。ほかにはだじゅばんがなければ、これを着るよりしようがない」
「お嫁さまも、ほかにかわりがなければ、そのじゅばんのひとをもらうよりしようがねえです」
　幸右衛門がからかうようににやりとする。
「お嫁の話はあとだ、先を話してくれ」
「いそがなくてもいいだ。春の日はながいでね」
「ゆっくりでいいから、それからどうした」
「主馬さまは酒乱さまをぜひお城へ移したい。りこうな殿さまより、りこうでない殿さまのほうが、ああいう策士にはあつかいいいでね。そういう下心があるから、御舎弟の慶三郎さまをせっせと酒乱さまのところへやって、ごきげんをとらせているだ」
「うむ、それは昔からのことだ」
「もう一つその奥があるだ」
「ふうむ」
「若だんなが江戸詰めになるとまもなく、主馬

さまは御城代さまに、慶三郎さまをお嬢さまの婿にという話を持ちかけている。つまり、酒乱さまを御家督に推すかわりに、そうしてくれというおためごかしがあるです」
「そりゃむしがよすぎる。鷹之助さまが御家督になるならぬで、伯父貴は別になにも得をすることはないじゃないか。矢沢にそんなかってな熱を吹かせる弱みはなにもないと思うがねえ」
「ですから、御城代はうむとおっしゃらないんでしょう。けど、主馬さまから考えれば、鷹之助さまがお城へ直れば、当然、牧村家は御養子を迎えなければならない。そこへぜひ慶三郎さまをはめこみたい、それには若だんながじゃまになるということになりますだ」
「なるほどなあ」
源吾はそれで思いあたることがあった。江戸詰めの間じゅう、よく自分を遊びに誘ったのは、大なり小なり矢沢組ともくされる連中ばかりだった。すると、こんどお国と道づれになったのも、偶然なことではないのではないか。
――そうか。だから、草加で御家人くずれの最上伴五郎などというあいきょう者が飛び出してきたのだ。
矢沢組は人切り最上を使って、けんかにことをよせ、自分を殺さないまでも、かたわぐらいにはする腹だったのだ。それでなければ、だれも見ていないはずのあの一件が、早くも伯父の耳へまではいるはずはあるまい。
――なんのことだ。じゃ、慶三郎の一行がきのう雀ノ宮へあの時刻に遠乗りをかけたのも、偶然ではなくて、みんな筋書きどおりということになるじゃないか。
こうわかってみると、ゆだんはできないが、かれらのすることはいっこうたわいがなくて、ばかくさくさえなる。
いや、ただばかくさいですまされないのは、まんまと敵の手にのせられて、真弓と絶交してきたことだ。

――いまさら男が、あの啖呵はまちがいでした、許してくださいと、頭はさげられないしな。だいいち、もう二度と顔は見ないと、断言してきているのである。
「弱ったなあ」
源吾はすっかり考えこんでしまった。
「なにが弱ったんですね、若だんな」
「うむ。まあいい」
「おや、玄関へどなたかみえましたね」
たのむという声を聞きつけて、幸右衛門はわらいながら立ち上がった。

さぐりの使者

「若だんな、笹田久利助さまがみえたです。どうなさるね」
玄関へ取り次ぎに出たじいやが、もどってきて告げた。あんまりいい顔をしていないところを見ると、幸右衛門は久利助が矢沢組だということを、ちゃんと知っているのだろう。
「通してくれ、用があるから来たんだろうからな」
どうせろくな用ではあるまいが、こわがることはないのである。
「ここはもうすっかりおちついていなさるかね」
幸右衛門は自分の腹をなでて、にやりとわらってみせる。けんかはするなという意味なのだろう。
「だいじょうぶだ。おれは小人は相手にしない」
源吾はそう答えると、それにかぎるだ、といって、じいやは玄関へ引きかえしていった。
「やあ、きのうは失礼」
まもなく、笹田久利助がなれなれしい顔をしてはいってきた。だれにでもなれなれしくするやつは、たいてい浅薄で節操がないから、うまくおだてて利用すると、案外役にたつことがあるかもしれない。そう考えたので、
「やあ、よくきたね」

と、源吾も如才なくなれなれしい顔で迎えてやった。
「どうだね、江戸から帰ってくると、国もとはまるっきり眠っているように見えやしないかね」
「うむ、たしかにのんびりしているな。しかし、なかには眠っていない人間も相当いるんじゃないのか」
ちくりと皮肉をいってやると、
「そんなのはきみくらいのものだろう。なにしろ、堂々と江戸のなじみをつれて帰国するんだからな。いい度胸だって、みんな感心していたぜ」
と、久利助はすかさず放蕩児の悪名を押しつけようとする。
「こんど帰ってきてみて驚いたんだが、わしは江戸でよく遊んだことになっているらしいな」
源吾はわざと人のいい顔をして、さぐりを一本入れてみた。
「わしもこっちへ帰って宇田さんの評判にはびっくりしたんだが、しかし、きみぐらい女にもてれば、国もとの連中がうらやましがるのも無理はないさ」
「だれがそんなにうらやましがっているんだね」
「若い連中はみんなうらやみ組だ。だいいち、女にもてるような男でないと、ものの役にはたたない」
「そういえばそうだな」
「そうだとも。大いに遊んで、国もとの眠っているやつらをあっといわせてやるんだな」
「そうしよう」
「ときに、話は違うが、こんど宇田さんが帰国したのはおめでたのためだって、ほんとうかね」
久利助が突然、妙なことをいいだす。
「おめでた――?」
「うむ、縁談がきまったんだって、もっぱらの評判だぜ」

「やれやれ、ずいぶんいろいろな評判があるんだな。国もとは眠っているどころか、それじゃ人の頭のはえを追うのに相当いそがしいだろう」
「ひやかしちゃいけない」
さすがに久利助は苦笑しながら、
「宇田さんがこんど御城代の養子になるって話は、ほんとうなのかね」
と、もっともらしい顔をする。
さぐりを入れてきたな、慶三郎のさしがねだと気がついたとたん、源吾は逆にこの男を利用してやれという気になった。
「そいつは少し変だなあ。わしは矢沢の慶君が伯父の家へはいるかもしれないと聞かされていたがなあ」
「ほんとうか、おい。御城代がそう漏らされたのかね」
はたして、久利助は目を輝かす。慶三郎にいい忠義ができると考えたのだろう。
「伯父貴は責任があるから、軽々しくそんなことは口にしないさ」
「そうだろうなあ。じゃ、お乳母さまか」
「違う、違う」
「まさか、真弓さんがそんなことを口にするはずはないな」
「いやに気にするんだな。矢沢主馬どのが伯父貴にそう希望を申し入れたと、江戸にいるころうわさに聞いていたんだ」
「なあんだ」
久利助はがっかりしたようである。が、ころんでもただは起きないやつだ。
「宇田さんはどう思うね。慶君がもし牧村家へはいるとしたら、反対かね、賛成かね」
「反対も賛成もない、それは伯父貴の意志ひとつできまることだ」
「まあ、そりゃそうだが。じゃ、宇田さんとしては、そうなっても別に文句はないんだな」
「むろんない」

「お乳母さまあたりの気持ちはどうなんだろうな。宇田さんはあそこの家族も同様なんだから、なにか聞いていないかね」
久利助はいよいよたいこもち根性を発揮してくる。
「さあ、お乳母さまは伯父貴しだいだろう。昔からそういうひとだ」
「すると、問題は真弓さんだな」
「あれはもうきまっている」
「へえ、どうきまっているんだね」
「牧村家は男がいないんだから、当然、養子を取らなければならんが、その養子は必ずしも真弓といっしょにしなければならないというわけじゃない。世の中には夫婦養子という例もたくさんあるからね」
「というと、それはどういう意味になるんだね」
久利助野だいこはまだふにおちない顔つきだ。
「頭が悪いぞ、久利助」
「そうかなあ」
「わしを女にもてる男だとほめてくれたのは、きみじゃないのかね」
「なんだって——？　それは、それは真弓さんは宇田さんがもらう、つまり、真弓さんは宇田さんが好きだと取ってもいいのか」
「わしはこれで、ずいぶん物の役にたつ男さ」
「へえ」
野だいこはあいた口がふさがらないようである。
「念のために聞いておきたいんだがね、それはもう御城代も承知ずみのことなのかね」
「まだわからないな」
「お乳母さまもか」
「そっちもまだわからないな」
「じゃ、つまり、その、この話はまだ当人どうしの意志だけということになるんだね」
「いや、おれの意志だけなんだ。真弓がどう考えているか、それはこれから当たってみるんだ

が、まあ十中の八、九は、先方にもその気があるだろうな」
真弓をいたずら娘にするのは、真弓の名誉のために控えておかなければならないのだ。
「なあんだ、宇田さんも人が悪いなあ」
久利助野だいこは、あきれた顔をしながらもまだ半信半疑で、しきりにさぐるようなことを口にしていたが、それ以上のことは源吾がなかなかしっぽをつかませないので、
「ああ、そうそう、肝心なことを忘れていた。きょう夕がたから、みんなで伝馬町の丸屋で、宇田さんの帰国祝いをやろうということになっているんだ。ぜひ来てくれたまえ」
と、念を押して帰っていった。
丸屋にはお国がいる。またなにかをたくらんだなとは思ったが、いまの久利助の報告が慶三郎方へどうひびくか、いわばこっちもすでに挑戦の矢を放ったも同じなのだから、源吾はけっしてあとへはひかないことに腹をきめた。

野だいこのしばい

その夕がた——。
「若だんな、今夜はあんまり飲まねえがいいですぞ」
源吾は出がけに、幸右衛門からくれぐれも念を押されて家を出た。
今夜の行動は、どうせまた一から十まで、すぐ伯父の耳へ筒抜けになるのだろう。そのために、敵はわざわざお国のいる丸屋を会場に選んだと見ていい。絶対にゆだんは禁物だが、伯父にも真弓にも絶交をたたきつけ、いざとなったら浪人してやろうとまでに一度は腹をきめたのだ。もうだれにも遠慮きがねはいらないから、正々堂々とやれという気持ちが、はじめから源吾にあった。
丸屋へ集まったのは、いずれもひとくせあるやつばかり十五、六人で、その大半はむろん慶三郎を取りまく矢沢組だ。そうではないほんの

四、五人は、今夜の中傷の裏づけをさせるために、わざと敵が呼んでおいたのだろう。

宴席は招かれた客だから源吾が正座につき、隣へ慶三郎が並んだ。あとは左右にわかれて膳をすえ、一同を代表して慶三郎のおめでとうのあいさつで酒宴はにぎやかに始まった。芸者も七、八人酌に出ているが、そのなかにお国の姿は見えない。

――おかしいな。

と思っていたら、実はこれが敵の作戦の一つだったようだ。

「宇田さん、江戸で遊びなれている目から見ると、こっちのおんなたちはやぼに見えやしないかね」

慶三郎の横に陣取っている久利助野だいこが、おくめんもなくまた江戸の放蕩児あつかいを押しつけてきた。

「そんなことはないさ」

源吾は軽くあしらっておいたが、

「あら、こちらさまは江戸のおかたでございますか」

と、そこにいた中年増があきらかにいやな顔をした。

「そうだよ。この人は仲之町でも深川でもさんざん本場の芸者を泣かせてきて、遊びのほうでは免許皆伝さ。まあ、きみたち、せいぜいわらわれないようにするんだな」

「ああ、こわい」

中年増はおどけたかっこうで、さっさと下座のほうへ逃げていってしまった。

「こんばんは」

そこへ新しいちょうしを持ってお国があらわれたのである。さすがに清妍を競う深川で鳴らしたおんなだから、着物のきこなし、髪形、みずぎわだった芸者ぶりで、それが末座でおじぎをして立ち上がると、すそさばきもあざやかに、まっすぐ正面の源吾の前へ進んですわった。

「宇田さん、きのうはどうも――。あたし、こんなに早くお目にかかれると思わなかった。うれしいわ」

思い入れたっぷりで酌をするのだから、目だたずにはいられない。

「ようよう、御両人」

と、すっとんきょうなやじが飛んで、たちまち杯が集まってくる。

「御一同」

久利助野だいこが大きな声で呼びながら立ち上がった。

「ただいまごらんの美人は、そもそも江戸は深川以来の宇田さんの深いなじみでな、こんど宇田さんが帰国するについて、わざわざ当宇都宮まで追いかけてきたという仲なのだから、諸君はけっしてこの美人に野心を起こさんよう、あらかじめ注意いたしておく」

「おいおい、久利助、座敷へ出れば芸者なんだから、酌ぐらいはさせてもいいだろう」

「それは宇田さんに掛け合ってくれ」

座はようやく酒に乱れてきたが、お国はいっこうに源吾のそばを立とうとしない。

「おい、源吾」

末席のほうから関口流柔術では宇都宮藩一をもって任じている大野荘太郎という男が、大きな声で叫んで、じろりとこっちをにらみつけた。これは矢沢組ではないが、日ごろから酒癖のあまりよくない男である。

「なんだね、荘太」

「貴公はいつの間にそんな遊蕩児になったたんだ」

「いや、別に遊蕩児になったわけじゃない」

「ごまかすな。遊蕩児にならん者が、そんなくだらん芸者などにほめられるわけはなかろう。なんだ、そのざまは」

そら始まったとにやにやしている者と、そっちはそっち、こっちはこっちと芸者を相手にしてすましている者と、どうやらこれはこうなるだろうと、矢沢組はわざわざ酒癖の悪い大野を

この席へ引っ張り出しておいたように見える。大将の慶三郎は、どこを風が吹くかというように、はじめから行儀よく、そっぽを向いている。
「まあいい、そうからむな」
相手になるのは矢沢組の芝居にのせられるようなものだから、源吾はあっさりうけ流す。
「よくはない。そんなくだらん芸者などにほれられて、大きなつらをするな」
「豪傑さん、くだらん芸者ですいませんでしたね」
お国がぐいとそっちを向いてやりかえした。
「宇田さんにほれたのはあたしのかって、あんまりよけいなお世話をやいて、水をささないでくださいまし」
「生意気な口をきくな。われわれは源吾の将来を心配するから、忠告しているんだ、黙っておれ」
「この人の心配なら、あたしのほうがよっぽどしているんです。ひとさまのお世話はうけたくありません」
「ばか、きさまなどがいくら心配したって、どれほどのことができるんだ。将来有為の男をせいぜい遊蕩児にして、藩を追い出されるぐらいがおちだ」
「けっこうでございますとも。この人が浪人させられたら、よろこんで江戸へつれて帰って、あたしがりっぱにたてひいてみせます。安心してくださいまし」
お国はてきぱきと逆襲して、一歩も負けてはいない。その江戸弁のあざやかな啖呵に、男たちも女たちも、さすがにみんな好奇の目をみはっている。
「宇田さん、きみはほんとうにお国にたてひいてもらうつもりでいるのか」
久利助野だいこがけしかけるように横から口を出した。
「わしは藩を追い出されるほどまぬけじゃない

よ」
「そうか。すると、両手に花というわけか。一方に宇都宮藩第一の美人、一方に里育ちの水もしたたる江戸女、やっぱり貴公は女にもてる男だ」
大野豪傑のは多少とも友人の身を案じる誠意があるが、野だいこのはまったく悪意から出るひやかしだ。
「笹田さん――」
お国がすかさずそっちへひざを向けた。酔っていささかひざ前はくずれかけているが、それだけにひどくあだっぽくなってきたお国だ。
「その藩第一の美人って、どなたのことでござんす」
「まあ、よろしい」
「よろしいことはござんせん。宇田さんはお国ひとりのもの、意地でもほかの女には指一本させませんと、その美人さんにあなたから、ようくくぎをさしておいていただきます」
「ようよう、またえらくほれたもんだな。あやまる、あやまる」
野だいこがおおげさに頭をかいてみせたので、やっと一座にわらい声が起こった。大野豪傑は苦々しい顔はしているがそっぽを向いて、それ以上からんで出ようとはしない。
「宇田さん、ちょっと――」
お国はいきなり源吾の手をつかんで立ち上がった。
「なにか用か」
「話があるんです」
「そうか」
いい機会だ、これ以上でくの坊にされていることはない、このまま帰ってやろうと、とっさに思案がきまったので、源吾はおとなしく立つことにした。
お国がその手を取って、はでに座敷の中央を通りながら、
「御一同さま、しばらく失礼させていただきま

す」
　と、あいさつをしていく。
「いいところを見せるなあ」
「もうお床入りか、まだ早いぞ」
　そんなやじや罵倒(ばとう)が、にぎやかなわらい声といっしょにいつまでもうずを巻いていた。

おぼろ月夜

「どこへ連れていく気なんだ」
　源吾は階段をおりてから聞いた。
「どこへって、これからほんとうはお床入りのぬれ場になるのよ。むろん、あたしが宇田さんをくどくんです」
　お国がいろっぽい目をしてみせる。
「冗談いうなよ」
「そうくるだろうと覚悟してました。いくらくどいたって、うんという人じゃないんだもの。憎らしいってありゃしない」
「おれのぼくねんじんは、今夜にはじまったことじゃねえ」
「じゃ、お帰りになる？　もうあんなお座敷、いやなんでしょう」
　江戸以来のつきあいだから、こっちの気持ちはよく読んでいるお国だ。
「うむ、腰の物を持ってきてくれ」
「ぬれ場のかわり、あたしもそこまで送ってあげるわ」
　お国はすなおに刀を取りに行って、すぐ引き返してきた。
「きみは座敷へ帰らなくていいのか」
「ふ、ふ、まだお床入りのさいちゅうじゃありませんか」
　玄関から表へ出ると、江戸の色街と違って、あたりはもうひっそり寝しずまっているところは、春の月がおぼろにかすんでいた。
「お国、今夜の筋書きはだれが書いたんだね」
　聞かなくてもわかってはいるが、つい口に出る。

「そんなやぼなこと、お聞きになるもんじゃござんせん」
「そうか、そうだったな」
　女には女の立場がある、しいて聞くまでもないと思った。
「宇田さん、あたしの悪ひも、とうとうここまで追いかけてきているのよ」
　少し歩いてから、お国がぽつんという。
「ふうむ、最上がねえ」
「悪縁だから、しょうがありゃしない。あたしはまた江戸へつれて帰られるかもしれないんです」
「いいじゃないか。きみの心の中にはいつも最上がいる。あの草加できみが刀の中へ飛びこんだとき、わしはそれをたしかに見た。あのときのきみが、正直にいうと、わたしにはいちばん美しく見えた。りっぱに添いとげてみろよ。女の真心で、いつかは悪ひもがいいひとになるかもしれんじゃないか」
「さあ、どうなんでしょうかね」
　お国はやるせなげである。
「もういいぜ」
　道はだんだん寂しくなるので、源吾は立ち止まった。あんまり遠くなっては、ひとりで帰すのが物騒になる。
「宇田さん、もうお目にかかれないかもしれないけれど、これだけはおぼえといてください」
　じいっと見上げて、お国の目になにか思い詰めた色がある。
「あたしは、あたしは悪い女でした」
　ああ、道中から今夜へかけての真相に、良心を責められているんだなと気がついたから、
「そのことならもういい。すんだことは、おたがいに水に流すことだ」
　と、源吾はあっさりと口をふさいでやる。
「あたしはねえ、悪い女だけれど、宇田さんにはほんとうにほれている。あんたのようなりっぱな男、あたしははじめてだった」

「おいおい、こんなところでくどいちゃ困るじゃないか」
「あたしは生まれるところをまちがえちまったんだからしようがない。どうせろくな死に方はしないでしょうけど、こんなたちの悪い女もいたってこと、たまには思い出してくださいね」
「江戸へ行けば、また会う日もあるさ。ここで見ていてやるから、早くお帰り」
「あんたのは、あんたのはそれが本心から出る親切なんだもの」
　ふっとお国の目に涙が盛りあがってきたが、
「帰ります。あたしより、宇田さん、あんたこそ帰りを気をつけてくださいね、敵が多いんだから」
　と、そっと目をふいた。
「だいじょうぶだ。わしが強いのは知っているじゃないか」
「だから、安心はしていますけれど、――じゃ、さようなら」
「おやすみ」
　お国はつときびすをかえして、もとの道を小走りに駆けだした。
　おぼろ月の中へその姿が消えて、下駄の音が聞こえなくなるまで、源吾は立って見ていてやったが、もういいと思ったので、城内のほうへ歩きだす。
　――言いたいことがあって、いえない、そんなかっこうだったな。
　そうか、ことによると待ち伏せがあるのかもしれない。はっと思い、あたりを見まわしたが、そう気にはならなかった。酔って気が大きくなっているせいだろう。
　しかし、切ってはいかんと思う。待ち伏せはどうせ同藩の者だ。なるべく罪は作りたくない。峰打ちに出て、すきがあったら逃げ出すことだと、心に用意ができる。
　――真弓はもう寝たかな。
　ふっと、けさの泣きだしそうな顔を思いうか

べて、胸が重くなってきた。
　お嫁さまもほかにかわりがなければ、そのじゅばんのひとをもらうよりしょうがねえですと、じいやは喝破していたが、絶交を断言してしまった今となっては、男としてどうにもこっちから頭をさげてはいけないのだ。
　それに、今夜のことは、あしたもう大きなおまけがついて、真弓の耳にも、伯父貴の耳にもはいる。お国の啖呵がはでだっただけに、あのとおりのことが告げ口になっても、お嬢さま育ちの真弓にはひどい打撃になるだろう。しかも、お床入りの一幕がおまけにつくのだ。
　――こんどこそ真弓も信用して、おれのことはすっかりあいそをつかしてしまうだろう。
　――いや、そんな中傷ぐらいで、おれにあいそをつかすようなあさはかな真弓なら、こっちのほうでごめんをこうむらあ。
　そうはいばってみても、真弓なしではまったく人生がはかなすぎる源吾なのだ。真弓がほかの男と結婚するようになれば、おそらく宇都宮にはいたたまらなくなるだろう。けっきょく、浪人して江戸へでも行くよりほかはない。
　――それにしても、慶三郎のやつ、うまい芝居をしくみやがったもんだな。
　腹がたつというより、あまりにも見えすいているだけに、ただ苦笑しているよりしようがなかった。
　――あいつが家老になると、きっとりっぱな悪家老ができあがるだろう。
　それはそれでもしかたがないが、もし真弓があいつの嫁になるようだったら、
　――それだけは許せない。断然、おれはあいつをたたっ切ってやる。
　源吾はむかむかしてきた。あんなけだものと、純情そのもののような真弓を並べて考えるだけでもけがらわしい。
「真弓、けっしてだまされるんじゃないぞ」
　思わず口に出して、源吾はぐんぐん大またに歩

きだす。道はやがて、城内の屋敷町へはいろうとして、一方は寺の土べい、一方はあき地の林になっている寂しいところへかかった。
「えいっ」
ふいに、うしろから、すさまじい殺気といっしょに、火のように切りかかってきたやつがある。

やぶれかぶれ

こういうこともあるだろうと、ちゃんと覚悟はして歩いていた源吾だが、そのあまりにも猛烈な切り込みには、思わず背筋が寒くならずにはいられなかった。
が、そこは日ごろの修業のおかげで、背後に剣気を感じたとたん、抜きうちにうしろを払って追い討ちに備えながら、なかば無意識にひらりと前へ跳躍している。その足が地につくのと、くるりと敵のほうを向いたのと同時だ。
ふいのうしろげさをしそんじた敵は、黒いずきんで顔をつつみ、着流しのしりっぱしょりというでたちだ。必殺の初太刀をみごとにかわされて、それが無念なのか、青眼に直した剣に火のような忿懣がたぎっている。
「名のれ、ひきょう者」
相青眼につけて叱咤しながら、源吾はすでに、敵は人切り最上だと、早くも見抜いていた。同藩のなかには、おそらく矢沢慶三郎といえども、こんなすごい殺気を持っているやつはなかろう。まったく鬼気迫るものがある。
――そうか、お国がいいたくていえずに、ただ帰りを気をつけろといっていたのは、この伴五郎のことだったんだ。
ふっとそれを思い出す。
お国も最上もはじめから矢沢に金で雇われていたのだ。草加の宿外れで失敗した最上は、情婦の見ている前だっただけに、あのままでは江戸へ帰れない。だから、今夜二度めの機会を買って出た。が、正面からではかなわないとわかっているので、恥もみえも捨て、ひきょうを承知のうえで不意討ちをかけたのだろう。
しかし、それさえ失敗してしまったのだから、今夜の最上は死にもの狂いになる。ゆだんはできないと、源吾はとっさに自分の酒気を特に自戒する気になった。
「うぬっ」
はたして、最上は歯をくいしばって、切ろう切ろうとあせっているようだ。今夜の勝負は、必ず一撃で決するだろう。敵が捨て身だからだ。
おぼろにぬれる最上の執拗なきっさきが、銀蛇のごとく痙攣しだした。
「突きだな」
冷静な源吾の心眼にそう映ったから、思わず一喝する。
「くそっ」
機先を制せられた最上は、出ばなをくじかれて、はっとひるむ。そこを踏みこめば切れると直感したが、源吾にははじめから伴五郎を切る意志はないので、
「えいっ」
ぐいと一歩踏み出しただけだ。
その盤石の気魄に圧倒されて、じりじりと後ろへさがった最上は、
「とうっ」
狂ったように一刀を上段に振りかぶり、猛然と逆襲に出た。切らば切れという捨て身で、必殺の一撃を入れ、敵がうけても払っても飛びのきざまの二の太刀の変化にものをいわせようという、竹刀ではだれでもよく用いている手段だが、命をやりとりの真剣勝負では、よっぽどくそ度胸がすわっていないとできない芸当だ。
が、源吾は敏感にそれと見て取ったので、
「えいっ」
こっちからも踏みこむように激しくひっぱらったから、戞然と刃が火花を散らし、敵に二の太刀をふるうすきを与えず、さっと前へ飛び違

った。最上もそこへ踏みとまっては飛びちがいざまの横なぎがこわいから、これも前へ飛びぬけるほかはない。その思いがけない違算に、はっとろうばいした最上は、わずかに足がもつれ、じゅうぶんに飛びぬけきれずに、どっと前へつんのめっていった。
　万事休す。それでも、とっさに身を返して、左手で半身をささえ、右の一刀を敵の襲撃に備えたときには、源吾はいつでも相手の立ちぎわへ踏んごめる位置へきて、ぴたりと青眼につけていた。最上はとうてい立ちきれないから、
「切れっ」
と、悲痛な声をあげた。
「二度めだな、最上さん」
　源吾はひと足さがって、だらりと刀をおろしてしまった。戦いは終わったという形である。
「勝負はまだつかねえ。行くぞ」
　口ではいったが、最上はもう気力が尽きはてていた。たとえ立ち上がっても、腕の相違はどうしようもないとわかっているからである。
「つまらぬけんかはよそう、お国が心配している」
「女の知ったことじゃない。男の意地だ」
「それはおかしいね、男の意地でわしはきみにねらわれるいわれは、なんにもないはずだ」
　さすがに最上は返すことばがないようだ。
「お国にも、きみにも、どうしてきみたちはわしにつまらないいたずらをするんだとは、一度も聞いたことはない。聞かなくてもわしにはわかっているし、きみたちだってもうどっちが正しいか、ちゃんと知っているはずだ。正しきを正しいとしてこそ、男の意地じゃないか。それでないと、せっかくの男が犬死にになる。お国が泣くぜ」
「ふん、うぬぼれてやがる」
「そのとおりだ。宇田川源吾は男の中の男だからな」
　源吾は昂然と胸を張ってみせた。

「鼻を落とすなよ」
　最上はまだあくたれている。
「ありがとう。わしはかさけのある女には一度もふれたことがないから、その心配はない。むしろ、きみこそ気をつけたほうがいいようだな」
　わらいながら源吾は刀を鞘におさめ、
「じゃ、おやすみ。お国によろしくいってくれたまえ」
　まだ地へしりをおとしたままの最上に会釈をして、ゆうゆうとそのそばを通りぬける。
　手にしている抜き身を横に払えば、じゅうぶんとどく距離だ。一瞬、きらりと最上の目が光ったが、こんどそれをかわされると、あまりにも自分がみじめになりすぎる。それをおそれたのだろう、最上はがくりと首を落として、それっきり身動きひとつしなかった。

お乳母さま

　二、三日たってから、源吾はお乳母さまから迎えの使いをうけた。
「おついでのとき、お立ちよりくださるようにとのことでございます」
　なんの用だともいわず、使いの者はただそう言いおいて帰ったそうだが、おついでのときというのは、お乳母さまは牧村家では正室にひとしい実権を持っているが、名分は召し使いになっているので、自分からことばづかいをへり下ってのことで、すぐ来いの意味なのだ。その点、源吾は子どものころさんざん世話になった恩があるから、だれよりも気心を知っている。
　が、呼びつけられる用件までは、さすがにちょいと判断がつかない。
　もっとも、源吾はこんど帰国してから、まだ一度もお乳母さまにあいさつをしていなかった。
「若だんな、人には折りめ切れめということがありますだ」
　おととい、幸吉が江戸のあと始末をして帰っ

てきたとき、幸右衛門は源吾に注意した。世話になった人だから、お乳母さまに早く帰国のあいさつをしてこなければいけない。女というものは特にそういうことにやかましいものだ。さいわい、幸吉がいいつけておいた江戸みやげを持ってきたのだから、それを持っていけば、ちょうどいい口実になるではないかと、せつにすすめていた。

　江戸みやげというのは、栄太楼の甘納豆で、これがお乳母さまの好物だと知っているから、ついでに真弓の分まで買わせておいたのだ。

「うむ、そのうちに行く。甘納豆は腐るもんじゃないから、だいじょうぶだ」

　源吾の返事はにえきらなかった。

「甘納豆は腐らなくても、それでは義理のほうが腐ってしまうだ」

「義理は義理、絶交は絶交、しょうがないさ」

　しかも、自分のほうからたたきつけた絶交だから、男としてのめのめ自分のほうから牧村の門はくぐれない。

「絶交って、どなたと絶交をなすったんです、若だんな」

　幸吉がびっくりして聞いていた。

「それはじいから聞いてくれ」

　源吾は苦笑しながら、座を立ってしまった。

　そんなわけだから、お乳母さまの用件というのは、なぜ顔を見せないのかというにあるのかもしれない。それならそう苦にもならないが、もし放蕩児あつかいの意見のむしかえしだと、またむかっ腹をたてたくなろうから、源吾は気が重いのだ。ことに、帰国祝いのときのお国との艶聞がまことしやかに言いふらされているさいちゅうだけに、いくら弁明したってむだにきまっている。

　――行ったって、どうせ真弓には会えやしないんだし。

　なによりもそれがいちばんつまらない源吾だ。つまらないというより、真弓にはもうすっ

かりあいそをつかされているだろうから、そんな家の門をくぐるのはむしろつらい。

　しかし、わざわざ迎えの使いをうけたからには、どうもすっぽかすというわけにはいかなかった。

「じいや、ちょいと行ってくる」

「それがいいだ。小言が出たら、若だんな、なんでもはいはいと頭をさげておくことですぞ。他人にさげる頭ではない。おまえさまはとにかくお乳母さまには育ての恩というものがありますだ」

　幸右衛門にも、源吾がきょうまたお乳母さまにまで絶交をたたきつけてくる心配がじゅうぶんにあったのだろう、出がけに、くれぐれも恩義のしがらみにかけて、念を押していた。

「幸吉、おれはことによると浪人して江戸へ出るかもしれない」

　屋敷を出てから源吾は、供の幸吉についそんな鬱憤をもらしてしまった。

「お国のあとを追ってかね、若だんな」

　幸吉の返事は意外である。

「なんだ、お国も江戸へ帰るのか」

「きのうまだ夜の明けないうちに、夜逃げをしたって話です」

「ふうむ」

　いずれ江戸へ帰る女だとは思っていたが、これは初耳だ。

「しかし、夜逃げというのはおかしいな」

「おかしくても、だれにもいわないで、黙って逃げ出せば夜逃げです。けしからん女だといって、久利助野だいこがおこっていたそうです」

「ふうむ」

　どうしてまた幸吉がそんなことまで知っているのか、源吾はちょいとふしぎだったが、ちょうど牧村家の門へかかったので、その話はそれっきりになってしまった。

　絶交はしても、それは自分の腹だけで、向こうから出入りを差しとめられたわけではないか

ら、別に遠慮はいらなかった。内玄関からかってにあがって、
「お乳母さまは——?」
と、出てきた女中に聞くと、お茶の間でございますという。
「お乳母さま、源吾です」
廊下の外から声をかけると、
「おはいりなさい」
といういつもの返事だ。
お乳母さまの千代は、藩の軽輩の娘で、けっして美人というほうではないが、当時すでに五十に手のとどいていた伯父が真弓を産ませるくらいだから、ぽってりとした男ずきのする面だちで、たしか真弓を産んだのは二十歳のときだったろう。まだ三十七、八のみずみずしいうばざくらという感じで、伯父の寵愛をうけて牧村家の家政を任されてから、どっしりとそれだけの貫禄が身についてきて、だれにもかげ口をきかせないしっかり者だ。
そのお乳母さまが、きょうはなんとなくむっつりと暗い顔つきで、源吾を迎えた。
「ごぶさたいたしました。このあいだちょいとごあいさつに出たのですが、あいにくお乳母さまにはお目にかかれず、ついそれっきりで失礼しました」
それをおこっているのかなと早くも見て取りながら、前へ出ればこのひとに頭をさげるのは少しも苦にならない源吾である。
「源吾さん、おみやげの甘納豆、たしかにいただきました。ありがとう」
「はあ、それはどうも——」
はてなと思った。自分はとどけたおぼえはない。
「せっかくいただくのでしたら、あなたの手から、あなたの無事なお顔を見ていただいたほうが、もっとうれしかったろうと思いますよ」
「はあ、少し敷居がまたぎにくかったんです」
源吾はうそがいえない性分なのだ。

「なにかそんなひけめがおありになるんですか」
「ええ、少しばかり——」
「だから、好きな女のひとを急にどこかへお隠しになったの?」
お乳母さまの顔に、ちらっと微笑がうかぶ。その微笑には悪意はなかったようだが、ことばは聞きのがせなかった。
「好きな女って、だれのことです」
「江戸のお国とかうかがいましたけれど、千代は好きなら好きでいいと思います。ただ、どうしてそれをすぐ千代に相談なさらなかったのです。うわさがたってしまってから隠したのでは、かえって人さまが変に思いますよ」
「お国のことなら中傷なんですがねえ」
「中傷——?」
「あの女は、江戸の宴席で顔なじみじゃあるが、深い関係はなんにもありません。きのう丸屋から急にいなくなったような話ですが、あの女にはひもがついているんで、おそらくそれといっしょに江戸へ帰ったんでしょう」
それをいかにも自分がどこかへ囲ったようにいいふらしてある。久利助野だいこらがさっそくふりまいた苦肉の策だろうが、まったく抜けめのない小悪党どもである。
お乳母さまは黙って顔を見ている。信じられないらしい。
「わしはそんなに信用がないのかなあ」
「丸屋の帰国祝いのときのお話もうかがっているんですよ」
「李下の冠 瓜田の履ということがあります。そんなところへ近づいたのがわしのまちがいだったが、男の意地でしょうがなかったんです」
「では、さっきいった牧村の敷居が高い、千代に会いたくないというのは、どういうことなのです」
しまったと思った。こっちはそんな意味でお乳母さまを避けていたわけではないが、お乳母

さまがそう取ったとすると、その疑いを晴らすのは容易のことではなかろう。

　まして、考えてみると、お乳母さまは真弓から自分を遠ざけるために、江戸へ追っ払ったひとだ。自分にはほかの女ができるということは望むところだけに、いよいよもって当惑するのだ。

　が、それはそれ、これはこれである。信じようと信じまいと、あくまで正々堂々とぶつかっていくべきだ。

「正直にいいますと、わしは帰国そうそうおじさんに、おまえは放蕩者だとしかられました。もっとも、おじさんはそれをしかるために、わしをこんど国もとへ呼びかえしたんだそうです。わしはひととおり、けっして江戸では放蕩などしたおぼえはないと弁明しておきました。それから茶の間へあいさつに出たら、お乳母さまは新殿のほうだとうかがったんで、ついでだから真弓さんのところへちょっとあいさつに行きました。すると、真弓さんもわしの放蕩のうわさをほんとうにして、わしをけいべつするようなことを口にする。身におぼえのないことだから、わしはがっとなって、他人のうわさだけを真にうけて、よく調べもせずに人を放蕩児あつかいにするのは、するほうが軽薄だ、わしはおじさんも真弓もけいべつする、もう絶交だといって、お乳母さまにあいさつするのを忘れて帰ってしまったんです。あとですぐ気がついたんですが、こっちから絶交だといってしまってるんで、敷居が高くて来られなかったんです」

「ほ、ほ。でも、絶交した真弓に、甘納豆だけはとどけてくれたのですね」

　そのことばには、気のせいか、どこかに皮肉なひびきがあるようだ。

　幸吉がそんなよけいなまねをしたにちがいない。帰ったらひっぱたいてやると思いながら、まさかお乳母さまの前では、幸吉がかってにやったんだとはいいかねる。口実だと思われてはなおしゃくにさわるからだ。

「それは、絶交するまえに江戸で買っておいたんだから、とどけさせたんです。気にくわなければ捨ててもらっていいんです」

「あなたが御自分でそういうのですから、いちばんまちがいがないでしょうが、千代もまだ半信半疑ですよ。丸屋のことは皆さんがそうおっしゃっているのです」

　お乳母さまの顔がひどく気むずかしく見えたので、

「では、お乳母さまとも絶交します。失礼しました」

　そのほうが男らしいと思ったから、源吾はきっぱりといいきって立ち上がった。

　これでは、牧村家のだれとも、完全にまじわりを断ったことになるのである。

他出

「幸吉、わしに無断で、きさま、なんでお乳母（んば）さまと真弓さんに甘納豆なんかとどけたんだ」

　屋敷へ帰ってくるなり、源吾はげんこつをかためて若党幸吉に詰め寄った。

「だって、若だんな、せっかく江戸から重い思いをして運んできたのに、ほっておけばいくら甘納豆でも干からびてしまいます。それより、早く持っていってあげたほうが、こっちの心がとどくではございませんか」

　幸吉は平気な顔をして答える。

「ばか。おかげで、おれはきょうお乳母さまの前でとんだ恥をかいてしまったじゃないか」

「どうしてです。そんな話ってありません」

「ありませんたって、あったんだからあったんだ」

「変ですねえ、お嬢さまはとてもおよろこびになっていたんですがねえ」

「なにっ」

　源吾は思わず目をみはって、

「きさま、真弓に会ってきたのか」

「はい、庭からまわってくれということでしたから、まわっていきますと、お嬢さまが廊下へ出てきて、これはほんとうに源吾さんがとどけろといったのですかとお聞きになりました」
「あたりまえだ。絶交した者がみやげものなどとどけるはずはないじゃないか」
「けれど、てまえが主人からいいつけられて持参しましたと申し上げましたら、お嬢さまとてもおよろこびになって、ほんとうですねと、二度も三度も念を押したうえ、真弓がたいそうよろこんでいたとくれぐれも申してくれって、心からうれしそうなお顔だったんです。てまえは若だんなの絶交の話は知りませんから、うっかり持っていったんですが、絶交の話がほんとうだとすると少し変ですねえ。どうして、お嬢さま、あんなによろこんだんだろうな」
幸吉がにやにやわらいだす。
「かってにしろ。絶交は絶交だ」
源吾はなぐりつけるのをやめて、さっさと居間へはいってしまったが、なんだかぽかんとしてしまった。
幸吉はおやじから話を聞いていて、黙って甘納豆をとどけに行ったのだ。もし先方がうけとらなかったら、てまえはなんにも知りませんから、江戸でたのまれたとおりだと思い、主人には黙って持ってまいりましたので、そんなことがあったのでございますかと、そらっとぼけて帰ってくる気だったのだろう。おやじに似ていっこくなところもあるが、そのくらいの意地と機転は持っている幸吉なのだ。
それより源吾がうれしいのは、その幸吉の持っていった甘納豆を、よろこんで受け取った真弓は、日取りからいって、すでに丸屋の一件を耳にしてからのことになるのだ。
——すると、少なくとも嫁さんだけは、おれの潔白を信用していてくれるんだ。
真弓さえ自分を信用していてくれれば、あとの者はどう思おうと、なんといおうと、対岸の

火事ほどにも感じない源吾なのだ。
「よし、いざとなったら真弓を誘拐して浪人してやる。そのときになってびっくりするなよ」
源吾はすっかり自信を得たので、放蕩のことについては、以後、いっさいだれにも弁解などしないことにきめた。
世間というものはふしぎなもので、こっちがあんまり平気な顔をしていると、からかっても張り合いがないとみえ、いつの間にか源吾放蕩のうわさは、だれも口にしなくなってきた。
といって、一藩の形勢が源吾に有利になったとは、けっしていえない。ここのところ矢沢組がしばらくおとなしいのは、源吾が絶対に牧村家へ出入りしないからで、矢沢組が新殿の鷹之助さまを取りまいて、盛んになにか画策していることは、以前と少しも変わりがないのだ。
そして、半月ほどたった。その間に宇都宮でも花が咲き、花が散って、ゆく春を惜しむ季節になってきた。
その後、源吾は伯父将監からも、お乳母さまからも、一度も迎えをうけないから、これは先方もこっちの絶交をみとめたことになるのだろう。親どもの絶交が成立した以上、いくら真弓が承知でも、真弓にだけ会いに行くというわけにはいかない源吾だ。
「これじゃまるで江戸にいたときとおんなじゃないか」
源吾は、正直にいって、ときどきやりきれなくなるときがある。真弓だって会いたがっているだろうから、ひとつ忍ぶ恋路と出かけるか、そんなことを考えることもあるが、それはただ考えるだけのことで、侍をもって任ずる源吾には、とうてい実行できることではなかった。
そうしたある朝、牧村家の表門から、供侍ふたり、若党ひとり、女中中間めいめいひとりずつしたがえた女乗り物が一丁、しずかに城外へかつぎ出された。かごの主は真弓で、徳次郎の宿に住んでいる乳母が病気と聞いて、その見舞

いに行くのである。
うかつ千万にも、源吾はそれを少しも知らずにいた。

邯鄲の夢

「若だんな、あなたはてまえを信用してくれますか」
その朝、源吾が食後の茶を喫していると、給仕についていた若党の幸吉が、まじめな顔をして妙なことを聞くのだ。
「いきなり、おれになにを信用しろっていうんだ」
「そうですね。つまり、てまえがどんなに忠僕で、いつも若だんなのためばかり考えて、ゆだんなく働いているかっていうことをです」
「それを信用していれば、どうだっていうんだ」
むろん、源吾は、幸吉が若い主人に対して、忠僕以上であることはよく知っている。ほんとうのことをいえば、主人と若党という感情ではなく、子どものときからいっしょにいて、お互いにわがままもいえば、けんかもして育ってきたのだから、兄弟もおなじことで、いまさら改めて信用だの、忠僕だのをかつぎ出すのは、かえってそらぞらしいくらいのものだ。
「つまりですね、若だんながほんとうにてまえのことを忠僕だと思っていてくれるんでしたら、一度ぐらいその忠僕のいうことを、訳などきかずに聞いてくれてもいいでしょう」
「ああ、そうか。なにがほしいんだ。遠慮なくいってみろよ。お嫁か？」
「若だんなじゃあるまいし――」
にっと白い歯を見せる幸吉だ。
「こら、口をつつしめ。おれはお嫁とは絶交している」
「でも、若だんな、ほんとうはほしいにはほしいんでしょう」
「おれのことはあとまわしでいい。おまえのほしいものは、いったいなんなんだ」

主人というものは、つごうが悪い話になると、頭から押さえつけることができるから得なものである。
「物がほしいんではありません。ぜひ、いっしょに行ってもらいたいところがあるんです」
「どこへ行けというんだ」
「それを聞かずに、きょう一日だけ、てまえに若だんなのからだをあずけてもらいます」
「ふうむ、一日かかるのか」
「行って帰ってざっと一日、なに、夕がたには帰ってこられましょう」
「なにかおもしろいことがあるのか」
「たぶん、おもしろいことになるだろうと思います」
幸吉になにかたくらみがあるようだ。どうせ一日家でぶらぶらしてしまうくらいなら、なにか知らず、外の空気を吸ってくるだけでもいい。
「よし、さいわい天気もいいし、それじゃきょう一日おまえにまかせて、どこへでも出かけよう」
主従はまもなく弁当のしたくをして屋敷を出たが、そこに意外な事件が待ちうけていようとは、誘い出した幸吉でさえ、そのときはまったく気がつかなかったようだ。
日光街道を宇都宮お城下から徳次郎の宿までは二里二十七町ある。城下を出はずれると、道はずっと杉並木になって、晩春のうすがすみに刷いたような日光山が、右になったり左になったりしていく。両側はほとんど麦畑だから、絶えず空のどこかであげひばりの声が美しかった。
「たまには田舎道もいいなあ」
はじめのうちこそ、のんびりとそんなことをいって楽しそうにしていた源吾も、どこまで行ってもおなじような風景だから、一里も行かないうちにいいかげんうんざりしてきて、
「おい、どこまで歩かせるんだ」
と、そろそろ主人のわがままを出してきた。
「もうすぐです」

そのもうすぐそこがまだ一里のうえもつづき、やっと徳次郎の宿へかかったのはやがて昼すぎで、その掛け茶屋へはいって主従は弁当をつかった。

「おい、まだ歩かせる気か」

源吾は食ってかかるようにいう。もう先へは絶対に歩きたくないのだ。

「くたびれましたか、若だんな」

「ちっともおもしろいことは起こらんじゃないか」

「そうおもしろいことばかりいそいじゃいけません。おもしろいことや、たのしいことってものは、さんざん苦労したあとでくるもんで、峠をのぼるようなものです」

幸吉がにやにやわらいながら、そんなもっともらしい意見をする。

「かってにしろ。おもしろくても、おもしろくなくても、おれはここで少し昼寝をしていくから、そのつもりでいてくれ」

「邯鄲夢のまくらとしゃれますかな」

忠僕はおちつきはらっているので、

「おれのは源吾ひじのまくらだ」

と、源吾はわざと幸吉に背を向けて、ごろりと床几の上へひじまくらでころがってみせた。

「では、てまえはその間にちょっと用たしをしてまいりましょう」

それは困りますとでもあわててくれれば少しは張り合いもあるのだが、強情な幸吉は平気で、ほんとうの用があるのかないのか、どこへ行くつもりなのか、

「おばあさん、すぐ帰ってくるから、あとをたのむよ」

と、茶店の老婆に声をかけておいて、さっさと出ていってしまった。

――ようし、絶対にただでは起きてやらんぞ。

われながら子どもっぽいとは思いながら、中っ腹でそんなことを考えているうちに、季節が季節だから、ついうとうととしかけたらしい。

「宇田川さま――」

まくらもとでたしかに女の声が呼んだような気がして、はてなと起きなおった。

「なんだ、きみか」

思わず目をみはらずにはいられない。そこに小腰をかがめてにっこりしているのは、真弓の腰元のお園である。

「どうしたんだ、変なところへ来ているな」

「あの、お供でございますの」

「お供――?」

指さす表のほうを見ると、街道の明るい日ざしの中に、天女のような真弓がすらりと天くだっている。城下から二里半も離れているこんな田舎へ、こいつ夢ではないかと一瞬思った。

が、夢でもちゅうちょするような源吾ではない。つかつかともうまっすぐ真弓の前へ進んで、

「どうしたんだ、真弓さん。なにしにこんなところへ来たんだ」

と、それは半分しかりつけるような語気になっている。

「乳母の見舞いにまいりましたの」

真弓はぽっとほおを赤らめて、むじゃきに答える。そして、世にも美しい目が、信頼しきったようにうっとりとこっちを見上げている。

「ああ、見舞いか」

そういえば、真弓は生まれるとすぐ、この徳次郎の宿の農家へ里子に出されて、五つのときまでそこで育てられたのだ。その乳母が病気で、見舞いにきたとすれば当然のことで、なにもびっくりするにはあたらない。

「しかし、お園とふたりっきりで、少し乱暴じゃないか。もし山賊でも出たらどうする気なんだ」

山賊はおおげさだが、こんな天女と腰元とふたりきりで田舎道を歩いていれば、どんないたずら者が出ないともかぎらない。

「いいえ、ふたりっきりではありません。かごでまいりました」

「かごで——?」
真弓が目を向けたほうを見ると、なるほど、向こうに駕籠の一団が止まっていて、そこから幸吉がこっちへ手を振っている。
「歩こう」
すべては幸吉の筋書きだったのだ。こしゃくなまねをすると思ったとたん、真弓とは絶交していたことに気がついた。
しかし、真弓はしごくおとなしく、まるでお嫁のように肩をならべて歩いている。
「幸吉のやつ、どうしてきょうの見舞いのことを知っていたんだろうな」
「お園が知らせたのでございますわ」
「真弓さんがいいつけたのか」
「いいえ、けさ、お園が申していました。幸吉にきょうのことを知らせておきましたから、きっと源吾さまが迎えに出てくれるでしょうって。真弓、とてもうれしかったの」
「今もうれしいか、真弓さん」
源吾は自分のよろこびを口にせずに、恩にきせるようなことをいう。男のみえとずるさだ。
「ええ。もう山賊が出てもこわくありません」
真弓はにっこりわらって、
「でも、真弓、けいべつされているから、来てもらえないと思いましたの」
と、ちょっぴり恨みごとをいう。
「おれこそ絶交なんだから、真弓さんはもうだれかのお嫁になってしまうだろうとあきらめていたんだ」
まだ自分のほうからあやまりたくない源吾だ。
「真弓はどこへもまいりませんわ」
「しかし、矢沢がしきりに養子になりたがっているんだろう」
「お乳母さまが承知しませんもの」
「そうか。お乳母さまはやっぱり若さま党だろうからなあ」
真弓は返事をしない。返事をしないのは、お乳母さまが真弓に若殿を押しつけている証拠と見ていいのだろう。
「おれはたとえ絶交したって、真弓さんはどこへもやらない決心なんだ。そのことだけはちゃんと承知してもらいたいな」
源吾は断然高飛車に出る。
「真弓だって、いつでもさらわれていく覚悟はしていますわ」
「ほんとうか、真弓さん」
かっと幸福が胸の中で爆発しそうになって、源吾はいきなり真弓の肩を抱いてやりたかったが、それだけはがまんした。うしろのほうで幸吉たちが見ているはずだからである。が、手ぐらいはかまわないだろうと思ったから、ぎゅっと握ってやった。
「みんなが見ていますもの」
真弓は赤くなって、困ったようにからだじゅうを堅くしている。
「かまうもんか。おれは山賊だ」
長い杉並木である。ひばりが鳴いている。
「真弓、おれは絶交したとき、ほんとうに悲しかったんだ。誤解されるようなことになったのは、おれにもいたらない点はあったが、おれはけっしてそんなくだらない男じゃないつもりだった。おれは、真弓に疑われるくらいなら、いっそ浪人して、江戸へ出てしまおうかと、何度考えたかしれない」
やっと源吾は本音が出てきた。
「もうおっしゃらないで。人のうわさだけをほんとうにして、あなたを疑うなんて、真弓が、真弓があさはかだったのです。あのとき、はだ着をおぬぎになって突っかえされて、悲しくて、もう真弓こそ死んでしまいたいと思い、そっとあのはだ着をきて、一晩じゅう泣きあかしたんですわ」
「おれはうれしいよ。真弓さんが信用してくれて、こんなうれしいことはない」
「もう真弓でよろしいんですの」

「それ、さんづけにしなくてもいいっていうことかえ」
「ええ、源吾さまだけの真弓なのですもの」
この半月ばかりのつらさ悲しさが、真弓の心をすっかりおおしくしたようである。
「絶交だなんて、源吾さまはほんとうに意地悪だと思いました。死ぬほど悲しいには悲しかったのですけれど、その一方では、なんだか安心しているのです。あんなにお怒りになるほど、源吾さまは潔白でいてくれた、それがとてもうれしかったし、真弓さえいつまでもいっしょうけんめい源吾さまのことをおもっていれば、きっといまにお心が解けると考えていましたの。ですから、甘納豆のおみやげがとどいたときは、真弓、泣くほどうれしゅうございましたわ」
「ああ、あの甘納豆か」
まさか、あれは幸吉がかってにとどけたんだとは、せっかくよろこんでいるのにいいかねるから、
「そういえば、おれだって朝顔のじゅばんを、あれからずっと着ていたんだ。きょうだって、ちゃんと着ているよ」
と、甘納豆の話は逃げる。
「ほんとう、源吾さま」
「あたりまえさ、絶交したって、おれは真弓のほかにお嫁はもらわないつもりだったんだ」
「真弓、なんだか泣きたくなりましたの」
真弓は急にすすりあげて、あいているたもとを子どものように顔へ持っていくのだ。
「おかしいよ、真弓。うしろからみんなが見ている。おれがいじめたんだと思われるじゃないか」
ちょいとまごついて、源吾が思わず振りかえると、遠い杉並木を幸吉とお園が並んで曲がってくるところだ。こっちへ気がついて、幸吉のやつはひょいと手を振ってみせたが、お園はいそいで幸吉のかげへ隠れるようにした。どうも手がつながっているようだ。
「あれえ、あのふたりも怪しいぞ」

源吾が見ないふりをして正面を向きながらいうと、
「だれが怪しいんですの」
と、真弓はやっと顔からたもとを放す。
「幸吉とお園だ」
「あれはよろしいんですの。お園はもう幸吉のお嫁になるつもりで、いつも幸吉のはだ着を縫っているのですから」
「ふうむ、けしからんやつだな」
源吾はまったくあいた口がふさがらなかった。

へびの目

行きは単調でうんざりするほど長い杉並木だったが、帰りはとてものどかな夢のようにたのしい道で、なによりもめったに人の通らないのが、じゃまにならなくてよかった。
「真弓、疲れたらもう駕籠に乗っていいよ」
源吾はそれでも何度かすすめてみた。駕籠に乗られてしまうのは寂しいには寂しいが、深窓育ちで、こんなに長道をしたことはないのだろうから、あとで熱でも出されてはたいへんだと思ったのだ。
「いいえ、まだ歩けますわ」
そのたびに、真弓は元気よく答える。
「少し休むといいんだが、休むくらいなら駕籠へ乗ればいいのにと思われるのもしゃくだからね」
「だいじょうぶなの。真弓、もっと道が遠くてもいいんです」
「そうだな、屋敷へかえれば、おれはおじさんとも、まだお乳母さまとも絶交なんだからな」
「それもそうですけれど、もし、もし山賊が真弓をさらってくれたときは、江戸までだって歩かなければならないんですもの」
そんなうれしいことをいってくれる真弓なのだ。
「なあに、山賊は強いから、そのときは真弓を

おぶって走る」
「真弓、このごろお台所へ出て、女中たちのおてつだいもしています。御飯がたけないと困ると思って」
「さあ、困ったぞ」
「どうかしましたの」
「真弓があんまりかわいいことをいうから、山賊はうれしくって、急に抱いてやりたくてたまらなくなっちまったんだ」
「でも、幸吉たちがわらいますもの」
人目がなければ抱いてもらいたい真弓らしい。空であげひばりがわらっていた。
やがて野沢をすぎて、まだこの甘い道行きは小一里ほどつづくはずだったが、源吾はそこまできてはっと夢からさめたように目をみはった。向こうの小川にそったところに掛け茶屋があって、そのあたりの並木に騎馬が七、八頭つないである。鞍の様子から見て、たしかに城内の若侍どもが遠乗りをかけ、茶店でひと休みしているといったふうだ。
「真弓、まずいことになったようだね」
源吾は思わずまゆをひそめた。
「お城のかたがたでございますね」
「うむ」
「真弓、駕籠に乗りましょうか」
こんなところを見られれば、またたちまちうわさの種にされてしまうのはきまっている。
「もうおそいかもしれないよ」
「なぜでございますの」
「敵はこっちを見つけているだろう。あそこに鹿毛がつないである。あれは鷹之助さまの乗馬だ」
「まあ」
真弓ははっとしたようだ。鷹之助のいるところには、きっと矢沢慶三郎がついている。この遠乗りは計画的なものだ。それも、まさか源吾がいっしょだとは、城下を出るときまで敵は知らなかっただろうから、病気見舞いの真弓の帰

りを待ちうけ、鷹之助の力をかりてなにか真弓にひと芝居しかけようという矢沢の筋書きにちがいない。
「おそらく、鷹之助さまの口から、いやおうなしに真弓を慶三郎に押しつけようというんだろう。どうする。真弓」
「そんなこと。――このまま真弓をつれていってくださいまし」
「不義は手討ちだ」
「かまいません。あなたの口から、真弓は源吾の妻だと、鷹之助さまにはっきりことわっていただきます」
日ごろおとなしい真弓にも、こんな強いところがあるのかと、源吾はすっかり感心してしまった。
「よし、じゃ行こう」
「源吾さま」
「どうしたね」
「死んでも、死んでも真弓はあなたの妻――」
それは深沈と情熱をたぎらせた必死のまなざしで、こんな美しい真弓ははじめてだった。
「そうだ。二世も三世も真弓は源吾の妻だ。なあに、いざとなれば、おれはこの世で山賊になってみせるから、心配しなくてもいいよ」
こっくりと一つうれしそうにうなずいてみせて、真弓はしっかりと源吾の手にすがってきた。
腹がきまると、天下になにもこわいものがなくなる源吾だから、真弓の手をひいて、堂々と茶店の前へかかった。
「よう、宇田川じゃないか。――これはこれは、真弓どのも、意外なところでお目にかかりますな」
ばらばらと待っていたように茶店から三人ばかり飛び出して、前へ立ちふさがりながら、先頭の久利助野だいこがわざとびっくりした顔をしてみせる。いずれもほんのりと目のふちが赤いのは、酒乱の鷹之助に酒をすすめていたものとみえる。

「やあ、きみたちこそ変なところへ降ってわいたんだな」
源吾は冷笑しながら、平気で真弓の手は放さない。
「いや、きょうは鷹之助さまの遠乗りのお供でな、若さまが貴公たちの姿を見て、ぜひ呼んでこいと仰せられるのだ。真弓さまもどうぞあれへお立ちよりください」
久利助はていねいにおじぎをする。
「どうする、真弓。鷹之助さまでは黙って通るわけにもいかないね」
どっちにしたって、こうなればただではすまないのだから、源吾は平気で真弓を女房あつかいにする。さすがに久利助どもはあきれた顔をしていた。
「あの、ごあいさつだけして、真弓すぐもどりたいと存じます」
うっとりと源吾に甘えるようにいって、真弓もなかなかいい度胸である。
つい鼻の先でやっている芝居だから、鷹之助にも矢沢にも筒抜けのはずだ。
その鷹之助と慶三郎は、茶店の奥の床几にならんで掛け、ふたりの間に一升もはいりそうなみごとな瓢がおいてある。あとは床几を左右にならべて、矢沢組の定連が三人ずつ掛けられるようになっている。
「若さま、仰せにより両人をつれてまいりました」
久利助野だいこはそう披露して、右側の自分の床几にもどる。
源吾が先で、さすがにそのかげへ隠れるように真弓がしたがい、茶店の土間へはいっていくと、焼きつくような目でふたりをにらんでいた慶三郎は、ぷいとそっぽを向いた。
「若さま、遠乗りでございますか」
もう相当酒がまわっているらしく、蒼白な鷹之助の顔を見ながら、源吾は立ったまま小腰をかがめてあいさつをした。

「真弓、これへ出ろ」
鷹之助はまず真弓にすわった目を向ける。
「はい」
真弓は会釈しただけで、源吾のかげから出ようとはしない。
「おまえたちはどこへ行ってきたのだ」
「徳次郎の宿の乳母が病気と聞いて、ただいま見舞いに行っての帰りでございます」
源吾がかわって答える。
「見舞いは存じておる。おまえたちはだれにことわって手などつないで、歩いていたのだ」
「別にだれにもことわりません。真弓が疲れたと申しますから、手をかしてやっただけのことです」
「ならん。だいたい、そのほうはなんのために真弓のあとを追いかけたのだ」
「追いかけたのではございません。途中で山賊が出るといけませんから、てまえが迎えに出たのです」
「ならん、ならん。よけいなお世話だ。真弓には慶三郎を養子にしてやることになっておる。それゆえ、きょうはわざわざ遠乗りをかけて、真弓を迎えにきてつかわしたのだ。かってにそのほうが迎えに出ることは、わしが許さん。さっさとさがれ」
「鷹之助さまは酔っておられますな、お乳母さまがまた心配なさいますぞ」
源吾は相手にしないといった態度で、たしなめるようにいった。
「宇田川、それは貴公よろしくないと思うな」
久利助野だいこが、鷹之助ではとうてい太刀打ちができないと見て、わきから口を出した。
「なにがよろしくないんだね」
「若さまは真弓どのの心配をしておられるのだ。いくら田舎道でも、貴公が真弓どのの手を取って歩くというのは、李下の冠、瓜田の履のたとえ、知らない者は不義者とまちがえる。それを慎むようにと申されているのだ。ここはす

なおにお答えすべきだとわしは思う」
「そうだ、久利助が申すとおり、そのほうどもは不義者だ。不義はお家の法度(はっと)、手討ちだぞ」
　だれかの入れ知恵を、今になって思い出したのだろう。酒乱どのはえたりとばかり、いたけだかになってきた。
「不義ではございません。真弓は伯父(おじ)牧村将監が許してくれた源吾のいいなずけ、妻になるものです。夫が疲れた妻の手をとってやる、少しもさしつかえないことだと存じます」
　源吾はずぶというそをつく。もっとも、このうそはきっとほんとうにするつもりだし、この場合、鷹之助といえどもそれはうそだと看破できにくいことだから、源吾は平気でいってのけた。
「ならん、ならん。真弓はそのほうなどにはやらぬ。慶三郎につかわすのだ。これは鷹之助の命令だ。一同、さよう心得ろ」
　酒乱どのは頭からわめきたてる能しかない。
　将監の許したいいなずけと聞いてから、慶三郎のへびのような目がなんとなく異様に光りだしてきたようだ。

酒乱ぐるい

「宇田川、御城代が婚約を許したというのはほんとうか」
　久利助野だいこがうさんくさそうに、またしても横から口を入れてきた。
「ほんとうだ」
　源吾はあっさり答える。
「失礼ですが、真弓どの、ほんとうですか」
「はい」
　はっきりとうなずいてみせて、さすがに真弓は顔を赤らめた。
「おかしいなあ」
　久利助はちらっと慶三郎のほうを見ながら、
「では、宇田川、貴公は将監どののあとをついで御城代になるわけだな」

と突っこんできた。
「いや、養子になるんじゃない。嫁にもらうんだ」
「それはおかしい。真弓どのはあととり娘だから、嫁には出しませんと、きのうお乳母(んば)さまから聞いたばかりなんだがね、その話はいつきまったんだね」
　このきのうというのも少しくさいが、真弓を嫁に出さないというのは、お乳母さまが日ごろだれにもいっていることなのだから、久利助はずるいしっぽをつかまえてきた。
「わしのはけさきまったばかりだ」
　一度承知でうそをついた以上、いまさらどぎまぎするような源吾ではない。
「けさ話がきまって、もう手をつないで歩く、少しどうかと思うなあ」
「思うことは人間の自由だから、どう思ってもらってもいっこうかまわんが、口に出して人の世話をやくのはおせっかいだ。やめたまえ」
「けしからん」
　久利助野だいこはさっと顔色をかえた。
「武士ともあろう者が、白昼でれでれと婦人の手をひいて歩く、領内の百姓どもに対しても、わが藩の士道を疑われる。だいたい、貴公は芸者と道行きをやったり、平気で人前で売女(ばいた)とたわむれたり、あまりにも節操がなさすぎる。これは一藩の面目にもかかわることだ。心ある者は、みんな苦々しく思っているんだ。少し慎んではどうか」
　久利助としてはいつになく勇ましい大みえをきる。
「久利助、貴公正気か」
「なにっ」
「そんな暴言を吐いて人を侮辱する、おのれの良心にきっととがめることはないんだな」
「暴言ではない。貴公の行状はすでに人がみんな知っている事実だ」
「人のことはどうでもいい。きさまの良心に聞

いているんだ」
　源吾はじっと久利助の目を見すえる。身に一点のやましさもない源吾の目は、秋霜のごとく澄んできびしいものがある。
「おのれの良心がどうしたというんだ」
「わしを面罵して恥じぬかと聞いているんだ」
「恥じぬ。貴公が芸者と道行きをやったことは、ここにいる者がみんな知っているんだ」
「よし、今夜五ッ（八時）、八幡山の見晴らしへこい。武士の返事をしてやる。約束したぞ」
「果たし合いだな」
　久利助はまっさおになった。久利助だけではない、連れの一行もさっと緊張して、目ばかりぎらぎらさせている。
「鷹之助さま、あまりお酔いにならんうちにおもどりなさるがよろしい。わしはこれで失礼します。――真弓、行こう」
　源吾はゆうゆうと立ち上がった。
「ならん、ならんぞ、源吾。真弓は帰すことならん」
「そのような無体を申すものではございません。あなたさまは御自分から真弓を出迎えにきてやったのだと申しながら、かようなところで酔っておられる。こんな酒の席へおいていっては、真弓がこわがります。真弓は拙者が無事に送りとどけますから、あなたさまもあまりお乳母さまが心配しないうちに早くおもどりください」
「いうな。そのほうはわしのことばにそむくのか」
「あなたさまは酔っておられる。武士は酒に心気を乱すものではございません」
「おのれ、わしを、わしを酒乱だと申したな」
「真弓、表までさがっておいで」
　鷹之助の目の色が変わっている。あぶないと見たから、源吾は注意した。
「はい」
　すなおに真弓はすらりと立って、一同に会釈

をしながら茶屋の表へ出ようとする。そこにはすでに供の者が駕籠をすえて待っていた。
「ならん、真弓、そのほうは慶三郎につかわすのだ。立ってはならん」
「そんな軽々しいことは口にしてはいけません」
「ええ、無礼者。そのほうは手討ちにしてくれる」
　酒に狂った鷹之助は、かっと逆上しながら、抜き討ちに源吾に切りかかった。
「あぶない」
　ひらりと身をかわした源吾は、逃げるのはわけはないが、一度狂いだした酒乱をこのままにしておくと、またけが人を出すおそれがある。そのまま胸もとへおどりこんで、
「えいっ」
　軽くみぞおちへあて身をくれた。
「うっ」
　もろくも鷹之助が前へのめり倒れたので、
「あっ、一大事」
　思わず一同が血相をかえて立ち上がった。
「しずまれっ」
　源吾は一喝して、
「いまさら一大事とはなにごとだ。かねて酒乱とわかっている鷹之助どのに酒をすすめれば、一大事がおこるのは知れきったことではないか。貴公たちこそ不謹慎きわまる。鷹之助どのは拙者が責任を持って屋敷へおつれするから、騒ぐに及ばぬ」
　と、一同をにらみつけた。その不敵なつらだましいに、だれもかえすことばはない。ずるい慶三郎は、例によってさっきからそっぽを向いたきりだった。
　源吾は鷹之助の手から刀をもぎ放して鞘におさめ、
「真弓、これを持って、あなたは駕籠でお帰り」
　と、真弓にわたした。
「源吾さまは――？」

「わしは鷹之助どのをおつれして、馬で帰ることにする。かまわず駕籠にお乗りなさい」
「はい」
ちらっと不安そうな顔はしたが、そのままいそいで駕籠のほうへ行く。
源吾は正体もなく気絶している鷹之助を抱きおこし、軽々と横抱きにして、表につないである鷹之助の乗馬のほうへ進んだ。こういうときはよく気のきく幸吉が、すばやく手綱を解いて、くつわをとっている。源吾はひとまず鷹之助のからだを鞍へ投げかけておいてから、ひらりと鞍にまたがり、左手でしっかりと抱きなおしてから、右手で手綱を取った。
「幸吉、あとをたのむぞ」
「はい。かしこまりました」
ちらっと見ると、真弓をのせた駕籠はすでに六尺が肩を入れて、こっちの出発を待っているので、源吾は乗馬に軽く角を入れる。
馬で飛ばせば城下までは四半刻（三十分）とはかかるまい。

その夜

やっと息を吹きかえして、まだきょとんとしている鷹之助をお乳母さまに引きわたし、ざっと事情を告げて屋敷へもどった源吾は、やっぱり矢沢にいっぱいくっていることにはじめて気がついた。
今夜八幡山へ果たし合いに行って久利助を切れば、武士道だけはりっぱにたつが、自分もまた国もとを立ちのかなければならない。藩命にしたがうとすれば、どんな理由があるにもせよ私闘だから切腹が定法だ。
――おれがいなくなってよろこぶのは慶三郎だけだ。
啖呵をきって、久利助野だいこを震えあがらせたときはいい気持ちだったが、まったくつまらんことになったぞと、源吾は後悔せざるをえない。

といって、果たし合いは自分からいいだしたことだから、むろんあとへはひけない。
――しょうがない。真弓にしたくをさせておいて、久利助を切ったら駆け落ちときめるほかはない。
それにしても、皮肉なものだと思う。幸吉は自分と真弓を和解させるために、きょうひっぱり出してくれた。それは筋書きどおりに運んで、まずめでたしめでたしだが、まさか幸吉もあんなところに意外な伏勢があることは、まったく思いもかけなかったろう。
いや、思いがけなかったのは、慶三郎のほうにしても同じだったにちがいない。お乳母さまの口ぶりだと、
「慶三郎さんを牧村の養子にという主馬さまからのお話は、だんなさまがこのあいだはっきりお断りになりました。それで慶三郎さんは若さまを動かそうとしたのでしょう」
と、まゆをひそめていた。酒乱の鷹之助を動かすということは、むろん利用することで、きょうは真弓の帰りを待ちうけて、あるいは鷹之助といっしょにどこかへつれていく、そんなたくらみがなかったとはけっしていえないのだ。まさか手ごめにするような乱暴なまねもすまいが、いやおうなしに同席させて、冗談にもせよ鷹之助のさしずで祝言のまねごとをしたと世間へいいふらしてしまえば、それだけで真弓は傷物にされたことになる。家がらがあるだけに、けっきょくは慶三郎を養子にするほかはなくなるのだ。
そのあぶないせとぎわを、源吾のほうがひと足さきにじゃまをしたことになる。
それはそれとして、伯父がはっきり矢沢主馬に慶三郎の養子縁組みを断ったとなると、伯父はいよいよ鷹之助の城入りを断念して、牧村の跡へ直す腹をきめたと見るべきだ。源吾にとっては重大問題だから、お乳母さまに絶交をたたきつけていることなどいってはいられない。

「すると、おじさんはいよいよ鷹之助さまを牧村の養子にお迎えする腹をきめたんですね」

と、念を押してみた。

「そのようです。ことしもお殿さまの御帰国が近づきましたので、きょうはお城で矢沢さまがたと最後の打ち合わせがあるのだと申していました」

そんなことはどっちでもかまわない。

「では、お乳母さま、真弓さんはほかへ嫁に出してもいいわけですね」

源吾はずぶとく切り出していった。

「場合によってはね」

たったいま、だらしのないかっこうで酒乱どのがかつぎこまれたばかりだし、真弓が鷹之助をきらっていることもよく知っているお乳母さまだ。さすがに、いいえ、真弓は若さまとめあわせるのですといいきれなかったらしい。

もうひと押しだと思ったので、

「真弓さんが嫁に出られるのなら、源吾にください。たいせつにします」

と、まっこうから突進した。

「おや、あなたは真弓をけいべつして、絶交だったのではないんですか」

お乳母さまは苦笑いして、うまくかわそうとする。

「いや、絶交はやめました。だから、きょうわざわざ徳次郎の宿まで迎えに出たんで、まさか途中でこんなことになろうとは思いもかけませんでしたが、迎えに行ってやっぱりいいことをしました」

「それはそうでしたね」

話はそれだけにして、あまり深入りはせずに帰ってきたが、こっちの意志はじゅうぶんお乳母さまに通じたはずである。十中の八、九、もうだいじょうぶだという自信はあるが、それが今夜の果たし合いでめちゃめちゃになるのだ。

――野だいこのやつ、おぼえていろ。

そして、またふっと気がついた。こっちは久

利助をたたっ切ってやるつもりでいるが、矢沢組がじゃまになる源吾という人間をやみに葬るとすれば、今夜ぐらいいい機会はない。おそらく、助太刀と称するやつが束になってかかってくるのではなかろうか。

――何人でもこい。人数なんかに恐れるような源吾じゃないが、相手が同藩のやつらでは、切ったあと味が悪いからなあ。

いや、人切り最上でさえ切りたくなかった源吾なのだ。できれば絶対に人は切りたくないだけに、人間というやつはめったに啖呵などきりたがるもんじゃないと、しみじみ後悔させられる。

「ただいまもどりました」

幸吉がうかない顔つきではいってきた。

「こら、きさま、けしからんぞ」

源吾は頭から浴びせかける。幸吉の顔を見たとたん、お園のことを思い出したからである。

「申しわけございません」

幸吉は神妙に両手をついて、

「まさか、てまえもこんなことになろうとは夢にも思わなかったんです。こんなことなら、きょう若だんなをお誘いするのではありませんでした」

と、しょんぼりしている。あんまり心配そうな顔をされると、源吾もついこの忠僕がかわいそうになってくる。

「いや、こんなことになったのは、ちっともかまわん。もしわしが行かなかったら、あの場合、真弓はどんなめにあわされていたかもしれないんだからな」

「真弓さまもそうおっしゃっていました」

「真弓は無事に屋敷へ帰ったんだろうな」

「お帰りになりました」

「おれがけしからんといったのは、お園のことだ」

「お園がどうかしたんですか」

「きさま、いつごろからお園にはだ着を縫わせ

ているんだ」

なあんだ、そんなことかと、幸吉は安心したような顔をして、にっとわらった。

「去年の夏、おやじさまがぐあいが悪いというんで、一度帰らせてもらったことがありましたね。そのとき、お園が真弓さまの使いで、いつものはだ着の包みをとどけにきて、幸吉さんにはこんなことをしてくれる親切なひとがあるんですかと、冗談のように聞くんです。わしにはまだそんなひとはないから、お園さんが縫ってくれるんならもらってあげてもいいなと、こっちも冗談半分だったんですが、ほんとうと、お園のほうが本気になってしまって、おかげでてまえはいい心配をさせられてしまいました」

「なにをそんなに心配したんだ」

「お園のやつが、もし子どもができたらどうしようって心配するもんですから」

「なんだ、もうそんな仲になっているのか」

源吾はまったくあきれてしまった。

「だって、しようがありません。勢いのおもむくところ、ひっきょうは男と女ですからね」

「ばか、もういい。しかし、それならそれで、早くなんとかせんければいかんな。勢いのおもむくところ、子どもができてしまってからでは、それこそまにあわん。お乳母さまに相談して、至急、屋敷へ引き取ることにしよう」

夫婦にしてしまうのがいちばん早い。家には女っけがないのだから、そのほうがじいやも安心するだろうし、それはそれでかまわないが、問題はやっぱり今夜の果たし合いだ。結果によっては、勢いのおもむくところ、そんな世話をやいている暇がなくなるかもしれないのである。

「若だんなは今夜どうしても八幡山へ行くつもりですか」

幸吉もそれが心配になるらしい。

「行くとも、こっちからいいだしたことだ」

「じゃ、てまえもお供します」

「ばかをいっちゃいかん。助太刀なら無用だ」

「そうはいきません。あっちはむろん矢沢組が総がかりですから」

「束になってきたって、おれひとりでたくさんだ」

「ああ、そうそう、真弓さまが八幡山へ行くまえにぜひお目にかかりたいというおことづてでした」

「そうはいくまいな。お乳母さまの目が光っているから、理由もなく真弓の部屋へ通るわけにはいかん。夜のことだしな」

「ですから、お園がそっと裏木戸をあけておくことになっています」

「忍びこむのか」

「それよりしようがありません」

「武士として、そんなまねもできないじゃないか。面目があるからなあ」

「若だんな、それじゃうかがいますが、あなたは今夜矢沢組に勝っても、もう宇都宮にはいられないんですよ。おわかりでしょうね」

「それはわかっている」

「そのとき、若だんなは、真弓さまを置いて、ひとりで江戸へのがれる気なんですか」

源吾はちょっと返事ができない。

「お嬢さまはもっとりっぱなお覚悟を持っているようなんですがねえ」

「どんな覚悟だ」

「若だんなが切り死にをした場合は御自害、さいわい命があればどこへでもいっしょにつれていってもらう。その打ち合わせがあるから、八幡山へ乗りこむまえに、ぜひお目にかかりたいといっているんです」

自害、そうかと、源吾はじいんと胸が鳴ってくる。

「お嬢さまばかりじゃありません。お園もその覚悟でいるんです。てまえだって、のめのめと留守番などしていられるもんですか。しっかりしてくださいよ、若だんな」

こりゃいかんと源吾は思った。死んでも生き

ても、四人の命にかかわる。いまさら幸吉についてくるなといっても、それはむだだ。この男は、隠れてでも八幡山へついてくるにきまっている。

「よし、真弓に会ってみよう」

そのうえでの思案だと、源吾は腹をきめた。自分はともかくとして、真弓やお園は絶対に殺してはならないのである。

「裏木戸からお忍びになりますか」

「いや、表玄関から乗りこもう。どろぼうねこは感心せん」

「そうですとも、人間生死のせとぎわに立って、だれに遠慮がいるもんですか」

忠僕幸吉は昂然たるものがある。どうしても今夜は死ぬ気なのだろう。

酒乱どの

日が暮れるのを待って、源吾は幸吉を供につれ、堂々と牧村家の玄関に立った。

源吾は大刀といっしょに弓の折れを一本腰にさしこんでいる。二つの秘策を胸に蔵しているのだ。一つはお乳母さまにいっさいをぶちまけ、真弓とお園を監視してもらうことで、一つは八幡山へ乗りこんでも敵は切らず、弓の折れでぶちのめして帰ることだ。万一こっちに命運がなければそれまでだが、これが成功すれば、なにも宇都宮を落ちる心配はないのである。

伯父将監はまだ城中の評定から退出してこないらしく、お乳母さまひとりのほうが源吾にも好都合だと思った。

幸吉を玄関に待たせておいて、いつものお乳母さまの茶の間へ通ると、お乳母さまの姿はなく、意外にもそこに真弓が出て、女中たちとなにかひそひそと話していた。みんななんとなくただならぬ顔色である。

「あ、お越しなさいませ」

真弓がほっとしたように座ぶとんをはずして、そこへ両手をつかえた。まるでだんなさまを迎えるような顔をしているから、源吾はうれしくなってしまう。

「お乳母さまはどうしたんです。真弓さんがこんなところにいるのは珍しいね」

「ええ、いいところへおいでくださいました」

「なにかあったの」

「若さまがだだをこねているのですって」

「ああ、そうか」

酒乱がはじまったのだと、源吾は思わずまゆをひそめた。

女中たちは気をきかせて、座ぶとんをすすめ、茶を出すと、みんな茶の間をさがっていってしまった。

「どんな様子なんだね」

「お帰りになると、ぐっすりおやすみになっていたのだそうですけれど、さっきお目ざめになって、水とおっしゃるのだそうでございます」

女中が水を持っていくと、一口のんでから、これは水だな、といった。そのときすでに目の色が変わっていたのだという。

「はい、おひやでございます」

「水ではない。酒を持て」

いきなり茶わんをそこへほうり出したので、女中はびっくりして、お乳母さまのところへきて、それを告げた。

一度いいだしたらなかなか聞かない酒乱どのなのだ。お乳母さまはよく心得ているから、湯のみに一杯酒をついで持っていった。いつもならその一杯でなんとかなだめてしまうのだが、今夜はそうはいかないらしい。いましがたお乳母さまがまた一杯酒を取りにきたのだという。

「とても大きな声をお出しになって、さいわい今夜はおとうさまがまだお帰りになりませんからよろしいのですけれど――」

しかし、今はひっそりとして物音ひとつしない。

「声がしないようだね、うまくお乳母さまがなだめたかな」

「これでおさまってくれるとよろしいのですけれど――」
「矢沢がだいぶ飲ませていたようだからな。真弓さん、こんなところへ来ていちゃあぶないんじゃないかね」
「あ、源吾さま、五ツでございましたね」
真弓のきれいな目が、はっと思い出したようにすがりついてくる。
「そんなこと、あんたは心配しなくてもいいんだ」
「あの、あの、真弓はどんなしたくをしておけばよろしいのでございましょう」
声をひそめて、あたりに気をくばりながら、急にいざりよってくる。
「真弓さん、わしを信じていなくちゃいかん。わしは負けもしないし、また相手を切るようなまねもしない。きっと無事に帰ってくるから、あんたは静かに待っていればいいんだ」
「ほんとうですの?」
「ほんとうだ。源吾は知恵も勇気もある男なんだ、安心しておいで」
「それだと、真弓、どんなにうれしいか」
目にいっぱい涙をためて、ひざの上の手に手を重ねてくる。半分は信じ、半分は信じられないから、ひょっとこれが一生の別れになるのではないかと、ほんとうならすがりつきたいところなのだろう。
「だいじょうぶだ。わしはけっしてお嫁さんを泣かせるような男じゃない」
口では明るくいっても、いちまつの不安はある源吾だから、じっと真弓の両手を握りしめる。あるいは最後の別れになるかもしれないんだと思うと、つい感情がたかぶってきて、真弓もそれを待っているような必死な面持ちだから、思わず握った手を引きよせようとしたとたん、新殿のほうからふいに、どすんと戸のくだけるような異様な物音がした。
「あっ」

ぎょっと顔を見合わせて耳を澄ましたが、それっきり声ひとつ聞こえない。それがかえってぶきみだった。

秘　密

「真弓さん、居間へもどっているほうがいい。わしは様子を見てこよう」
源吾は妙に気になるので、思いきって立ち上がった。
「そうしてくださいませ」
真弓もただならぬ顔をしてうなずきながら、
「あの、黙ってお帰りになってはいや――」
と、いそいでいい足すのを忘れなかった。
「はっ、源吾め、必ずごきげんうかがいにまかり出ます」
つい冗談口が出て、真弓の顔がにっこりほころびるのを見てから、源吾はするりと廊下へすべり出た。
新殿はその母屋の廊下を三つほど曲がって、渡り廊下でつづく南にある。駆けつけてみて、源吾はぎょっと目をみはった。そこの雨戸が一枚庭へはね飛んで、あけっぱなしの障子から座敷をのぞいてみると、鷹之助の姿もお乳母さまの姿もない。湯のみが一つ、盆の上から畳へころげ出しているのも、ただごとではない。
おそらく、酒乱どのは三度めの茶わんをお乳母さまにとめられて狂いだし、雨戸をけはずして庭へ飛び出したのだろう。お乳母さまはそれを追っていったのだ。
――外へ出たとすると、酒乱どののめあては矢沢の屋敷だ。しようのないおかただな。
源吾も捨てておけないので、あいた雨戸からはだしで庭へ飛びおりた。新月がほのかに若葉の庭にただよっている。内庭を出て、裏門への林の道へかかると、そこにだれか倒れているようだ。どうやらお乳母さまらしい。
「お乳母さま、どうしたんです。――あっ」
抱き起こそうとして、がくぜんとした。右の

肩先へ一太刀あびて、おびただしく血が流れているようだ。
「お乳母さま、しっかりしてください、お乳母さま」
ひしと抱きおこして、耳もとへ二声三声必死に叫びかけると、どうやらその声が通じたらしい。うつろな目をあいて、わずかに手さぐりするようなかっこうをする。
「お乳母さま、源吾です。わかりますか、源吾です」
「源吾さんか――」
「しっかりしてください。ほんの浅手なんだ。いますぐ医者を呼ばせますから、気をたしかに持ってくださいよ」
「あ、源吾さん――」
じいっと顔を見あげているが、もう目は見えないようだ。
「源吾さんですね」
「源吾です。宇田川の源吾です」
「だれも、だれも、あたりにいませんか」
いまにも消え入りそうな細い声だが、なにか必死なものを感じる。
「いません。いないが、すぐ人を呼びますから」
「いいえ、あなたに、あなただけ――」
「なんです。いってください」
「千代は、悪い女でした。鷹之助さまは千代の子――」
「えっ」
「真弓に、姫君に申しわけない。許してください」
あっと源吾は息をのむ。わが耳を疑いながら、思わずぼうぜんと、蒼白なお乳母さまの顔を見つめている。
「わが子の手にかかる自業自得です。どんなに毎日、苦しかったか、あさはかな女」
そして、最期にあえぐようにいった。
「許して、――だんなさま」
たしかにそう聞こえたが、それは声ではなく、

くちびるの動きでわかったのかもしれぬ。
葉かげもるほのかな月かげに息絶えたお乳母さまの顔は、十九年の心の重荷をおろしてか、もう苦悩苦痛のかげはあとかたもなかった。
姫君をわが子と取りかえたのは、はたして千代ひとりの心から出たことだろうか、伯父将監の心に魔がさしてのことだろうか。
いや、おそらく伯父の心から出たことにちがいあるまい。伯父の寵愛に満足していた千代が、それ以上の欲心を起こすはずはないからだ。
――恐ろしいことだ。
源吾もまた日ごろ伯父を敬愛している者だけに、伯父のために悲しみ、伯父のために恐れる。
――そうか、鷹之助の酒乱は、天の報いだった。そのために、伯父も御家督には絶対に反対したんだろう。
それにしても、十九年の間、このお乳母さまはどんなに悩みぬいたことか。鷹之助を産んでからは、一日として安らかな日はなかったろう。
「お乳母さま、あなたが悪いんじゃない」
源吾は急に滂沱として涙があふれて流れてきた。
「お乳母さま、わしはあなたに育てられたのだ。あなたの罪は、源吾がこの世で、必ずつぐないます。安心して、もう安心して仏になってください」
思わず嗚咽せずにはいられない源吾だ。
――いったい、どうすればいいんだ。
真弓が主家の姫君、そうわかっては、もう駆け落ちどころじゃないじゃないかと、突然そんな水のような反省さえかえってくる。
いや、どんな犠牲を払っても、真弓をもとの姫君に直さなくては、一門が不義の徒になるのだ。
「そうだ、とにかく鷹之助を屋敷へつれもどすのが先決問題だった」
源吾はやっと冷静さを取りもどしてきた。
「源吾――」

うしろから静かに呼ぶ者がある。はっとして振りかえると、伯父の将監がいつの間にかそこへきて立っていた。

「千代はわしがあずかる。鷹之助をつれてきてくれ」

伯父はさっきからきて、だいたいの様子を見聞きしていたらしい口ぶりだ。

源吾は、まだぬくみの残っているお乳母さまをしっかりと抱いて立ち上がった。

「おじさん、きのどくなお乳母さまでした。たいせつに抱いていってあげてください」

「うむ」

うなずいてぐいと抱き取る。

「源吾はおじさんの善処を祈ります」

くどいことはいいたくない。また、口にするのもいまわしいことだし、いわれる伯父もつらいだろうと思ったので、

「てまえもつくすべきはつくして、けっして命を惜しむものではありません」

と、むしろ淡々といい足した。

「わかっている」

伯父もまた簡単にうなずいて、

「源吾、矢沢へまいっても、なるべく無益なけが人は出すな」

といいそえ、ぐいともう一度千代の死骸（しがい）を抱き直すようにして、内庭のほうへ歩きだした。

ことによると、これが生きた伯父の姿を見る最後かもしれないと、見送る目に、それはひどく心重いような老いのうしろ姿だった。

一撃一倒

——妙なことになったもんだなあ。

裏口から表へ脱け出した源吾の足もまた重い。ついさっきまで自分の身近にいた真弓が、今は急に手のとどかないところへ行ってしまったのだ。

——まさか、姫君では恐れ多くてお嫁にするわけにいかんからな。

これは源吾にとって、まったく皮肉な運命になってしまったものだ。いや、真弓にしても、いまさら姫君はいやだ、源吾のお嫁のほうがいいといって泣きだすかもしれない。が、いくら泣いても、こうなってはもう姫君をやめるというわけには、絶対にいかないのだ。そして、真弓が主家の姫君であるかぎり、源吾は無断でその姫君をわが物にすることは、侍として良心がゆるさない。といって、事実はすでに無断で半分わが物にしてしまっているだけに、まったくつらいのだ。

——あっ、いかん。

恋々たるものがあるうちに、とうとう矢沢の屋敷の前まで来てしまった。

そうだ、まもなく五ツ（八時）だ。八幡山で久利助野だいこと果たし合いの約束もある。それまでになんとか鷹之助を伯父（おじ）の屋敷までつれて帰らなければならないし、あの矢沢がそう簡単に鷹之助をかえすかどうか、今夜はからだがいくつあっても足りない源吾だった。

——恋々はあとまわしだ。しっかりしろ、源吾。

源吾は矢沢の門の前で立ち止まって、深呼吸を一つしてから、しゃっきりとくぐりをあけて、玄関のほうへ進んでいった。

「たのうむ」

大声で案内を請うと、すぐに顔見知りの若党が取り次ぎに出てきて、そら来たぞといわぬばかりの顔をする。

「御当家に鷹之助さまがまいられているはず、伯父牧村将監の名代として宇田川源吾が迎えにあがったと、鷹之助どのに取り次いでいただきたい」

「しばらくお待ち願います」

奥へ引きかえしていった若党は、しばらく出てこなかった。

八幡山のことがあるから、矢沢組は今夜みんなここへ集まっていたところへ鷹之助が飛びこ

んできたことになるのだろうから、一同それを取り巻いて、源吾をどう迎えるか、追いかえすか、なかなか相談がまとまらないのだろう。

源吾は静かに相手の出ようを待っていた。たとえ矢沢組がどんな策をろうして真弓を手に入れようとしても、その肝心な真弓がもうだれの手もとどかないところへすわってしまったことになるのだから、むだに騒ぐだけ笑止千万ということになるのだ。

やがて若党がもどってきて、

「お待たせいたしました。どうぞ庭からおまわりくださいということです」

と、切り口上で返事を伝えた。

こっちはちゃんと牧村将監の名代と名のっているのだから、庭からまわれというのは無礼至極である。が、慶三郎はそれを承知のうえで、こっちが無礼とがめすれば、いやならそのままお引き取りくださいという手を用意している。源吾には早くもそう読めたし、こっちはそんな面目より、ここは鷹之助を一刻も早くつれてもどればいいのだから、

「承知した。案内してくれぬか」

と、あっさり出てやった。

はたして、若党はちょいと意外そうな顔をしたが、

「それでは御案内いたします」

と、すぐに内玄関のほうから出てきた。

むろん、陰でだれかが様子を見ていて、座敷へ注進が飛んだにちがいない。

暗い家の横手をまわり、裏庭から広間の廊下の前へ出てみると、実に壮観だった。正面に鷹之助をすえ、そのそばに慶三郎がひかえ、以下矢沢組の侍が二十人あまり、いずれも肩ひじを張ってずらりと左右に並んでいる。そのなかに笹田久利助の顔もあって、これはすでに目を血走らせているようだ。

「諸君、じゃまをする」

一同の視線を一身にあつめながら、源吾はくつぬぎ石の上へ立って、おちついて会釈をした。だれも答える者もなければ、出迎えて上がれという者もない。それは覚悟のまえだし、ほかの者には用がないのだから、

「鷹之助さま、将監が心痛しています。すぐに屋敷へおもどりなさいますよう。源吾がお迎えにあがりました」

と、おだやかに切り出した。

「黙れ、源吾、偽りを申すな。じいの名代なら、なんで庭先からまわるのだ」

だれかの入れ知恵にちがいない。鷹之助はいたけだかになって源吾をにらみつけた。

「おことばですが、今はそんな面目のことを申しているときではございません。あなたさまは屋敷を出られるときどういうことをなされたか、よくお考えにならなくてはいけません。鷹之助さま、この手の血をとくとごらんください」

源吾は一言一言に力を入れながら、ゆっくりとさとすようにいって聞かせ、ぬっと両手を前へ出してみせた。べっとりと血のりが黒ずんでいる。

「お乳母さまは重態でございますぞ」

「なにっ」

さすが酔ってはいても、思いあたることはあるらしい。

鷹之助はじっとうつろに目をすえた。

一同の者も、目の前に血の手を見せられて、ほぼ事態は想像できただろう。思わず息をのんだ顔だ。

「わしは帰るぞ」

突然、鷹之助が立ち上がった。

「若さま、それではお約束が違います」

あわてて久利助が叫んだが、

「黙れ。わしはもどるのだ」

酒乱どのだから、一度いいだしたら人のいうことなど耳に入れるはずはなく、一同の前の畳をけるようにして、廊下からどんどん玄関のほうへ飛び出していく。末席の二、三人がいそい

でそれを追った。
「失礼した」
　目的は達したので、源吾が一礼しながらくつぬぎからおりると、
「待て、源吾――」
　と、久利助が呼びとめる。
「用かね」
「もうそろそろ時刻だ。八幡山を忘れているんじゃなかろうな」
「忘れてはおらん、鷹之助さまをお送りしてから、すぐ行く」
「自分からいいだしておいて、一寸のがれか。見苦しいぞ」
　珍しく久利助が勇ましく毒舌をろうする。そうか、ここでみんなで取りまく腹だなと、源吾はすぐに読み取って、よし、乗ってやれと思った。
「久利助、望みならここでやってもいいぞ」
「やる気か」
「むろん、あとへはひかん」
「よし。じゃ、ここでやろう」
　久利助はすっくと立ち上がった。
「宇田川、われわれはさっきその場にいあわせたかかりあいがある。義によって笹田に助太刀をするから、そう思ってくれ」
　遠乗りの連中が五人、同時に立ち上がる。
「承知した。来たまえ」
　源吾は少し縁先から離れて、むぞうさに腰から用意の弓の折れを抜きとった。
「行くぞ、源吾」
　すばやく身じたくをして廊下へ出た久利助が、抜刀しながら叫ぶと、
「やれ、やれっ」
　つづく五人がいっしょに抜刀して、ばらばらと庭へおどり出す。
　敵が刀を抜いたからには、戦闘開始と見ていい。六人に取りかこまれるのをわざわざ待っている必要はないから、
「えいっ」
　源吾は自分のほうから逆に突っ込んでいきながら、まっさきに庭へ飛びおりた久利助を、びゅんと弓の折れでたたきすえた。
「わっ」
　あわてて刀を振りまわしたが、じゅうぶんに体勢のととのわぬうちだから、久利助はしたたか肩先を強打されて、前へつんのめったまま、それっきり起きあがれない。
「やった、うぬっ」
「たたっ切れ」
　同時に残る五人が一度に殺到してきたが、
「とうっ、えいっ」
　源吾の敏捷な弓の折れは、びゅん、びゅんと風を切って縦横に飛び、たちまち刀をはね飛ばされる者、腕、肩、胴を砕けるかとばかりたたきつけられる者、一瞬まっくろなたつまきがきりきりと巻き起こったと見る間に、五人、いや、久利助を入れて六人が六人とも、ばたばたとそこへ算を乱して打ちのめされていた。しかも、倒れたっきり、ひとりも起きあがろうとする者のないのは、いずれも一撃で戦闘力を失うだけの痛手をくらっているのだ。

待たれる者

「あっ」
　廊下まで走り出て、あわよくば乱陣へ加わろうとひしめきたっていた矢沢組の残る人数も、あまりにもすさまじい源吾の腕力に、思わずそこへ立ちすくんでしまったようだ。
　――よし、これで約束の果たし合いだけはすんだ。
　闘志を失った連中を刺激してまで無用の腕好みをする必要はない。そう思ったから、わざと源吾は黙ってその場を立ち去ろうとしたが、さすが慶三郎も今夜は黙殺という例のずるい手も使えなかったのだろう。
「待て、源吾」

呼びとめて、ひらりと庭へ飛びおりてきた。もうちゃんと身じたくまでしている。
「やるのか」
挑戦（ちょうせん）されては、源吾もあとへひけない。
「わしもあの場にいあわせた。したくをしてくれ」
「いや、わしはこれで相手をしよう」
源吾はあっさりと手の弓の折れを示した。
「なにっ」
小ばかにされたようなものだから、慶三郎はさっと顔色を変えたが、
「わしは遠慮はせんぞ。来い」
憤然として抜刀した。源吾は無言で弓の折れを青眼に取り直す。けっして相手をばかにしたのではなく、今はこっちの事情が変わっているので、負けても勝っても、いや、たとえこっちが切られても、絶対に刀はぬかない腹なのだ。
が、構えをつけてみて、これなら無事に帰れそうだと、ほっとした。三年まえまでは藩の竜（りゅう）虎（こ）といわれ、試合のたびに勝ったり負けたりした技量伯仲の好敵手だったが、いま見ると、慶三郎は人切り最上にも及ばない腕に見える。
が、当人にはうぬぼれがあるから、そうは思えないのだろう。しかも、悪いことに、相手は弓の折れだという安心がある。たかをくくる気はなくても、くみしやすしという気がどこかにあるから、
「とうっ」
衆目のてまえきれいに切る欲がでて、すっと青眼から上段に構えを直そうとした。むろん、上段にかわった太刀は、そのまままっこうから切りおろしてくる激しい仕掛けを含んでいる。
その一刀必殺の寸前、源吾の心眼に敵は上段に出ると映ったとたん、
「えいっ」
疾風の一撃が慶三郎のあがりかけた籠手（こて）へ、びゅんとからだごとおどりこんでいた。
「あっ」

わざの相違だからどうにもならない。ぴしりと籠手を弓の折れで痛打された慶三郎は、全身にしびれを感じて、もろくも刀を取り落とし、よろよろとうしろへよろめきながら、どすんとそこへしりもちをついていた。
「失礼——」
源吾はじゅうぶんと見たから、くるりときびすを返して、広間の庭を出る。慶三郎はまだ声さえたてる気力はなかったようだし、廊下の連中も、あまりのあっけなさに、ただぼうぜんとしているばかりだった。
——ついに勝った。
これで駆け落ちはせずにすむのだが、しかし源吾の胸は少しも晴れぬ。手のとどかぬ真弓の顔を見てつらい思いをするくらいなら、むしろこのまま自分ひとりで宇都宮を逃げ出したいとさえ思う。
「あ、若だんなさま」
矢沢のくぐりから門を出ると、伯父（おじ）の屋敷の玄関へおいてきたはずの幸吉が、いきなり物陰から飛びついてきた。
「なんだ、来ていたのか」
「黙って、ひとりでこんなところへ来るなんて」
幸吉は腕につかまって、ぶるぶる身をふるわせている。
「まあいい、歩きながら話そう」
源吾はさっさと歩きだした。
「でも、無事でよかった。てまえはもし矢沢の屋敷で騒ぎがおこるようだったら切りこむ気でいました」
しばらく歩いてから、幸吉がほっとしたようにいった。
「どうしておれが矢沢にいるとわかったんだ」
「お園のやつがたいへんだといって、お乳母（んば）さまにまちがいがあった、若さまがいない、若だんなはあとを追ったようだと教えてくれたんです」
「幸吉、おまえ鷹之助さまが無事に屋敷へ帰っ

たかどうか知らないか」
源吾ははっとそれを思い出す。
「御無事にお帰りになったようです。あとを追っていったふたりが、まさか屋敷内まではは いれないからなと、いましがた帰ってきましたから」
「そうか」
伯父はどうしたろう。そして、真弓はどうしているだろう。
「幸吉、お乳母さまは若さまに切られて死んでしまった。きのどくになあ」
「お園から聞きました」
「おまえはなんでもお園から聞くんだなあ」
ふっと源吾はうらやましいなあと思う。
「そんなことをいって——。お園の身にもなってください。てまえが矢沢で切り死にをすれば、あいつも生きちゃいません」
「それはわかっているが、真弓さんはお乳母さまのことを、もう知っているんだろうな」
「話だけは聞いて、とてもお嘆きだそうですが、てまえがこっちへ来るまでは、御家老さまがまだ死に顔にお会わせなさらなかったようですよ」
「じゃ、死骸は新殿のほうにあるのか」
「そうだそうです。まだだれにも知らせるなとおっしゃって、新殿へはだれもお近づけになりませんそうで」
伯父はわしの帰りを待っているんだなと、源吾は思った。しかし、今夜は伯父の顔を見るのもつらい。
「あんまり人には知らせたくない不祥事だ。伯父貴も当惑しているんだろう」
「酒乱さまではどうしようもありません。あいつらがきょう若さまに地酒なんか飲ませたのが悪いんだ、ちくしょう」
「そうだ、あれさえなければな」
いや、こんなことにならなければ、恐るべき秘密はまだだれにもわからずにいたろう。その

ほうがもっと悲しむべきことなのだ。
「おや、若だんな、すぐ牧村さまのほうへおうかがいするんじゃないんですか」
源吾はさっさと自分の家のほうへ道を取っているのである。
「うむ。一度うちへ帰ってしたくをしなおしていくことにしよう」
ことによると、今夜は自分もまた武士として腹を切らなければならない。源吾は、水行水をつかってからだを清め、新しいものを身につけて、いつでも腹が切れるようにしておきたかったのだ。

心ごころ

源吾は一度屋敷へもどって、水行水でからだを清め、衣服を改めてから、幸右衛門に冷や酒の用意を命じた。
「若だんな、これはなんのまねでございますね」
座敷へ幸右衛門父子をならべて、まず一つを自分がのみ、その杯を老僕にわたすと、幸右衛門は杯はうけたが、幸吉の酌はうけず、むっつりと源吾に聞いた。
「じいや、今夜牧村の伯父の家に不祥事が起こった。わしはこれからそのあと始末におじさんに会いに行くが、場合によるとおじさんといっしょに腹を切ることになるかもしれん。これは別れの杯のつもりと、一つにはじいやには長いあいだ親がわりの世話をうけたその礼のつもりの杯だ。わしはけっしてうろたえて死にいそぎをするようなまねはしないが、万一わしが腹を切ったら、なにぶんあと始末はよろしくたのむ。そのつもりで杯をうけてくれ」
「そうでござえますか。そんならおうけいたします」
幸右衛門はせがれの幸吉に酌をさせて静かにのみほし、
「若だんな、わしにも少し考えがありますで、この杯はわざとおかえしはしません。じいめが

あずかっておきますべ。どうか、いま自分でいった、うろたえて死にいそぎはしない、そのことばをしっかりと胸にたたんで、あとのことは心おきなくお出かけなせえまし」

　と、杯を押しいただいて、ふところへしまった。

　源吾はその杯を幸吉にもやり、ついでにお園のことをじいやに話しておいてやるつもりだったが、肝心な杯をしまわれてしまってはそれができない。

「そうか。では、なにぶんあとをたのみおく」

「承知したです——。幸吉、気をつけてお供するだ。おまえもうろたえてはなんねえぞ」

「はい」

　若い主従は、幸右衛門に玄関まで見送られて屋敷を出た。

「幸吉、わしはお園のことをじいやに話しておいてやるつもりだったが、ついいいそびれてしまった」

　外へ出てから源吾はすまなそうにいうと、

「そんなことは、若だんなが生きて帰ってからでたくさんです」

　と、幸吉はおこったように答えた。

「それもそうだな」

　源吾はもうさからわないことにした。幸右衛門も幸吉も生きて帰ることを切望していてくれる。が、真弓が手のとどかない天の星になってしまった今では、正直にいって生きることにそう執着は感じられない源吾なのだ。

　牧村の屋敷へ着いたのは、やがて五ッ半（九時）に近かったろうか。

「おいでなされませ」

　出むかえに出た女中も、茶の間に詰めていた家来たちも、さすがに暗い顔をして、だれも高い声ひとつたてる者はなく、屋敷じゅうがしいんと憂いに沈んでいた。

「あ、源吾さん、御苦労さまです」

　茶の間へはいると、用人の村尾市兵衛がほっ

としたような顔でむかえた。

「伯父上は——？」

「新殿でございます」

「鷹之助さまはどうしたろう」

「おかげで、さきほど無事にお帰りになりまして、小さくなっているようでございます」

「真弓さんも新殿のほうかね」

「いや、お嬢さまはお居間です」

「ふうむ。すると、真弓さんはまだお乳母さまの死に顔にも会ってはいないのか」

「はい、御家老さまは呼ぶまでだれも新殿へ近づいてはならぬとおおせられて、いまだに人をお近づけになりません。若さまに御意見申し上げているのだろうとは存じますが、どうも心配になりましてな」

　ひどく不安そうな市兵衛の顔だ。

　酒乱の鷹之助に意見などしたところですむ問題ではない。伯父はなにか善処の道を思案しているのだろう。あるいは、自分の行くのを待っているのかもしれぬ。すぐに行ってみようかとも考えたが、それなら、源吾がきたらすぐ通すようにと家人にいいつけてあるのがほんとうのようにも思える。

　どうしようかと迷っているところへ、お園がきて、

「源吾さま、お手すきでございましたら、お嬢さまがお目にかかりたいとおっしゃっております」

　と、迎えにきた。

「ただいまうかがいますと申し上げておいてくれ」

「はい」

　いつもなら、迎えにこられるまえにさっさとこっちから押しかけている源吾だが、今はそれができぬ。会ってどんな態度をとればいいのか、自信が持てないのだ。恋人から急に他人になれといっても、そうはいかない。

　しかし、相手が主家の姫君とわかっては、も

う絶対にお嫁あつかいにはできないのだ。

――しようがない。真弓にいっさいの真相を打ち明けて、もうお嫁にはできないのだから、源吾のことはお忘れくださいと、はっきり別れを告げてこよう。そのうちに伯父が呼びにくれば、どうせない命にきまっているんだ。

源吾は決心して立ち上がった。

「市兵衛、ちょっと真弓さんに会ってくる」

「そうしてあげてください。お嬢さまもおひとりで、さぞ御心配なすっていることでしょう」

市兵衛も薄々は真弓との仲を知っているらしく、好意のこもった目に微笑をうかべていた。

今からなるべく、さよう、しからば、姫君さま、の気持ちで会ったほうがいいと思ったので、源吾は真弓の居間へくると、障子の外の廊下へちゃんとすわって、

「真弓さん、源吾でございます。おじゃましてもよろしいでしょうか」

と、他人行儀に案内を請うた。そして、やりきれないなあと悲しくなる。

「どうぞ――」

待ちかねているような、甘い真弓の返事だ。

障子をあけて、静かに居間にはいり、あとをしめて行儀よく端近へすわる。

「源吾さま、お敷きくださいまし」

お園が真弓の前へ座ぶとんをすすめておいて、自分は真弓に会釈をして、すっと次の間から廊下へ出ていく。供待ち部屋にいる幸吉に会いに行くのだろう。

「お敷きくださいませんの」

いつまでも障子ぎわにきちんとすわったまま動こうとしないので、真弓がけげんな顔をしていう。

「はあ、ここでよろしいです」

「どうしてですの」

「真弓さん、お嫁の約束は取り消さなくてはならなくなるかもしれません」

源吾は思いきっていってから、

「わしは悲しいです」

と、ついつけ足してしまった。そして、しまったと思った。男として未練もはなはだしいかぎりである。

真弓は一瞬ぽかんとこっちの顔を見つめながら、

「どうして、――どうしてでございますの」

と、あえぐように聞いた。

「わしは今夜、腹を切るようになるかもしれん」

「まあ――。では、では、真弓もごいっしょに自害いたします」

「いや、これには深い事情があるのです。真弓さんは自害などしてはいけません」

「いいえ、どんなに深い事情があっても、真弓、約束をやめることはいや。――それだけは取り消さないで」

真弓のきれいな目から大粒な涙がほおにあふれてきた。それをぬぐおうともせず、じっとすがるように源吾の顔を見つめて、いっしょうけんめい返事を待っている。

「それが困るんだ。まさか、真弓さんを地獄へつれていくわけにはいかないからなあ」

そうだ、われわれの行くところは地獄かもしれぬ。その話を真弓に打ち明けるつもりで前へ出たのだが、それはあまりにも深い伯父の罪をあばくようになるので、いざとなると源吾はどうしても口にする勇気が出ない。

「いいえ、真弓は地獄へでも、どこへでも、お嫁ですから、よろこんでついてまいりますわ」

「そういうわけにいくかなあ」

「いきますわ。真弓は子どものときから、お乳母さまも、おとうさまも鷹之助さまにとられてしまって、源吾さんひとりがたよりでした。真弓のことをほんとうに考えてくれるのは源吾さんだけでした。源吾さんにすがっていさえすれば、真弓はしあわせになれると思っていましたのに、いまさらひとりになるの、死んでもいやです」

「そりゃ、真弓さんがどうかしあわせになれるようにと、そのことばかり考えているんだ。真弓さんのためなら、源吾はどんなことだってしてあげる覚悟でいる」
「それなら、地獄へでも、どこへでもいっしょにつれていってくださいませ」
「しかし、そこにそうはいかない訳がおこってしまったんだからなあ」
「いいえ、そんな悲しい訳は伺いたくありません。どうしても伺わなくてはならないのなら、真弓、そのまえに死んだほうがしあわせだと思います。源吾さんのお嫁でいられる間に、死なせてくださいませ」
　真弓はもう涙をこぼしてはいなかった。なにか身に迫っている大きな不幸の前に、ちゃんと死を覚悟して、ひたすら源吾の愛情だけは失うまいと必死に祈っている、そんな深沈たるまなざしに見える。それは源吾にとって、なによりも美しい、なにものにも替えがたいこの世の宝であるような気がしてくる。
　——わしの負けだ。
　源吾ははっきりとそう思った。これほどまでに自分を信じ、愛情をつくしてくれるものを、男として入れないのはひきょうだ。人の世の約束、あとでの人のそしりなど、もう問題ではない。真弓の愛情にわが身命をささげよう。武士の名も、男の意地ももういらぬと覚悟した。
「真弓、おじさんにお目にかかってこよう」
「はい」
「お乳母さまのなきがらにも別れを告げて、それからわれわれはわれわれの道をとることにしよう。おいで」
　源吾は静かに立ち上がって、真弓のほうへ手をさしのべた。
　はっと目を輝かしながら、その手にすがって立ち上がり、
「真弓、お嫁なのね」

と、やっと安心したように聞く。
「うむ。極楽へ行くか、地獄へやられるか、もうどこへ行っても、どんなことがあっても真弓は放さない」
「真弓、きっといいお嫁になります」
　しっかりと抱きしめられた源吾の胸の中で、真弓はおとなしく目をつむりながら、誓うようにつぶやいていた。

幸福というもの

　伯父は伯父で善処の道を講じてくれるだろう。自分たちは自分たちで、取るべき道を取ればいい。
　そう思って、源吾は長い新殿への廊下を、真弓の先に立って歩いた。
「おとうさま、どうしていつまでもわたしたちを呼んでくれなかったのでしょう」
「鷹之助さまが正気にかえって、あやまちを悟るまで、ふたりきりで通夜をする気だと思うな」
「では、黙っていって、しかられませんかしら」
「そんなことはない。われわれは身内なんだから」
　むしろ、伯父は顔を見られるのがつらいにちがいない。自分が求めた悲劇とはいえ、一生を不幸に終わった千代のなきがらを前にして、その実母を手にかけた酒乱のわが子と三人きりで通夜をする。どんな気持ちだろうなと思うと、源吾は自分の胸が痛くなってくる。
　新殿の廊下へ出ると、沈んだ香のにおいがそこはかとなく漂ってきた。しいんとして、物けはいひとつしない。そこになきがらが置いてあるとわかっているだけに、真弓はなんとなくぶきみなものを感じるのだろう。
　つと近寄って、源吾の手を求めてきた。
　広間の障子に、行燈の灯がひとつつうすぐらい。その障子の前の廊下へ行って、源吾は真弓とならんですわった。
「おじさん、源吾です。ただいま帰りました」

障子越しに声をかけて返事を待ったが、ひっそりとしてなんの答えもない。
まさか眠っているはずもなかろうと思い、
「おじさん、真弓さんもいっしょです。御焼香をさせていただきにまいりました」
と、もう一度呼んでみた。
やっぱり返事はない。はてなと、胸へくるものがあった。
「おじさん、失礼します」
思いきってすっと障子を一枚あけてみる。
「あっ」
はたして、十畳の間の床の間のほうへ北をまくらに千代のなきがらを置いて、そのまくらもとを逆びょうぶでかこい、前に経机を置いて香をたき、少し離れたところに伯父将監が、わがひざへ突っ伏している鷹之助を抱くようにして、その背中へ自分も突っ伏している。まるで眠っているように見えるが、そのかっこうにどこか鬼気がただよって、ひっそりと身動きひとつしないのは、あきらかに息絶えているのだ。
「源吾さん」
真弓が身ぶるいしながら、ひしと取りすがってきた。
「真弓、おちつかなくちゃいかん」
源吾はしかるようにいって、手を取って立ち上がった。行燈を持ってそばへ寄ってみると、伯父も鷹之助も口から少し血を吐いている。
そばに酒器が置いてあるのは、最後に鷹之助の好きな酒をすすめ、その中へ毒を入れて、自分もまたそれを飲んだのだろう。
経机の上に遺書が三通のせてあって、一通は源吾あて、一通は真弓、あとの一通には矢沢主馬殿としたためてある。
源吾は死骸に合掌してから真弓のを取って、
「おじさんの遺書だ。おちついて読んでごらん」
と、真弓にわたしてやった。
真弓は子どものようにうなずいて、ふるえる手で封を解く。

源吾も自分あてのを取りあげて、一つ行燈の灯に肩をならべながら目を通した。
「源吾へ遺書のこと。
一、このたび鷹之助さま御不始末は、将監日ごろ御養育の不行き届きにてまことに申しわけこれなきことにござ候えども、鷹之助さま酒乱の儀はとうてい不治にて治療おぼつかなく、一藩の名誉のためにも将監お供の覚悟をきめ、恐れ入った儀にござ候えども、かくのとおり決断つかまつり候。
一、さて、娘真弓儀まことにふびんの者ゆえ、そこもと妻としてお引き取りくだされたく、しかるうえは牧村家家名の儀は殿さまおぼしめしにて断絶いたし候とも苦しからず、真弓のこと一門のよしみにて、ただただそこもとにたのみおき候。
筆をおくにあたって慚愧断腸。そこもとはくれぐれも自愛のうえ、くりかえして真弓のことせつにたのみおき候」
二度、三度読みかえしてみたが、事の真相には一言もふれていない。言外の意味をくみとれば、一藩の名誉のために真相は伏せておけ、ただただ真弓のことはおまえに任せるから、できるだけ幸福にしてあげてくれるようにという心なのだろう。
――女の幸福は、身分や貧富できまるものじゃない。おれもたった今そう考えて、真弓の望みどおり、いっしょに自決しようと決心したばかりだった。伯父貴はそれを、生きて幸福にしてあげてくれとたのんでいるのだろう。
そうだ、自分さえ身命をささげて一生真弓に仕えてやる気になれば、そのほうが真弓には、いまさらなまじ姫君になるよりは、かえって幸福かもしれない。責任は重大だが、源吾は急に胸があかるくなってきた。
「真弓、そっちにはなんと書いてあるね」
源吾は遺書をひざへひろげたまま、ぼうぜんとしている真弓に聞いた。

「牧村の家名は断絶するだろうから、真弓はなにごとも運命とあきらめて、源吾さんにおすがりしてしあわせになるようにって——」
「うむ。わしにも真弓をたのむと書いてある。伯父はともかくも鷹之助さまのお命を縮めたのだから、家名断絶はしょうがないだろうな」
「源吾さんや真弓には、おとがめはありませんの」
「たぶん、そんなことはないと思うよ」
「そうでしょうか。もしおとがめをうけて、別別にどうかされるくらいでしたら、真弓ここで源吾さんといっしょに死んでしまったほうがうれしいと思うのですけれど」
「いや、絶対にそんなことはない。そのためにおじさんは家名をすてて、自分の命まで犠牲にしているんだからね」
「では、源吾さんももう切腹しなくていいのですね」
「うむ、切腹はやめた。わしには、おじさんの遺言をまもって、これからいっしょうけんめい真弓をしあわせにしてやらなければならない大仕事があるんだ」
「いいえ。真弓は、真弓はあなたのそばにさえおいていただけば、それでもう一生しあわせですわ」
はじめて真弓の目から、きれいな涙があふれ出す。真弓は子どものころから、どんな悲しいときでもけっしてわっと声をあげて泣いたことはない。おおらかに手放しで大粒の涙をこぼす。やっぱりお姫さまの血は争われないもんだなと見ているうちに、くずれるように源吾のひざへ突っ伏してきた。
「真弓、わしがついているじゃないか。泣くことはありゃしない」
源吾はその肩へやさしく手をおきながら、ふっと見ると、目のまえに伯父が罪のわが子をひざへかかえるようにして、父子折れ重なるように息絶えているのだ。

毒酒をのまされて、それが毒酒だとわかっても酒乱の鷹之助が今夜は狂いださず、おとなしく将監のひざへすがっていった。目の前に千代の死骸があるから、鷹之助も自分のおかした罪の恐ろしさによくよく観念していたのだろう。その子が毒に苦しみだすのをしっかりと抱いて、おなじ毒に倒れる。おのれがまいた因果の種とはいえ、伯父の胸中を考えると、源吾もまた目がしらがうるんでこずにはいられなかった。
——おじさん、りっぱな御最期です。及ばずながら、あとは源吾が必ず罪のつぐないをしますから、どうか親子三人、むつまじく成仏してください。
源吾は合掌して深くうなだれた。
事件はその夜のうちに、日ごろの政敵矢沢主馬の手にうつり、いっさいがありのままに発表された。
藩論は、たとえ酒乱で乳母を手にかけたとはいえ、若君に毒酒をすすめたのは行き過ぎだ、日ごろの将監にも似合わぬうろたえ方だとする説と、いや、身を殺して主家のわざわいの根を断ったので、だれにでもできる決断じゃないとする者と、二派に分かれて相当議論はあったが、けっきょく牧村家家名断絶、一門親戚はおとがめに及ばず、娘真弓儀は将監の遺志どおり宇田川源吾に嫁してさしつかえなしときまったのは、将監の三七忌がひそかにいとなまれた翌日であった。
あの日以来、真弓の後見としてずっと伯父の家に謹慎しながらその日のくるのを待っていた源吾は、即日牧村の屋敷のあと始末をして、召し使いにはそれぞれ手当をあたえて暇を出し、屋敷を藩へ引き渡して、ほんのわずかな私財といっしょに真弓とお園をつれ、久しぶりで自分の屋敷へ帰ったのは、もう日暮れに近かった。
その夜、宇田川家では老僕幸右衛門が、床の間を背に源吾と真弓の膳をならべ、その下手横

へ幸吉とお園の膳をおいて、若い二組みを膳につかせ、自分は下座のまんなかへすわって、
「若だんなさま、お嬢さま、このたびはとんだことでごぜえまして、慎んでおくやみを申し上げます」
　と、ていねいにおじぎをしてから、
「さて、これでおくやみのほうはすみました。そこで、きょうからお嬢さまとお園が宇田川家の者になりましたについて、忌中ではごぜえますが、お嬢さまはお殿さまから宇田川へ嫁にきてもいいとお許しが出ています。もうだれにも遠慮することはありません。膳はお精進だが、御家老さまとお乳母さまにも見ていただいて、じいやが親がわりなり、仲人役なりをつとめますで、今夜をお嬢さまのおこし入れの日ときめたいと思います。ついでに、幸吉とお園にも杯のまねごとをしてやりたいと思いますから、どうか若だんなのほうからまず、杯ごとをしてくだせえまし」
と、ふところから先夜の杯を取り出した。
　源吾はちょいと驚いて真弓の顔を見たが、真弓は少しほおを赤らめたきりで、黙って微笑している。
　幸右衛門がそんな型破りのことをいいだした気持ちは、源吾にもわからぬことはなかった。牧村家二千石の家名は、普通からいえば半分は真弓に残るべきである。たとえば、五百石でも真弓の手当として、家名だけは残してくれるのが武士の情けだ。それを矢沢がきれいに断絶させてしまったのは、将監の遺書で真弓が宇田川へ嫁すときめられていたからだと、老僕は内心憤慨しているのだろう。それならこっちも、あとでまた真弓の身にごたごたとめんどうが起こらないうちに祝言をさせてしまおうという腹にちがいない。
「どうだ、真弓さん。じいやのいうとおりにするかね」
　源吾も、どうせ祝言することにきまっている

のだから、精進でやるのもいいだろうという気になり、真弓の意見をたたいてみた。
「真弓はあなたしだいでございますわ」
「そうか、二千石のお姫さまが二百石の花嫁になるんだ。別に格式張ることもなかろう。じいや、祝言の杯をさせてくれ」
　幸右衛門はまず源吾と真弓に、それから幸吉とお園に杯のまねごとをさせて、
「おめでとうごぜえます。御家老さまもお乳母さまも、これできっと御安心なされたでしょう。おめでとうごぜえます」
　とよろこびをのべて、そっと涙をふいた。
　すっと真弓が座ぶとんをすりおりて、
「じいや、真弓はなんにも知らないふつつか者です。どうぞ遠慮なくしかってください」
　と、そこへ白い両手をつく。
「おお、しかりますとも、遠慮なくしかりますともよ」
「おとっつぁん、ありがとうございました。園はお台所へさがります」
「うむ、それがいい、それがいい」
　幸右衛門はたまらなくなったように、とうとう手ぬぐいで顔をおおってしまった。
　もう二、三日で五月の節句がくる晴れた夏の宵のことである。

●わが師を語る

仕事のひと

伊藤文八郎

今日の仕事を終わって、縁にどっかと腰を落とす。大家族だった家人たちは、独立したり、嫁して静かになった。孫たちもふえたので、それでなくとも人の多く訪う家なので、こんなしじまは珍しいといえる。

吐き出した紫煙が乱れたと思ったら、庭木がざわざわとなった。肌に冷たさを感じさせる秋風だ。どこかに夕立があったのかもしれぬ。

人の世の人の世なりに秋冷ゆる
黄昏やふと古傷にふれる秋
いたわりをうけているような老の秋

「あなた、お支度ができました」

いつもの声がすぐやってくる。一献の時間を待つたのしさ。

それにしても、年輪を感じさせる句を作るようになったものだ。

と、これは先生がお元気なころの姿をしのんでの寸景である。

四十歳という中年から作家業に入った先生は、好きな将棋も控えめに、創作一本に情熱を傾けられた。昭和十四年のことである。

作品『梅樹』は、この翌年に発表されている。先生の、いわゆる忠臣蔵ものに付随するものだ。

大野九郎兵衛の娘を妻にした男の話で、世情、武士故に「不義」という名目で愛する妻を離縁する。その忍従の境地、惻々たる妻への愛がよく書けているのである。わたしは校正をしていて涙が出てきてしかたなかった。

校正というものは内容を読まない方が誤字を

訂正しやすいのだが、それでいてつい読まされてしまうのである。これは筆力というか、巧さなのだ。

こうした思いやりの深い、人生をわかって、生きている人間の書けるという人は少ない。

昭和五十年から五十一年にかけて『山手樹一郎短編小説全集』十五巻を編んだ。短編小説が十五巻にもまとまるということも珍しいが、これが出版されるということも珍重されていいのである。ただ単に偏見とだけでかたづけられぬものがあるが、日本では短編小説集というものは売れないのである。企業としてもうからぬものはやりたくない、出版というものからいえば出さざるを得ぬものでも、それ故に食われてしまう企画は敬遠せざるを得ないのが実情だ。

これは先生と『新樹』同人の意志からで、わたしの勤務する出版社で発刊した。もっとも、これまで先生の単行本を発行して、それぞれが実績を積んだこともあって、危惧を押して刊行したものだった。幸い、多くの部数ではないが、偏見、危惧は払拭された。だからといって、他の作家のものも、とはいえないのである。「作品」が違うのである。先生の作品には庶民の共鳴感が伴うのだ。

短編小説を編集するにあたって、先生を良く知る作家群の中から、海音寺潮五郎さんにお言葉をいただいたので寸借する。

山手さんの作品の特質は、読者心理に通暁しぬいているところにあることはもちろんだが、いろいろな事象にたいしてやわらかで、やさしく、たとえば春の日ざしのように、いたわりをこめた考え方と、それを表現するにふさわしい、温かく、やさしく、しかもむだのない文体とにある。一言にしていえば、酸いも甘いも知りつくした大通人が、大衆に伍して共に遊び楽しんでいる趣の文学ということがいえる。

まったく、海音寺さんのお言葉のとおりで、

だから、先生の作品は読み出したら飽くことのない〝魔力〟があって、面白さが満ちあふれているのである。
　われわれが先生の作品をまねても、所詮それはまねの境からは出られず、先生の作品の本質は遠くにあり、別格のものなのだ。歯がみしても追いつけぬものがある。が、いつのころからだか『新樹』の会の同人たちの発言、来し方を振り返ってみると、先生の志す姿勢、あるいは意とするところのものが、深く投影しているのが見えた。馬齢五十を超えてこんなことに気づくのは遅いのだが、先生とは三十年からのおつきあいで、やっとそのことがわかったということを尊しとしたい。
　先生のお人柄は、同僚諸先輩の作家からエピソードとして聞くが、人生体験があったからこそ、そして弛まぬ精進があったからこそあれだけの作品が出来るので、わたしの目から見る先生は、情がこまやかで、まじめで、正義漢で、しかも勤勉家なのである。少しは楽されたらいいと思われるが、それを許さない建て前を自分で礎かれているようだ。こうしてみると、いかにも余裕がなさそうに見えるが、そんな振幅のなさではないのである。小説というものは好奇心に満ち、貪欲に、なんでも咀嚼してしまうたくましさがないと、骨の太い、いい小説が書けないのである。それだけに、全身全霊をぶちまけて書かないとだめなので、体力も、精神力も強靱でなければならない。
　先生は五年ほど前から病床に臥すようになり、筆を擱いた。同人たちは、ご家族とともに再起を願って意欲を駆り立てるが、微笑されるのみである。七十八歳という高齢で、これはやむを得ぬことかもしれぬ。
　時たま、遊びふけった夜など、同人の一人から家に、先生のことで電話があったのでは、と胸をつかれ、酔いざめの、申し訳なさを感じるこのごろである。

山手樹一郎長編時代小説全集56
隠密三国志　他一編
発行――一九七七年一二月一〇日初版第一刷
　　　一九七九年一一月二五日初版第二刷
著者――山手樹一郎©
装画――国貞（静嘉堂文庫提供）
装丁――玉井ヒロテル
発行者――和田欣之介
発行所――株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三―四―一六
〒一〇三　☎東京二七一―〇〇五一　振替東京〇―一一六一七
印刷製本――城北印刷製本センター
◆――定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします